瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告WI

下川津遺跡
一第 1 分 1 1 一

1990 • 3

香川県数育委員会 側番川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公団

瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告VII

下川津遺跡 -第1分冊-

1 9 9 0 • 3

香川県教育委員会 財務川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公団

序 文

瀬戸大橋は、四国と本州を結ぶ交通の幹線として、岡山県倉敷市児島と香川県坂出市番の州の間に架橋されました。昭和63年4月10日の開通以後、文化、経済交流の大動脈として、大きな役割を担っております。

瀬戸大橋架橋に先立ち、香川県教育委員会は、その路線上に位置する14遺跡について、本州四国連絡橋公団から委託を受け、昭和51年度から昭和62年度にかけて、発掘調査を実施いたしました。今回報告する下川津遺跡は、瀬戸大橋から南へ延びる瀬戸中央自動車道が国道11号と交わる坂出インターチェンジ建設に伴い発掘調査を実施した遺跡で、瀬戸大橋関係の発掘調査では最後のものです。下川津遺跡の調査は、昭和59年度の予備調査に始まり、昭和62年10月まで足掛け4年間、約9万㎡の発掘調査を実施し、県内の単一遺跡の発掘調査としては最大のものとなりました。検出した集落跡は、弥生時代前期から室町時代にかけて営まれた大規模なもので、7世紀代の牛馬耕を実証するカラスキなど、注目される遺物も各時期にわたり多数出土しました。

本書は下川津遺跡の調査成果をまとめたもので、今回「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」WIとして刊行することになりました。本報告が、調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお発掘調査の実施、報告書作成にあたり、本州四国連絡橋公団及び関係諸機関並びに地元 関係各位の多大な御援助、御協力を頂きました。また研究者の方々からは貴重な御教示を頂き ました。ここに深く感謝の意を表します。

平成2年3月

香川県教育委員会 教育長 松 繁 壽 義

例 言

- 1. 本書は,瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第7冊にあたり,坂出市 川津町に所在する下川津遺跡の調査成果を収録した。
- 2. 発掘調査は、本州四国連絡橋公団から委託を受け、香川県教育委員会が実施した。
- 3. 発掘調査は、昭和59年度の予備調査をもとに、翌昭和60年5月1日から昭和62年10月28日までの約2年6ヵ月を要した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

昭和60年度 大山真充 藤田任亮 藤好史郎 西村尋文 松野一博 松原伸二

浜田重人 松本敏三 安藤史郎 坂口淳子 岩崎晃彦

昭和61年度 大山真充 藤田任亮 藤好史郎 西村尋文 松野一博 大久保徹也

浜田重人 松原伸二 北山健一郎 安藤史郎 坂口淳子 今井和彦

清水周作 石田美和 加藤隆也 山元敏裕

昭和62年度 大山真充 藤田任亮 藤好史郎 中西 昇 西村尋文 植松邦浩

岩橋 孝 松原伸二 北山健一郎 田淵祐司 上田 広 石田美和

山元敏裕 山本英之 徳永多佳子

4. 発掘調査にあたって下記の関係諸機関の御協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県土木部瀬戸大橋対策室・香川県土木監理課・香川県土木河川課・坂出市教育委員会・地元瀬 戸大橋対策協議会・下川津自治会・中原自治会・中塚自治会

- 5. 報告書の作成業務は、本州四国連絡橋公団から委託を受けた香川県教育委員会の指導のもとに、昭和62年11月より、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本書の編集は藤好・西村が担当し、執筆担当は、各文末に記したが、主な担当は下記のとおりである。
 - 第1章 藤好史郎
 - 第2章 大久保徹也
 - 第3章 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也
 - 第4章 大久保徹也・西村尋文
 - 第5章 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也
 - 第6章 自然科学分析
 - 第7章 藤好史郎
- 6. 本報告書は、量的な関係上3分冊に分かれる。第1分冊は、第Ⅰ章~第Ⅲ章、第2分冊は、第Ⅳ章~第Ⅵ章までを掲載する。第3分冊は写真図版である。
- 7. 本書作成において、自然科学関係の分析で、小田島・嶋地・林・鈴木・能勢・藤原・三辻の各先生から玉稿を頂いた。記して謝意を評します。

凡 例

- 1. 本書で報告する遺構の遺構名は、以下の略号を用いる。
 - SH 竪穴住居 SB 掘立柱建物 SA 棚列 SP ピット SE 井戸 SK 土坑 ST 墓 SX 不明遺構 SD 溝
- 2. 本書で使用する報告遺構名には、以下の操作を加えた。
 - ①遺構名には第 I ~ N 期までの時期記号を付した。
 - 第Ⅰ期-弥生時代前期 第Ⅱ期-弥生時代後期~古墳時代前期 第Ⅲ期-古墳時代後期~鎌倉時代 第Ⅳ期-室町時代
 - ②本書で報告する遺構の遺構名には、概報遺構名との対応を計るため、報告遺構名のヨコに概報 遺構名を付した。

時期記号

 図
 S H II 01 (第172・416図 図版50 図版50 概報遺構名

- 3. 本書の遺構図中で使用する方位は真北方位で、標高はT.P.で表示している。
- 4. 第1分冊遺構挿図中の溝の断面設定個所は、付図中に示した。また、その設定個所が複数ある場合は、番号を付し挿図との対応を計った。
- 5. 土器の実測図中には遺物番号のヨコには、土器の質を表わす以下の略号を付した。
 - S-須恵器 U-黒色土器A K-黒色土器B G-瓦器 Z-在地の瓦質土器 R-緑釉 B-青磁 W-白磁 T-備前焼 E-染付
 - なお、何も付していない土器は、弥生土器ないし土師器・土師質土器である。
- 6. 第1・2分冊の頁数・挿図番号・表番号は、分冊単位で個別に付した。
- 7. 第3分冊中においては、遺構の詳細な場所を表わす区画名を<>で括って表示した。
- 例) 〈 I 6 〉 I 6 区

本 文 目 次

序	文		
例	言		
凡	例		
第15	冊		
第	[章 訓	査の方法と経過	
<u>\$</u>	第1節	調査に至る経過	
Š	育2節	調査方法	,
É	自3節	発掘調査の経過	,
Š	售4節	整理作業の経過	1
第I	1章 立	地と環境	
5	自1節	地理的環境	15
É	售2節	歷史的環境	20
第』	Ⅱ章 微	高地の調査	
角	自1節	はじめに	26
角	第2節	第 I 期 弥生時代前期	28
角	第3節	第 Ⅱ 期 弥生後期~古墳時代前期	52
身	94節	第Ⅲ期 古墳時代後期~鎌倉時代・・・・・・・・・・・2回	08
身	95節	第Ⅳ期 室町時代50	6(
角	96節	石器60	
穿	97節	石製品6/	
穿	88節	金属器62	
舅	9節	木器	52

第2分冊

- 第№章 低地帯の調査
 - 第1節 はじめに
 - 第2節 低地帯各部の状況
 - 第3節 水田遺構について
 - 第4節 土 器
 - 第5節 石 器
 - 第6節 金属器
 - 第7節 木 器

第 V 章 考察

- 第1節 下川津遺跡における地形的変遷
- 第2節 下川津遺跡の歴史的変遷
- 第3節 下川津遺跡の弥生から古墳時代前期の集落構造
- 第4節 下川津遺跡における6~8世紀の集落構造と動向
- 第5節 下川津遺跡といわゆる条里地割について
- 第6節 古墳時代後期の方形土坑
- 第7節 蛸壺および蛸壺焼成土坑
- 第8節 下川津遺跡の古代・中世墓について
- 第9節 弥生時代前期の石器について
- 第10節 下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について
- 第11節 下川津遺跡における7・8世紀代の土器様相について
- 第12節 出土木製品について

第 VI 章 自然科学分析

- 第1節 下川津遺跡出土土器の蛍光 X線分析
- 第2節 下川津遺跡土壙墓出土の歯の鑑別
- 第3節 下川津遺跡のプラント・オパール分析報告
- 第4節 下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告
- 第5節 下川津遺跡出土木製品の樹種分析委託報告
- 第6節 下川津遺跡出土鍛冶関係資料の分析委託報告
- 第7節 下川津遺跡出土資料のC-14分析委託報告
- 第Ⅵ章 おわりに
- 第2分冊付表

第3分冊 写真図版

第1分冊挿図目次

1	第[章	調査の方法と経過	第	30図	SHⅡ01平・断面図 57
第	1図	下川津遺跡調査区割図 4	第	31図	SHI02平・断面図 58
第	2 図	年度別調査区割図5	第	32図	SHI03平・断面図 62
1	第Ⅱ章	立地と環境	第	33図	SHI04平・断面図 62
第	3 図	下川津遺跡周辺遺跡分布図17~18	第	34図	SHI05平・断面図 63
第	4 図	下川津遺跡周辺水路配置図 19	第	35図	SHI06・07平・断面図 65
1	第Ⅲ章	微高地の調査	第	36図	SHI08平・断面図 68
第	5 図	下川津遺跡旧地形概念図 26	第	37図	SHI09, SHI09平・断面図 … 69
第	6図	第 I 期主要遺構配置図29~30	第	38図	SHI10平・断面図 72
第	7図	SHI01平・断面図 31	第	39図	SHⅡ11平・断面図 7
第	8図	SKІ02平・断面図 32	第	40図	SHI12平・断面図 73
第	9図	SKІ09平・断面図 34	第	41図	SHI13平・断面図 73
第	10図	SK I 10平・断面図 34	第	42図	SHI14平・断面図 74
第	11図	S X I 05 · 06 · 08	第	43図	SHI15平・断面図 74
		・09平・断面図 36	第	44図	SHI16・17平・断面図 76
第	12図	SX I 10平・断面図 37	第	45図	SHⅡ18平・断面図 78
第	13図	S D I 02 · 03,	第	46図	SHI19平・断面図 79
		SD II 13断面図 38	第	47図	SHI20・21平・断面図 8
第	14図	S D I 03,	第	48図	SHI22平・断面図 82
		SDI13・14断面図 39	第	49図	SHI23平・断面図 83
第	15図	SDІ04平・断面図 39	第	50図	SHⅡ24平・断面図 8/4
第	16図	I 期竪穴住居出土土器 1 40	第	51図	SHI25・26平・断面図 86
第	17図	I 期竪穴住居出土土器 2 41	第	52図	SHⅡ27平・断面図87
第	18図	I 期竪穴住居出土土器 3 ······· 42	第	53図	SHⅡ28平・断面図 88
第	19図	I 期土坑出土土器 1 ······ 43	第	54図	SHI29, SXI01平・断面図 … 89
第	20図	I 期土坑出土土器 2 ······ 44	第	55図	SHI29柱穴断面図90
第	21図	I 期不明遺構出土土器 1 ······· 45	第	56図	SHI30, SDI16平・断面図 … 95
第	22図	I 期不明遺構出土土器 2 ······· 46	第	57図	SHI31・32平・断面図 93
第	23図	I 期溝出土土器 1 ····· 47	第	58図	SHI33平・断面図 9/
第	24図	I 期溝出土土器 2 ····· 48	第	59図	SHI34平・断面図 99
第	25図	I 期溝出土土器 3 ····· 49	第	60図	SKI07平・断面図 96
第	26図	I 期溝出土土器 4 ····· 50	第	61図	STI01平・断面図 97
第	27図	I 期溝出土土器 5 ····· 51	第	62図	SDⅡ01断面図 98
第	28図	第 Ⅱ 期主要遺構配置図(1)53~54	第	63図	SDⅡ02断面図99
笹	20 ত্বা	第Ⅱ期主要造構配置図(2)55~56	笞	64127	SD II 11平・断面図10

第	65図	SDI17平・断面図102	第 99図	Ⅱ期竪穴住居出土土器27137
第	66図	H10区周辺概要図	第100図	Ⅱ期竪穴住居出土土器28138
		(竪穴住居,掘立柱建物を除く)…104	第101図	Ⅱ期竪穴住居出土土器29139
第	67図	SD I 20·SD II 86, H10区断面図	第102図	Ⅱ期竪穴住居出土土器30140
	•••••	105	第103図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器31141
第	68図	SDI20·SDI186, SDI1179	第104図	Ⅱ期竪穴住居出土土器32142
		・183・188, Ι2区周片断面図 …106	第105図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器33143
第	69図	S D II 20 · S D III 86,	第106図	Ⅱ期竪穴住居出土土器34144
		J 3 区周辺平・断面図108	第107図	Ⅱ期竪穴住居出土土器35145
第	70図	SDI21断面図109	第108図	Ⅱ期竪穴住居出土土器36146
第	71図	SDI22平・断面図109	第109図	Ⅱ期竪穴住居出土土器37147
第	72図	S D I 23断面図110	第110図	Ⅱ期竪穴住居出土土器38148
第	73図	Ⅱ期竪穴住居出土土器 1111	第111図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器39149
第	74図	Ⅱ期竪穴住居出土土器 2112	第112図	Ⅱ期竪穴住居出土土器40150
第	75図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器 3113	第113図	Ⅱ期竪穴住居出土土器41151
第	76図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器 4114	第114図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器42152
第	77図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器 5115	第115図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器43153
第	78図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器 6116	第116図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器44154
第	79図	Ⅱ期竪穴住居出土土器7117	第117図	Ⅱ期竪穴住居出土土器45155
第	80図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器 8118	第118図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器46156
第	81図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器 9119	第119図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器47157
第	82図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器10120	第120図	Ⅱ期竪穴住居出土土器48158
第	83図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器11121	第121図	Ⅱ期竪穴住居出土土器49159
第	84図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器12122	第122図	Ⅱ期竪穴住居出土土器50160
第	85図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器13123	第123図	Ⅱ期竪穴住居出土土器51161
第	86図	Ⅱ期竪穴住居出土土器14124	第124図	Ⅱ期ピット,土坑,墓,
第	87図	Ⅱ期竪穴住居出土土器15125		不明遺構出土土器 1162
第	88図	Ⅱ期竪穴住居出土土器16126	第125図	Ⅱ 期溝出土土器 1163
第	89図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器17127	第126図	Ⅱ期溝出土土器 2164
第	90図	Ⅱ期竪穴住居出土土器18128	第127図	Ⅱ期溝出土土器 3165
第	91図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器19129	第128図	Ⅱ 期溝出土土器 4166
第	92図	Ⅱ期竪穴住居出土土器20130	第129図	Ⅱ 期溝出土土器 5167
第	93図	Ⅱ 期竪穴住居出土土器21131	第130図	Ⅱ 期溝出土土器 6168
第	94図	Ⅱ期竪穴住居出土土器22132	第131図	Ⅱ 期溝出土土器 7169
第	95図	Ⅱ期竪穴住居出土土器23133	第132図	Ⅱ 期溝出土土器 8170
第	96図	Ⅱ期竪穴住居出土土器24134	第133図	Ⅱ期溝出土土器 9171
第	97図	Ⅱ期竪穴住居出土土器25135	第134図	Ⅱ 期溝出土土器10172
第	98図	Ⅱ期竪穴住居出土土器26136	第135図	Ⅱ期溝出土土器11173

SHⅢ03平・断面図214	第174図	Ⅱ 期溝出土土器12174	第136図
SHⅢ04平・断面図215	第175図	Ⅱ 期溝出土土器13175	第137図
SHⅢ05平・断面図216	第176図	Ⅱ 期溝出土土器14176	第138図
SHⅢ06・07平・断面図217	第177図	Ⅱ 期溝出土土器15177	第139図
SHⅢ08平・断面図218	第178図	Ⅱ 期溝出土土器16178	第140図
SHⅢ10・11平・断面図219	第179図	Ⅱ 期溝出土土器17179	第141図
SHⅡ12平・断面図220	第180図	Ⅱ 期溝出土土器18180	第142図
SHⅢ13平・断面図221	第181図	Ⅱ 期溝出土土器19181	第143図
SHⅢ14平・断面図222	第182図	Ⅱ 期溝出土土器20182	第144図
SHⅢ15平・断面図223	第183図	Ⅲ 期溝出土土器21183	第145図
SHⅢ16, SDⅢ34平・断面図 …223	第184図	Ⅲ 期溝出土土器22184	第146図
SHⅢ17平面図223	第185図	Ⅲ 期溝出土土器23185	第147図
SHⅢ18平・断面図223	第186図	Ⅲ期溝出土土器24186	第148図
SHII19, SDII51	第187図	Ⅲ期溝出土土器25187	第149図
・52平・断面図225		Ⅲ期溝出土土器26188	第150図
SHⅢ20平・断面図226	第188図	Ⅲ期溝出土土器27189	第151図
SHⅢ21・22平・断面図226	第189図	Ⅲ期溝出土土器28190	第152図
SHⅢ23, SKⅢ16平・断面図 …227	第190図	Ⅲ期溝出土土器29191	第153図
SHⅢ24平・断面図228	第191図	Ⅲ期溝出土土器30192	第154図
SHⅢ25平・断面図229	第192図	Ⅲ期溝出土土器31193	第155図
SHⅢ26平・断面図230	第193図	Ⅲ期溝出土土器32194	第156図
SHⅢ27平・断面図230	第194図	Ⅲ期溝出土土器33195	第157図
SHⅢ28・29平・断面図232	第195図	Ⅲ期溝出土土器34196	第158図
SHⅢ30~37平・断面図233~234	第196図	Ⅲ期溝出土土器35197	第159図
SHⅢ30~37断面図235	第197図	Ⅲ期溝出土土器36198	第160図
SHⅢ38・39平・断面図237	第198図	Ⅲ期溝出土土器37199	第161図
SH <footnote>1140平・断面図238</footnote>	第199図	Ⅲ期溝出土土器38200	第162図
SH <footnote>1143・44平・断面図239</footnote>	第200図	Ⅱ , Ⅲ期溝出土土器39201	第163図
SHⅢ45平・断面図240	第201図	Ⅱ , Ⅲ期溝出土土器40202	第164図
SH <footnote>町46平・断面図240</footnote>	第202図	Ⅱ 期溝出土土器41203	第165図
SHⅢ47・48平・断面図241	第203図	Ⅱ 期溝出土土器42204	第166図
SH <footnote>1149平・断面図242</footnote>	第204図	Ⅱ 期溝出土土器43205	第167図
SH <footnote>150・51平・断面図243</footnote>	第205図	Ⅱ 期溝出土土器44206	第168図
SHⅢ52平・断面図244	第206図	Ⅱ 期溝出土土器45207	第169図
SH <footnote>153, SD 11128平・断面図…246</footnote>	第207図	SHⅢ01平・断面図208	第170図
SHⅢ55平・断面図247	第208図	Ⅲ期主要遺構配置図(1)209~210	第171図
SH <footnote>町56平・断面図247</footnote>	第209図	Ⅲ期主要遺構配置図(2)211~212	第172図
SH <footnote>1157, SD 111183平・断面図…248</footnote>	第210図	SHⅢ02平・断面図213	第173図

第211図	SHⅢ58, SKⅢ66, SDⅢ184	第243図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図ધ5 …329
	・186平・断面図249	第244図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図26 …330
第212図	SHⅢ59平・断面図250	第245図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑵ …331
第213図	第1微高地北半部第Ⅲ期掘立柱建物	第246図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図28 …332
	・栅列配置図252	第247図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図② …333
第214図	第1微高地南半分第Ⅲ期掘立柱建物	第248図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図30 …334
	・棚列配置図253	第249図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑶ …335
第215図	第2微高地第Ⅲ期掘立柱建物	第250図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑶ …336
	· 栅列配置図254	第251図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑶ …337
第216図	G9区周辺第Ⅲ期掘立柱建物	第252図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図34 …338
	・棚列詳細配置図256	第253図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑶ …339
第217図	第4微高地第Ⅲ期掘立柱建物	第254図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図36 …340
	· 栅列配置図257~258	第255図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図37 …341
第218図	H・I4区北面土層断面図304	第256図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図38 …342
第219図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(1) …305	第257図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑶ …343
第220図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(2) …306	第258図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図40 …344
第221図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(3) …307	第259図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑷ …345
第222図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑷ …308	第260図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図42 …346
第223図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑸ …309	第261図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑷ …347
第224図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(6) …310	第262図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図44 …348
第225図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑺ …311	第263図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図45 …349
第226図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(8) …312	第264図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図46 …350
第227図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(9) …313	第265図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図47 …351
第228図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(10) …314	第266図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図48 …352
第229図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(11) …315	第267図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑷ …353
第230図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図位)…316	第268図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図50 …354
第231図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(3) …317	第269図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑸ …355
第232図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図⑴ …318	第270図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑸ …356
第233図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図低 …319	第271図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図⑸ ···357
第234図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(16) …320	第272図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図⑸ ···358
第235図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図(I) ···321	第273図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図⑸ ···359
第236図	第Ⅲ期掘立柱建物平·断面図(18) ···322	第274図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図56 …360
第237図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図Ϣ …323	第275図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑸ …361
第238図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図20 …324	第276図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図58 …362
第239図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図② …325	第277図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑸ …363
第240図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑵ …326	第278図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図60 …364
第241図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図ሬ3 …327	第279図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(61) …365
第242図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑵ …328	第280図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図62 …366

第281図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑹ …367	第318図	SKⅢ41平・断面図410
第282図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図64 …368	第319図	SKⅢ42平・断面図410
第283図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑹ …369	第320図	SKⅢ43平・断面図412
第284図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図660 …370	第321図	SKⅢ45平・断面図412
第285図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図67)…371	第322図	SKⅢ46平・断面図414
第286図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図68 …372	第323図	SKⅢ49平・断面図414
第287図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図69 …373	第324図	SKⅢ50平・断面図414
第288図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図700 …374	第325図	SKⅢ52平・断面図415
第289図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図(71) …375	第326図	SKⅢ57平・断面図416
第290図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑺2)…376	第327図	SKm60平・断面図417
第291図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑺3 …377	第328図	SKⅢ61平・断面図417
第292図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑺4 …378	第329図	SKⅢ63平・断面図417
第293図	第Ⅲ期掘立柱建物平・断面図⑺ …379	第330図	SKⅢ66平・断面図418
第294図	第Ⅲ期栅列平・断面図(1)385	第331図	SKⅢ67平・断面図419
第295図	第Ⅲ期栅列平・断面図(2)386	第332図	STⅢ01平・断面図423
第296図	第Ⅲ期栅列平・断面図(3)387	第333図	STⅢ02平・断面図423
第297図	第Ⅲ期栅列平・断面図⑷388	第334図	STⅢ03平・断面図423
第298図	SEⅢ01平・断面図395	第335図	STⅢ04平・断面図424
第299図	SEⅢ01枠組概念図396	第336図	STⅢ05平・断面図424
第300図	SEⅢ02・03平・断面図397	第337図	STⅢ07平・断面図424
第301図	SEⅢ04平・断面図398	第338図	STⅢ08平・断面図425
第302図	SEⅢ05平・断面図399	第339図	STⅢ09平・断面図425
第303図	SEⅢ06平・断面図399	第340図	STⅢ10平・断面図425
第304図	SKⅢ01平・断面図401	第341図	STⅢ11平・断面図426
第305図	SKⅢ02平・断面図401	第342図	STⅢ12平・断面図426
第306図	SKⅢ05・08・10・14平・断面図	第343図	STⅢ13平・断面図426
	403	第344図	STⅢ14平・断面図426
第307図	SKⅢ06平・断面図404	第345図	STⅢ15平・断面図426
第308図	SKⅢ15平・断面図404	第346図	STⅢ17平・断面図427
第309図	SKⅢ17平・断面図404	第347図	STⅡ18平・断面図427
第310図	SKⅢ19平・断面図404	第348図	STⅢ20平・断面図427
第311図	S К Ⅲ 21平・断面図405	第349図	STⅢ21平・断面図427
第312図	S К Ⅲ 22平・断面図406	第350図	S T II 22平・断面図 ·······427
第313図	S К Ⅲ 23平・断面図407	第351図	S X Ⅲ 01平・断面図429
第314図	S К Ⅲ 25平・断面図409	第352図	S X Ⅲ 02, S D Ⅲ 01平・断面図 …429
第315図	S К III 26平・断面図409	第353図	S X Ⅲ 04平・断面図 ···········430
第316図	S К II 29平・断面図409	第354図	S X Ⅲ 08平・断面図430
第317図	SKⅢ38平・断面図409	第355図	SXⅢ09平・断面図431

第356図	SXⅡ10平・断面図431	第393図	S D Ⅲ 108断面図 ······462
第357図	SDⅡ02平・断面図453	第394図	S D Ⅲ 110断面図462
第358図	SDⅢ03断面図453	第395図	SDⅢ113平・断面図463
第359図	SDⅢ04断面図454	第396図	S D Ⅱ 135断面図463
第360図	SDⅢ05断面図454	第397図	S D Ⅱ 136断面図 ·······463
第361図	S D Ⅲ 06断面図454	第398図	S D Ⅱ 140断面図······463
第362図	S D Ⅲ 07断面図454	第399図	S D Ⅲ 142平・断面図463
第363図	S D Ⅲ 08断面図454	第400図	SDⅡ143・144平・断面図⑴464
第364図	SDⅢ09断面図454	第401図	SDⅡ143・144平・断面図(2)465
第365図	SDⅢ10断面図454	第402図	S D Ⅲ 143断面図······465
第366図	SDⅢ11·12断面図455	第403図	S D Ⅲ 147断面図······465
第367図	SDⅢ13断面図455	第404図	S D Ⅲ 159断面図 ·······465
第368図	SDⅡ14断面図455	第405図	S D Ⅱ 160断面図 ······465
第369図	SDⅡ15・16断面図455	第406図	S D Ⅱ 161断面図 ······465
第370図	SDⅡ18断面図455	第407図	S D Ⅱ 162断面図 ······465
第371図	SDⅢ19断面図455	第408図	S D Ⅱ166平・断面図······466
第372図	SDⅢ25平・断面図456	第409図	SDⅡ168・169断面図466
第373図	SDⅢ27断面図456	第410図	SDⅡ170平・断面図·······466
第374図	SDⅢ29断面図456	第411図	S D Ⅱ 173断面図 ······466
第375図	SDⅢ30断面図456	第412図	S D Ⅱ176断面図466
第376図	SDⅢ31断面図456	第413図	SDⅡ177平・断面図467
第377図	SDⅢ32断面図457	第414図	SDⅢ188・190断面図466
第378図	SDⅢ39断面図457	第415図	ピット列Ⅲ01・04・05平・断面図
第379図	SDⅢ46断面図457		
第380図	SDⅢ47断面図457	第416図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 1470
第381図	SDⅢ60断面図457	第417図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 2471
第382図	S D Ⅲ 71 · 72 · 74,	第418図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 3472
	SXⅢ05平・断面図458	第419図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 4473
第383図	SDⅢ71断面図459	第420図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 5474
第384図	SDⅢ75断面図460	第421図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 6475
第385図	S D Ⅲ76断面図 ······461	第422図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 7476
第386図	S D Ⅲ80断面図 ······461	第423図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 8477
第387図	SDⅢ81·82断面図 ······461	第424図	Ⅲ期竪穴住居出土土器 9478
第388図	SDⅡ83・84平・断面図462	第425図	Ⅲ期竪穴住居出土土器10479
第389図	SDⅡ89・90断面図461	第426図	Ⅲ期竪穴住居出土土器11480
第390図	S D Ⅲ 93断面図 ·······461	第427図	Ⅲ期竪穴住居出土土器12481
第391図	SDⅢ95断面図462	第428図	Ⅲ期竪穴住居出土土器13482
	S D III 97平・断面図462	第429図	Ⅲ期竪穴住居出土土器14483

第430図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 1484	第464図	Ⅲ 期墓出土土器 2,不明遺構出土土器 1
第431図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 2485		518
第432図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 3486	第465図	Ⅲ期不明遺構出土土器 2519
第433図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 4487	第466図	Ⅲ期溝出土土器 1520
第434図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 5488	第467図	Ⅲ期溝出土土器 2521
第435図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 6489	第468図	Ⅲ期溝出土土器 3522
第436図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 7490	第469図	Ⅲ期溝出土土器 4523
第437図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 8491	第470図	Ⅲ期溝出土土器 5524
第438図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器 9492	第471図	Ⅲ期溝出土土器 6525
第439図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器10493	第472図	Ⅲ期溝出土土器 7526
第440図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器11494	第473図	Ⅲ期溝出土土器 8527
第441図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器12495	第474図	Ⅲ期溝出土土器 9528
第442図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器13496	第475図	Ⅲ期溝出土土器10529
第443図	Ⅲ期掘立柱建物出土土器14497	第476図	Ⅲ期溝出土土器11530
第444図	Ⅲ期栅出土土器 1498	第477図	Ⅲ期溝出土土器12531
第445図	Ⅲ期棚出土土器2,ピット出土土器1	第478図	Ⅲ期溝出土土器13532
	499	第479図	Ⅲ期溝出土土器14533
第446図	Ⅲ期ピット出土土器 2500	第480図	Ⅲ期溝出土土器15534
第447図	Ⅲ期ピット出土土器3501	第481図	Ⅲ期溝出土土器16535
第448図	Ⅲ 期ピット出土土器4,井戸出土土器1	第482図	Ⅲ期溝出土土器17536
	502	第483図	Ⅲ期溝出土土器18537
第449図	Ⅲ期井戸出土土器 2503	第484図	Ⅲ期溝出土土器19538
第450図	Ⅲ期井戸出土土器 3504	第485図	Ⅲ期溝出土土器20539
第451図	Ⅲ期井戸出土土器 4505	第486図	Ⅲ期溝出土土器21540
第452図	Ⅲ期井戸出土土器5,土坑出土土器1	第487図	Ⅲ期溝出土土器22541
•	506	第488図	Ⅲ 期溝出土土器23542
第453図	Ⅲ期土坑出土土器 2507	第489図	Ⅲ 期溝出土土器24543
第454図	Ⅲ期土坑出土土器 3508	第490図	Ⅲ 期溝出土土器25544
第455図	Ⅲ期土坑出土土器 4509	第491図	Ⅲ 期溝出土土器26545
第456図	Ⅲ期土坑出土土器 5510	第492図	Ⅲ 期溝出土土器27546
第457図	Ⅲ期土坑出土土器 6511	第493図	Ⅲ期溝出土土器28547
第458図	Ⅲ期土坑出土土器 7512	第494図	Ⅲ 期溝出土土器29548
第459図	Ⅲ期土坑出土土器 8513	第495図	Ⅲ 期溝出土土器30549
第460図	Ⅲ期土坑出土土器 9514	第496図	Ⅲ期溝出土土器31550
第461図	Ⅲ期土坑出土土器10515	第497図	Ⅲ期溝出土土器32551
第462図	Ⅲ期土坑出土土器11516	第498図	Ⅲ期溝出土土器33552
第463図	Ⅲ期土坑出土土器12,墓出土土器1	第499図	Ⅲ期溝出土土器34553
	517	第500図	Ⅲ期溝出土土器35554

第501図	Ⅲ期溝出土土器36555		588
第502図	Ⅲ期溝出土土器37556	第536図	№ 期溝出土土器 2589
第503図	Ⅲ期溝出土土器38557	第537図	№ 期溝出土土器 3590
第504図	Ⅲ期溝出土土器39558	第538図	№ 期溝出土土器 4591
第505図	Ⅲ期溝出土土器40559	第539図	№期溝出土土器 5592
第506図	第Ⅳ期主要遺構配置図561~562	第540図	№ 期溝出土土器 6593
第507図	第Ⅳ期掘立柱建物平・断面図⑴ …563	第541図	№期溝出土土器 7594
第508図	第Ⅳ期掘立柱建物平・断面図(2) …564	第542図	№期溝出土土器 8595
第509図	SEN02平・断面図565	第543図	№期溝出土土器 9596
第510図	SKN04平・断面図566	第544図	№期溝出土土器10597
第511図	SKN 06断面図566	第545図	№期溝出土土器11598
第512図	SKN 07断面図566	第546図	№期溝出土土器12599
第513図	SK№08断面図566	第547図	№期溝出土土器13600
第514図	SKN 09断面図566	第548図	№期溝出土土器14601
第515図	SKN10平・断面図568	第549図	№期溝出土土器15602
第516図	SKN12平・断面図568	第550図	№期溝出土土器16603
第517図	SKN16断面図568	第551図	N 期溝出土土器17 ······604
第518図	S X № 02断面図571	第552図	SHI01出土石器(1)605
第519図	SXN03断面図571	第553図	SXI04出土石器605
第520図	S X № 04断面図571	第554図	SHI01出土石器(2)614
第521図	SDN01・03断面図573	第555図	SHI01出土石器(3)615
第522図	SDN01, I19区平・断面図574	第556図	SKI03・04・05・08出土石器… 616
第523図	SD№04断面図577	第557図	SXI01出土石器617
第524図	SD№05断面図577	第558図	SXI03出土石器(1) ······618
第525図	SD№06断面図579	第559図	SXI03出土石器(2) ······619
第526図	SD№08断面図579	第560図	SDI02出土石器(1) ······620
第527図	SD№09断面図579	第561図	SDI02出土石器(2) ······621
第528図	№期掘立柱建物,井戸出土土器1	第562図	SDI02(3)・03出土石器622
	581	第563図	SDI03出土石器 ·····623
第529図	№期井戸出土土器2,土坑出土土器1	第564図	S X I 01出土石器623
	582	第565図	SHI01・02(1)出土石器624
第530図	№期土坑出土土器 2583	第566図	SHI02(2)・03出土石器625
第531図	Ⅳ 期土坑出土土器3,不明遺構出土土器1	第567図	SHI04・05・06(1)出土石器626
	584	第568図	SHI06(2)・07・08(1)出土石器 …627
第532図	№期不明遺構出土土器 2585	第569図	S H I 08(2) · 09 · 10 · 12 · 13 · 14(1)
第533図	№期不明遺構出土土器 3586		出土石器628
第534図	№期不明遺構出土土器4587	第570図	S H II 14(2) · 15 · 16 · 17(1)
第535図	Ⅳ 期不明遺構出土土器 5, 溝出土土器 1		出土石器629

第571図	SHI17(2) \cdot 19 \cdot 20 \cdot 22 \cdot 23	第582図	遺構出土貸銭651
	出土石器630	第583図	SDⅢ71中・西部出土木器654
第572図	S H I 25 · 28 · 30 · 32 · 34	第584図	SDⅢ71中・西部出土木器655
	出土石器631	第585図	S D Ⅲ71東部出土木器 ·······656
第573図	SKⅡ02出土石器632	第586図	SEⅢ04出土木器657
第574図	S D I 01・13出土石器633	第587図	SEⅢ01井戸枠材658
第575図	SDI13・14・20出土石器634	第588図	SEⅢ01井戸枠材659
第576図	遺構出土石製品642	第589図	SEⅢ01井戸枠材660
第577図	遺構出土鉄器(1)646	第590図	SEⅢ01井戸枠材661
第578図	遺構出土鉄器(2)647	第591図	SEⅢ01井戸枠材662
第579図	遺構出土鉄器(3)648	第592図	SEⅢ01井戸枠材663
第580図	遺構出土鉄器(4)・遺構出土青銅器(1)	第593図	SEⅢ01井戸枠材664
	649	第594図	SEⅢ05井戸枠・出土木器665
第581図	遺構出土青銅器(2)650	第595図	SEN01出土木器666
			·

第1分冊表目次

	第1表	第Ⅰ期	竪穴住居出土石器組成表	635
	第2表	第Ⅰ期	土坑出土石器組成表	635
	第3表	第Ⅰ期	不明遺構出土石器組成表	636
	第4表	第Ⅰ期	溝出土石器組成表	636
	第5表	第Ⅱ期	竪穴住居出土石器組成表	·····637~638
	第6表	第Ⅱ期	土坑出土石器組成表	639
	第7表	第Ⅱ期	不明遺構出土石器組成表	639
	第8表	第Ⅱ期	溝出土石器組成表	640
			foto a 10 part I de es vi	
			第1分冊付表目次	T .
,		+ 1# 60 5 d	_	
			₹	
作.	大表2 オ	卜器観察 表	₹	·····707~762
			付図目次	
	付図1	下川津遺	遺跡第1 微高地北半部遺構配置図	
	付図 2	下川津遺	遺跡第1 微高地南半部遺構配置図	
	付図 3	下川津遺	量跡第2微高地遺構配置図	
	付図 4	下川津遺	遺跡第3,4微高地北半部遺構配置図	
	付図 5	下川津遺	量跡第4微高地南半部遺構配置図	
	付図 6	第1微高	5地大型掘立柱建物群遺構配置図(1)	
	付図7	第1微高	5地大型掘立柱建物群遺構配置図(2)	
	付図8	第1微高	5地大型掘立柱建物群遺構配置図(3)	
	付図 9	第4微高	场地大型掘立柱建物群遺構配置図	

第 [章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経過

瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査は大きく海峡部と陸上部に分かれる。海峡部の調査では,香川県教育委員会は本州四国連絡橋公団(以下本四公団と略す)の委託を受け,昭和51年度の島嶼部の予備調査に始まり,昭和59年度までの足掛け9年間,与島・羽佐島・岩黒島・櫃石島の4島で実施した。その成果は,「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告」 I ~III ,「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」 I ~III ,「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」 I ~III で報告した。

陸上部は、瀬戸中央自動車道(国道30号線)が四国側に延び、坂出市番ノ州から国道11号線との交わる坂出インターチェンジの間である。昭和46年度の架橋用地等関係地区の埋蔵文化財分布地図を本四公団に提示したのに始まる。昭和48年度、瀬戸大橋ルート関連公共事業調査の実施に伴い、本四公団へ陸上部の幅200m・距離1.5kmの範囲内に所在する遺跡分布図を提示。昭和52年度、国道30号線調査事業の一貫として分布調査を実施し遺跡分布図を提示。この分布調査により、坂出インターチェンジ建設予定地に、塚の存在と土器片の散布が確認される。その後昭和56年度、陸上ルートがほぼ確定したのに伴い、再度分布調査を実施した。昭和57年度陸上ルートの決定に伴い詳細遺跡分布図を作成し、本四公団へ提示する。昭和59年度、本四公団と締結した「香川県側埋蔵文化財発掘調査委託契約(その2)」により、陸上部で発掘を含む予備調査を実施する。当初用地の関係上、聖通寺地区、茶臼山地区、角山地区の3地区の予定であったが、土地所有者の協力を得て、下川津地区を加え、合計4地区で予備調査を実施した。

昭和59年度に実施した予備調査の中で,下川津地区が坂出インターチェンジ建設予定地で,今回報告する下川津遺跡に該当する。下川津地区の予備調査は,2次に分けて実施した。1次調査は,昭和59年6月4日から11月5日にかけて,国道11号線より南の地区に,幅3m・長さ25~80mのトレンチを13ヶ所に設けた。2次調査は昭和60年2月6日から3月末にかけて国道11号線より北で3ヶ所のトレンチを設定した。調査実掘面積は,インターチェンジ建設工事範囲約180,000㎡の1.3%に相当する2,300㎡である。それまでの分布調査では中世の集落跡が工事対象地の東北部を中心として広がると想定していたのが,予備調査の結果,調査対象地の東半に安定した標高4~5mの微高地が広がり,その微高地上に弥生時代前期から室町時代にかけての集落跡が展開し,微高地の周囲には低地もしくは埋没河川が存在することが明らかとなった。

この結果,下川津遺跡の調査は,インターチェンジ工事予定地の東半の約90,000㎡を対象として実施することが確定した。ただし,埋没した河道が走ると推定されるインターチェンジ建設予定地の西半においても,旧地形の復元等を目的としてトレンチ調査を実施する計画となった。

工事面積に比して,予備調査面積が1.3%にすぎないことから,本調査予定地の括り等の面で,問題が生じる危険性が危惧された。翌年度から実施した本調査において,調査対象地の修正の必要性は生じなかったものの,推定以上の遺構・遺物の検出により,調査工程上の問題が生じた。例を上げると,調査対象地内の埋没河川部では,多量の木器・土器等の遺物が出土し,遺物の出土量が少ない河川において

も水田跡が広がっていた。また微高地上の遺構においても,遺構密度はきわめて高い地区が大半を占め,遺構密度が低いと推定していた地区においても,たまたま予備調査トレンチが遺構の隙間を縫って設定していた地区もあり,当初の調査体制では工程上の問題が生じた。

以上のように、狭い面積の予備調査の限界が明確となった。狭いトレンチでは、湧水や地盤の強度の問題等から、埋没河川の底まで掘り下げ、十分なデータを得ることは困難であった。今回の予備調査程度の面積では、遺跡範囲の確定等では誤差は少ないが、調査工程を積算するにはデータ不足であることが明確となった。予備調査のデータを読み取る際に、実掘したトレンチのデータの限界を十分に把握しておくことが必要であるとの貴重な教訓を得た。

調査期間については、瀬戸大橋が昭和63年4月開通予定ということもあり、昭和62年度までの間で設定せざるを得なかった。

翌昭和60年,本四公団と昭和60年4月1日付けで締結した「香川県側埋蔵文化財発掘調査委託契約 (その3)」により,坂出インターチェンジ建設予定地内の下川津遺跡の本調査を開始した。その後,昭和61・62年度に締結した委託契約(その4)・(その5)により,発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法

1.はじめに

昭和59年度に実施した工事予定地の約1%に相当する2,300㎡の予備調査により、それまでの分布調査で推定した以上の規模・内容の遺構が対象地内に広がっていることが判明した。旧地形的には、工事予定地の東半に、標高5m前後の微高地が南北に連なり、微高地の東西縁辺と微高地を横断するように埋没河川が流れることを確認した。この微高地上には、弥生時代前期から室町時代にかけての、集落跡が展開する。この結果、調査対象地は、工事予定地の東半に広がる微高地を中心として周辺の埋没河川部を含むように調査対象地を設定し、調査対象地の面積は約9万㎡となることが確定した。

調査期間については,瀬戸大橋の共用開始が昭和63年度に予定されていたことから,調査期間は,おのずと限定されたものとなり,翌昭和60年から63年までの間で,調査を実施することとなった。こうした状況下で,より調査期間を確保するために,本四公団との協議を通じて,本四公団の工事計画を反映した調査計画となった。

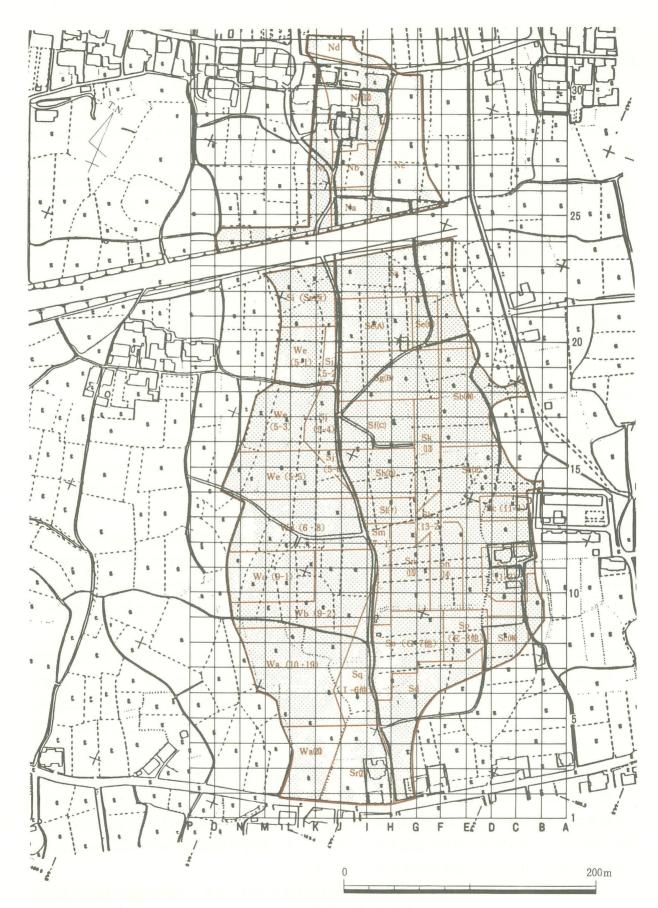
2.調查体制

調査対象地が約9万㎡と広大なこと,また調査期間が2年半ほどと面積の割りには短いことから初年度は3班体制で調査を開始した。1班は職員2名・嘱託1名で構成される。その後の調査の進展につれ,当遺跡の内容が予備調査で想定していた以上のものであることが判明してきたことから,昭和60年度半ばから1班増強し計4班体制を取ることとなった。この4班体制は,最終年度の昭和62年7月以降の調査縮小までこの体制を継続した。

また作業員については、1 班当たり30名を目処として動員した。その結果最大時で、120名以上の作業員を使用することとなった。作業員は、当初は3 班体制であったことと調査対象地周辺からの動員ということもあり、60名ほどの雇用数であったが、調査体制の増強に伴い、作業員の動員を遺跡の近隣だけでは限界があり、遺跡からは離れた綾歌郡等からの動員が不可欠となった。そこで送迎バスを運航することにより、作業員の確保を計った。

初年度末に調査を実施した調査区西北部の埋没河川の調査において、県下では初めて水田跡を検出し、調査区西部の埋没河川部においても全面調査が必要となることが確実となった。この結果、拡大を重ねてきた初年度の調査体制でも、昭和61年度上半期には工事工程との調整が困難な状況となる地区が生じることが判明した。これ以上の作業員の雇用は員数上もまた事務上も困難であることから、工事請け負い方式による調査を県下では初めて試みることとなった。この工事請け負い方式では、業者に発掘調査を請け負わせ、調査員はそれを指導することで調査をすすめる。従来の運営方式の調査とは異なり、掘り上げる土量の出来高で清算を行う。この方式では、調査員の職務の中で現場の監理面での直接的な負担および作業員の雇用に伴う業務が無くなるという長所がある。今回は調査員が担当する地区の他に工事請け負い調査地区の指導を兼務するという形を取り、調査対象地区も比較的単純と想定され、土量も多い埋没河川内の水田遺構部を充てることとした。

この工事請け負い方式による調査も,職務負担の軽減は計れるが,業者の熟練度や検出遺構の難易度 によっては必ずしも全面的な職員負担の軽減と直結せず,課題を残した。



第1図 下川津遺跡調査区割図

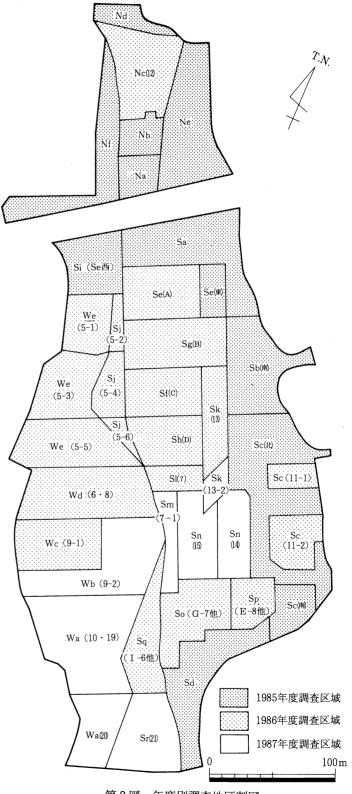
3.調査区の設定

調査対象地内に20m方画の,グリッドメッシュをかぶせた。グリッドの基準方位は,概ね集落遺構が展開する微高地の中軸線を基準とし,真北から22度30分内西に振った。この方位は,大東川周辺に残るいわゆる条里方位と概ね共通したものである。初年度の調査は,工事予定地内の用水路及び市道の付け

替え予定地と国道11号を橋脚建設予定地から開始したが,調査の整合性の関係から工事予定地が一部しかかからないグリッドも全掘することを原則とした。発掘調査が,複数班の同時調査となることから,各班の調査地区を明確にし,調査の面においては遺構名等の混乱を防ぐことや調査の進行状況の明確化を目的として調査対象地をブロック分けし,各班が担当することとした。各調査区の面積はまちまちであるが,概ね1,000㎡前後である。

4. 航空写真測量の導入

遺構図作成に伴う負担の軽減と実測図 の精度の均一化を目的として, 航空写真 測量を実施し、1/20図と1/50図の縮尺 で遺構の完掘状況の実測図の作成を行っ た。航空測量には、上記の目的の他に、 細かな等高線の図化、国土座標系への組 み込み,撮影写真の合成による調査地区 全域が一望となる写真の作成などの利点 がある。一方では, ヘリコプターを使用 しての撮影では天候の不順により撮影時 期が確定できない点, また場所によって はヘリコプターの飛行が制限されること など直接的な問題と伴に, 遺構検出と図 面完成の時期的なずれにより, 完成図面 と調査者がイメージしていた図面との整 合性の問題やそれによる校正の手間など の難点もあることは十分に了解していな くてはならないであろう。



第2図 年度別調査地区割図

5.プラントオパールの事前分析

下川津遺跡では、埋没河川内で水田跡が検出されたこともあり、実際の発掘調査以前に水田跡の有無でプラントオパールの事前分析を簡易ボーリングによる採取資料をもとに行った。

6.基礎整理と調査概報

下川津遺跡は、調査対象面積が広大なことと期間的制約から、年間3万㎡ほどの面積の調査を実施せざるを得なかった。遺構密度も高く、時期的にも弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡で、遺物出土量もコンテナ約5,000箱にのぼる大規模な遺跡であった。単純なコンテナ量からすれば、下川津遺跡で出土した遺物は、それまで香川県教育委員会が実施した発掘調査での遺物出土量の1/3に相当する量である。

調査では、各班が独立して発掘調査を実施した。つまり複数の遺跡調査が隣接している状況であった。 そこで調査内容の混乱を防ぎ、現場作業への調査成果のフィードバックの目的で、香川県教育委員会坂 出連絡事務所にて注記作業などの基礎整理を併行して実施した。また各年度末には概報を発行した。報 告書作成の担当が必ずしも調査担当と一致しないことが予測され、この概報は、調査時点での所見をま とめ、報告書作成の基礎資料となるものでもある。 (藤好)

第3節 発掘調査の経過

1.昭和60年度

瀬戸中央自動車道と主要幹線である国道11号線とを結ぶ坂出インターチェンジ建設工事早期着手は、昭和63年度の瀬戸大橋の供用開始に向けて、最重要課題の一つであった。建設工事との関係上、発掘調査に期間的な余裕は少なく、調査期間の確保の面から早期調査着手が望まれた。しかし用地確保の関係から発掘調査開始は、土地所有者の協力が得られたのちの昭和60年5月1日となった。調査工程は当初から必然的に本四公団の建設工事工程との調整の中で組み立てざるを得ない状況で、昭和60年度は国道11号線を立体交差する高架橋建設予定地と調査対象地の東縁辺に沿う市道および農業用水の付け替え予定地を中心として実施することとなった。これはインターチェンジ建設予定地の中央を南北に、通称高木道と呼ばれる市道と農業用水が走るが、昭和61年度のインターチェンジ内での工事や発掘調査の全面展開には、予定地内の市道と水路の付け替えが必要であったからである。この市道・水路の付け替え工事予定地だけの調査では、その後の調査予定地の調査成果との整合性の面から難点が有り、発掘調査は工事対象地が含まれる20m四方のグリッドは原則として完掘することとした。

調査は、国道11号線を挟む高架橋の建設予定地のNa・b, Sa地区から開始した。Sa地区の東部に低地帯が広がる他は上面が削平を受け、平坦化した低平な微高地である。11号線北部のNa・b地区では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴住居を中心とした遺構群、南のSa地区では古墳時代後期以降の掘立柱建物群を検出した。この中でNa・b地区は、予備調査のデータから下川津遺跡で遺構密集度が高い地区であろうと考えていたが、調査の進展につれ、異常な遺構密集地区が広がる地区が他に広がることが分かり、Na・b地区は遺構密度は高いものの下川津遺跡では平均的な遺構の検出状況であることが明らかとなってきた。またこの時点では調査対象地が未買収であったことと代替の水路がまだ未完成であったことから、調査対象地内の現水路を撤去し、その下位の調査を実施することができない個所もあった。

国道の北では、引き続き $Nd \cdot e \cdot f$ 区の調査を開始した。Nf 地区はNa 地区の西にあたり、当初から計画していた周辺の低地帯の流路確認等を目的としたトレンチ調査区である。その後、この調査対象地と大束川の間の低地部のトレンチ調査は、本四公団の工事工程との調整の中で、トレンチ調査からボーリング調査に変更し、翌昭和61年度の2次に分けて実施した。Nd 地区は宅地部であるNc 地区の北に位置する低地帯で、中世期の遺物と柱穴を検出した。

Na・b区の調査後実施したNe地区は、本書で第1低地帯と呼ぶ埋没河川が広がる地区である。弥生時代後期を中心とする流路を古墳時代後期以降の流路が切り、いずれの流路からも膨大な量の土器が出土した。古墳時代後期以降の流路からは、土器の他にカラスキ等の木製農耕具をはじめとして多量の木製品が出土した。予備調査では、トレンチが湧水のため下位の遺物出土状況を十分には把握できなかった。そのため、当初の予定以上の期間を要し、今後の調査工程の変更と調査体制の増強が急務となった。

9月から10月にかけて,香川県歴史民俗資料館と兼務で松本敏三研究員が調査に加わり,また西村尋文・浜田重人両技師の採用・異動による計3名の増員を行ない,それまでの3班体制から4班体制へと調査体制の補強を行なった。またそれに伴い,作業員の増員の必要性が顕在化した。それまでは瀬戸大

橋対策協議会や地元自治会等の協力と有線放送・市公報による募集をかけていた。この下川津周辺を中心とする近在からの動員では,50名程度の雇用が限界であった。そのため新たに綾南・綾歌・飯山町方面から作業員を雇用すべく,通勤用のバスを運航し,作業員数の確保をはかった。その結果,就労実数で,120名ほどの雇用が可能となり,1班あたり30名程度の配置となった。

引き続いて調査対象地の東縁辺に沿う市道・水路の付け替え予定地の調査に入った。調査対象地の北部に位置する第1微高地から中央の第2微高地の北部にかけて,また調査区の南半の第4微高地の東縁ではNe地区で検出した第1低地帯につらなる流路が調査対象地に含まれた。また第1低地帯を挟み,第4微高地の東側に位置する第3微高地で,古墳時代後期の3棟の竪穴住居を検出した。また調査対象地の南東部にあたるSd区では弥生時代後期から13世紀前後の遺物を含む包含層が広がり,その上面と包含層の下位から掘り込まれた,多数の柱穴群・溝・土坑・墓等を検出した。この地区の遺構は類似した埋土のものが複雑に切り合い,異常な密度から遺構の関連性の確定は困難をきわめた。

こうした調査対象地東側の調査を通じて、下川津遺跡の今回の対象地内の遺構分布密度や遺物を多量に含む埋没河川の状況が判明してきた。この市道・水路部の発掘調査のめどが立ちはじめ、国道11号線から南へ調査を展開するとの基本方針で、Se東・Si地区も着手した。Se(東)地区では弥生時代前期から室町時代にかけての密集した集落遺構を検出した。またSi地区では7・8世紀代の掘立柱建物群が展開することが明らかとなった。またSi地区の西部では第4低地帯の流路を検出し、その内部から県下初の平安時代後期の水田址を検出した。

初年度は、28,600㎡の発掘を実施した。昭和60年度の調査を終えて、Si区で検出した水田址の存在から西部低地帯の全面調査の可能性が生じた。また調査主任と個別調査担当との兼務の困難さ、個別調査区の狭さから生じる遺構把握の困難さと時間的なロスなどが課題として残った。

2.昭和61年度

2年度目の昭和61年度は下川津遺跡の発掘調査がピークを迎えた年である。昨年度の課題を踏まえて,調査主任の業務を,調査の統括,調査工程の調整,本四公団・工事側との交渉等とし,実際の発掘調査から離れたものとした。また各班が担当する調査区を広く設定した。また調査区西部の低地帯の調査方法については,事前のプラントオパール分析を実施することと事前のトレンチ調査により,水田址の有無および水田面の層準を確定することとした。7月に実施したプラントオパール分析調査の結果水田址の存在が明らかとなり,またトレンチ調査の結果水田を検出できなかった地区においても,遺物が多量に出土することが明らかとなってきたため,全面調査が確定した。

昭和61年度の発掘調査は、昨年度に引き続き、4 班体制で開始した。国道11号線の南部Se(A)・Sg(B)・Sf(C)・Sh(D)地区の調査を4・5月に実施した。この4 地区は国道11号線と立体交差する高架橋の橋桁の作業ヤード予定地である。この4 地区では中央部を、本報告書で第2低地帯と呼ぶ弥生時代前期以前の埋没河川が走る。この第2低地帯を挟む第1 微高地南部のSe(A)・Sg(B)地区では弥生時代前期から奈良時代と室町時代の集落跡を検出した。第2 微高地のSf(C)・Sh(D)地区では弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡・古墳時代後期から鎌倉時代にかけての遺構群を検出した。この4 地区の調査終了後、第1 微高地と第2 微高地を分ける第2 低地帯で、弥生時代後期と奈良時代と考えられる水田址を検出した。また第1 微高地の西縁部のSj地区、第2 微高地南部のS1 地区の調査を実施した。

下川津高架橋の完成と伴に、本四公団による建設工事も本格化し、インターチェンジの管理棟部や本

線道路部の建設用地の早期調査の要請が本四公団から出され,Sc($11-1\cdot 2$)地区の家屋退去部やSo(G7)・Sq(I6)地区の調査を実施しした。こうした地区の中でSo(G7)地区の南部は,昨年のSd地区と同様,異常な密集状況を示す建物群を検出し,土坑内から越州窯青磁椀や水晶製の石帯等が出土するなど注目される遺物も出土した。

また、こうした直営による従来の調査と併行して、8月から11月にかけて工事請負により、We区の低地部で約6,000㎡の調査を実施し、Si地区で検出した水田址の続きを検出した。今年度の調査の当初予定面積が約40,000㎡であり、今年度調査予定地が60年度並みの内容であれば、現体制では約6,000㎡が残る計算となる。そこでこの6,000㎡を、工事請け負い調査で補うこととし、掘削土量の計算が比較的容易と判断した低地部の水田跡の調査となるWe地区をその対象とした。工事請け負い調査実施の結果、工事請け負い調査は必ずしも調査員の職務軽減とは結びつかず、これまでの直営調査を担当しながらの工事請け負い調査の実施は、調査員の過重負担となるものであったことは留意する必要がある。

また国道11号線の北部で残っていたNc地区の家屋の立退きが完了し、10月より発掘調査を実施した。この地区では第1 微高地の北端を検出すると伴に、弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代中頃から後半代にかけての集落跡を検出した。この地区の調査は、家屋の立退き後の調査ということもあり、攪乱を受けている遺構も多く、検出は容易なものではなかった。この地区の調査と平行して第2 微高地中央部に周囲の工事が進み、周囲は工事用の盛り土がなされ、谷状に残されたSk(13)地区の調査も実施した。

N c 地区の調査が 1 月末で終了し,国道11 号線の北部の調査が完了した。 2 月から南部の調査区に集結することとなり,S p · S m 地区で調査を開始したのをはじめ,S q · S o · W a 地区など,本線道路部を中心として発掘調査を実施した。S o · S m 地区の調査では,通称高木道と呼ばれる市道とその東を平行して走る幹線水路を撤去し,その下位の調査を実施した。この幹線水路は,条里の坪界線と一致するものである。昭和61年度の調査面積は41,200㎡となる。

3.昭和62年度

最終年度の昭和62年度は、19,800㎡を対象として、下川津遺跡の中央部と南西部で調査を実施した。昨年度からの継続地区であるSm・Wa・Wb地区で調査を開始した。Sm地区の調査では、南部で古墳時代後期の竪穴住居群と第4微高地では唯一の弥生時代前期の溝を検出した。6月まで4班体制で調査を継続した。7月から、調査体制を2班に縮小し、残りのSk地区南部・Sn・Srの3地区の調査を実施した。Sk地区南部とSn地区の北部は第3低地帯にあたり、弥生後期と奈良時代の水田址を検出した。最後となったSr地区の調査では、7世紀前半の整地層を確認し、その下位から6世紀後半の建物と溝を検出した。溝内からは、金銅製の圭頭太刀把頭・耳管・管玉が廃棄された状況で出土した。整地層の上面からは、「コ」の字形に配置された大型の掘立柱建物群と竪穴住居を検出した。最後の現地説明会をSr地区を対象として10月3日に実施した。Sr地区の遺構の保存が立案され、本四公団と交渉の後、Sr地区全体を砂で覆い、遺構の保全をはかった。10月28日の調査事務所からの撤収で、89,600㎡の下川津遺跡の発掘調査が完了した。下川津遺跡の遺物出土量は土器・石器類が合計してコンテナ4,100箱、木器はコンパネで組み立てた大型の箱にビニールを敷き容器として利用したものも多いが、コンテナ換算にして約900箱が出土した。この遺物出土量は、香川県教育委員会が過去の調査により発掘した遺物総量の約1/3に相当する膨大なものとなった。

今年度の7月の調査体制の縮小により,現場担当以外は遺物収納・図面・写真の台帳作成等の整理と概要報告の作成を行なった。これは下川津遺跡の調査が,小区画(地区)単位の発掘調査の積み重ねで成り立っており,各地区は独立した遺構名を有するものが大半である。また調査担当が異動や退職したものも多い。本報告書作成をひかえ,基礎的な整理を行なわないと,遺物等の混乱が不可避と考えたからである。

現場作業の終了に伴い,坂出市府中町に,昭和62年11月に新設された香川県埋蔵文化財調査センター へ遺物等を搬入した。 (藤好)

なお、昭和60~62年度期間中の発掘調査に係わった調査体制は、以下の組織表の通りである。

昭和60年度

昭和60年度						
総括 文化行政認	果		調査担当	女化行政課 場	反出連絡事務所	
課長	磯田	文雄(~S60.12.21)	所長	松本 均	嘱託	安藤 史郎
教育次長			主任技師	大山 真充	•	坂口 淳子
課長事務取扱	樫原	悠(S60.12.21~)		藤田 任亮		岩崎 晃彦
主幹	松本	豊胤		藤好 史郎	調査補助員	和泉美香子
課長補佐	片山	堯	技師	西村 尋文		川田 純
				松野 一博		
庶務				松原 伸二		
係長	宮谷	昌之		浜田 重人		
主事	小河	恵朗	瀬戸内海暦	医史民俗資料館	馆	
主査	加納	覚(~S60. 6. 1)	専門職員	松本 敏三		
昭和61年度						
総括 文化行政認	果		調査担当 フ	文化行政課 切	反出連絡事務所	
課長	廣瀬	和孝	所長	佐藤 正義	嘱託	安藤 史郎
主幹	松本	豊胤	文化財	大山 真充		坂口 純子
課長補佐	片山	堯	専門員	藤田 任亮		今井 和彦
			主任技師	藤好 史郎		石田 美和
庶務			技師	西村 尋文		加藤 隆也
係長	宮谷	昌之		松野 一博		山元 敏裕
主事	近藤	紀文(S61.6.1~)		大久保徹也		清水 周作
	松下日	由美子		浜田 重人	調査補助員	田村 久雄
	小河	恵朗(~861.6.1)		松原 伸二		小田 典生
				北山健一郎		和泉美香子
						徳永多佳子
						平井 秀明
						山西 雅章
						千田 一宏
昭和62年度						
総括 文化行政語	果		調査担当		反出連絡事務所	
課長	廣瀬	和孝	所長	佐藤 正美	嘱託	田淵 裕司
課長補佐	高木	尚	文化財	大山 真充		植田 広
副主幹	小原	克巳	専門員	藤田 任亮		石田 美和
				藤好 史郎		山元 敏裕
庶務			主任技師	中西 昇		山本 英元
係長	宮谷	昌之		西村 尋文		徳永多佳子
主任主事	近藤	紀文	技師	植松 邦浩	調査補助員	田村 久雄
主事	水本	久美子		岩橋 孝		小田 典生
	俊野	英二 (S62. 6. 1~)		松原 伸二		平井 秀明
				11 1 4-4		1 A W =

北山健一郎

中条 洋子

第4節 整理作業の経過

1.基礎整理作業

昭和60年以降,下川津遺跡発掘調査と併行して,坂出連絡事務所で,基礎整理作業を実施した。初年度の上半期は,基礎整理作業は比較的順調に推移した。しかし,下川津遺跡の整理作業担当職員を配置できなかったことから,調査が忙しくなるにつれて,遺物注記作業を中心として,基礎整理作業の停滞が生じ始めた。ラベル内容の完全注記から,台帳制による略番号注記への変更により,混乱は避け得たが,出土遺物量が膨大な量となったため,注記・復元が未完の遺物が大量に残るなどの問題が生じた。また各年度末には,調査成果の概要をまとめた瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報 VI~WIを刊行した。この概報は,調査内容の早期の公開と同時に,調査終了後の報告書作成時に,調査担当職員の全員が整理作業に当たることは困難であることが十分に予測されることから,各担当遺構中で重要なものや複雑なものについて,あらかじめ記録を明確に残しておくことを目的とした。この概報は,調査時の所見であり,十分に遺物等についての検討をなし得ないまま刊行したものであることから,本報告時には内容的に変更が生じた個所もあるが,本報告書作成時には重要なデータとなった。

昭和62年7月,下川津遺跡の発掘調査の縮小に伴い,現場作業と併行して遺物収納コンテナ・実測図・写真等の基礎整理を実施し,同年11月開館予定の香川県埋蔵文化財センターへの移転に備えた。またこれらの作業と同時に,坂出連絡事務所で実施してきた基礎整理作業は継続して実施した。

昭和62年11月,香川県埋蔵文化財センターが,坂出市府中町に設立されることになり,瀬戸大橋関係の発掘調査業務のために設けられていた坂出連絡事務所は,閉鎖されることとなった。下川津遺跡出土遺物は,他の瀬戸大橋関係の遺物と合わせ,埋蔵文化財センターで保管されることとなった。また報告書作成業務もセンターで行なうこととなる。

2.埋蔵文化財センターにおける整理作業

本州四国連絡橋公団との協議の結果,下川津遺跡の報告書は「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告WI」とし,これを含む瀬戸大橋関係の2遺跡の報告書の作成を昭和62年度までの2年半の期間で実施するとの計画となった。下川津遺跡の他の報告遺跡は,坂出市櫃石島の旧石器遺跡の花見山遺跡で,「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告WI」である。

昭和62年11月1日,新設の香川県埋蔵文化財センターで,整理作業を開始した。11月以降の瀬戸大橋関係の主な業務は,昭和62年度の下川津遺跡調査の調査概報の作成,また花見山遺跡と下川津遺跡の本報告書作成業務の開始である。

下川津遺跡の報告書作成にあたり、その基本的な方針を次のように設定した。

- ・集落域のほぼ全面調査となったことから、各時代の集落構造の明確化を目的として遺構及び出土遺物 を可能なかぎりデータ化する。
- ・埋没河川等から出土した木製品の資料化。

本整理には,調査員が3人専従となるが,昭和62年度は,花見山遺跡の報告書作成と重なり,実質的に下川津遺跡の報告書作成体制が整ったのは昭和63年度になってからである。下川津遺跡の整理作業は,従来の瀬戸大橋関係の報告書作成と同様,整理作業員を組織し,遺物実測・遺構図面作成・注記復

元等の作業を行なう計画を立てた。遺構の数・出土遺物量ともに大規模な下川津遺跡の報告書作成では、整理作業員の大量投入が必須の条件である。新規雇用の整理作業員が、遺物実測の実務にあたるには3~6ヶ月の訓練期間が必要となる。そのため62年度の下半期は整理作業体制整備に費やした時間も多い。

前述したように初年度の昭和62年度の下半期は,花見山遺跡の報告書作成と重複したことと,出土遺物の注記作業が未完であったことから,注記作業等の基礎整理に重点を置いた。また自然河川関係の整理は,出土木器の内容および出土状況の確認,遺物収納の整備,PEG含浸処理の試験的運行等の作業から開始した。遺構関係は,現場で各地区ごとに作成していた遺構名記入模式図と遺構一覧表の確認整備等を行なった。

昭和63年度は,実質的に報告書作成の体制が整った年である。整理作業は,内容から概ね3分野に分かれる。整理補助員と整理作業員で構成される5班を編成した。その内,4班が微高地上の遺物・遺構関係で,復元に2班8名,土器実測に1班5名,遺構図作成に1班3名をあてた。1班4人が自然河川関係を担当することとした。微高地上の遺構出土遺物は藤好,遺構関係は西村,自然河川は大久保が各々担当した。

微高地上の遺物で主なものは土器であるが,復元終了後併行して実測対象遺物を抽出した。流れ作業的に遺物の実測図が完成していくシステムとし,第1微高地の北部の竪穴住居出土遺物から実測を開始した。出土遺物の中で特徴的なものは小片であっても実測対象とすることとした。当初大まかな見込みとして,3,000点前後の土器実測を計画した。復元作業と併行した実測対象遺物の選出過程で,実測すべき遺物数は増加し,最終的には概報時に実測していた遺物を含み,約5,500点の実測となり,最終的には,この中から 9割りほどに相当する約5,000点を報告書に掲載することとなった。この実測点数の大幅な増加は,遺物出土量の多さに加え,全体の出土遺物の内容把握ができないままに当初の計画を立てざるをえない状況により生じた。検出遺構の多さから,各遺構ごとの実測対象遺物抽出作業での実測点数の増加が累積し,結果として大幅な実測数の増となった。

また遺構図関係は、竪穴住居関係から遺構図作成を開始し、土坑・溝と順次進めていった。この中で最も時間を費やしたのが、掘立柱建物と栅列関係の作業である。下川津遺跡第Ⅲ期は、6世紀後半の竈付き竪穴住居群の出現から概ね鎌倉時代までの間を指す。集落遺跡のほぼ全面調査となった下川津遺跡の中でも、この第Ⅲ期は非常に重要な時期である。第Ⅲ期には、竈付きの竪穴住居群の出現、カラスキに代表される多量の木製農耕具等の遺物、その後、整地がなされ企画的に配置された大型の掘立柱建物群が出現し、円面硯・木製品においてはカラスキに代表される木製農耕具など開拓者集団にふさわしい遺物が有琴柱・越州窯青磁・水晶製石帯等の一般の集落では出土しないような遺物も出土している。この時期の集落の変遷等を考える上でも掘立柱建物の構成の明確化は、最重要課題のひとつであった。第4微高地を中心として検出した高密度に分布する柱穴群を、各柱穴間の埋土・形態上の特色・位置等の関係から組み合わせ、各掘立柱建物の構造を明らかにする作業が最も難行した。発掘調査時点では建物と考えていたものについても再度検討を加えた。

自然河川関係は、出土木器の実測作業を行ない約800点の木器を実測した。また木器に関しては先行して遺物の写真撮影を昭和63年度中に行なった。

平成元年度は、概ね昭和63年度の作業の継続であるが、前述したように、遺構出土土器の実測対象のものの増加により、当初予定していた低地帯出土土器の実測で、土器実測班による実施が困難となって

きたため、木器実測を行なってきた班が土器実測にあたることとなった。石器の実測は、整理補助員・作業員合わせ3名があたり、微高地上の遺構と自然河川出土の弥生時代前期のものを対象として実施し、約500点実測し、400点掲載した。作業の中で、かなり時間を要したのが、観察表の作成である。微高地上の出土土器約5,000点の観察表、出土木製品、石器の観察表の作成にかなりの時間を費やした。作業の合間を縫って行なった土器の観察表は、概ね4ヵ月を費やした。また遺構関係の整理と遺物の整理をそれぞれが独立して実施したことによる弊害としては、それぞれの時期の決定上で差異が生じ、その確認等でかなりの時間が必要であった。

また、自然科学関係の分析依頼・委託。木器の保存処理委託、木器以外の遺物の写真撮影委託等を実施した。

なお、昭和63、平成元年度期間中の整理作業に係わった調査体制は、以下の組織表の通りである。

昭和63年度

総務

香川県教育委員会 文化行政課			財団法人	、 香川県埋蔵文	て化財調査センター
総括	課長	廣瀬和孝	総括	所長	田丸秀明
	課長補佐	高木 尚		次長	小原克巳
	副主幹	野網朝二郎			
総務	主事	横田 秀幸	総務	主査	加藤正司
		水本久美子			
			整理	文化財 専門員	藤好史郎
埋 蔵 文化財	係長	大山真充		主任技師	西村尋文
文化规				技師	大久保徹也
平成元年度					
香川県教育委員会 文化行政課			財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	太田彰一	総括	所長	十川 泉
	課長補佐	高木 尚		次長	安藤道雄
	副主幹	網野朝二郎			

主任技師 西村尋文 技師 大久保徹也 大久保徹也 今回の下川津遺跡の整理作業は、これまでの香川県の報告書作成では最も多くの期間・体制を要したものとなった。しかし下川津遺跡の遺物出土量が、それまでに香川県教育委員会が調査を実施した全遺跡の遺物出土量の約1/3に達すること、調査対象面積の広さに起因する遺構数の多さ、また時期的に

であった。今回の報告書作成を振り返ってみれば、やり残したものの多さも心残りであるが、非常に大規模な遺跡の報告に3名の調査員が当たり、翻弄されながらも精一杯の事実報告は行なったつもりである。

弥生時代前期から室町時代までという長期間にわたる遺跡であることからすれば、むしろ不十分なもの

総務 係長

整理 係長

加藤正司

藤好史郎

最後に、発掘調査ならびに報告書作成作業を行なうに際して、多くの方々の協力を得た。

工事請負い調査の実施

主任主事 横田秀幸

水本久美子

主事

県土木部監理課係長篠原敬志,同監察員四海 博,同監察員石川 実,同主任主事 田淵匠,県土木部 河川課主査秋山利明,同主査筒井伸博,同主任主事笹尾隆一,同主事湯浅 強,水道局建設管理課技師

山下欣也(役職名は下川津遺跡調査当時)

発掘調查·整理作業全般

足利建亮,東 潮,足立克己,綾村 宏,石野博信,市田京子,植野浩二,宇垣匡雅,潮田鉄雄 桂 真幸,金田章裕,亀井正道,亀田修一,川畑 迪,木下 忠,黒崎 直,河野道明,下條信行 佐久間貴志,菅原康夫,滝瀬芳之,玉城一枝,高倉洋彰,新納 泉,西本豊弘,丹羽祐一,樋口隆康 橋本久和,平井 勝,平井典子,広瀬和雄,福田正継,福田さよ子,古市光信,的場法子,町田 章 光谷拓実,林部 均,森 浩一,山田昌久,山本悦世

以上の方々の御協力を頂いた。心からお礼を申し上げます。

1章 参考文献

1.香川県教育委員会 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(WI) 1986

2. 同 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(WI) 1987

3. 同 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(IX) 1988

第Ⅱ章 立地と環境

下川津遺跡は香川県中部の丸亀平野東端,現在の行政区分で香川県坂出市川津町下川津・蓮尺・中塚に位置する。坂出市川津町は同市の西南端にあって15の小字を含む。合併以前は綾歌郡川津村,遡って近世段階では鵜足郡東川津村(折居,鋳物屋,峠,東山,春日,六反地,中原,下川津),西川津村(西又,西原,元結木,中塚,弘光,蓮尺,上西原)に別れる。更に中世段階では川津郷・河津庄が所在し,律令下の鵜足郡川津郷に含まれる。19世紀前半の記録(「天保9年御領分明細記」)では前記西川津村高1261石余,東川津村高1486石余となっている。平均反収を1石強と考えればこの段階では両村合わせておよそ220町歩前後の耕地面積を想定できる[©]。

第1節 地理的環境

香川県(旧讃岐国)は四国北東部にあり、中国地方に小さく突出している。北は瀬戸内海中部のいわゆる備讃瀬戸を挟んで岡山県に相対し、南は阿讃山地によって四国中央部を東西に貫通する吉野川流域徳島県と隔てられる。面積約1800km。と中四国地方で最も狭く、また東西約92km、南北約61kmと東西幅の割には南北の奥行の狭い帯状を呈する。また山に遮られた南側を除いて、三方は海に面しており、西は燧灘、北は備讃瀬戸、東は播磨灘にそれぞれ接する。すなわち瀬戸内海の比較的広い範囲にむかって大きく間口を広げた格好をとっている。

更にこの地方内部は阿讃山地に発して瀬戸内海に注ぐ中小河川が形成する小平野群が,南の国境阿讃山地から派生して海岸線に突出する幾多の山塊・丘陵群によって隔てられ,それぞれ独自の小地域を成す。西部の柞田川,財田川を主要河川とする観音寺平野,高瀬川流域の三野平野,中部の弘田川,金倉川,土器川,大東川流域の丸亀平野,綾川流域の綾北平野,本津川,香東川,春日川,新川流域の高松平野,東部では湊川など中小河川が形成する小海岸平野群からなる東端地域とその背後にある鴨部川,津田川流域の長尾平野等である。令制下郡はほぼこうした河川水系単位に設定されており,これらが相対的に完結した政治的,経済的単位を成し得たことを示している。

広義の丸亀平野を弘田・金倉・土器・大東の各河川流域の平地部分と考えれば東西約12km・南北15km の三角形状を呈し,ほぼ中央部に位置する土器川流域でもっとも深く山間部に食い込む。ただしこの内沖積平野と見成しうる部分は海岸線に接した幅1.5~2.5km程度の帯状の地域に限られるとみるべきであろう。これ以南では比較的高燥な段丘面,緩扇状地形が広範に展開する。それらを縫って上記各河川の旧河道が網目状に広がり,その痕跡は現地表においても容易に観察できる。この部分は水系単位に律令制下の多度郡,那珂郡,鵜足郡に三分されている。

鵜足郡は当平野東端の大東川流域にほぼ相当する。阿野郡とは聖通寺山,角山から城山横山山地を経て栗熊台地を挟み,南方高鉢山山地にいたる山地群によって遮断される。那珂郡とは概ね土器川を自然の境界とするが飯野山西方の現丸亀市川西町などで同川西岸地域の一部をも取り込んで設定している。さてこのように限定付けられる本郡はその内部を丘陵・段丘地帯など自然の境界によって更に複数の小地域に区分することが可能である。飯野山によって南を遮られる大東川下流地域は三方を丘陵に囲まれ,鵜足郡北端にありながら意外なほど直接的に瀬戸内海に面する部分が少ない。その南方には飯野山

南麓に広がる緩扇状地形を経て高鉢山山地北側に展開する岡田・栗熊台地,それと横山山地に挟まれて 大東川中・上流域の低地部が東西に細く延びる。飯野山南西麓から土器川西岸に二村郷,同南麓に坂本 郷,その南側土器川に接した部分の小川郷を挟んで岡田台地から大東川中・上流域低地部に井上・栗熊 郷がそれぞれ比定されている。更に岡田台地,高鉢山山地西部によって遮断され,土器川北岸面した狭 い平地が存在する。長尾郷の比定地である^②。

東方との交通は地形から見て飯野山北側川津郷から常山・金山と古代山城,城山城(第3図67)の存在する城山・郷師山の間の隘路をへて阿野郡山本郷へ至るコースと途中から郷師山南麓に沿って東に回り込み,額坂峠に至るコース,飯野山南麓の坂本郷から城山・横山間にある先述の額坂峠の険しい山道を経て国府(第3図68)の所在する阿野郡甲智郷に抜けるコース,大東川上流の井上郷・栗熊郷から横山と栗熊台地に挟まれた隘地を通って阿野郡羽床郷に達するコースが想定できる。なお聖通寺山・角山・笠山・金山北麓に広がる現坂出市街は陸か・開発共に著しく遅れると考えられる。また南方へは鵜足郡南端の長尾郷から土器川を遡り,阿讃山地の竜王山(1060m)の西方寒風越を経て阿波國美馬郡に通ずる。西方へは僅かに土器川を挟んで那珂郡の平野部に接し,大東川河口部の津郷を介して瀬戸内海に面することは言うまでもない。

続けて鵜足郡北端・大東川下流地域のうち川津郷を中心とした地域について限定してもう少し詳しく 眺めてみよう。この地域は東に常山・郷師山を控え、北は角山・青の山が海岸線に並び僅かに常山・角 山間の隘路と角山・青の山間を流れる大東川河口部を介して瀬戸内海に通ずる。青の山南麓から飯野山 北西麓のほぼ蓮池付近まで展開する土器川およびその支流群の痕跡が現地表においても比較的明瞭に見 て取れ、土器川沿岸部分がかなり不安定な状態に有ったことが想定できる。西はこれによって限られる。 南は飯野山と郷師山から南西に延びる丘陵によって画される。大東川はこの二つの丘陵間を抜けて本地 域のほぼ中央部を北に貫流する。常山・郷師山間の谷筋ー前述の阿野郡へ抜けるコースの一つであるー が長く東から続きその部分に小河川 城山川が流れる。

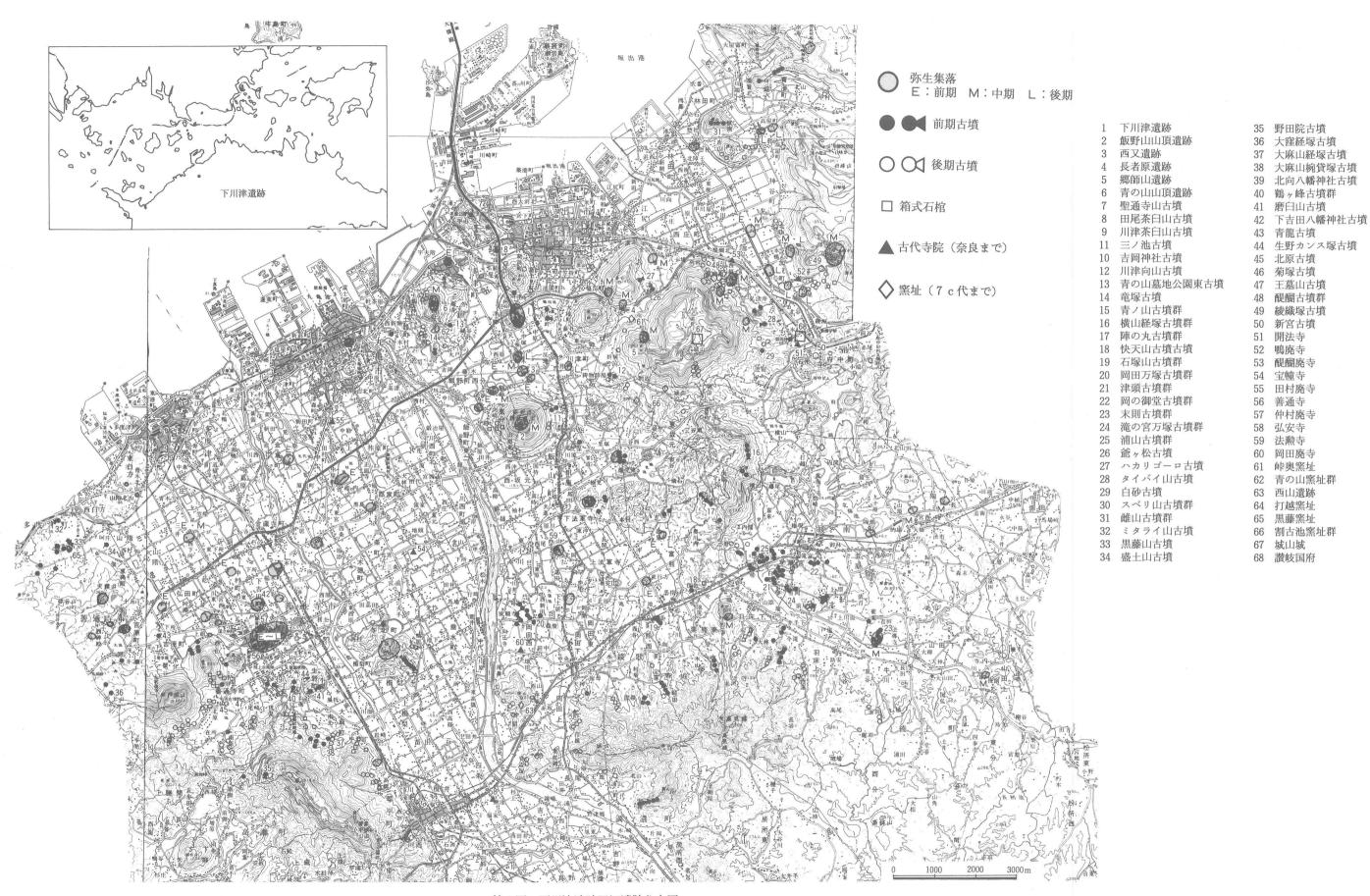
以上のごとく鵜足郡北端部に位置する本地域は東西約3km,南北約3kmの範囲を自然の様々な境界によって画されたいわば地理的な一小単位と見成すことが出来る。またその位置は大東川河口部を経て広く内海沿岸諸地方に連なり、東の谷筋を抜けて阿野郡中枢部に通ずる至便の地である。

この地域は今でこそ一面の水田が広がり、近世後半段階に旧東西川津村域に限っても200町歩以上の水田が存在したことが分かっている。弥生時代以降の地域史を考える際に現景観に至る耕地拡大の進展が重要な指標となることは云うまでもない。またそのためには水利条件と灌漑設備の整備に注目する必要がある。続いてこの観点から眺めてみよう。

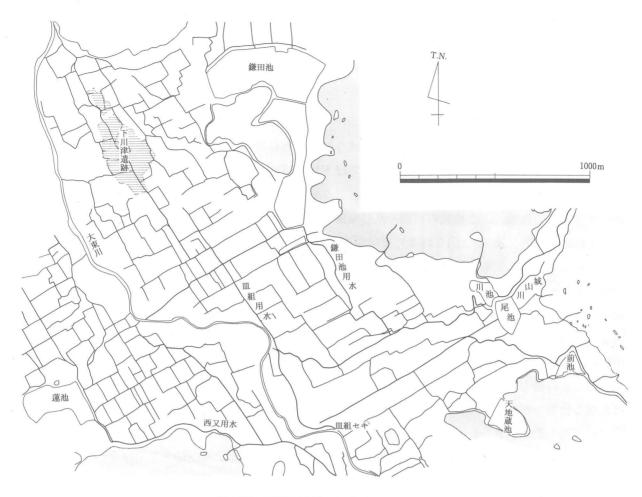
現在,この地域では大東川中流 綾歌郡飯山町で取水する坂元用水,西又用水および丸亀市飯野町で 土器川中流から取水する飯野幹線用水の計3本の域外から連なる広域用水路に依存する部分が大きい。 (第4図) 域外からの広域灌漑用水に大きく依存する。ちなみに下川津遺跡東方に位置する鎌田池は角

山・常山北麓の現坂出市街南部地域の新田開発に伴い近世後半に築造されたものでこの地域の用水源としては殆ど機能していない。また近世段階においても、大東川上流の現綾歌町楠見池 仁池から多く引水したことが記録に残っている。このように域外からの取水に大きく頼るのは、この部分の大東川が用水源になり得ていないことが重要な理由であり、恐らくそれは大東川の河床が低過ぎて揚水困難なためであろう。

しかしこのような広域灌漑用水・大形貯水池など高度な灌漑施設は明らかに歴史的に後出するもので



第3図 下川津遺跡周辺遺跡分布図



第4図 下川津遺跡周辺水路 配置図

ある。整備以前には周辺丘陵部からの落ち水や小河川に頼らざるを得なかったであろう。その場合,大東川東岸南部の城山川流域の谷筋は未だしも,その程度の小川すらない東岸北部下川津遺跡周辺や,西岸飯野山山麓地域は水利面で甚だ不利な条件にあったことが予想できる。

ところでこの地域は丸亀平野の条里地割分布域の東端に当たるが一町方格線はやや乱れて欠落する部分も多い®。その様相は均質的ではなく,詳細に見れば3グループに別れている。城山川流域は東西坪界線が卓越しており,城山川を取水源として大東川に排水する水利系を反映している。この北方下川津遺跡周辺は全般的に条里地割がもっとも未発達であるが,南の城山川流域から引水する南北線が僅かに認められる。大東川西岸の飯野山山麓地域では東西線が優位で,大東川への排水を意図している。どうやら条里地割においても現灌漑体系と同様に大東川に依存しないことを原則としている。また同時に城山川流域,下川津周辺地域,飯野山山麓地域でそれぞれ条里地割の分布パターンに差異が認められ,先に想定した広域灌漑用水整備以前の水利条件の違いを反映していると見て良い。下川津遺跡の位置は水利条件面では不利とさえ云いうる。城山川流域がもっとも容易に開発を進めらる条件を備えている。

(第5章5節下川津遺跡における条里地割について参照)

(大久保)

第2節 歷史的環境

1.下川津遺跡周辺の遺跡分布

弥牛時代集落

縄文時代のこの地域の状況を語りうる資料は今のところ見当たらないが、弥生時代前期には既に下川津遺跡を含めて4遺跡が知られている。それらは下川津遺跡を除けば何れも部分的なデータに過ぎずそれぞれの遺跡の消長は十分には知り得ないが、どうやら中期中葉以降から後期まで契機的に発展する遺跡は無さそうである。この地域の初期の農耕集落は比較的短期間の移動を繰り返していたようである。その中にあって西又遺跡®(第3図3)では環壕の可能性の有る大溝が確認されている点は注目に値する。しかしそれにしても前期新段階に形成されせいぜい中期前半まで機能するにすぎない。

中期後半~後期初頭では丘陵上に遺跡分布を見るが、今のところ平地部では未確認である。遺跡の詳細は不明であるが、この地域にあってはもっとも眺望の利く青の山山頂(第3図6)、飯野山山頂(第3図2)で共に中期後半の土器が採集されている。典型的な高地性集落と云えよう。このほか城山山塊の中腹緩斜面部に長者原遺跡(第3図4)、郷師山遺跡(第3図5)等石庖丁を始めとする多量の打製石器類の出土を特徴とする中期後半の遺跡が点在する。これらは相対的に高地に立地するものの先の二例とは異なる性格を想定すべきであろう。著明なサヌカイト産地、金山周辺に位置することから石器生産遺跡の可能性も想定できるかも知れない。以上の中期段階の遺跡は他の多くの例と同様に後期中葉以降まで継続するものはないようである。一方平地部では後期に入って元結木遺跡・下川津遺跡など再び遺跡分布が確認できるが遺跡数・規模について前段階のそれと比較しうるだけのデータはない。

首長墓系列

古墳時代については古墳群の展開と消長とから検討を進めよう。以下示してゆくように後の1~2郷単位の小地域ごとに古墳の分布・消長等の展開には個性が現れるようである。集落遺跡の展開を十分に把握できない現状ではこれによって地域の歴史的特質を掘下げてゆくのが最も早道であろう。

古くに破壊されて仿製三角縁神獣鏡が出土した川津茶臼山古墳(第3図9)は前方後円墳と伝えられる。聖通寺山山頂には墳形不詳の積石墳、聖通寺山古墳(第3図7)がある。その南にあって角山に続く尾根鞍部にはこの地域最大の全長79mの前方後円墳で埴輪を持つ田尾茶臼山古墳®(第3図6)が,また青の山南麓にはかつて筒形銅器と銅鏃を出土した吉岡神社古墳®(第3図10)がある。以上4例がこの地域における古墳時代前期段階の首長墓である。なお金山東南麓の爺ケ松古墳®(第3図26),ハカリゴーロ古墳®(第3図27)は立地とその眺望から見て綾川流域の集団に係わるものと見成しうる。また飯野山東麓の三の池古墳(第3図11)は前方後円墳とされるが,現状を見るかぎりでは積極的にそれを肯定する材料はない。上記4例で前 I 期に積極的に遡らせ得るものはない。川津茶臼山古墳と吉岡神社古墳は副葬品から前 II 期以降に比定できるし,田尾茶臼山古墳は埴輪を見るかぎりでは前 II 期以降に位置付け得るが,後期までは下らない。恐らく単一の首長墓系列と見て良いのであろう。ただし前期末以降この系列は今のところ辿れない。後期段階でこの地域の首長墓と見成しうるのは僅かに6 c後葉に位置付け得る青の山南麓の大形横穴式石室墳,竜塚古墳®(第3図14)だけである。

周辺地域でも同様に比較的小範囲内で継起的な首長墓系列を確認できる例が多い。例えば讃岐地方中部にかぎっても大東川上流地域では綾歌町石塚山古墳群(第3図19),快天山古墳(第3図18),陣の丸

古墳群(第3図17)などからなる1~2グループの首長墓系列が確認できるし、綾川下流域でも前記の爺が松・ハカリゴーロ両古墳を始め雌山古墳群(第3図31)、タイバイ山古墳(第3図28)、白砂古墳等(第3図29)、最低2グループ程度の系列が想定できる。西方弘田川下流域ではミタライ山古墳(第3図32)、黒藤山古墳群(第3図33)の系列が、同川上流・金倉川中流の善通寺地域でも2グループの系列を認めうる。うち1系列は古墳時代後期後半まで連続する可能性が高い。また土器川流域の平野最奥部の小地域、満濃町長尾地域でもやや規模は小さいが前方後円墳を含む1単位の系列と考えられる古墳群が認められる。

これ以上の例示は省くが、古墳時代の全期間とは云わないまでも特に前期段階に限れば讃岐地方では この程度の小地域単位で前方後円墳を主体とする首長墓系列が存在することが一般的と云って良い状況 にある。換言すれば讃岐地方の小地域集団すなわちその首長層の多くはこの時期には最小クラスに近い 規模が大半を占めるとは云え、前方後円墳を築きうる立場を畿内中枢の諸首長との関係において保持し ていたと云えよう。その点では川津地域はそうした平均的な地域の1つと理解する事が出来る。

中小規模墳の展開

さて前期後半以降こうした小地域間の古墳群の展開に大きな格差が生じはじめる。この段階では確実に中小規模墳の築造数が増大し,更に墳丘等の区画施設を持たない箱式石棺群も存在する。地域間の格差は中小規模墳の展開状況によって顕著に現れる。先に述べたように川津地域では前期後半以降の首長墓系列が不明確で,同時に中小規模墳も大規模に群集する状況は認められない。副葬品の点からこの時期に下ると思われる川津向山古墳®(第3図12),青の山墓地公園東古墳(第3図13)など2~3が知られるにすぎない。未確認のものや既に消滅したものの存在を考えたとしても大規模な群集は望めないであろう。箱式石棺群は飯野山西北麓や青の山山麓などで幾つかの確認例がある。

綾川上流で綾南町・綾上町にまたがる羽床盆地では津頭西・東古墳[®] (第3図21),岡の御堂1号墳[®] (第3図22)などの首長墓クラスの大形円墳の継起的築造が前期後半以降に認められる。同時に規模・主体部構造・副葬品などの点でこれらより下位に位置付けうる滝の宮万塚古墳群(第3図24),浦山古墳群(第3図25)などの中小規模墳が密集する。この地域で確認している中小規模墳で時期の推測できる約70基のうち50基近くがこの段階のそれで後期後半以降の横穴式石室墳よりはるかに多い。同様の状況は大東川上流地域でも確認できる。岡田万塚古墳群(第3図20)では小型の前方後円墳を中心にかつて数10基におよぶ中小規模墳が群集していたと云う。

これらと対照的なのが,弘田川上流・金倉川中流の善通寺地域,綾川下流地域である。善通寺地域では青竜古墳(第3図43),生野カンス塚古墳(第3図44)等の首長墓クラスの大形円墳と共に周辺丘陵裾部に箱式石棺群の群集がかなり濃密であるが、中小規模墳の数は余り多くないし、濃密な分布も確認できない。綾川下流域も同様である。川津地域は明らかに後者に類似している。

群集横穴式石室墳

横穴式石室墳の普遍化によって初めて中小規模墳が増大する地域とそうでない地域とがある。前者は 横穴式石室の採用を契機に群集墳を形成し、後者ではそれ以前に出現している場合が多い。先に触れた ように羽床地域では却ってこの時期のそれは減少しているし、大東川上流地域でも前代ほどの群集は認 められない。逆に善通寺域では「墳丘を有する」古墳はこの時期に爆発的に増大するらしい。川津地域 ではこの段階で群集墳の形成が始まると云って良いであろう。10数基以上を数える青の山山塊の横穴式 石室墳の群集を始め、飯野山山麓、城山川流域の谷部等に認められる。古墳時代後期後半、6世紀後半 段階に築造される横穴式石室群集墳の量は,前代の群集墳に比して確実に増大しているが周辺地域に比べて特に有力な群集状況は示さない。前節で見たように土地条件から見て最も開発が容易であり,かつ阿野郡中枢部へ抜けるコース沿いに位置することから本地域の中枢の一つと見て良い城山川流域谷部においても現在知られているそれの数は多くない。青の山の後期古墳群にしても群集密集度という点ではとくに傑出した様相を示すわけではない。高松市浄願寺山古墳群等と異なり山塊各所に比較的散漫に分布する状態にある。

先に述べたように後期段階の首長墳系列の不明確さと共にこうした動向は注意しておくべきであろう。 **須恵器生産**

ここで古墳以外に目を転じてみよう。讃岐地方ではほぼ古墳時代後期後半から,奈良時代に綾川上流 陶地区に集中するまでの間,概ね郡単位で1~2の須恵器窯が分布すると云われる。阿野郡では綾川上流に打越窯[®](第3図64)があり,多度郡ではやや古いが弘田川下流に黒藤窯[®](第3図65)がある。鵜足郡域では岡田廃寺に伴う瓦窯で須恵器を焼成している例[®]を除けば,他は全て北端川津地域周辺に集中する。青の山南麓の青の山1,2号窯(第3図62)では7世紀前半の操業が,城山川上流峠奥窯[®](第3図61)ではほぼ7世紀代一杯の操業がそれぞれ想定できる。更に後者の立地する谷筋に連なる南側支谷の奥,割古池周辺(第3図66)でも最近2基の窯が発見され[®]6世紀末~7世紀代の生産が確認されている。この段階における郡毎の須恵器生産と云う状況は,郡域単位程度を対象とした須恵器流通と考えるのが素直であろう[®]。とすれば鵜足郡におけるこのような生産地分布は該期の川津地域を考える上で重要である。

古代寺院

讃岐地方は南海道諸国中,奈良時代以前創建の古代寺院が最も多く,現在確実なところで32ヶ寺を数えると云う。郡別分布では,山田郡の5寺,阿野郡の国分寺,国分尼寺を含めた5寺が最も多いが,最低2寺以上が確認されている。阿野郡では国分寺・国分尼寺以外で綾川流域に開法寺(第3図51)。鴨廃寺(第3図52),醍醐廃寺(第3図53)が,那珂郡では北から田村廃寺(第3図55),宝幢廃寺(第3図54),弘安寺廃寺(第3図58),多度郡では仲村廃寺(第3図57),善通寺(第3図56)が知られている。やはりそれぞれ郡域の中枢部分に分布するようである。

一方鵜足郡域では,僅かに大東川上流の法勲寺廃寺(第3図59)と岡田廃寺(第3図60)が知られるにすぎない。大東川下流域では青の山東麓と土器川西岸双子山東方の2箇所て奈良時代の瓦を出土した地点があるが[®]古代寺院の所在を推測するだけの材料には欠ける。

以上周辺地域との比較を重点に起きながら奈良時代までの川津地域の動向を大雑把に追ってきた。前節で述べたように土地条件・位置関係に恵まれ、鵜足郡の中枢として十分機能しうる位置にあり、古墳時代前期にはこの地域独自の首長墓系列も復元可能である。しかし前期末以降その系列は途絶え、また中小規模墳の展開においては、その増加は横穴式石室墳の一般化の時期まで下る。こうした古墳時代後期以降の相対的な「地盤沈下」傾向は奈良時代まで続き、この地域では古代寺院を確認できない。そうした状況にあって6世紀末~7世紀代に鵜足郡域の須恵器生産を一手に引き受けている。こうした歴史的な状況を踏まえればこの須恵器生産の性格については改めて検討する必要があろう。

2.古代・中世の川津周辺

古代以降の複雑な歴史的展開を語るには、現段階のこの地域の考古資料は余りにも非力である。しば

らくは断片的に残された文献資料からその間の動向を窺ってみよう。ただし現存する資料は中央の社寺・貴族がこの地域に設置された封戸・荘園の給(領)主としての立場から残した記録である。言わば上級権力として外部からこの地域に接しており,そうした制約からそのような資料だけからではこの地域においてどのような具体的な展開を辿って古代社会から中世のそれへの展開が成されたか,そうしたものを根本で規定する生産関係はどのように推移したか,それによって在地の支配関係はどのように動揺し変容を遂げたかあるいは再編を計ったか等地域社会の歴史的展開をダイナミックに映し出すことは困難である。とはいえここではしばらくそれによって動向の一端でも窺うことにしよう。

正倉院資料中に「讃岐國鵜足郡川津郷戸主内部宮麻呂調絁壹匹長六丈廣一尺九寸 天平十八年十月」の墨書を持つ絁がある。これが文字資料として現れる「川津」の初例である。調物として絁をこの地域から貢納していたことが判る。

川津郷は752年(天平勝宝 4 年)他の19郷と共に東大寺封戸に勅施入されている。なおこの時に勅施入された地域として讃岐國では他に山田郡宮処郷(現高松市前田町周辺),香川郡中間郷(現高松市中間町,御厩町周辺)が見える。封戸制度は国家機構を媒介とした律令的収奪物の支配層への再配分システムであるので,同時期の東大寺初期荘園のように一在地支配層を介在させるにせよー東大寺そのものが直接的にその経営に関与し,川津郷の生産関係に強い影響を行使することは期待できないが,この関係によって古代末まで「川津郷」が東大寺文書に散見する。

因に天暦四年(950)「東大寺封戸并寺用雑物目録」では川津郷から封物として調絹40疋7尺,庸米44石5斗5升,租白米41石2斗6升5合,中男油1斗5升を貢納することになっている。これら貢納物のの品目は同文書に記された讃岐國内の宮処郷,中間郷と同じであり,その中に調絹40疋が見える点が注目できる。先の正倉院宝物と共に絁がこの地域の特産物であることを示している。

律令国家の動揺の中でそれと密接不可分に形成されてきた各地の東大寺初期荘園・封戸は解体してゆくが当地域もその例に漏れない。平安後期以降の資料でしばしば封物遅滞の記事を見るがそれでも康治元年(1142)「東大寺返抄案」で同年分讃岐國百五十戸料として御封米732石 4 斗 4 升 6 合が貢進されたことが確認出来るので12世紀中葉までは維持し得たことが分かる。しかし弘安三年(1168)寺家御封便補保として三木郡原保,那珂郡金倉保を立てているので,その後間もなくどのような事情からか川津郷を含めた讃岐國封戸三郷からの封物確保が困難になっていたことが推定できる®。

やや下って13世紀中葉には九条道家初度惣処分状(建長二年1250)の一条実経譲与分の「新御領」中に「春日社領河津庄」を見ることが出来る。これは九条道家が讃岐の知行国主であった時期に公領川津郷の一部を割いて立庄したものと推定されている。すなわち平安時代末から鎌倉時代にかけて律令制度に基づく収奪,この場合は封戸制度としての収奪を東大寺が成し得なくなり,恐らくそれと密接に係わり立荘あるいは公領の纂奪=荘園化が進行する。律令的収奪に抵抗してこれを不可能とし,あるいは荘園化によって負担軽減,権利拡大を求める在地の動きが何らかの形で存在したであろうがその状況を知る資料はない。少なくとも13~14世紀には当地域には公領川津郷と河津「庄」が併立している。両者の位置関係を明確に記す資料はないが,川津町東山に春日神社が所在することから律令下川津郷東南部の城山川流域を中心とする地域が河津庄の故地と推定されている。。

ただし最近の研究によれば公領と称しても実際には知行国主を本家とする荘園と見るべき内容であったと考えられている。川津郷についてみれば九条道家の死後次いで知行国主となった後嵯峨院が文永九年(1272)円満院宮円助法親王に譲与し「光厳上皇院宣案」によれば建武四年(1337)には宣政門院懽

子領であったらしい[®]。

鎌倉時代末から室町時代初頭の内乱期には、当地域でも混乱が生じている。建武四年(1337)から暦応四年(1341)にかけて、川津郷、河津庄およびそれらから飯野山を挟んで南西に位置する興福寺領工村荘において仁木弥次郎なるものが軍勢を率いて盛んに濫妨を働き、これに対して興福寺衆徒、川津郷領家職修理亮資任から濫妨停止の申状が出されている。修理亮資任申状案(「外記日記」紙背文書)によれば前記仁木弥次郎は預所と号したとのことであるので、同郷の在地支配権を巡る紛争と考えられる。彼が在地勢力であるのか、本来本家あるいは領家により任命され外部から派遣された勢力であるかは明らかではないが、記録に現れた限りでも4年におよぶ間、鵜足郡北部で荘園秩序を脅かす活動を続け得たのは、少なくともその背後には荘園領主の支配に抵抗しそれを支える在地の勢力が有ったことは確かであろう。それ故興福寺等の荘園領主は幕府に訴えてその解決を計らねばならなかった。この一連の騒動の後、宣政門院領川津郷・春日社領河津庄・興福寺領二村荘に関する記録は残っていない。

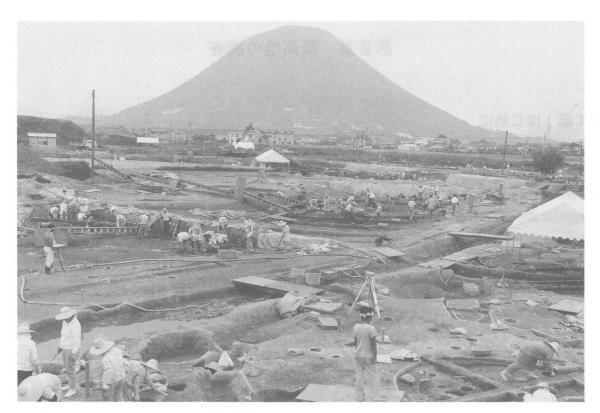
室町時代前半には大東川河口西岸の宇多津に守護所が置かれ、守護細川氏の領国支配の拠点として、また物資の集散地として栄える。また東岸の聖通寺山には応仁年間に細川氏被官の奈良氏が城を構え、以後以後天正十年(1582)に長曽我部元親に追われるまで三代に亙って居城する。守護支配の下でその被官として在地武士団が組織される過程でこの地域においてどのような事態が生じたか、嘗ての荘園秩序がどのように消滅していったかは明らかではない。

以上下川津遺跡周辺地域の地理的・歴史的環境について大雑把に眺めてきた。弥生時代前期前半から 室町時代末におよぶ下川津遺跡の歴史的展開に周囲のこうした状況が色濃く反映されているのは当然で あるし、逆に川津地域の展開を下川津遺跡の内容がより雄弁に語ることも出来るであろう。(大久保)

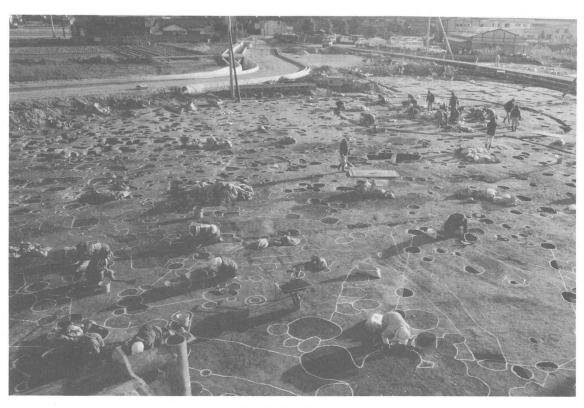
Ⅱ章補註

- 注1 『日本歴史地名大系38 香川県の地名』平凡社 1989 275 P
- 注 2 注 1 前掲書48 P~51 P
- 注3 金田章裕「第六章 条里と村落生活」『香川県史1 原始・古代』 1988
- 注 4 國木健司「三反地遺跡」。『香川県埋蔵文化財調査概報集』香川県教育委員会 1990
- 注 5 「田尾茶臼山古墳」『新編香川叢書 考古編』 1983
- 注 6 「吉岡神社古墳」注 5 文献
- 注7 松本敏三・渡部明夫『爺ケ松古墳調査概報』香川県教育委員会 1975
- 注8 「ハカリゴーロ古墳」注5文献
- 注9 真鍋昌宏他「青の山7号墳」『青の山南麓における埋蔵文化財調査概報』丸亀市教育委員会 1980
- 注10 「向山古墳」注5文献
- 注11 「津頭古墳群」注5文献
- 注12 渡部明夫他『岡の御堂古墳群発掘調査概報』綾南町教育委員会 1977
- 注13 松本敏三他「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』Ⅱ 1986
- 注14 松本敏三他「香川県古代窯業遺跡分布調査報告 I」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』 I 1985
- 注15 渡部明夫氏の御教示による。
- 注16 注13文献
- 注17 蔵本晋司「飯山町割古谷の須恵器窯跡二例」『香川史学』第18号 香川歴史学会 1989
- 注18 渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』 1980
- 注19 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報 特別号8』香川県文化財保護協会 1967
- 注20 田中健二「第八章 荘園と公領」『香川県史1 原始・古代』 1988
- 注21 注1文献 275P

注13文献



第1微高地・第2低地帯調査風景



第4微高地調查風景

第Ⅲ章 微高地の調査

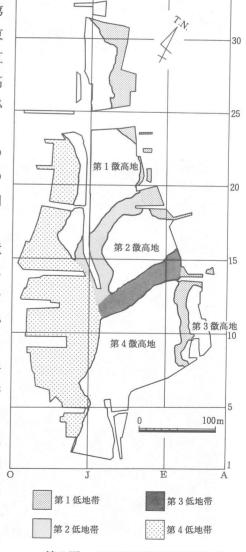
第1節 はじめに

下川津遺跡は、標高5m前後の微高地とその微高地を分断する埋没河川で構成される。微高地は、4 微高地に分かれ、北から第1微高地・第2微高地・第4微高地となり、東に第3微高地が位置する。第2微高地は調査対象地内にほぼ含まれ、第1・4微高地はその大半が含まれる状況である。これに対して第3微高地は調査対象地内にその西端の一部が含まれるだけで、大半は調査区外に広がりを有する。

第1微高地は東部から北部にかけて埋没河川第1低地帯が南北に流れ、西部は一部調査区外に広がりを有するが、西部は砂礫層が広がり、その砂礫層上面では遺構がきわめて希薄であることから、調査対象地内の状況でほぼ全容が判明したものとみて大過ないであろう。また第2微高地は、その東端部が調

査対象地外に延びるが、調査対象地に隣接して埋没河川が走ることが地割り等から確認でき、ほぼ状況は全貌に近い。また第4微高地は東部の第1低地帯が西に回り込み、微高地自体の東西幅が狭くなることから、南へ微高地自体は広がるもの調査区のまとまりとしては比較的良好である。これに対して第3微高地は調査体調面積が非常に狭いことからその状況はごく一部が判明したにとどまる。

また微高地を分断して走る埋没河川である低地帯は、東部の 第1低地帯では多量の土器および木製品が出土したが, 現在の 河川である大東川よりの第4低地帯では、流路のくぼみを活用 した水田址を検出したが遺物出土量は少ない。また第1・2・ 4 微高地を分断する第2・3 低地帯は比較的浅く, 土器等の遺 物出土は多いものの木器等の出土は認められなかった。こうし た状況からすれば、第2・3低地帯が早く流路としての機能を 失い, 少なくとも弥生後期後半段階では水田化された可能性が 高い。この第2・3低地帯は、西部の第4低地帯に切られるこ となどから, 弥生後期後半段階では, 第4低地帯の前身の流路 が水田として機能していた可能性が考えられる。第4低地帯 は、大東川よりになることから、その後の河川氾濫等の影響を 受けやすかったと考えられ, 新流路に切られる。この新流路は 少なくとも平安時代後半代には水田化され、鎌倉期には北部は 完全に埋没し、集落域が埋没河川上にのる。これに対して、東 部の第1低地帯は8世紀代までは少なくとも流路として機能し ている。その差が検出した遺構・遺物の状況の差にあらわれた ものと理解できる。



第5図 下川津遺跡旧地形概念図

下川津遺跡の今回の調査で検出した遺構・遺物はその初現は少なくとも縄文時代草創期にのぼり,有 舌尖頭器が1点出土したほか,縦長剝片が1点出土している。ただしこれらの遺物はいずれも後世の埋 没河川の埋土や排土中からの出土であり,現位置を保ったものではない。下川津遺跡が実質的に始まる のは,弥生時代前期の古段階になってからである。縄文時代晩期の土器等は若干量の出土を見るが,確 実に単独で検出したのは第1微高地上で検出した土坑1基にとどまる。

この主体となる時期に属する遺構・遺物は、弥生時代前期から室町時代に及ぶが途中の断絶期や遺構の広がりの明確な差から、4時期に大別される。

第Ⅰ期は、弥生時代の前期古段階が中心で、わずかに新段階の遺物を含む。弥生時代前期の遺構は第 1 微高地南部を中心として検出し、その他では第 4 微高地南部で溝を 1 条検出したのみである。遺物の 出土も第1微高地南半が中心で、後世の遺構内から混入するように土器群が出土した。その後弥生時代 中期から後期前半代にかけての遺物は皆無に近く、空白期となる。第Ⅱ期は弥生時代後期後半から古墳 時代前期にかけての時期で、第1・2・4微高地上に集落遺構が展開する。その中心は第1微高地と第 2 微高地を分ける第2低地帯に面する場所が中心となる。第2低地帯は東部と西部をそれぞれ第1低地 帯・第4低地帯に切られるが本来的にはほぼ類似した個所に流路の残存形態としてのくぼみが連なって いたと考えられ,前述した第Ⅱ期の集落域の広がりが,第2低地帯に面した展開を示すことに誤りはな いであろう。古墳時代後期6世紀の後半代の集落域が各微高地の中央部にまで住居等の建物が分布する のに比べて,この第 Ⅱ期の集落域は第 1 微高地の北部の集落域を除いて微高地の中央部までの広がりを 見せない点は注目される。第Ⅲ期は古墳時代後期6世紀後半代から鎌倉時代にかけての時期である。5 世紀代を中心とする断絶期の後第4微高地の南半部を中心として始まる, 竈付きの竪穴住居群と掘立柱 建物群で構成される集落が、第Ⅱ期では居住空間としてはほとんど活用されていなかった微高地の中央 部にまで広がるように展開する。こうした建物群の中にはその配置に規則的な構成を示すものも多い。 またこの時期には土坑墓と考えられる遺構も概ね7~8世紀代と考えられるものが第1微高地の中央部 から東部にかけて分布し、第4微高地南半部に鎌倉時代の土坑墓が分布する。集落域内に墓域が含まれ ることとなり、集落の様相に大きな変化が生じた可能性もある。第Ⅲ期の7世紀代には隣接する埋没河 川内から、カラスキ等の良好な木製農耕具が出土し、開発者集団的な集落の様相が考えられる。また、 7世紀代になると第4微高地の南半部を中心として整地面が確認され、大型の建物群が出現し、概ね竪 穴住居の方向などに微高地全域を通じての規格性が認められるなど集落域の様相の大きな変化が生じた ことが窺われる。また輸入磁器の越州窯椀・水晶製の丸鞆が出土し、また埋没河川内からの出土木製品 の中には琴柱・呪譜木などが有り、また出土遺物のなかに円面硯が有るなど集落の性格を推察するう えで注目すべき遺物も含まれる。第N期の室町時代には集落域は第1微高地の南半部に限られ,方形区 画の溝に囲まれた建物群が出現する。他の調査区域は大半が水田化すると考えられ、居住と関連する明 確な遺構は認められない。

以下,本章では,微高地上で検出した遺構を中心として時期ごとに報告する。遺構名は発掘調査時点での名称は各調査地区ごとに独立して命名しており,そのままでの使用は混乱を生じる可能性が高いため,北から統一的に再命名した。またこれまでに刊行した概報での名称は,本文中で併せて表記することとした。なお,遺構名中のローマ数字は前述した下川津遺跡の第Ⅰ期から第Ⅳ期までの時期を示している。 (藤好)

第2節 第1期 弥生時代前期

1.はじめに

下川津遺跡の諸遺構の中で最も古い時期に当る遺構及び遺物は、弥生時代前期の中でも比較的古い段階である。この時期の遺構は少なくその拡がりは、第1・2・4 微高地上に少数確認できるのみである。遺構の拡がり上の傾向としては、第1 微高地上の南半部中央より、第1 低地帯沿いに掛けて比較的集中している。

出土遺物としては遺構の所在する各微高地上よりも,周辺部の自然河川中より多量の遺物が出土している。特に第1・2 微高地を画する第2 低地帯の堆積層中からは,土器及び石器がコンテナ400箱前後出土している。これらの遺構及び遺物の拡がりより,弥生時代前期の集落域の中心は,第1 微高地の南半部に所在していたものと推定できる。

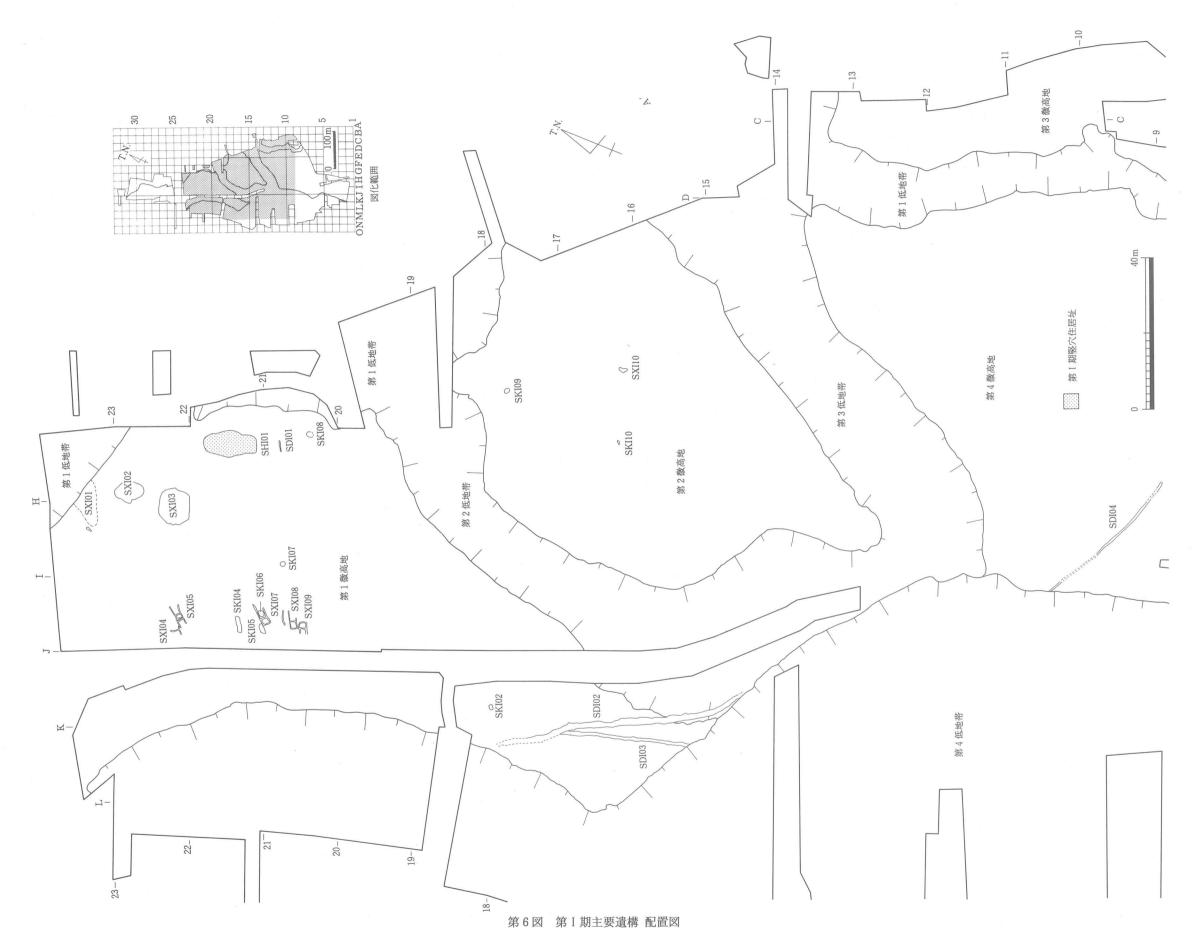
当期に最低限定できる主要な遺構を微高地単位で集計すれば、第1微高地-住居址1・土坑8・不定 形遺構9・溝2,第2微高地-土坑2・不定形遺構1,第4微高地-溝1条検出できたのみである。こ れらの諸遺構は何れも残りが悪い。そのため、後世の削平により大部分の遺構が既に失われているもの と推定される。次に、最大資料化出来る遺構と遺物を順次紹介する。 (西村)

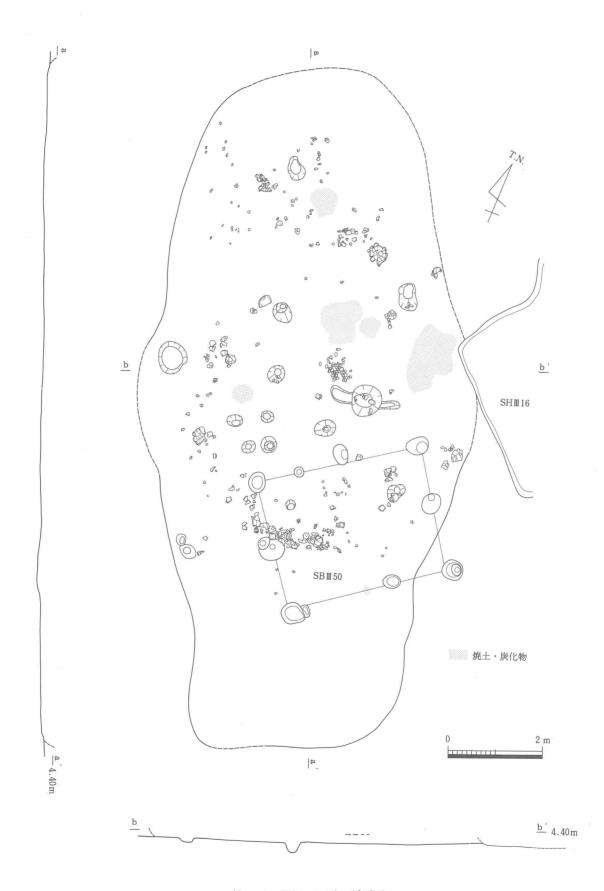
2. 堅穴住居

SHI01(第7·16~18図 図版17 SH8601)

G21区,第1 微高地中央南よりの第1 低地帯に面した地点で検出した,下川津遺跡で唯一の弥生時代前期の住居と考えられる遺構である。東部はSHⅢ16とその周溝に,北部はSDⅢ29にまた西部も現代の小溝に切られる。遺構の残存状況は悪く,明確な壁面は検出できず,非常に緩やかに落ち込む。平面形は,残存状況が悪いこともあり,明確にしがたいが,中央部が脹らむ南北に長い隅丸方形状を呈する可能性が高い。中央の円形状の部分を中心として焼土と炭化物を検出したことから,包含層の落ち込みではなく住居跡と考えた。長軸約14.7m,短軸約5 m,残存深約0.2mを測る。南北が非常に長く,形状的に南北の方形部と中央部の3ブロックで平面が構成されること,また北部の方形部にも焼土が認められ炉の可能性があることなどからすれば,3棟の竪穴住居が重複している可能性も否定できない。遺物としては、中央部を中心として比較的残存状況が良好な土器群を検出し,石器では注目できるものとして磨製石鏃が検出された。

図化したものはいずれも床直からの出土の遺物である。(第16図 1)は突帯文系の甕である。口縁直下に僅かに刻み目を持つ突帯を有し、口縁部上半が外反することから弥生系の甕の影響を受けたものと考えられ、時期的には矛盾しないものと考える。(2~11)は壷で器表の残存状況がよいものは、磨きもしくは丁寧なナデが施されているものが多い。(6)を除き口縁部直下もしくは肩部に成形時の段を持つ壷である。器表は剝落しているものが多いが、磨き状の丁寧なナデ調整を施す。(3~10)の外面にはへラ描沈線による文様が施される。(3)には有軸の木の葉文、(4)には頸部に連孤文・胴部に山形文ないし有軸の波状文が、施される。他の壺にもほぼ同様の文様が施されているものと考えられる。(6)は他の壺と比較してやや胴の張りが少ないもので、口縁部直下の段も明瞭ではない。器表の調整は丁寧なもののややつくりが雑な感を受けるものである。(第17図 1~5)は壺で(1)はやや胴部の径と比較し





第7図 SHI01 平・断面図

て頸部が細いもので、(2・3)は小形の壺、(4・5)は壺の低部と考えられる。(6)は蓋器表は丁寧 な磨きが施される。($7\sim11$)は甕で、器表の剝落が進み調整は明確ではない。口縁直下には段を持ち、 残存状況の良好なものは口縁端部には刻み目が残る。(第18図1~12)甕である。口縁直下には段は持た ない。いずれも器表の剝落が著しい。(13) は円盤状の紡錘車である。

出土した土器群は、壺では概ね体部の直径が大きなものが中心であり、長頸化したものは認められな い。また甕でも必ずしも段を持つものばかりではないが、少なくとも頸部直下に沈線を有するものはな (藤好) いことから, 弥生時代前期の古段階に否定されよう。

3. 土 坑

SK I 01 (第7·19図)

I25区で検出した,長軸約1.2m,短軸約0.9m,深さ約0.10mを測る土坑で,下川津遺跡内で検出し た唯一の明確な縄文時代の遺構である。平面形は楕円形を呈し、埋土は暗褐色土である。内部からサヌ カイトの剝片が多量に出土したほか、縄文時代晩期の土器片が出土している。

(第19図 $1\sim3$) は深鉢。($4\sim8$) は浅鉢である。

(藤好)

SK I 02 (第8·19·20図)

J17区で検出した,長軸約1.22m,短軸約0.94m, 深さ0.5m弱を測る土坑である。平面形は方形,断 面形は台形状を呈する。埋土中には焼土と炭化物が 含まれる暗褐色系の砂質土である。土器が出土した。

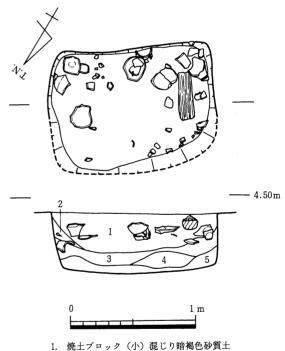
(第19図9~13) 壺である。(9) は肩部に段, そ の直下に2条の平行沈線をめぐらし、複線の山形文 が施され、口縁直下に段は持たない。器表の調整は 丁寧な磨き状のナデである。(11) は外面にヘラ描 の文様が認められる。この文様は特徴的なものでS HI01出土の壺に見られる,体部に施された有軸の 羽状文状の文様から導かれる可能性が考えられる。

(14~18) は甕である。口縁部が残るものに,整形 時の段や沈線を残す物は認められない。(第20図 1~2)は壺か甕の底部で器表の剝落が著しい。

(3) は手捏ねのミニチュアの壺である。 (藤好)

SK I 03 (第20図)

H23区で検出した,長軸約1.5m,短軸約0.5m, 深さ約0.10m前後を測る不整な長円形を呈する土坑 である。弥生時代前期の土器片が出土することか



- 焼土ブロック(小)混じり暗褐色砂質土
- 炭化物混じり暗褐色砂質土
- 弱焼土混じり (弱暗) 褐色砂質土
- 1に類似

第8図 SKI02 平・断面図

ら,第Ⅰ期の土坑としたが,周辺には弥生前期の包含層が残ることや,方位的に概ねSDⅢ08と平行す ることから,後出する時期の所産の可能性もある。

出土遺物中2点を図化した。(第20図4・5)は甕口縁部である。(4)は口縁端部に刻み目を持つ甕 (藤好) 口縁部である。ただし小片のため傾きについては再考の余地がある。

SK I 04 (第20図)

I21区で検出した長軸4.3m以上,短軸1.2m,深さ0.21mを測る土坑である。平面形は長方形を呈する。形状から見て二つの土坑が重複している可能性もある。断面形はレンズ状で浅い。第一微高地で検出した I 期の土坑の中では比較的整った形態を残す。また底面もほぼ平坦である。埋土は単層で少量の弥生前期前葉の甕などの小片を出土した。ここでも突帯文系の深鉢を共伴している。

出土遺物中3点を図化した。(第20図6・7)は甕の上部である。(6)は、突帯文系の深鉢で口縁部直下に断面カマボコ形の低い突帯を付し、頂部に刻み目を施す。(8)は壺下半部、円盤状に突出気味の底部を持つ。 (大久保)

SKI05(第20図)

I20・21区で検出した長軸2.6m以上,短軸1.2m,深さ0.10mを測る土坑である。西端を溝SD№01に切られる。平面形は長方形を呈し、断面形はレンズ状で浅い。第一微高地で検出したⅠ期の土坑の中では比較的整った形態を保つ。埋土は単層である。多量のサヌカイトチップと弥生前期と判断できる程度の土器片を少量出土した。

(第20図9)は小片で磨耗も著しいため、断定し難いが突帯文系深鉢の可能性が高い。(10)は小形壺の胴部最大径、(11)は壺口縁である。(12)は壺肩部片で不明瞭だが段を持つ。(13)は底部片。円盤状の突出も認められず単純な平底を呈する。 (大久保)

SK I 06 (第20図)

I21区で検出した平面形略方形を呈し、長軸1.8m, 短軸1.5m, 深さ0.10mを測る断面形レンズ状の 浅い土坑である。同時期の不明遺構SXI06の内部に位置するが、付帯施設とは断言できない。著しい 削平を受け、土坑下部が辛うじて残存していると思われる。埋土は単層で突帯文系深鉢を含む弥生前期 土器小片を少量出土した。

(第20図14) は突帯文系深鉢。口縁部にほぼ接して矮小化した断面カマボコ形の突帯を付す。刻み目はない。(15) は甕口縁部片で端部に刻み目を持つ。 (大久保)

SKI07(第20図)

H20区で検出した平面形楕円形,断面形は逆台形状を呈し,長軸1.9m,短軸1.2m,深さ0.23mを測る浅い土坑である。溝SDⅢ31に切られる。埋土は単層で若干量の弥生前期前葉の土器小片を出土した。

(第20図16)は壺として復元図示したが該期の壺としては口・肩部の形状がやや異形である。(17・18)は底部。(17)では明瞭に円盤状の突出が認められるが、(18)はやや厚手の単純な平底を呈する。(19)は傘形を呈する蓋。上端縁を丁寧な指押さえで摘み出す。(20~23)は甕口縁部片。何れも端部に刻み目を持つ。(24)は甕上半部片で低い段を持ち縁に刻み目を付す。 (大久保)

SKI08(第20図)

G20区で検出した平面形不整楕円形,断面形は逆台形状を呈し,長軸1.9m,短軸1.4m,深さ1.00mの土坑である。溝SDⅢ32・Ⅲ37に切られる。第一微高地検出のⅠ期の土坑としては比較的深いが,埋土は単層である。少量の弥生前期前葉の土器小片を出土した。

(第20図25) は甕口縁部片。端部下端に小さい刻み目を付す。(26) は底部片で僅かに円盤状に突出する。 (大久保)

SKI09 (第9·20図)

F17区で検出された,長軸1.5m,短軸0.7m,深さ0.10mを測る,不整形で浅い土坑である。平面形

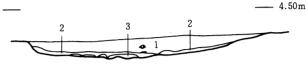
は不整楕円形状,断面は浅い皿状を呈する。 埋土は3層に分かれ最下層は焼土層である。 土坑中からは拳大の円礫が数個検出された。 図化できる資料はないが,この土坑は概ね弥 生時代前期に当る。 (西村)

SKI10 (第10·20図)

G16区で検出した,長軸約1.14m・短軸約0.36m・深さ0.2m弱を測る土坑である。平面形は隅丸の長方形状を呈する。中央をSD ■46に切られ,本土坑の長軸はSD■46と直交する。弥生時代前期の甕の破片が出土している。

(第20図30) 如意状の口縁を呈する甕で, 口縁端部には刻み目,口縁直下には段を持つ。 器表はナデ調整である。 (藤好)

- 4.50m



0 1 m

 黒褐色粘質土(粗砂を含む)
 黒褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロックを多量に含む)
 焼土(黒灰色の焼土ブロックを含む)

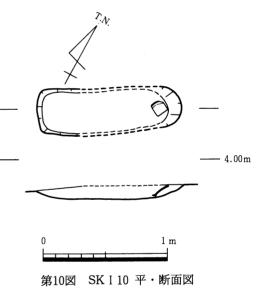
第9図 SK I 09 平·断面図

4.不明遺構

SXI01(第21図 SXSA04)

G23区で検出した。SBⅢ30・SDⅢ09等に切られる。 旧地形の窪みと考えられ,弥生前期の遺物を検出した。 (第21図)

(第21図 $1 \sim 2$) は突帯文系の甕の口縁部である。(1) はやや外反する口縁端部に刻み目,その直下に刻み目のつく突帯,(2) は口縁直下に刻み目を持つ突帯が廻る。(3) は深鉢の口縁部と考えられる。($4 \sim 13$) は壺である。($4 \sim 8$) は口縁部の破片でいずれも段を持つ。($9 \cdot 10$) は段を持たず,(10) は口縁直下の段が突帯状になる。



(11~13) は肩部の破片である。(10) は肩部に段を持ち、その上部に 2本の平行沈線、段の直下には有軸の羽状文となる可能性の高いへラ描文が施され、(12) には段の直上に平行沈線が廻りその間に刻み目が施される。(14~16) は壺の底部と考えられる。(17・18) は口縁部の破片で、(17) は口縁端に向かって薄くなる特徴的な断面を呈し、口縁直下の段には刻み目を持つ。(18) は壺もしくは甕の口縁部で、端部と口縁直下の段上に刻み目を持つ。(19~31) は甕である。(19・20) は明瞭な段を持つ。(21~26) は口縁直下に段を持たないもので、残りの良いものは口縁端部に刻み目を持つ。(27) は突帯文系の甕であろう。(28~31) は底部で、(29・30) は器表に板ナデの痕跡が顕著である。(30) は高杯の可能性も考えられる。(32) は薄いが、紡錘車と考えられる。(33) は中空の棒状の土錘で表面に溝がで藤好)

SXI03 (第22図 SXSA24)

G22区で検出した。SBⅢ32に切られる。SXI01同様,旧地形の窪みに堆積した弥生前期の包含層と考えられる。

(第22図 $1\sim4$)は縄文系の甕である。(1)は頸部から上位が外反し,口縁直下に突帯を持つ。(2・3)は外反する口縁を持ち,(3)は口縁下に刻み目を持つ突帯が回る。(4)はやや内傾し,外湾する頸部を持ち,口縁部内面に沈線を持つ。($5\sim10$)は壺と考えられる。(5)は口縁直下に段を持ちその下位に少なくとも 2条の沈線が廻り,器表はヘラ磨き。(6)は肩部に段を持ち,器表はヘラ磨き。($7\sim9$)は底部。($11\sim21$)は甕である。($11\cdot12$)は口縁直下に刻み目を持つ突帯が廻り,器表の残りの良い(12)では口縁端部に刻み目を持つ。(13)は口縁直下に一条の沈線,口縁端部に刻み目を持つ。($15\cdot16$)は口縁直下に段や沈線は持たない。($18\sim21$)は底部で,(18)は上げ底状の比較的厚い底部,(19)は細身の底部を持つ。($22\cdot23$)は紡錘車で,(23)は厚い。本遺構からは突帯文系の甕が含まれるが,いずれも胎土が他の甕等と差はなく,口縁部も外反することから同時併存のものであろう。

(藤好)

SXI05(第11図)

I 22区で検出した遺構である。 I 20・21区にかけて集中する「日」字形遺構と同様のものと考えられ、細い鈎状に曲がり何かを区画するような溝で構成される。本遺構は、南部で検出したS K I $06\sim09$ と比較して溝の連続性に欠ける。 (藤好)

SXI06(第11·22図 図版18 SX8601)

I20・21区で検出した。概報時に「長方形周溝状遺構」として報告した不明遺構である。本遺構を含め,第一微高地西半部で4基確認している。本遺構は竪穴住居壁溝様の規模と断面形態を持つ幅0.2m,深さ0.1m程度の小溝を,概ね「日」字状に配し,長軸6.4m,短軸2.1mを測る。周囲の削平が著しいこともあるが,現状では竪穴状の掘り込みは伴わない。北辺は南辺より2m程度長い。東辺を欠き,西辺中央は途切れる。また西よりほぼ1/3の部分に南北辺を繋ぐ間仕切り状の小溝が走る。更に西辺は部分的に二重に巡る。内部あるいは周囲でこれに伴う炉址,柱穴は認め難い。溝中から少量の弥生前期土器小片・サヌカイトチップを出土した。弥生前期に比定できる。 (大久保)

SXI08(第11図 図版19 SX8602)

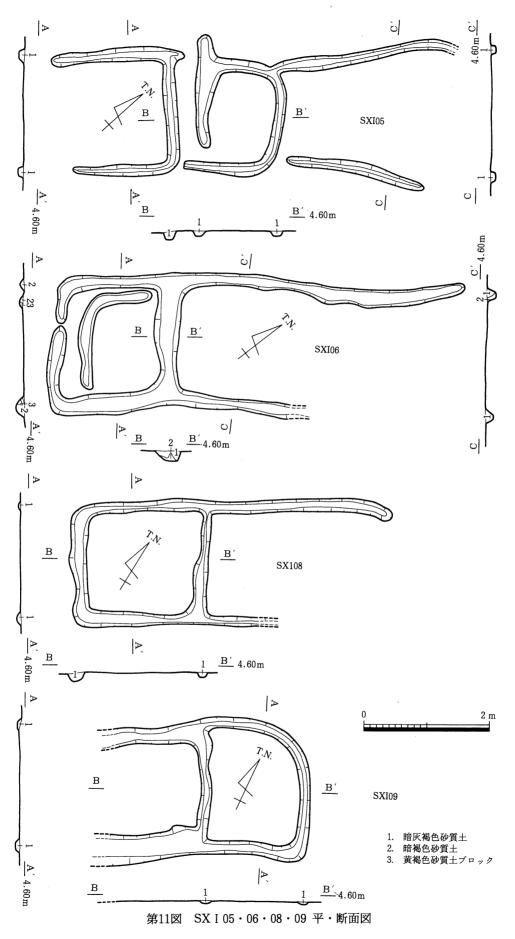
I20区で検出した。本遺構はSXI06同様に竪穴住居壁溝様の規模と断面形態を持つ幅0.2m,深さ0.1m程度の小溝を,概ね「日」字状に配し,長軸5.1m,短軸2.0mを測る。現状では竪穴状の掘り込みは伴わない。南辺東端は弥生前期の不定形落ち込みと重複して不明瞭,東辺は検出していない。中央よりやや西よりの部分に南北辺を繋ぐ間仕切り状の小溝が走る。やはり内部あるいは周囲でこれに伴う炉址,柱穴は認め難い。溝中から少量の弥生前期土器小片・サヌカイトチップを出土した。弥生前期に比定できる。 (大久保)

SXI09(第11図 図版19 SX8603)

I20区で検出した。本例もやはり竪穴住居壁溝様の規模と断面形態を持つ幅0.2m,深さ0.1m程度の小溝を,概ね「日」字状に配する遺構で,長軸3.2m以上,短軸2.1mを測る。西半部は室町時代の溝SDN01に切られる。本遺構では東端溝は連続している。また中程に南北辺を繋ぐ間仕切り状の小溝が走るが,中央部で途切れる。やはり内部及び周辺でこれに伴う炉址,柱穴は認められない。溝中から少量の弥生前期土器小片・サヌカイトチップを出土した。弥生前期に比定できる。 (大久保)

SXI10(第12·22図)

F16区で検出された,不定形な落ち込み状の遺構である。長軸2.3m,短軸1.0m,深さ0.7mを測る平面形は不整形な縦長状の形態を呈し,断面は不整形なV字状を呈する。壁面は急角度で底部に到り,底

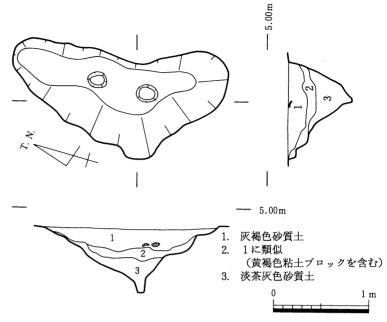


部はほとんど平坦面を持たない。 また,底部には柱穴状の凹みが2 個所検出された。埋土は砂質土を 基調に3層に分かれる。(西村)

5.溝

SDI02(第13·23·24図)

J14区からK17区にかけて,第 1 微高地の西南部に位置し,南北 方向の流路を持つ溝である。第 2 低地帯の西側を走り,本来の第 2 低地帯の西縁辺部をわずかに切る。 南部は第 4 低地帯流路 1 に,また 北部は第 4 低地帯流路 2 に切られ る。北部のK17区では,SDII 13



第12図 SX I 10 平・断面図

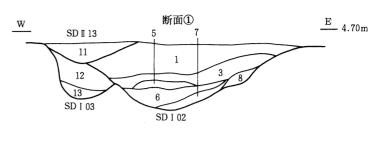
と重複し、上位にSDI13がのり、SDI03を切る。ただしこの地区の北部では削平のため、上位のSDI13は消失している。検出長約68m、幅約1.9m、深さ約0.5mを測る。出土した土器群は、やや古相のものと新しい様相を呈するものに区分されるが出土状況では分離できなかった。(第 $23\cdot 24$ 図)

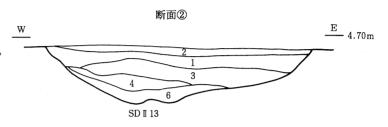
(第23図 $1\sim5$)は突帯文系の甕と考えられる。 $(1\sim3)$ は口縁直下に段を持ち、 $(1\cdot3)$ は突帯 に刻み目が残る。 $(4\cdot5)$ は突帯が明瞭ではないが、逆L字状の口縁とするには拡張が弱い。 $(6\sim$ 24) は壺である。 $(6\sim8)$ は大型の壺の口縁。 $(6\cdot7)$ は口縁直下に段を持ち,(8) は小片のため段を 持つか不明瞭であるが、複数の沈線が廻る。($9\sim18$) は頸部から胴部にかけての破片である。(8・ 9)は口縁直下に複数の沈線が廻り、 $(11\cdot 12)$ は肩部に複数の沈線が廻り、段は明確ではない。 $(12\sim$ 14) の胴部には連弧文が認められる。(15・16) は複線の山形文が認められ,(15) は肩部に段,(16) は 肩部段の直下に3条の平行沈線,(17)は斜格子文が認められる。(19~22)は壺の底部。(23)は壺の体 部と考えられるが、2条の刻み目を持つ貼り付け突帯が廻る。(24) は口縁部が欠落する小型の壺の底部 である。頸部から体部に多条のヘラ描沈線が施され、かなり長頸化したもので、時期的には(23)と共 に明確に降る時期の所産のものであろう。(第23図25~34・第24図1~12) は甕である。(26) は口縁部 直下に段を持ち、(25) は2条以上の沈線、(34) は沈線間に刺突文が施される。(第23図28・27・第24図 1)は、段・沈線とも施されないものである。(1)は口縁部が摩滅している、内外面に刷毛目が認めら れる。甕の底部の中では(11)のように細身で厚い底のものが出現する。(第24図12) はミニチュアで, (13・14) は紡錘車である。本溝の土器群には、時期差があると考えられ、壺でも口縁直下に段を持つ ものと、複数の沈線が廻るものや長頸化してきたものに区分される。また甕でも口縁直下に段を持つも のと沈線が廻るものがあり、底部でも細身厚底のものが出現する。 (藤好)

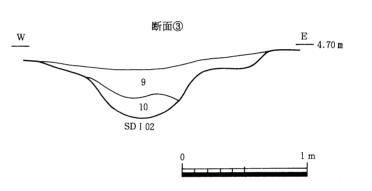
SDI03(第13·14·24~27図)

K15区からK27区にかけて,南北方向の流路を持つ溝で,北部でSDI02に切られる。西にSDI13が接して走る。検出長約34m,幅約1.0m,深さ約0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。K17区で検出した切り合い状況によれば,本溝をSDI02が切ることから,第1 微高地西部の弥生前期の溝は,

第2低地帯の埋没の進行に従い, 西から 東へと移動したことが窺われる。(第24 (第24図15~20) は,口縁直 下に突帯を持つ土器群である。(15) は 口縁端部が内外面に拡張され、上端には 2個所の突起が付く。(16~20) は口縁 直下に突帯が廻り、剝落が進む(18)以 外は突帯の端部に刻み目を持つ。いずれ も胎土的には他の前期の土器と差はない。 (21) は口縁部外面が肥厚し,上端部ほ ど薄くなる甕で、SXI01出土の甕(第 21図17) と類似する。(第24図22~35・ 第25図1~15)は壺である。(22~26)は 口縁直下に段を持つ。(24) の口縁部端部 には刻み目が付く。(27) は頸部の破片で 外面は磨き状の丁寧なナデがあり, 肩部 の段が目立たないスリムな壺である。 (28) は大型の壺の口縁部。(29・30) に は頸部に竪穴住居方向の複線のヘラ描文 が廻る。(31~35) は肩部に刻み目を持 つ突帯が廻る。(第25図1~15) は体部 である。(1・2) は肩部に2条の沈線 を持つが、(1)は沈線間が剝落してお り, 貼り付け突帯が廻っていた可能性が ある。 $(3 \sim 5)$ は肩部に段を持ち,



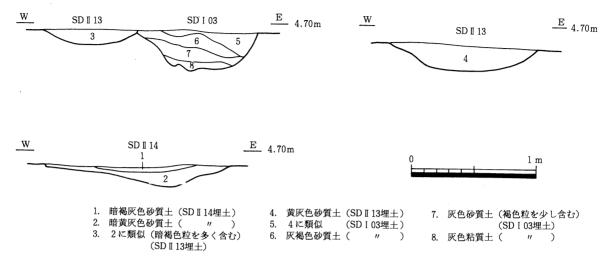




- 1. 暗黄灰色粘質土 (暗褐大粒を多く含む)
- 2. 1に類似(1よりさらに暗褐色粒多し)
- 3. 暗褐色砂質土
- 4. 3に類似(褐色粒を多く含む)
- 5. 暗黄灰色砂質土
- 6. 暗灰褐色粘質土
- 7. 茶灰色砂質土 (暗褐色粒多)
- 8. 茶灰色砂質土
- 9. 茶灰色粘質土
- 10. 暗灰色粘質土(褐色粒多)
- 11. 暗黄灰色砂質土(暗褐色粒多) (SD II 13埋土)
- 12. 灰褐色砂質土 (SD I 03埋土)
- 13. 12に比べやや粗砂(")

第13図 SD I 02 · 03, SD II 13 断面図

(6~10) は連弧文が廻る。(16~21) は壺の底部と考えられる。(22) は甕の蓋で、内外面にヘラ磨きを施す。(23~26) は口縁端部に刻み目を持つ甕で口縁直下には段や沈線は持たない。(第26図 1~3・5・6) は口縁直下に段を持つ甕で口縁端部の残存状況の良いものは刻み目を持つ。(4) は蓋。(7~11) は口縁直下に段や沈線は廻らない甕で、(7) の外面は刷毛目が残る。(12~17) は接合の段を残す甕の体部上半と考えられ、(16・17) では段上に刻み目が廻る。(第26図18~22、第27図 1~4) は甕の底部である。(5・6) は高杯と考えられ、(6) は脚部に突帯が廻る。(7) は紡錘車、(8) は円盤状土製品である。出土遺物は、SDI02同様、より古相のものと新しい様相のものが混在して出土しているが、切り合いから後出するSDI02には、本溝と比較すると、口縁下に多条の沈線が廻る壺(第23図9) や長頸化して多条の沈線が廻る壺(第23図24) また甕では口縁下に沈線が廻る甕(第23図25) や底部が細身で厚底のもの(第24図11)があり、古相では差はないものの新相でより新しい様相のものが認められる。また本SDI03には肩部に突帯を持つの壺が含まれ、SDI02には認められない点は注目される。こうした状況からすれば、SDI02の古相は混入遺物である可能性が高い。 (藤好)

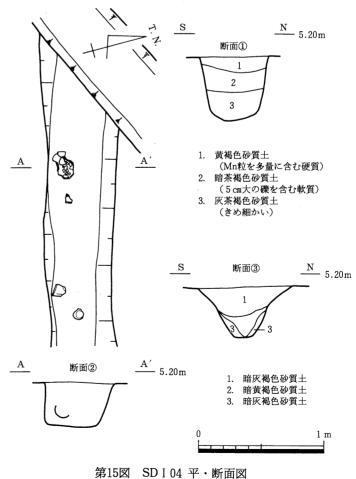


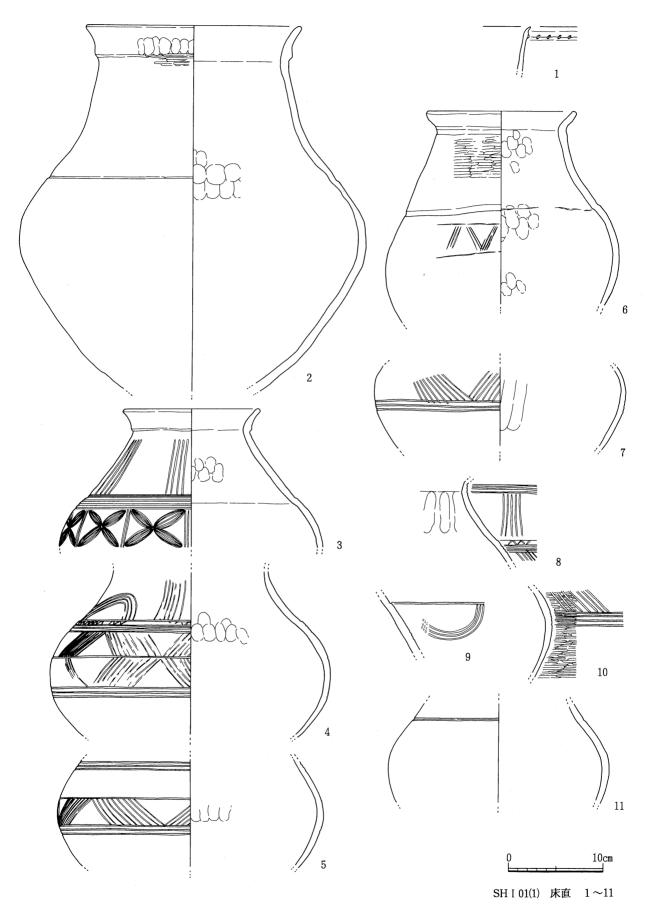
第14図 SD I 03, SD II 13·14 断面図

SD [04 (第15·27図 図版149)

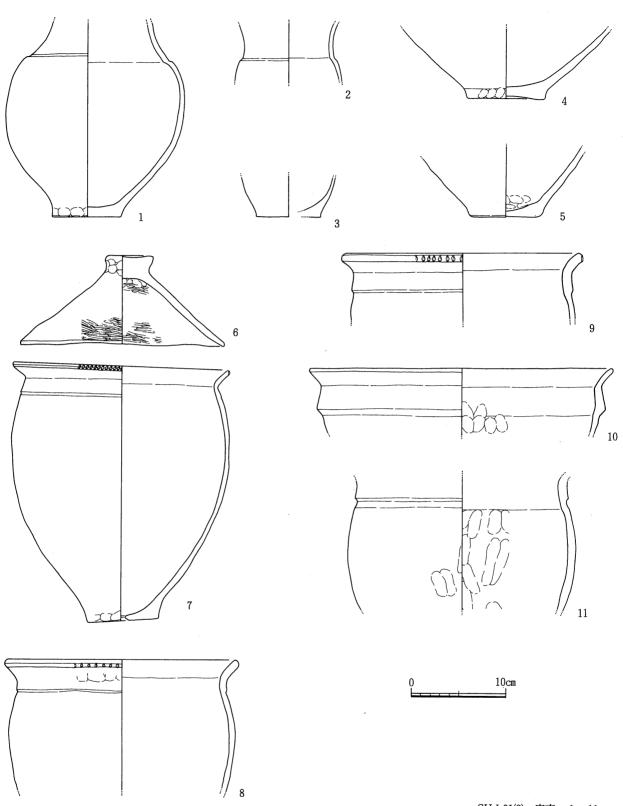
G8区からI10区にかけて、概ね東 南から西北方向の流路を持つ溝である。 第4微高地で弥生時代前期に該当する 溝は本溝だけである。検出長約26m, 幅約0.5m,深さ約0.4mを測る。断面 形はV字形を呈する。SDⅡ20に切ら れ,その以西では残存状況が悪く一部 途切れ,その後 I 16区で再出現し,第 4低地帯流路1に切られる。

(第27図9) は大型の壺で、口縁直 下と肩部に段を持ち外面および口縁部 内面にヘラ磨きが施される。(10) は 小型の壺で体部の張りは少なく, 口縁 直下と肩部に段を持つ。(11) はやや 雑な成形の底部。(12) は口縁直下に 段・沈線等は廻らない甕である。下川 津遺跡の弥生前期の中では古相を示す 一群である。 (藤好)



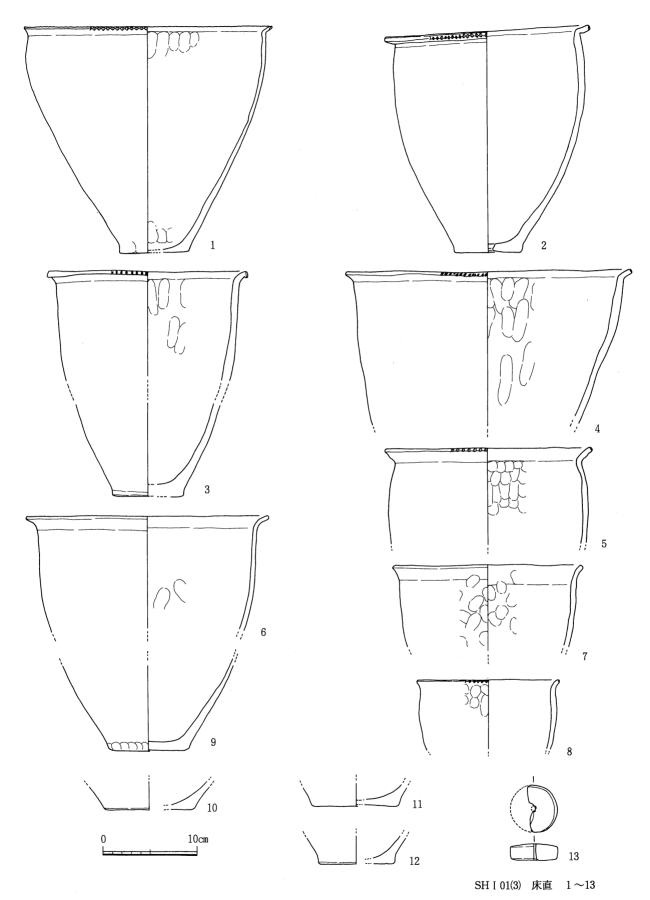


第16図 Ⅰ期竪穴住居 出土土器 1

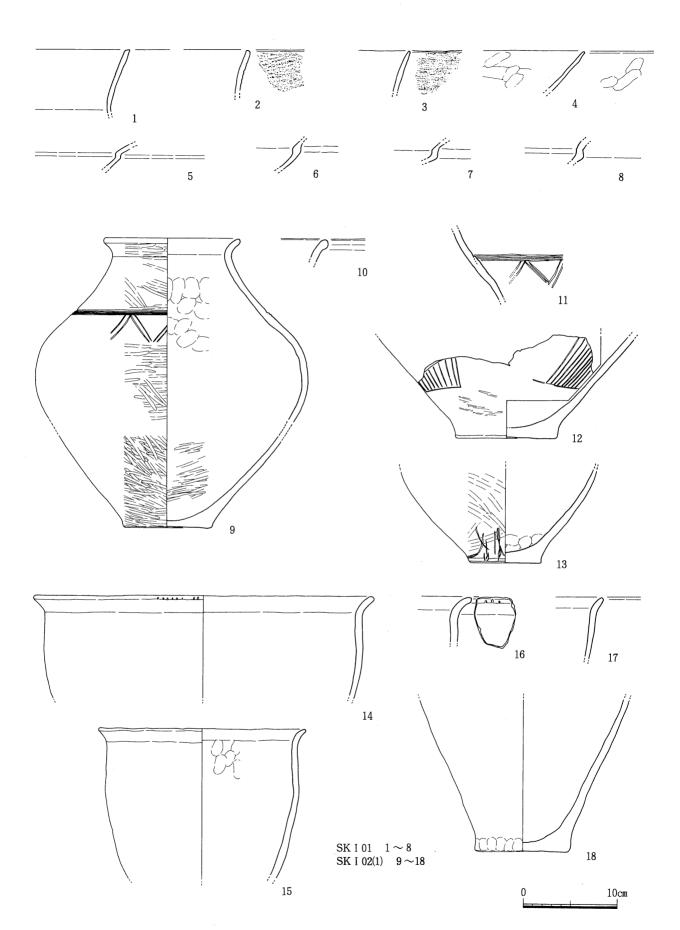


SH I 01(2) 床直 1~11

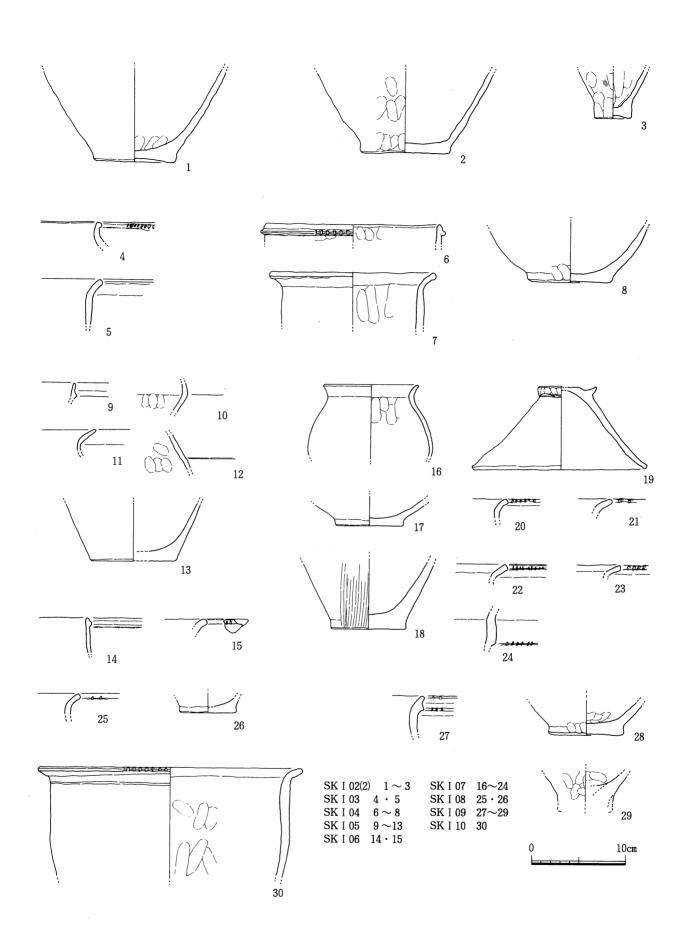
第17図 Ⅰ期竪穴住居 出土土器 2



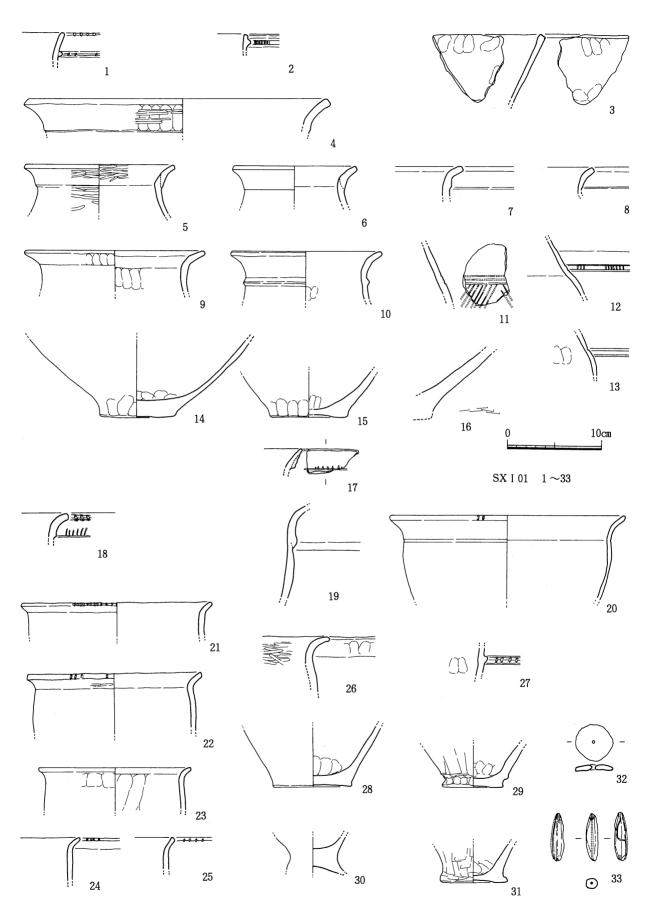
第18図 Ⅰ期竪穴住居 出土土器 3



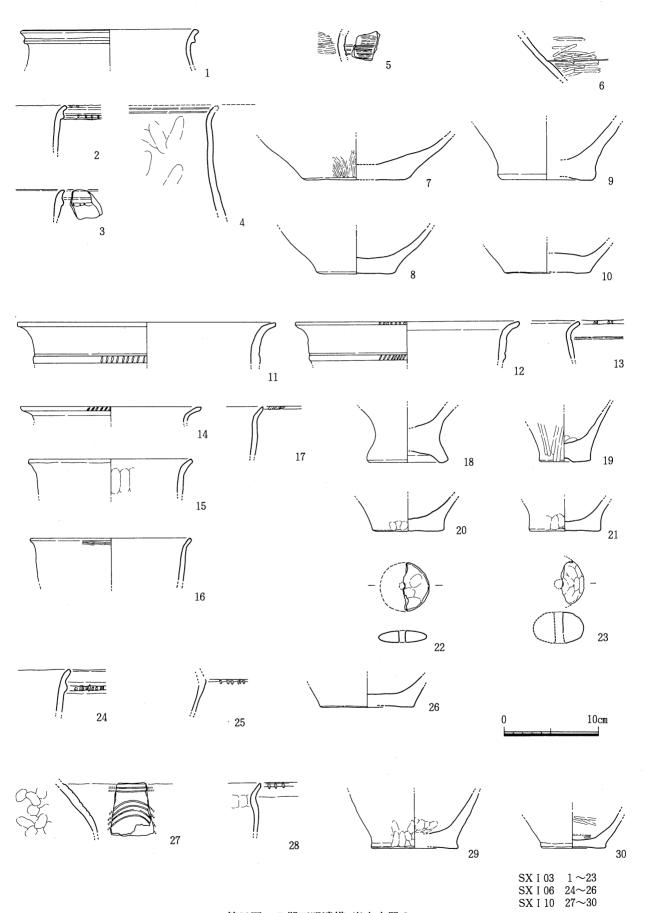
第19図 Ⅰ期土坑 出土土器 1



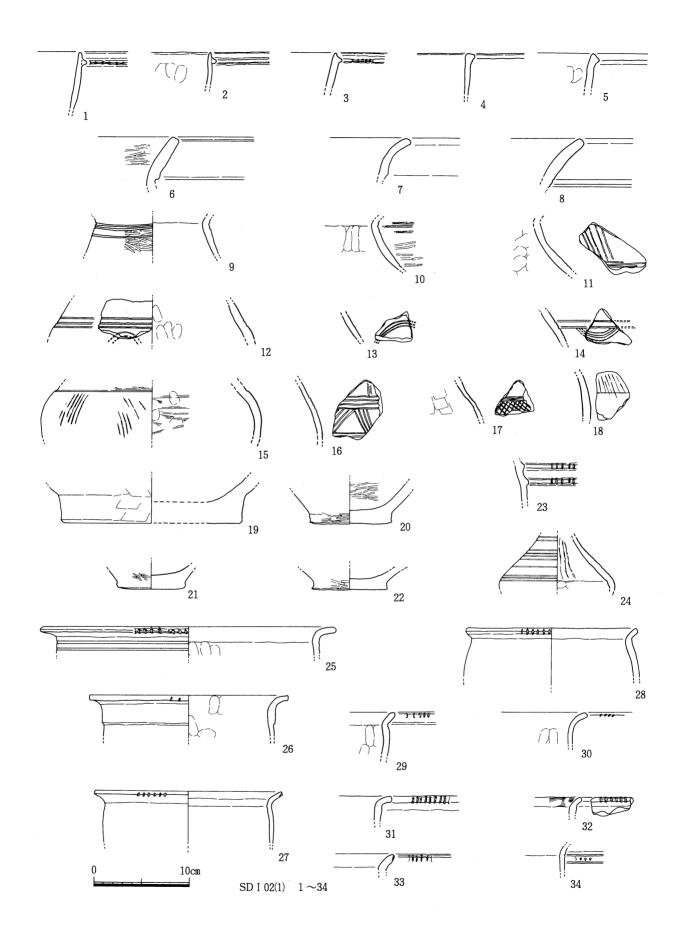
第20図 Ⅰ期土坑 出土土器 2



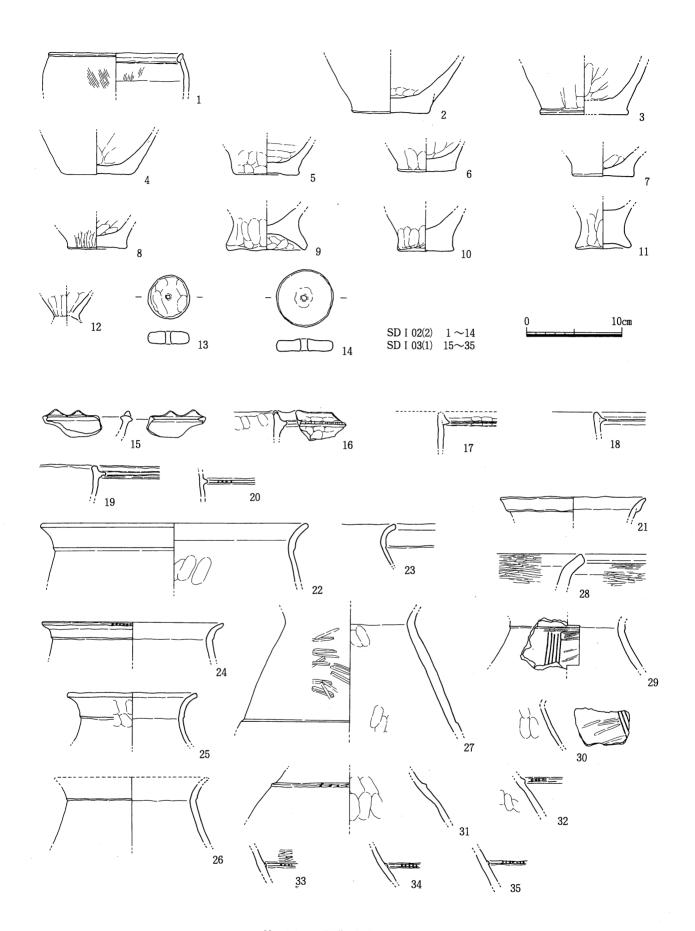
第21図 Ⅰ期不明遺構 出土土器 1



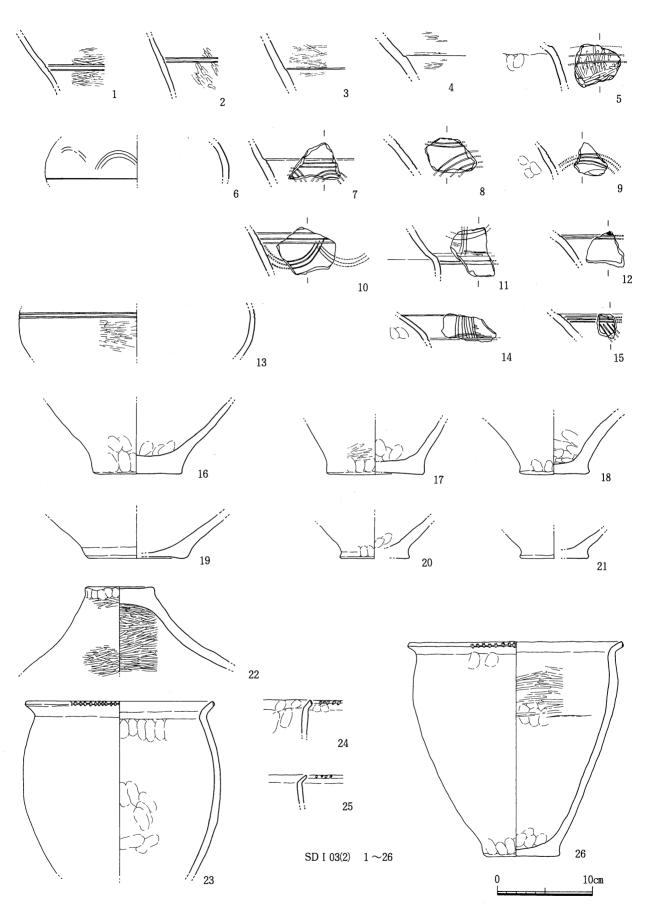
第22図 Ⅰ期不明遺構 出土土器 2



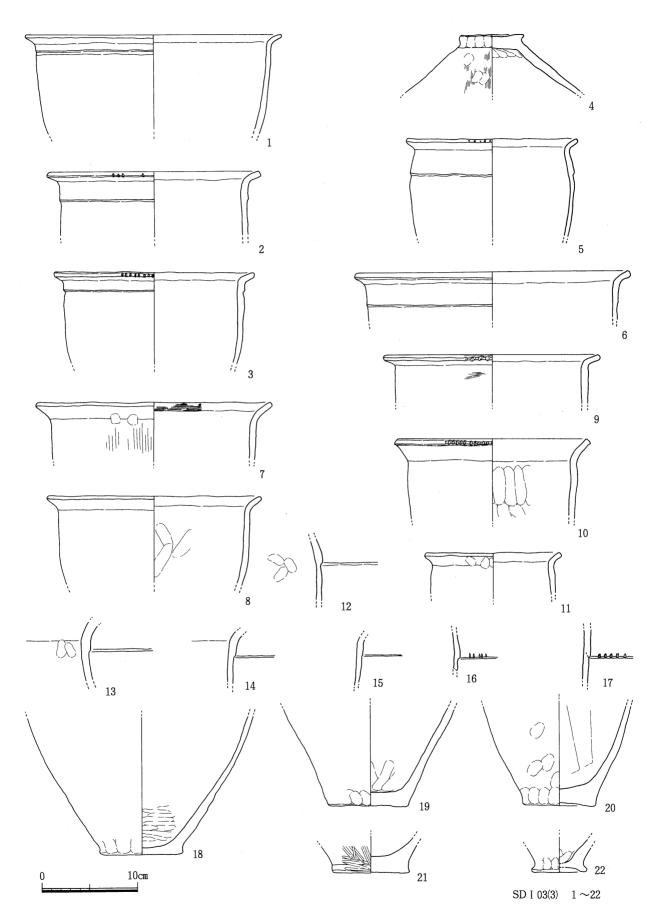
第23図 Ⅰ期溝 出土土器 1



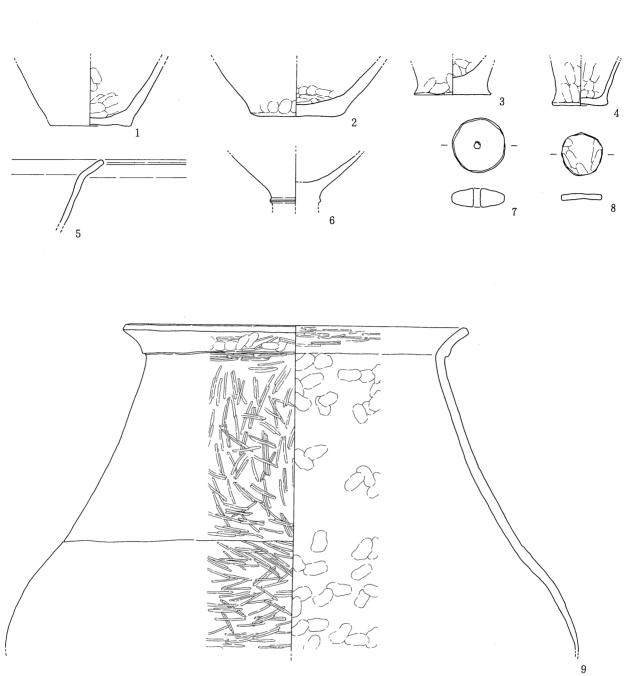
第24図 Ⅰ期溝 出土土器 2

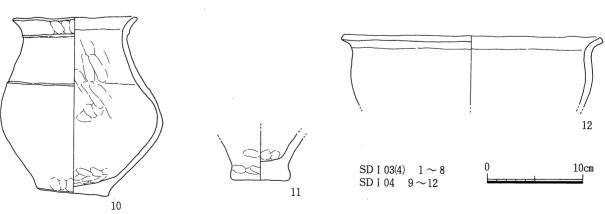


第25図 Ⅰ期溝 出土土器 3



第26図 Ⅰ期溝 出土土器 4





第27図 Ⅰ期溝 出土土器 5

第3節 第Ⅱ期 弥生時代後期~古墳時代前期

1.はじめに

弥生時代前期の集落が廃絶した後に、下川津集落が再開するのは弥生時代後期の段階である。この集落は第1・2・4 微高地上に所在する。当期の竪穴住居址の分布を大まかに見れば、第1 微高地北部・南部、第2 微高地北部、第1・2 低地帯沿いに 3~4 棟前後の小グループで分布している。

当期に最低限定できる主要な遺構を微高地単位で集計すれば、第1微高地-竪穴住居址28・土坑1・ 溝15、第2微高地-竪穴住居址6・墓1・不明遺構1・溝2,第4微高地-土坑1・溝6等である。な お、第2・3低地帯には弥生時代後期末の水田址が検出することが出来た。次に、最大資料化出来る遺 構と遺物を順次紹介する。 (西村)

2. 堅穴住居

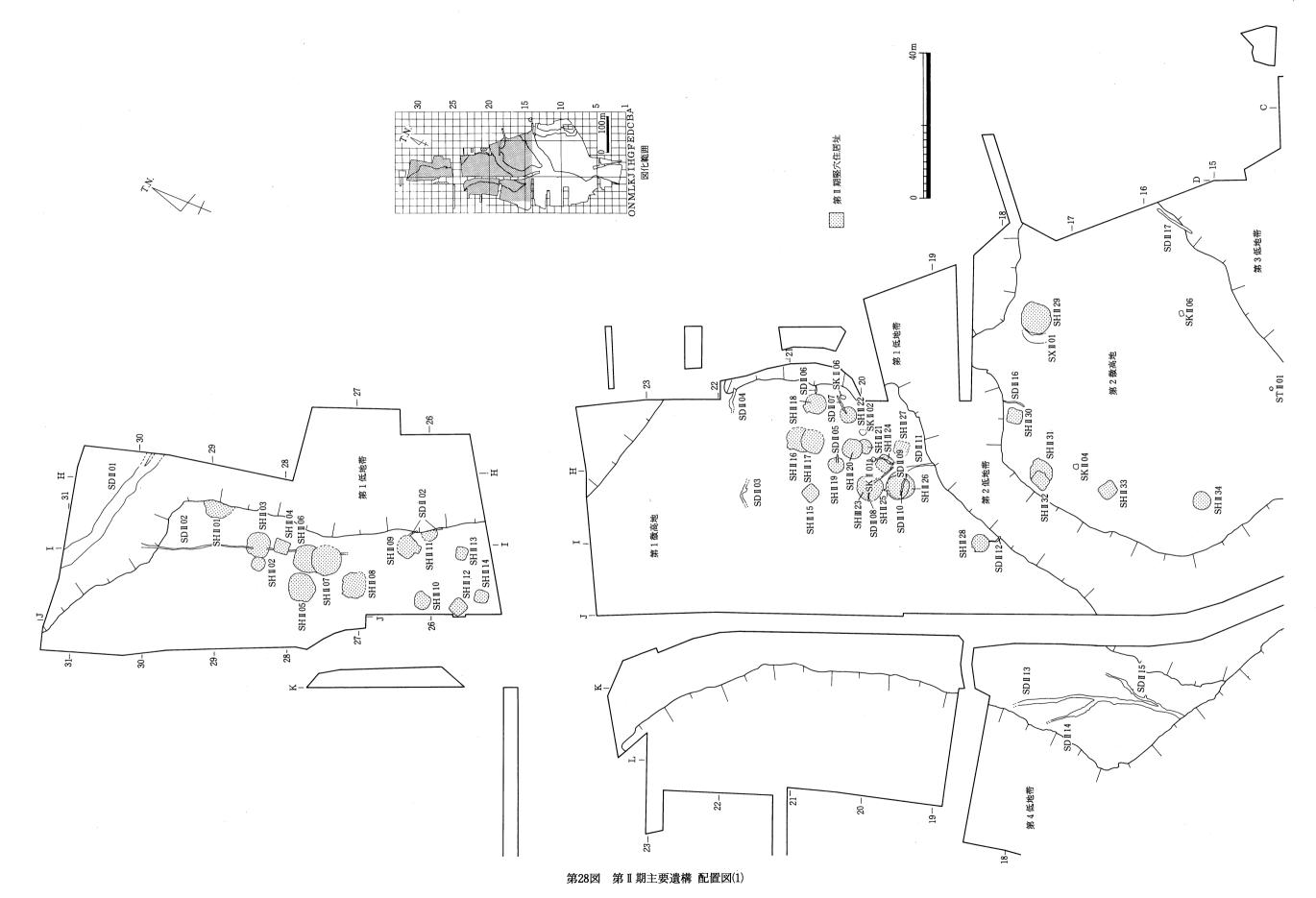
SH II 01 (第30·73図 図版21 SH8735)

本遺構は,第1 微高地北部に集中する第 II 期の竪穴住居群中の中で最北部に位置する。H28・29区で検出した。本遺構は第1 低地帯にかかる斜面部に面した微高地東縁辺に位置し,東半部は削平を受けている。また北端はS K III 01に,南部はS H III 03により切られる。平面形が,多角形気味の不整円形住居と考えられ,北西部に張り出しを持つ。長軸7.2m以上,短軸5.2m以上,深さ0.34mを測る。復元面積は54.8㎡で,当該期の円形を呈する竪穴住居の中では平均的な規模である。内部構造としては,検出範囲全体に不明瞭な部分もあるがベッド状遺構を有するようである。主柱穴は6穴である可能性が高い。中央部にファイヤーピットを持つ炉跡を有し,その周辺に炭化物と焼土の集積が認められた。ファイヤーピットは2段に落ちる。

(第73図1)は,精良な胎土を用いた雲母土器の長頸壺で,明確な平底を持つ。口縁部内面は板ナデ状の調整を施し,横方向に大きく開く。外面は刷毛,内面上半部は指頭痕顕著,内面下半部はヘラ削り。頸部と体部が歪むが丁寧な作りである。(2~6)は甕で,(6)を除き体部の下半部はヘラ削りがなされる。(2)は雲母土器の甕で外面に刷毛目の痕跡が残りやや雑な作りの土器である。(3)は外面刷毛で下半部へラ磨き,内面は上半部指頭痕顕著,下半部へラ削りが施され,口縁部内面は板状の工具によるナデが認められ明確な平底を呈する。(6)は小型の甕で外面に刷毛目が残り,内面はナデ調整である。(7~9)は鉢で,(7)は大型の鉢。(8)は口縁部が片口状を呈し,短い脚がつくやや雑な作りのものである。(9)は明確な平底のものである。(10)は高杯で精良な胎土を使用し,口縁部内面は工具による凹線状の条痕がつくナデ,杯部下半部外面はヘラ削りを施す。本遺構出土の土器群には精良な胎土の壺・甕・高杯が含まれ,明確な平底を呈することに時期的な特徴があろう。

SH II 02 (第31·73~76図 図版22·23 SH8732)

第1 微高地の北部に集中する第 II 期の竪穴住居群の中に位置する。東部ではわずかにSH II 03を切る。平面形は,ほぼ等辺の隅丸方形を呈し,長軸3.7m,短軸3.7m,深さ0.36m,主軸の方位はN 4°Eを測る。面積は11.0㎡で,当該期の竪穴住居の中では小型の住居である。内部構造としては,中央部にファイヤーピットを持つ炉が位置し,主柱穴は4穴である。炉の近くには砂岩の台石を置かれた状況で検出した。西壁を中心として壁溝が回る。遺物の出土は概ね2層に分かれて出土した。黒色の粘質土をベー

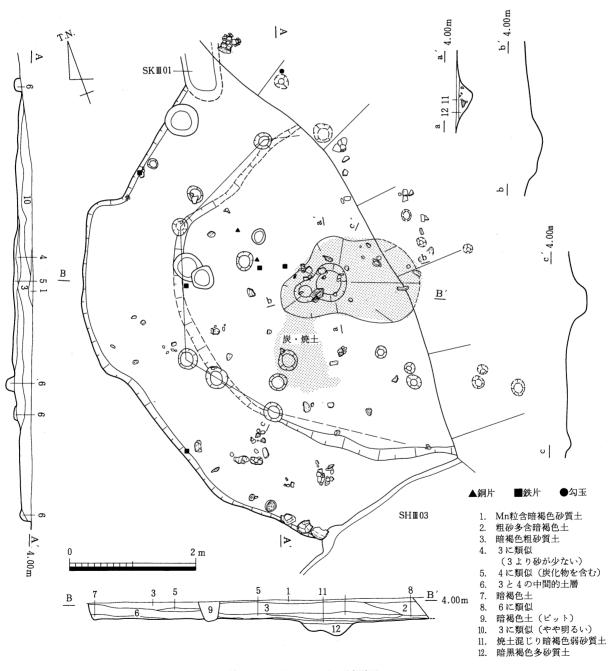




スとする上層からは二次的に火を受けた多量の土器群が出土し、上層の器種構成は小型丸底壺類と高杯が卓越し、祭祀後の一括投棄によって集積した可能性が高い。

この上層出土の土器群は下層出土のものと比較すると顔つきが異なるが,両層間に明確な間層がないことや上層の黒色粘質土の広がりが完全に竪穴住居の掘り方の範囲内に含まれること,また上層の最深部がほぼ竪穴住居の中央部と一致することなどから,本来の掘り方が完全に埋没していない時期に上層が堆積したものであろう。 SHII 02が完全に埋没した後,その掘り方と一致して土坑が掘り込まれたとするのは無理がある。本SHII 02の下層と上層の堆積の間にそれ程の時間的な差はないと考えられる。

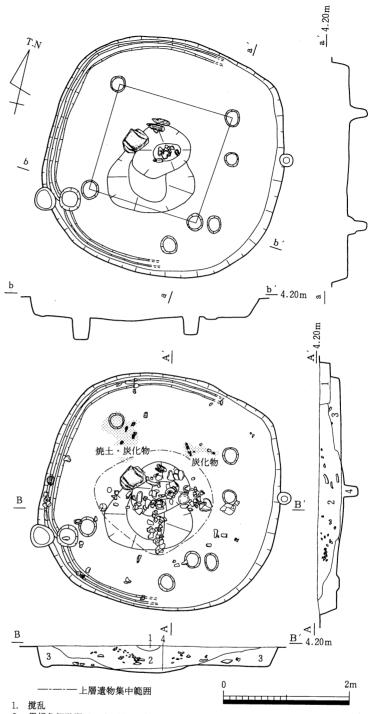
なお、本遺構の東に隣接するSH II 03の西部には、本来のSH II 02の範囲をこえて焼土面が広がる。 この焼土面が火を用いた祭祀の場であり、その際用いられた土器が本SH II 02の上層に廃棄されたと考



第30図 SH II 01 平・断面図

えられる。そこで本SHⅡ02の上層出 土のものが祭祀の際に使用された遺物 だけからなるかが問題となる。調査時 点では、SHⅡ03の埋土はほとんど残 存していなかったが,祭祀が行なわれ た時点ではSHⅡ03の削平は、さほど 行なわれていなかった可能性が高く, 祭祀用の土坑が掘られた時にSHⅡ03 に本来含まれていた遺物が火を受け. 祭祀用の土器の廃棄に伴い, SHⅡ02 内に混入した可能性が考えられる。上 層遺物の祭祀用のものとSHⅡ03に本 来帰属する遺物の分離についてである が、遺物の大きさと二次的に火を受け た状況が観察されるかがその識別の根 拠となろう。まず出土遺物の概要につ いて記し, その後で, 祭祀用の遺物の 明確化を図りたい。

(第73図11~15,第74図1~8)は 床面から出土した土器である。(11・12)は壺の底部で,(11)は外面に叩き・刷毛・ヘラ磨きの順で成形調整し, 内面はナデである。(12)は外面は刷 毛,内面はヘラ削りが確認される。 (13~15)は甕でいずれも外面は叩き 痕が残り,その後(13・14)では外面 に刷毛調整が行なわれ,内面にはヘラ 削りと刷毛目が認められる。底部が残 存する(13・14)で,(13)は平底, (14)は不安定な平底である。(第74図 1~5)は鉢である。(1・2・4・ 5)は不安定な平底,(3)は外面を削 り,丸底を呈する。また内面は(2・



- 1. 現品 2. 黒褐色細砂混じり土 (土器片多量に混在)
- 3. 黄茶褐色細砂土
- 4. 暗褐色砂質土 (炭化物を含む)

第31図 SHⅡ02 平·断面図

 $3 \cdot 5$)では刷毛目が認められる。 $(6 \sim 8)$ は製塩土器で、残りの良い(6) では体部が広がり気味となる。

(第74図 $9\sim17$)は下位から出土したものである。(9)は大型の壺体部で外面は叩き,内面はヘラ状の工具を用いた縦方向のナデ。($10\sim12$) は甕で(10) は外面は叩き後刷毛である。($13\sim15$) は鉢と考えらる。(13) は大型の鉢で外面叩き,($14\cdot15$) は不安定な平底である。(16) 高杯の口縁部で,精良な

胎土を持ち、内面は工具による凹線状の条痕がつくナデ。(17) は製塩土器で外面に叩きの痕跡が残る。

(第74図18~24,第75・76図)は上層出土の土器である。二次的に焼けたものが多い。(第74図18~24)は壺である。(18~22)は赤変し,二次的に焼けており,(23・24)もその可能性がある。(24)を除き口縁部が残っているものは,端部に波状文を施すし,頸部はやや開き気味に上方に伸び,口縁部で大きく開く。体部は球胴に近く,底部は不安定な平底である。体部外面は叩き後へラ磨き,内面はナデである。(23)は肩部の破片で,突帯上に刻み目を施し突帯下半にはヘラ描の絵画か文様があるが小片のため,その内容は分からない。

(第75図 $1\sim 4$)は球形の体部を持つ壺である。(1)は口縁部が短く外反し,真球形の丁寧な作りの壺で,外面に刷毛目の痕跡,内面体部過半は指頭痕が顕著なものである。(2)は外面叩き,内面は叩き原体を使用したナデが施される。(3)は外面刷毛,内面指頭痕顕著。(4)は外面刷毛,内面へラ削である。($5\sim 16$)は甕で,口縁部が残るものの中で,($7\sim 12$)は端部をナデにより面取りをするが,他の甕は面取りをしない。内面の調整は($5\sim 7\cdot 10\cdot 11\cdot 16$)ではヘラ削りを,($8\cdot 9\cdot 15$)が刷毛,(13)が丁寧な磨きを施し,残りはナデ調整である。(13)は壺の底部の可能性が考えられる。(17)は大型の鉢,($18\sim 22$,第76図 1)は単純口縁の鉢である。(22)を除き外面に叩き痕が明確に残る。($18\cdot 19$)は外面にヘラ削りを施し口縁径が器高と比して大きなものである。

(第76図 $2\sim10$)は高杯で,($2\cdot3$)が杯部の上半が発達し下半との境界が明確なものである他は,杯部の上半と下半の境界が明瞭ではないものが目立つ。脚部は(3)以外は屈曲が明瞭なもので,脚柱部内面にヘラ削りを施すものも多い。(11)は器台の口縁部の小片である。($12\sim18$)は口縁部が比較的発達した小型丸底壺で,ややタイプが異なる(18)を除き非常に薄い作りのものである。($19\sim28$)はやや作りの雑な小型丸底壺の類で($19\sim23$)は外面に叩き痕を残す。($32\sim36$)は製塩土器で,(36)は祭祀用の小型のものである。(37)はミニチュア土器である。

床面から出土したものは,甕を除き,比較的二次的に焼けていないものが目立つ。壺で焼けている(第73図11)は炉跡内からの出土のもので,他に二次的に焼けているものは(第74図1)の鉢と製塩土器だけである。これに対して上層からの出土のものの中では,壺では,(第74図18~24,第75図1~14)と図化し得た全点が焼けており,その中には焼けた結果白灰色に変色しているものも多い。また鉢では(第75図20~22)が焼けていず,(第76図1)が不明瞭であるが,他は二次的に焼けている。高杯は全点二次的に焼けており,小型丸底壺類は(第74図26~31)が不明瞭な他は図示し得た全点が焼けている。製塩土器も焼けている可能性が高い。上層と床直上出土のものの間には二次的に焼けているか否かの大きな差がある。また上層出土の土器の中で焼けていないものは小片であり,混入品である可能性が高い。また焼けたもののなかにも(第74図23,第75図12・16・17・22,第76図1・10)は2分の1以下の小片で,混入したものと考えられるものもある。前述したように隣接するSHII03を切る焼土面の広がりが祭祀遺構であるとすれば,焼土面がSHII03を掘り込んで入ることから,SHII03内の遺物が二次的に火を受ける可能性は高く,SHII02内への廃棄の際に混入する可能性は十分考えられる。しかし(第74図18)等の大型の壺でほぼ完形に復元されるものは,二次的な混入とは考えにくい。

こうした点からすれば、上層出土の遺物の中で二次的に火を受けるような祭祀に使用された土器は、 高杯と小型丸底壺類および大型の壺であろう。製塩土器は本遺構の下層からも出土しており上層出土の ものとの関係は、やや不明瞭である。

また上層出土の遺物の中で、小型丸底壺類は胎土中に細砂を多く含む特徴的なものが大半を占める。

図化した遺物の中で,(第76図26~30)を除き細砂を多く含む。(26~30)は,他の小型丸底壺類と比較すると厚手もので,類似したものがSHII03から出土しており,混入の可能性が高い。細砂を多く含む胎土のものは高杯にも有り,(第76図 $4\cdot7$)が細砂を多量に含む点は注目される。また小型丸底壺類は非常に薄い作りのものであり,内面は大半がナデもしくは叩き原体を用いたナデ成形で,へラ削りを施すものは少数で,しかも施されるヘラ削りもそれ程明瞭なものではない。また口縁部外面にのみ,叩き目を残す雑な作りのもの(第76図23・31)があり,6世紀後半以降の製塩土器と類似した形態を呈する点は注目される。こうした新しい傾向のものと口縁端部に波状文を持つ大型の壺の共存は,やや疑問であるが,出土状況からは共存すると考えざるを得ない。

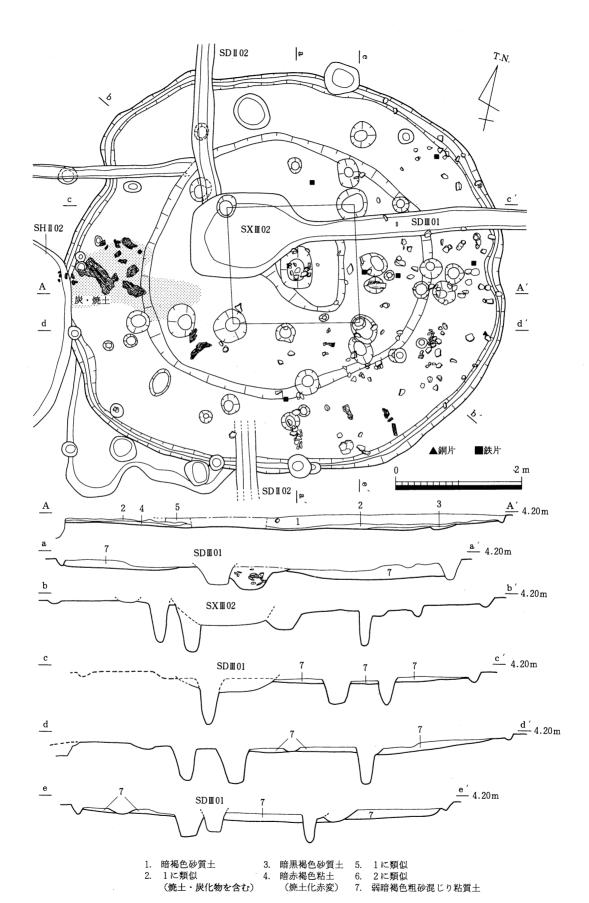
上層出土の遺物には新しい様相と古相が共存する。こうした点からすれば、本遺構の床面直上出土のものと上層出土ものの間にさほどの時間差がないのが実態ではないだろうか。本遺構の上層出土の高杯は、SHI04出土のものと形態的に共通した要素を持ち、同時併存である可能性が高い。 (藤好)

SH II 03 (第32 · 77図 図版24 · 25 SH8733)

SHⅡ02の東に位置する。H・I28区で検出した。本遺構は、第1微高地北部を南北に走るSDⅡ02 と、平安期のSXⅢ02とそれにつながる溝SDⅢ01により切られる。平面形が多角形気味の不整円形住 居である。西部と東部の2ヵ所に平面的なくぼみが認められる。また西北部に張り出しを有する。直径 約6.6m・深さ0.08mを測る。ベッド状遺構の上面にはほとんど埋土が残存せず残存状況は悪い。面積 は36.0㎡で、当該期の円形の竪穴住居の中では平均的な規模である。内部構造としては、中央部にファ イヤーピットを持つ炉跡が位置する。ファイヤーピットは2段に落ちる。主柱穴の認定はやや困難であ るが、炉周辺に4穴、またベッド状遺構と床の境付近で柱穴が複数回るように検出された、埋土の状況 から本遺構に伴うものと考えられ、支柱の可能性がある。全周にベッド状遺構と壁構が回る。また西部 を中心として焼土および炭化層の広がりを検出したが、炭化層が西南部では本遺構の範囲外に広がりを 見せることから,焼失家屋ではなく,竪穴住居埋没後のものである。またこの住居は残存状況が悪く, 特にベッド状遺構の上面には竪穴住居の埋土がまた焼土はSXⅢ02内に焼土等がまったく含まれないこ とや,またSHⅡ02の上層とベースは類似したものであることなどからSHⅡ02埋没後でSXⅢ02の間 で、SHⅡ02の上層の時期の所産である可能性が高い。SHⅡ02上層出土土器が二次的に火を受けたの は,隣接するこの焼土層の範囲においてであったと考えられる。そういう視点からするとこの焼土層の 広がりは、まさに祭祀が行われた場所である可能性が非常に高い。また出土遺物は床面直上からの出土 のものである。

(第77図 $1 \cdot 2$)は壺である。(1)は口縁端部に鋸歯文状のヘラ描文が廻る。($3 \sim 8$)は甕で,底部は明確な平底である。内面は,刷毛目を残すもの(3)とヘラ削りのもの($4 \cdot 5$)がある。($9 \sim 11$)は小型の甕類で,(11)は精良なつくりのものであるが,($9 \cdot 10$)はやや厚手のものである。また(11)は雲母土器で,内面は指頭痕が顕著である。($12 \sim 15$)は大型の鉢で,(12)は外面にヘラ削りの痕跡,(13)は刷毛目,(14)は内面にヘラ削りが認められる。(15)は外面に叩き目が顕著に残る。外面に叩き目が残る大型の鉢である。(16)は高杯,(17)は製塩土器である。

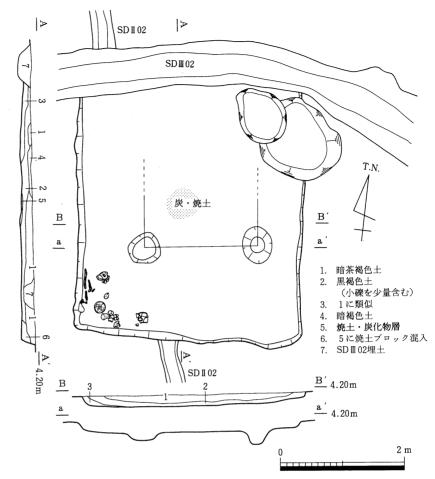
出土遺物の中で,SHI02の上層遺物と関連するものは,(第77図 9・10・15・17)であろう。(9・10)はSHI02上層出土の(第76図26~30),(15)は(第75図17),(17)は(第76図32)等と共通したものである。製塩土器を除いて,SHI02上層出土のものは,小片であることから,本SHI03からの混入品と考えられ,製塩土器もその可能性が高い。 (藤好)



第32図 SHⅡ03 平·断面図

SHII04 (第33·77図 図 版26 SBNB09)

SH I 03の南に位置する。 128区で検出した。本遺構は, 北辺を平安期の溝SDⅢ02 に、また北東部の隅を近現代 の土坑で切られる。SDⅡ02 と重複するが、埋土が非常に 類似しており, 切り合い関係 を明確にするまでには到らな かった。本住居跡は、南北方 向に長い長方形で、長軸4.1 m以上,短軸3.6m以上,深 さ0.19mを測る。主軸の方位 はN7°Wを測る。面積は 17.6㎡である。明確に長方形 を呈する竪穴住居は, 当該期 において下川津遺跡では少な く,他に第2微高地のSHI 32がある程度である。また中 央部が炉跡と考えられる焼土



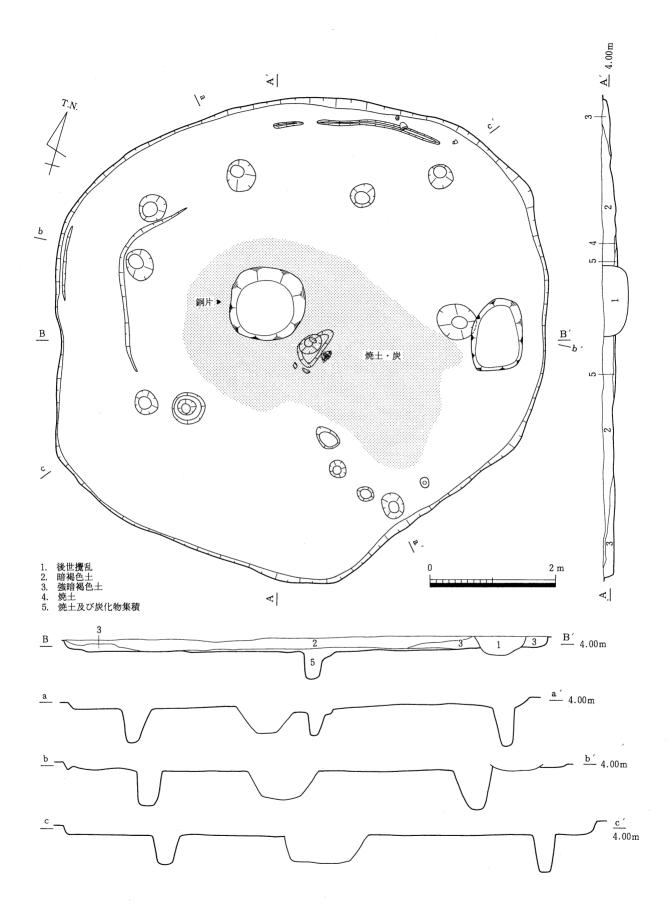
第33図 SHII 04 平・断面図

と炭化物の集積が認められた。遺物から見るかぎり長方形プランの住居やファイヤーピットが伴う炉跡は後出する要素のようである。遺物は住居の南西部から置かれた状況で高杯 3 固体が出土した。壁溝やベッド状遺構は認められない。出土遺物は \mathbf{S} H \mathbf{II} 02上層出土遺物と類似し,同時期の可能性が高い。 \mathbf{S} H \mathbf{II} 03上で祭祀を行った集団の居住住居の一つがこの \mathbf{S} H \mathbf{II} 04であると考えられる。

(第77図18・19)は壺の破片で、(19)は体部下半の破片であるが、かなり球胴化したものであることが窺われる。(20~22)は甕の破片で(22)はかなり胴が張る甕であろう。(23・24)は甕もしくは小型丸底壺の破片であり、器壁が非常に薄いもので,胎土的にも共通したものである。(25~28)は高杯である。脚部内面の~ラ削りや杯部の屈曲が弱いものが含まれるなど $\mathbf{S} \mathbf{H} \mathbf{II} \mathbf{02}$ 上層との共通性が見られる。(30)は紡錘車で,断面が台形状を呈し、滑石製の紡錘車と共通した形態を呈する点は注目されるが,外面に鋸歯文等の施文は認められない。(藤好)

SH II 05 (第34·78·79図 図版27 SBNB03)

I 27区,第1 微高地北部に集中する第 II 期の竪穴住居群の中で,もっとも微高地の中心部に近い位置に位置する。平面形は,多角形気味の不正円形を呈し,東南隅が直線的な形状を呈する。長軸8.0m,短軸7.6m,深さ0.2mを測る。中央部には後世の攪乱坑があり,その周囲には,炭化物と焼土の混在層が広がる。その範囲は通常の炉跡の広がりより大きいが,焼失家屋とするまでには到らない。焼土下からファイヤーピットを検出した。また残存状況は良くなかったが,西部を中心としてベッド状遺構が,また北壁に沿って壁溝の痕跡を検出した。



第34図 SH II 05 平・断面図

(第78図 $1\sim6$)は床面直上からの遺物である。(1)は口縁部の破片,($2\cdot3$)は底部,(4)は小型の甕,($5\cdot6$)は鉢と考えられる。(第78図 $7\sim46$,第79図 $1\sim24$)は下位から出土した遺物である。(第79図 $7\sim26$)は壺で,口縁部が上下に拡張されるもの,上部だけの拡張,また拡張がほとんど認められないもの等,かなりの差がある。また頸部にも(17)のように直線的に外反し,口縁部でさらに大きく開くもの,また内傾して口縁部で大きく開くものがある。底部は明確な平底を呈する。($27\sim46$)は甕で,($32\sim35$)の雲母土器と外面に叩きを施し刷毛で消すものの両者が認められ,底部は明確な平底を呈する。

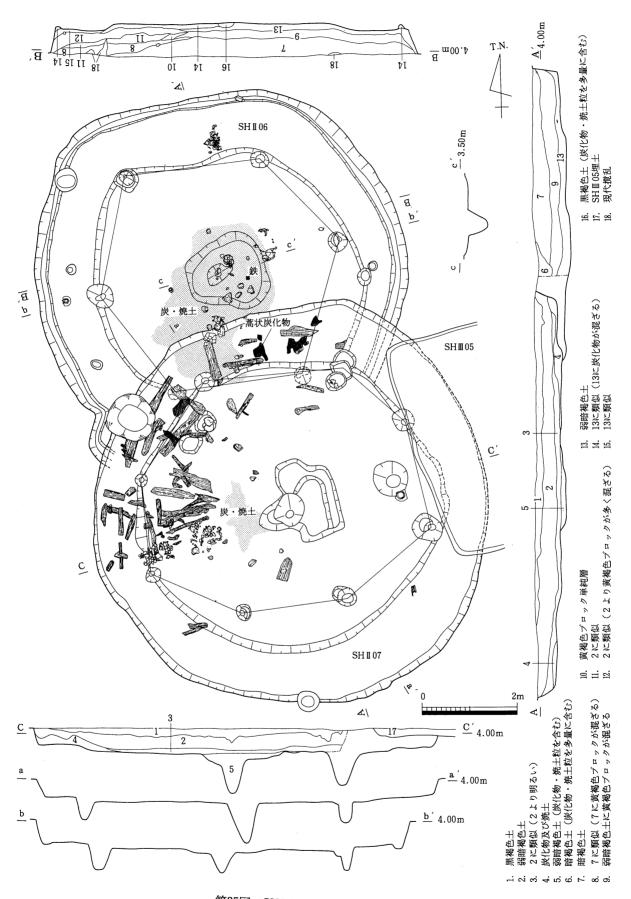
(第79図 $1\sim14$)は鉢で,底部は明確な平底を呈する。($15\sim22$)は高杯である。($15\cdot16\cdot18\sim20$)は口縁部内面に工具による凹線状の条痕がつくナデを施し,脚部内面はヘラ削りの雲母土器である。 ($23\cdot24$)はミニチュアの甕である。

SH II 06 (第35·79~83図 図版28·29 SBNB04)

I 27区, SH II 05の東側に隣接して検出した住居で、南部はSH II 07に、また北部はSB II 14に切られる。SD II 02と重なるが埋土が類似し、先後関係は確認できなかった。平面形は多角形気味の不整円形住居で、南西部に張り出しを有する。長軸7.9m,短軸5.8m以上、深さ0.68mを測る。面積は50.9㎡で、当該期の円形に近い竪穴住居の中では平均的な規模である。中央部にファイヤーピットを持つ炉跡が位置し、周辺にベッド状遺構と壁構がめぐる。ファイヤーピットはやや浅い土坑と中央部の深いピットの2重になっている。また西壁際からは壺の頸部より上位の部位が倒立した状況で検出された。(第79図25~33、第80図1~7)は床面直上の遺物である。(第79図25~27)は壺で、(25)は口縁端部を上下に拡張し、口縁端部に刷毛状の工具を使った鋸歯文状の施文が認められ、頸部は直立する。(27)は雲母土器の細頸壺。(28~33)は甕で、(28・30)は外面に叩き目を刷毛で消す。底部が残るものは明確な平底である。(第80図1~5)は鉢で、いずれも明確な平底を呈する。大型の鉢の(1)は片口状の口縁を持つ。(6・7)は高杯である。(6)は杯部内面にヘラ磨き、(7)は脚部外面に刷毛目が残る。

(第80図8~27,第81図,第82図1~9)は下位出土の遺物である。(第80図)は壺で,(8~11)は上方に拡張した口縁で,(10)を除き外面に模様を施される。(9)は鋸歯文,(11)は竹管文がある。(19)は頸部外面に刻み目を施す突帯を持つ。(20)は雲母土器の細頸壺,底部は明確な平底ないし不安定な平底で,丸底のものはない。(26)は壺もしくは小型の雲母土器の鉢で内面は指頭痕が顕著なもで,SHI03出土のものの中に類例がある。(第81図1~26)は甕で,(1)は外反する口縁にかなり球形に近い体部を持つ。(15~23)は雲母土器の甕である。(27~35)は鉢で,いずれも平底に近い底部を持つ。(34・35)は脚台付の鉢である。(36~41)は高杯の杯部で,(36・37)は口縁部内面に工具による凹線状の条痕がつくナデを施す雲母土器の高杯である。(40・41)は短く外反する口縁部を持つ。(第82図1~7)は高杯の脚部である。(6)は雲母土器で内面にヘラ削りを施す。(7)は脚台付の鉢の可能性もあり,直線的に開く脚部を持つ。(8)は甑。(9)は手捏ねの土器で器種は不明である。

(第82図10~30) は上位から出土したものである。(10~15) は壺で,(12) は雲母土器で外面はヘラ磨き,内面は指頭痕顕著なもので,口縁端部は摘み上げる。(14) は口縁部が大きく上方に拡張され,甕の可能性もある。(13) は頸部に刻み目のある突帯が廻る。(第82図16~23) は甕で,底部はいずれも明確な平底からなる。(16) は球形の体部を持ち,外面に刷毛の痕跡が残り,内面はヘラ削りがなされているものと考えられるが剝落のため,不明瞭である。(18・19) はやや長胴気味の甕で,外面に刷毛目が施される。残存する底部は明確な平底のものである。(24~28) は鉢。(29) は高杯で口縁部内面にヘラ磨



第35図 SH II 06·07 平·断面図

きの痕跡が残り、端部内面は工具による凹線状の条痕がつくナデが施される。(30)は製塩土器。(第82 図31 \sim 37、第83図 $1\sim$ 13)はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なものである。 (藤好)

SH II 07 (第35⋅83~87図 図版28~30 SBNB05)

I27区,SHI06を切る状況で検出した住居で,東部は古墳時代後期のSHII05に切られ,SDI02を切る。平面形は多角形気味の不整円形住居で,長軸8.6m以上,短軸7.3m以上,深さ0.58mを測る。面積は57.2㎡で,当該期の円形に近い竪穴住居の中では平均的な規模である。主柱穴はやや乱れるが6穴と想定され,西部にやや小規模の柱穴が2穴位置する。中央部にファイヤーピットを持つ炉跡が,また周囲にはベッド状遺構が回る。ファイヤーピットはやや浅い土坑と中央部の深いピットの2重になっている。壁溝は検出されなかった。本住居は,焼失家屋で西北部を中心として炭化物と焼土の集中を検出し,炭化物はまさに垂木がそのまま焼けたように中心の向かう状況で確認された。こうした垂木の痕跡の検出状況からすれば,本住居は,住居の上部構造が残存する時期に半焼した可能性が高い。遺物の出土状況では、SHI06と同様に西壁際で壺の頸部より上位の部位が倒立した状況で検出された。

また,この竪穴住居の上半部の堆積層は他の多くのこの時期の遺構埋土とは異なり,黒色の粘質土であり,SHII02の上層堆積土とよく類似する点は注目される。この埋土中から(第86図 7)の小型丸底壺が出土しており,SHII02の上層出土遺物との時期的な共通性が考えられる。SHII06との関係については,ほぼ同様の規模を呈し,ファイヤーピットの構造や遺物の出土状況など類時点は多いが,本住居には,壁溝と張り出しがないのに対し,SHII06には両者が認められるなどの相違点がある。また他の切り合い関係のある住居間では,明確な形態差を有するものが多い。埋没後時間を経たものでない場合,強度上の問題があるためと考えられる。こうした事例からすれば,SHII06とSHII07の間には時間差があると考えられる。

(第83図14~24,第84図 1~13) は床面直上出土の土器である。(14~20)は壺で,(14)は短い頸部を持ち頸部下端には刷毛工具による刻み目が施される。(15)の端部には鋸歯文が認められる。(18)は直立気味の頸部を持つ。(19)は体部下半で,外面は叩き後へラ磨き,内面はヘラ削り,底部は明確な平底を持つ。(21~24,第84図 1~6)は甕である。(21)は長胴のもので,口縁径は小さい。壺としたほうが良いものかもしれない。外面に刷毛が施され,内面下半部は不明瞭であるが器壁が厚いことからへラ削りは施されていない可能性が高い。(22)は外面に叩き目が顕著。(第84図 3~6)は雲母土器の甕で,もっとも残りの良い(3)は外面下半部はヘラ磨き・上半部刷毛目・内面は下半部へラ削り・上半部は指頭痕顕著で,口縁部内面は工具による凹線状の条痕がつくナデ調整の典型的な土器である。出土した底部は不安定な平底と明瞭な平底の両者がある。(第84図 7~13)は鉢で,摘み出しにより平底化しているが,本来的には不安定な底部を呈するものが主体となろう。(10)は小型の甕とも考えられ,SHIの3等で出土したものと同一の器形である。(11~13)は大型の鉢で,(13)は片口状の口縁を呈する。

(第84図14・15,第85図 $1\sim19$)は下位出土の土器である。(第84図 $14\cdot15$)は壺で,(14)は口縁部内面と端部に,竹管文をめぐらし,外面にはさらに鋸歯文を付ける。(第85図 $1\sim11$)は甕で,($1\cdot2$)は雲母土器。底部は不安定な平底と摘み出しによる平底の両者からなる。($12\sim15$)は鉢。(18)は雲母土器の高杯で,工具による凹線状の条痕がつくナデが内面に認められる。(19)製塩土器。

(第85図20~47, 第86図 $1 \sim 7$)は中位出土の土器である。($20 \sim 30$)は壺で,($20 \cdot 21$)は頸部が細くなり,上部に拡張した口縁部を持つ。(26)は雲母土器の細頸壺で,外面はヘラ磨き,内面は指頭痕顕著なもである。出土底部は明確な平底を呈する。($31 \sim 44$)は甕で,($35 \cdot 36$)は雲母土器で,工具によ

る凹線状の条痕がつくナデが口縁部内面に認められる。 $(45\sim47)$ は鉢で,大型の(46) には外面に叩き目が認められる。 $(第86図1\sim6)$ は高杯で, $(3\sim5)$ は雲母土器である。(6) は脚柱部が非常に短い短脚のものである。(7) は小型丸底壺で口縁部は高く伸び,底部は平底気味となる。

(第86図 8~36)は上位出土の土器である。(8~16)は壺で,(16)は短い直立気味の頸部である。(17~22)は甕で,(18)は球形に近い体部を持つと考えられ,外面には非常に細かい叩きが施される。(23~25)は鉢で大型の(23)の外面は刷毛目が顕著である。(26~31)は高杯で(31)には脚柱部にへ ラ削りが認められる。(32)は製塩土器。(33・34)は蛸壺で混入の可能性がある。(35)は器壁が厚いが 小型丸底壺と考えられ,(16)はミニチュア土器である。

(第87図1~19)はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なものである。

本竪穴住居から出土した土器は、中位から上位にかけて後出する可能性の高い小型丸底壺・蛸壺等が含まれ、完没したのは比較的新しい時期のと考えられる。また底部は甕では不安定な平底と拡張により 平底化したものが目立ち、壺では平底となる点は注目される。 (藤好)

SH II 08 (第36·87~89図 図版31 SBNB01)

I 27区,SHI 05の南部で検出した住居で,南部はSDI 08,東部は古墳後期の竪穴住居SHII 03に切られる。北辺と東辺が比較的直線的な形状を示し,隅丸方形の竪穴住居であると考えられるが,その主軸方位が通例の隅丸方形のものと異なる点が問題である。本竪穴住居は,SHI 06等の北版部の状況との類似性が高いことから,むしろ多角形状の不正円形住居としたほうが良いものかもしれない。いずれにしても中間的な過渡的な形態として理解すべきものであろう。またこの住居跡では南東部に張り出しと考えられる部位があり,張り出しの位置関係からすれば,SHI 01・SHI 03等との共通性が考えられる。特にSHI 03では南東部にわずかに張り出し状の痕跡があり共通する要素となろう。長軸8.1m,短軸6.6 m以上,深さ0.35mを,面積は41.9㎡を測る。中央部にファイヤーピットを持つ炉が位置する。主柱穴は整然とは確認されず,北半部は4穴が6穴配置状に回るものの南部の主柱穴の配置が明確でない。

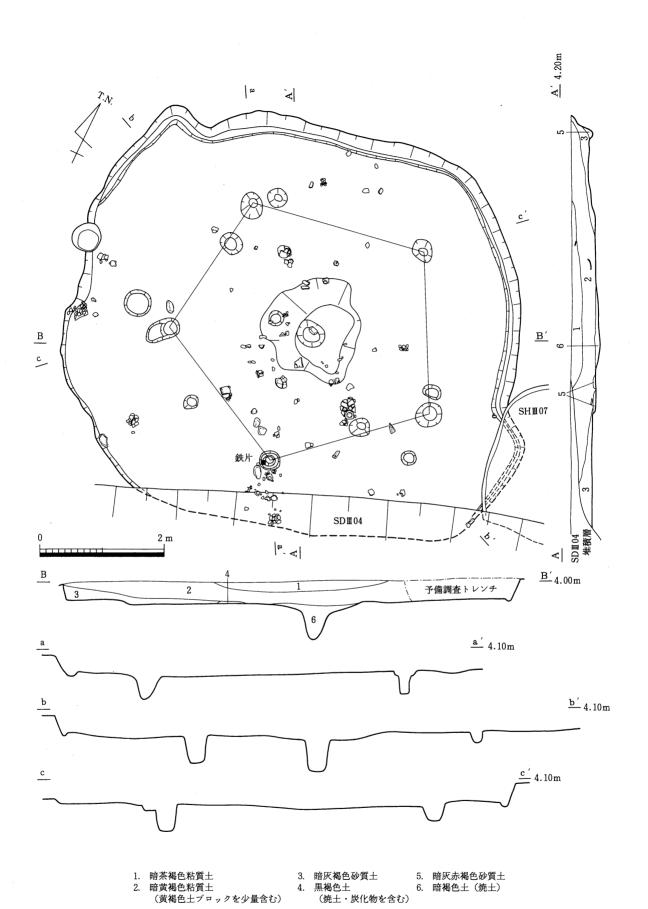
(第87図20~25,第88図 1~13)は床面直上出土の土器である。(第87図20~24)は壺で,底部は明確な平底を呈する。(22)は雲母土器の細頸壺で外面はヘラ磨き内面はヘラ削り。(25,第88図 1~9)は甕で(1)は小型の雲母土器の甕で,(4・5)は雲母土器の大型の甕で底部は明確な平底を呈する。(10~13)は鉢で,(12)は単純口縁の鉢で外面はヘラ削り。

(第88図 $14\sim25$,第89図 $1\sim12$)は下位出土の土器である。($14\sim18$)は壺である。($14\cdot15$)は同一固体の可能性があるが,薄く丁寧な作りの壺で,口縁端部は短く上部に拡張され,内面に櫛描波状文が施される。($22\sim25$)は甕である。(24)は雲母土器で外面は刷毛目調整である。(第89図 $1\sim6$)は鉢。($9\sim12$)は高杯である。

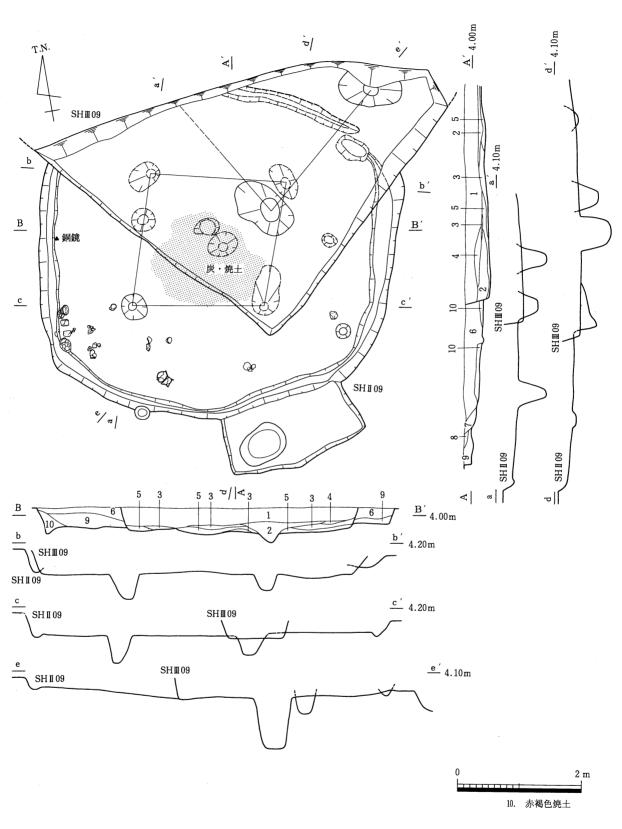
(第89図13~36)は上位出土の土器である。(21)は雲母土器の細頸壺で下半部はヘラ削り、上半部は 指頭痕顕著で、やや小型ものである。(36)の蛸壺は混入品である可能性が高い。 (藤好)

SH **II 09** (第37·90図 図版32 SBNA11)

H・I6区で検出し、北部は古墳後期の竪穴住居SHⅢ09に、また南部は掘立柱建物SBⅢ20の柱穴によって切られる。SHⅡ09の平面形はSHⅢ09の下部で捻出した壁溝により、全体の平面形は推定できる。主柱穴が4穴であることや、東西辺の方位がほぼ真北方向を向くこと等、隅丸方形と共通する要素の方が多い。そのため、やや南北辺が脹らむものの隅丸方形の範疇で理解したい。1辺約5.7m、深さ



第36図 SH II 08 平・断面図



- 暗褐色砂混弱粘質土
 1に類似(黒褐色土ブロックを含む)
 1に類似(黄褐色粘質土ブロックを含む)

- 4. 褐色粗砂
 5. 2に類似(炭化物を含む)
 6. 砂混じり暗褐色土
- 7. 黄褐色砂質土
 8. 6 に類似
 9. 6 に類似(黒褐色土を含む)

第37図 SH II 09, SH II 09 平·断面図

 $0.34 \,\mathrm{m}\,$ を,主軸方位はN13°Eを測る。面積は27.8㎡で,当該期の隅丸方形の竪穴住居の中ではやや大型のものである。内部構造としては中央部にファイヤーピットを持つ炉跡が有し,南東隅に張り出しが付く。この張り出しの方位はSH II 06の張り出しの方位と一致する点は注目される。両住居の間に位置するSH II 08の張り出しでは北西方向に向くことから,SH II 07・09間の類似性は高い。

主要な出土遺物としては、西部の床面直上から(第580図7)の小型仿製鏡が出土した。鈕は欠落しており、器表には稲藁が表裏に付着していた。

(第90図 $1\sim19$)は床面直上出土の土器である。($1\cdot2$)は壺で,(1)は口縁端部を上方に拡張し,(2)は外面に竹管文が廻る。($3\cdot4$)の底部はわずかに平底気味となる。($5\sim10$)は甕で,($8\cdot9$)は雲母土器の甕である。($11\sim15$)は鉢。($16\cdot17$)は高杯,(16)は口縁部が外反して伸び,(17)は雲母土器で,工具による凹線状の条痕がつくナデが口縁内面に施される。($18\cdot19$)は製塩土器である。

(第90図20~28) は下位出土の土器である。(20~24) は壺。(25~27) は甕で(25) の外面は叩き後刷毛,内面下半部はヘラ削りが施され,上半部は指頭痕が顕著である。(第90図29~33) はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なものである。 (藤好)

SH II 10 (第38 · 91図 図版33 SBN A 08)

(第91図 1)は床面直上から出土した甕で、外面は刷毛、内面は指頭痕が残る。($2\sim20$)は下位出土の土器である。($2\sim4$)は壺で、上方に拡張された口縁部を持つ。(4)は底部で不安定な平底で、外面は刷毛、内面は板ナデ。($5\sim16$)は甕で、出土した底部は明確な平底の($13\sim14$)から丸底気味の(16)までがある。($17\cdot18$)は鉢。($19\cdot20$)は高杯で。(20)は薄い器壁を持ち、大きく外反する。

(藤好)

SH II 11 (第39·91図 図版33 SBN A12)

田25・26区,SHII10の南で検出した。近現代の土坑等で大幅に攪乱を受けた柱穴住居である。平面形は円形を呈する竪穴住居であると考えられ,推定直径約4.2m,深さ0.48m,推定面積13.1mを測る。第 1 微高地北部の竪穴住居群の円形住居の中では最も南に位置する。内部構造としては,中央部にファイヤーピットを持つ炉跡が,また壁面に沿ってベッド状遺構が回る。炉跡を挟み,東西に柱穴と考えられるピットを検出したが,主柱穴は明確ではなく,円形住居の他例からすれば,6 穴もしくはそれに近いものの存在が考えられる。

(第91図21~31)は床面直上出土の土器である。(21~26)は壺で,(24)は直立する頸部である。(25・26)の底部はやや不安定な平底である。(27~30)は甕。(31)は雲母土器の小型丸底壺と考えられ,体部には稜を持つ。

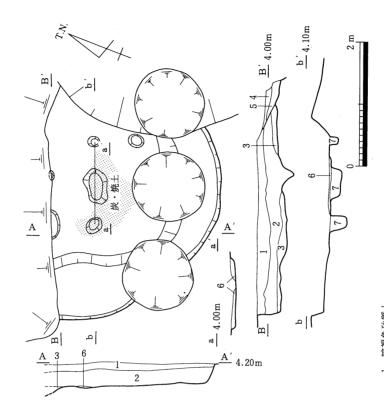
(第91図32~34) は上位出土の土器である。(32) は壺の口縁で外面にヘラ描の鋸歯文を持つ。(34) は高杯の脚で、内外面に刷毛目が残る。

3に類似 (3に比べやや暗い) 淡褐色土 (僅かに黒褐色ブロックを含む貼り床) 焼土及び炭化物 暗褐色土

6. 7. 8

弱黒褐色土 暗褐色砂質土 弱暗褐色砂質土 3 C類似(炭化物を含む)

1 2 3 4



B

°. 0

m0S.₽

, V

 ・ 暗褐色砂質土
 ・ 黄褐色小ブロック湿じり弱暗褐色土
 ・ 灰褐色小ブロック混じり弱暗褐色土
 ・ (炭化物を含む)
 ・ 暗赤褐色多砂質土
 ・ 原褐色砂質土
 ・ 灰褐色砂質土 3 5 :-

 $\frac{B'}{M}$ 4.20m

A

<u>в</u>|

 $\frac{a}{4.20m}$

5.

6. 黒褐色砂質土 (炭化物を含む) 7. 暗褐色砂質土 (炭化物・土器片を含む)

第38図

m | m |

SH II 12 (第40·92図 図版34 SBN A 01)

I25区で検出した隅丸方形の竪穴住居で正方形に近い平面形を呈する。第1 微高地の竪穴住居では最も西に位置する住居である。長軸約4.4m,短軸4.0m,深さ0.58mを,主軸方位はN15°Eを測る。面積は15.4㎡で,当該期の隅丸方形の竪穴住居の中では平均的な規模である。北西部は古墳時代のち期の遺物を含む包含層がわずかに上部を覆う。この住居の西側は平安期以降の流路である第4 低地帯の流路が位置するが,弥生期においてどの程度第1 微高地が西側に広がっていたかを示すデータを得ることはできなかった。内部構造としては、中央部にファイヤーピットを持つ炉があり、その上層は焼土と炭化物が集中する埋土が堆積していた。住居の壁面も焼土化しており、焼失家屋である。主柱穴は明瞭ではないが、中央の炉を挟むような状況で検出した 2 穴が該当すると考えざるを得ない。出土遺物としては、床面から浮いた状況で、完形の甕(第92図 2)が出土した。

(第92図 $1\sim3$)は床面直上出土の土器である。(1)の壺は短く直立する頸部を持ち,器表はヘラ磨き,内面は板ナデ調整である。($2\cdot3$)は甕で,(2)は完形で出土し,体部外面は叩きのち刷毛,内面下半部はヘラ削りで,底部はやや不安定な平底である。($4\sim9$)は下位出土の土器で($4\sim7$)は甕で(6)は擬似口縁を生かした口縁部を持つ甕である。(8)は片口状の口縁を持つ鉢である。(9)は鉢もしくは高杯の口縁。(10)は上位出土の甕で不安定な平底がわずかに残る。

SH II 13 (第41·92·93図 図版35 SBNA06)

I25区で検出した非常に小規模な隅丸方形の竪穴住居である。SBⅢ23に切られる。他の隅丸方形の竪穴住居と異なり、中央部に炉に相当する焼土や炭化物は検出できなかった。主柱穴は2穴と考えられる。出土遺物には、小型の隅丸方形の住居としては珍しく、鉄器片が3点出土している。また手捏ね土器や大型の片口の鉢等が出土している。小規模であることや炉を持たないことから、住居としての機能よりむしろ倉庫等として理解されるべきものであろう。

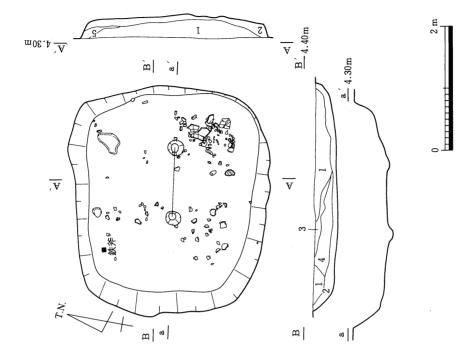
(第92図11~19,第93図1)は床面直上出土の土器である。(11・12)は壺。(13・14)は鉢で,(13)は外面は刷毛で,底部は不安定な平底を呈する。(15)は脚部で器壁が厚く。やや雑な作りのものである。(16)はミニチュアの甕で口縁端部は面取り。(17)は内外面に指頭痕が顕著な不明土器。(8)はミニチュア。(19)は先端が二股になる支脚と考えられる。(第93図1)は大型の壺の体部で,外面は叩きのちへラ磨き,内面下半部は刷毛目が残る。

(第93図 $2\sim6$)は上位出土の土器である。 $(1\sim4)$ は甕の口縁。(5) は鉢。(6) は高杯で口縁端部は面取りし、外面にはヘラ磨きが認められる。 $(7\sim19)$ はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なもで、(7) の壺の口縁部は上方に拡張される。 (藤好)

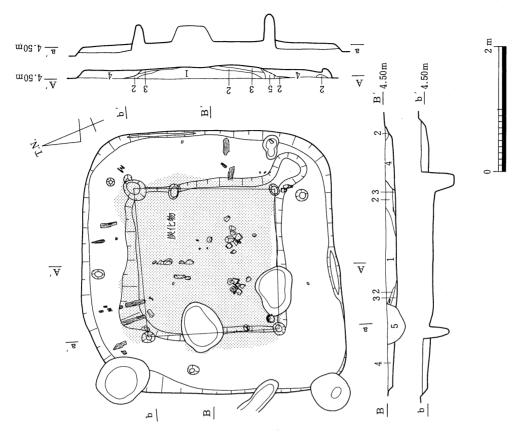
SH II 14 (第42·94~96図 図版35·36 SBN A 02)

I25区、SHⅡ12に隣接するように検出した隅丸方形の竪穴住居で、掘立柱建物SBⅢ21に切られる。長軸3.9m、短軸3.6m、深さ0.56mを、主軸方位はN10°Eを測る。面積は11.9㎡で、当該期の竪穴住居の中ではやや小規模なものである。内部構造としては、中央部にファイヤーピットを持つ炉を有し、主柱穴は、配置がやや乱れるものの4穴と考えられる。埋土中には焼土と炭化物の集積層が有り、壁面も焼けている。焼失家屋であるため遺物の残存状況も良く、北東隅で完形の壺、北西隅で高杯1点と重ねられた鉢が3点出土し、南西隅では、壺と鉢が各1点出土した。また炉跡の隣接して完形の甕が1点出土するなど、まさに当時の竪穴住居内の容器等の配置状況を確認し得る好例である。また本住居は第1

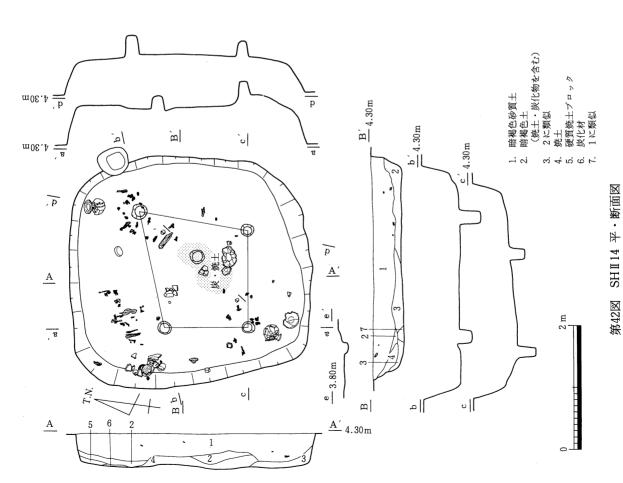
第40図 SHI12 平·断面図



B' 4.20m 焼土 炭化物集中 炭化物混ごり焼土 1 に類似 b' 3.80m | B | B 6.5. 8 暗褐色多砂質士 弱暗褐色多砂質士(炭化物を少量含む) 1 に類似(焼土・炭化物を少量含む) 3 に類似(3 に比べ焼土・炭化物多い) 0 , V 2 m 00 (3) **8**3 0 -: 2: 6: 4: | m <u>в</u>|



1. 弱暗黒褐色土 3. 暗灰茶褐色土 2. 暗茶褐色土 4. 暗黄灰褐色土(貼り床ベット) 5. ピット埋土



微高地北部に展開する第 I 期の竪穴住居群の中で最も南に位置する。南には約25mほどの国道の未調査部を挟み、南北約80mの第 I 期の竪穴住居が分布しない空白域が認められる。未調査部の問題はあるが、現状では、一つの住居群のまとまりの最南端の住居である。

(第94図、第 II 95図 1~12) は床面直上出土の土器である。(1~5)は壺で、(1)は大きく外反する頸部を持ち口縁との境は明瞭ではない。外面は叩きのち、刷毛のち、疎らなへラ磨きで、内面はナデ調整である。(2)は(1)と概ね共通した形状を呈するが、口縁部と頸部の境が明確で、体部上半と口縁部外面に叩き目が顕著に残り、内面はヘラ削りである。両者とも不安定な底部を持つ。(7~17)は甕である。概ね外面は叩きのち刷毛で、内面はヘラ削りのものと刷毛目のものがあるが前者が多い。(17)はミニチュアの甕である。甕の底部は不安定な平底である。(18・19,第95図 1~10)は鉢である。(第95図 1~5)は外面にヘラ削り、(6~9)は叩き目が施される。(10)は拡張された底部がつく。(11・12)は高杯で、残りの良い(11)は工具による凹線状の条痕がつくナデが口縁部内面に廻るが、雲母土器ではなく、やや悪い胎土である。(第95図13~19)は下位出土の土器である。(第95図20~27)は上位出土の土器である。(20)は口縁部外面に鋭い工具による鋸歯文が施される上方拡張の顕著な壺である。(21)は端部に竹管文が廻る。(24)は外面に叩き目が顕著な鉢、(26・27)は製塩土器。(第96図)はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なものである。(11)は脚台付の鉢であろう。本遺構は焼失家屋であることから遺物の残存状況が良好で、いわゆる狭義での雲母土器は高杯の口縁部の小片では含まれるもの大型の甕等では出土していない点は注目される。。

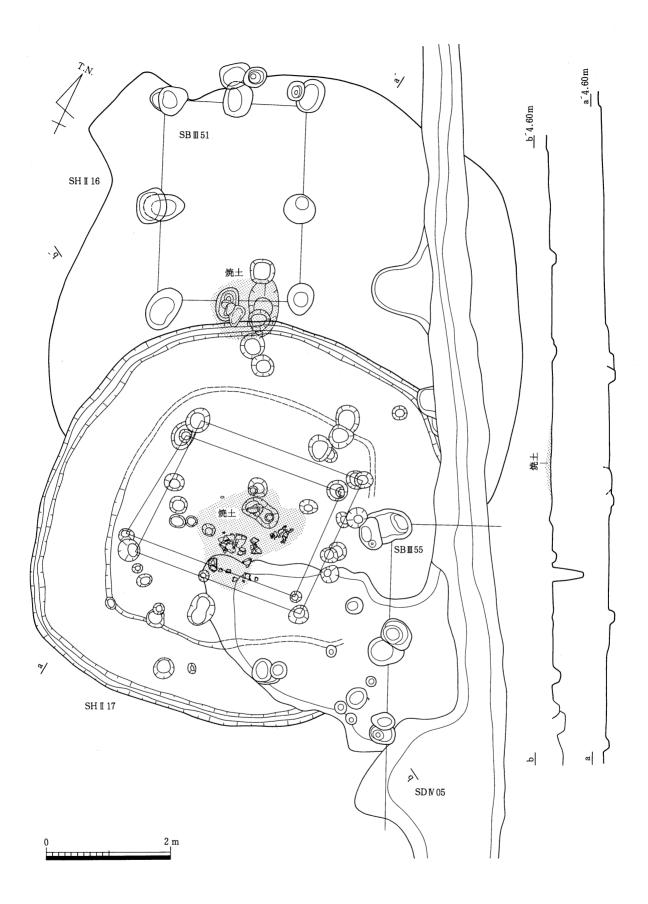
SH II 15 (第43·97図 図版37 SH8613)

田20区で検出した。第一微高地東南部に位置し、周囲には同時期の竪穴住居14棟が集中する。本遺構はこれら住居群の東端にあって、総柱建物SBⅢ53に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.2m、短軸4.1m、残存深0.2m、主軸方位N19°Eを測る。面積は15.2㎡で、当該期の竪穴住居中の平均よりやや小形である。屋内四周には幅0.8~1 m程度、中央部床面と0.1~0.15m程度の比高を持ついわゆるベッド状遺構が認められる。主柱穴は4本で径0.2~0.3m、深さ0.4m程度、ベッド状遺構縁辺の四隅に配される。床面に炉址および中央穴は認められなかった。また壁溝も断片的に見られるのみで極めて不明瞭である。なお本住居は焼失家屋で床面、特に北辺ベッド上を中心に炭化材を検出した。床面に残された遺物で図示しうる例はなく、図化・掲載した資料は何れも覆土中検出例である。

出土土器は小片が多く全形を知りうるものは殆どない。器種的には広口壺・甕・鉢・製塩土器・高杯を含む。(第97図1)は広口壺口縁部でやや肥厚し強く内傾する端面には鋸歯文を配す。甕は体部球形化がかなり進行しているようであるが,底部片を見るかぎりでは僅かながら平底をとどめている。全体に薄手で口縁部は強く屈曲して内面に稜を持つ。(第97図7)の甕は明らかに時期を違える資料で混入品であろう。小形鉢には(15)のように矮小化した平底をとどめる例と(16・17)のように底部平坦面の角をこぎ落として丸底を指向するものがある。埋土中出土資料であるが甕の一部を除いてほぼ弥生後期終末の単一時期の様相を示している。 (大久保)

SHⅡ16 (第44・97図 図版38 SH8604)

G20区で検出した張り出しを持つ竪穴住居址である。本遺構はSHI17・SDN05に切られ、また上半部は削平を受けているため残りが悪い。平面形は円形を呈し西に張り出しが付く。長軸7.6m以上,短軸3.6m以上,残存深0.05mを測る。面積は50.1㎡で、当該期の竪穴住居址の中では比較的規模の大きな竪穴住居址である。内部構造として炉址は中央部で確認されたが、明瞭な主柱穴は抽出できなかった。



第44図 SHⅡ16·17 平·断面図

また、本遺構は焼失家屋と考えられ、炭化物・焼土がほぼ全面わたって検出された。

出土遺物としては,弥生時代後期後半の土器及び石器等が出土した。SHI16の出土土器は,床面直上の遺物5点を抽出した。

(第97図23)は壺あるいは器台の口縁部である。端部は上方に拡張している。(第97図24)は壺の上半部である。口縁部は体部からの連続で,外湾気味に口縁端部につずき,丸くおさまる。内外面共に頸部周辺には指頭痕を残す。(第97図25)は甕の底部である。底部は平底で外上方に直線気味に延びる。内面にわずかに指頭痕が残る。(第97図26)は甕ないし壺の底部片である。底部は平底で,外面にわずかに指頭痕を残す。(第97図27)は小形の甕の底部である。底部は平底で,外上方に向けて内湾気味に体部につずく。また,底部の作りは粗雑である。体部には指頭痕をわずかに残す。 (西村)

SHⅡ17 (第44・98図 図版38 SH8605)

G20区で検出した竪穴住居址である。 $SDN05 \cdot SHII16$ と切り合い関係にあり,東辺をSDN05に切られ,北辺ではSHII16を切り込んでいる。また上半部はSHII16同様,かなり削平を受けているため残りが悪い。平面形は胴張りの隅丸方形を呈し長軸6.5m,短軸6.2m,残存深0.25mを測る。面積は35.0mで,当該期の竪穴住居址の中では比較的規模が大きいほうである。主柱穴は建て替えがあったものと考えられ,2組の主柱穴が確認された。柱穴の数は1組み4柱穴である。炉址は中央部で確認された。住居内では幅約0.9,高さ0.05mのベット状遺構が周囲をめぐる。壁溝は全周をめぐる。

出土遺物としては、弥生時代後期後半の土器及び石器等が出土した。出土した石器は大半はサヌカイト製の剝片類だが、他の住居址に比べ比較的多く207点を数える。SHⅢ17出土の土器は、床面直上の遺物を中心として10点抽出した。

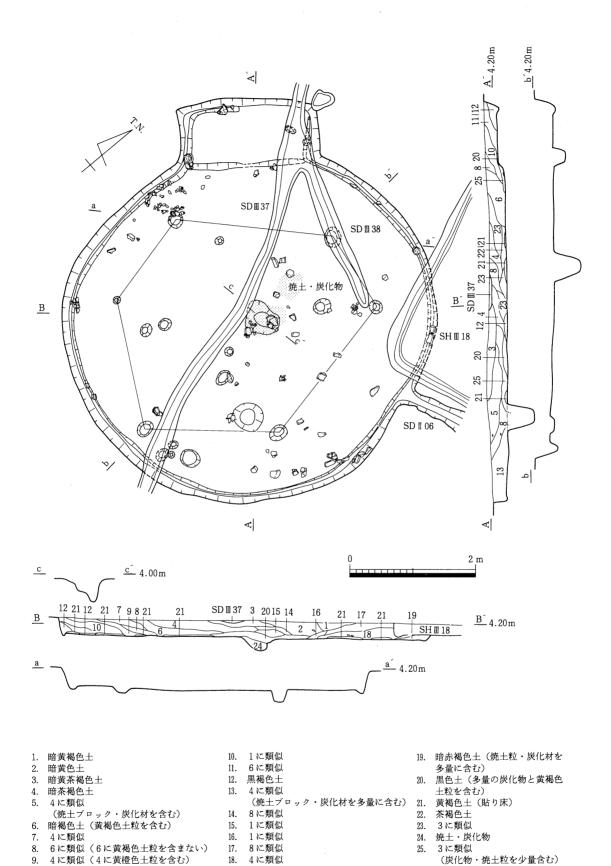
(第98図 $1\sim6$)は床面直上の遺物である。(1)は壺の口縁部である。端部は上方に僅かに肥厚させている。(2)は弥生前期の甕の口縁部で,混入品である。($3\sim4$)は鉢である。(3)は大形の片口鉢である。底部は丸味を持ち,内湾気味に体部に続く。口縁部は外反し端部はわずかに肥厚する。(4)小形の鉢である。底部は平底で直線気味に口縁部に続く。端部は丸くおさまる。(5)は杯である。混入の可能性が高い。(6)はミニチュアの鉢である。

(第98図 $7 \sim 10$)は上位の堆積層中より検出された土器である。(7)は壺の口縁部,(8)は甕の口縁部,($9 \cdot 10$)は甕の底部である。外面にはタタキが顕著に認められる。。 (西村)

SH II 18 (第45·98·99図 図版39 SH8602)

第2微高地の南部にまとまりを有する竪穴住居群の中で最も東に位置する。第1低地帯に面した斜面よりに位置する。古墳時代後期の竪穴住居SHⅢ18に北東部を切られる。またSDⅢ37に中央部を切られる。平面形は円形を呈し,西北部に張り出しを持つ。規模は,長軸5.9m,短軸5.7m,深さ0.25mを測る。内部構造としては,中央部にファイヤーピットを持つ炉が有り,主柱穴は不明確であものの6穴と考えられる。北西部に位置する張り出しは住居の床面より一段高く,壁に沿って壁構が回る。壁構東部からは排水溝が東に延びる。壁溝は張り出しの東部では不明瞭になる。西に6mほど離れて位置するSHⅡ17は本竪穴より,やや大型の住居であるが,張り出しの方向は共通している。

SHII18の出土遺物として、42点の土器を抽出した。(第98図11~27)は床面直上の資料である。(11~14)は壺である。(11・12)は広口壺の口頸部、(13)は口縁と底部を欠く広口壺、(14)は底部である。(15~18)は甕である。(15~17)は口縁部を「く」の字状に屈曲させた甕、(18)は所謂雲母土器の甕である。(19~26)は鉢である。(23・24・26)の鉢は、口縁端部を上方につまみ上げている。底部



第45図 SHⅡ18 平·断面図

を残すのは(19~23.25)の資料で,(25)を除けば、全て平底である。(27)は高杯脚部である。

(第99図 $1\sim25$)は下位より出土した資料である。($1\sim9$)は壺である。($1\sim5$)は広口壺の口縁部、($6\cdot7$)は細頸壺の口縁部である。($10\sim16$)は甕である。($17\sim23$)は鉢である。($17\cdot18$)は大型の鉢である。($17\sim23$)は高杯である。($17\sim23$)は高杯である。($17\sim23$)は高杯である。($17\sim23$)は本である。($17\sim23$)は本のは本のなる。($17\sim23$)は本のなる。($17\sim23$)は本のなる。($17\sim23$)は本のなる。($17\sim23$)は本のなる。($17\sim23$)は本のなる。($17\sim23$)は本のなる。($17\sim23$

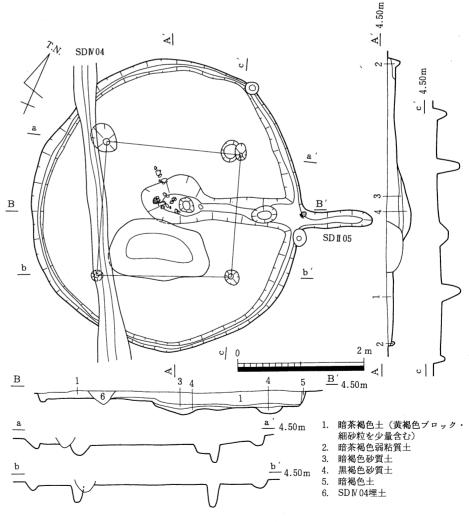
SH II 19(第46·100図 図版40 SH860)

G20区で検出した。本住居も同様に第一微高地東南部に位置し,周囲には同時期の竪穴住居14棟が集中する。また溝SDN04に切られる。平面形はほぼ円形を呈し,長軸4.7m,短軸4.4m,残存深0.14m主軸方位はN20°Wを測る。面積は12.4㎡で,当該期の竪穴住居中では平均的な規模を持つ。床面中央に平面楕円形,断面浅い皿状を呈する長軸1m,短軸0.8m,深さ0.2mの中央穴があり,そこから屋外東方,即ち微高地縁辺部に向かって長約3mの排水溝が延びている。主柱穴は4本で平均径0.20~0.50m,深さ0.35mで柱間距離は2~2.1mを測る。壁溝は全周し,先の排水溝に連結している。

床面および覆土中から若干量の土器を出土したが床面検出資料間にも一定の時期差が認められ所属時期の厳密な特定が困難である。

(第100図 $1\sim4$) は甕小片。($2\cdot4$) は明確な平底をとどめるが(3) は薄手の丸底を呈する。

(12) は土製紡垂車で ある。



第46図 SHII19 平・断面図

(5) に従えば後期終末に下るが,甕および鉢(7) では後期後葉を下らない。 (大久保) SH **11 20** (第47・100~102図 図版41 SH8607)

G20区で検出した。第一微高地東南部に位置し,周囲には同時期の竪穴住居14棟が集中する。本住居は同時期の竪穴住居SHI21の一部を切り,また溝SDⅡ32に切られている。平面形はややいびつな円形を呈し,長軸6.0m,短軸5.6mを測る。面積は23.6㎡で,当該期の竪穴住居中の平均よりやや大形である。また残存深最大0.05mと削平が著しい。壁面に沿って最大比高0.1m程度のベッド状遺構がある。ただし,東半部では不明瞭であり,また西半部においても,中央部床面との境はかなりなだらかである。中央部よりやや南よりの床面に平面隅丸長方形の浅い中央穴二基を検出した。何れも炭・灰片を多量に含む薄層の互層状堆積が認められる。柱間寸法のばらつきが大きいが主柱穴は6本からなり平均径0.3m,深さ0.4mを測る。また内4箇所では同規模の柱穴が2本1組になる。壁溝は部分的に認められるだけではなはだ不明瞭である。東側の一部だけだが二重に巡る部分もある。以上の所見から見て本住居は一回以上の建替えないしは若干の拡張を行っている可能性が高い。

住居床面のベッド上面,中央穴周辺に小形甕,鉢,手焙り形土器等が残されていた。また覆土上面中央部には土器小片が集中的に投棄されている。ただし全体として住居の遺存状態が良くなく覆土が薄いため,必ずしも覆土中遺物と床面遺存遺物とが明確に分離し難かったところもある。

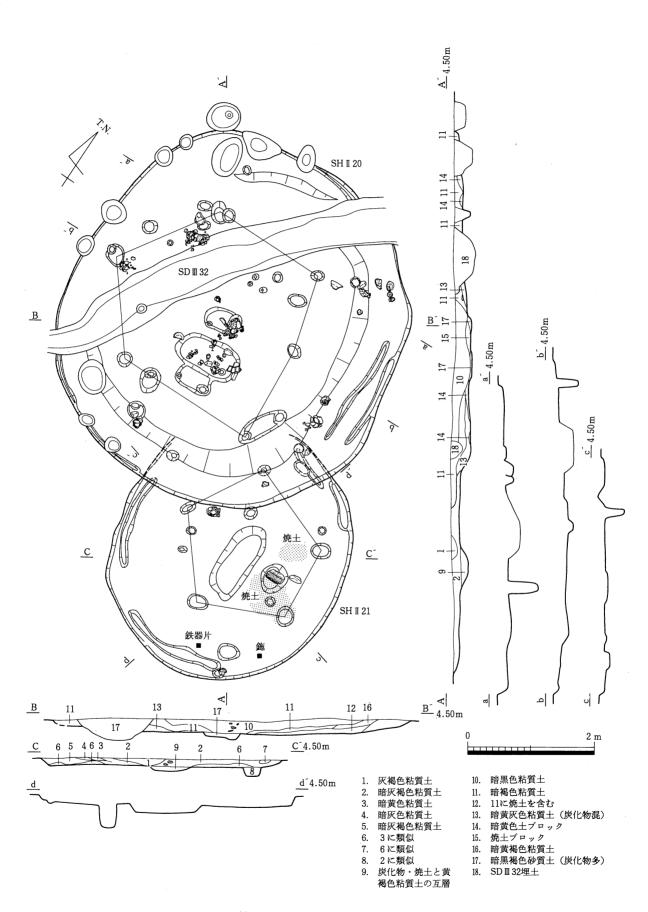
その中には20個体近い製塩土器を伴っており、周囲には比較的多量の炭片が認められた。それらは何れも二次的焼成の痕跡が顕著で剝落が著しいが体部中位以上まで遺存する例も含んでいる。下川津遺跡あるいはその周辺で当該期に土器製塩が行われた可能性を示すものである。

図化・掲載した91点のうち床面遺存資料は(第100図13・34,第101図 $1\sim5$ ・第102図 $1\sim5$ ・9・12・13・15・18・21・22)の19点である。ただし(第102図21・22)の製塩土器は覆土中のそれらと一連の資料の可能性がある。

(第100図13~28) は壺口縁部・頸部片である。本住居関連資料中には細頸壺・小形丸底壺は含まれない。(13) はラッパ状に開く口縁部を持つ広口壺で類例は少ない。(14~24) のように強く開き口縁端部を断面三角形状に拡張し端面に鋸歯文ないしは櫛描波状文を描く例か,(25・26) のように二重口縁を成す例が多い。(29~31) の壺底部では丸底か平底でも平坦面がひどく矮小化している。甕(第100図32~第101図31)では何れも口縁部を含め全体に薄手で体部外面の並行叩きを殆ど消さない資料が多い。底部(第101図18~31)は壺同様に殆ど丸底を呈するか平底にしても極度に矮小化している。ただし(第101図2・4)のように張りが弱く底部を小形鉢にしばしば見るような細かい削りで丸底化した例は極めて珍しい。(第101図32,33) は雲母土器甕である。口縁部の強い屈曲度合いにその特徴を明瞭にとどめるが端部の肥厚は認められず,また肩部の形状も以前のものとは微妙に異なる。雲母土器甕としては最新の形態である。

(第102図 1)は非常に粗雑な作りであるが手焙り形土器であろう。($3\sim17$)は小形の鉢。何れも底部は丸底化している。(3)は底部の角をこそぎ落として丸底とする。ここでは通例の小形鉢よりも遥かに小さく全体に指押さえを顕著にとどめるむしろ手捏ね土器のようなタイプ($9\sim17$)が多く出土している点が注目できる。(第102図 $18\cdot19$)は高杯である。(18)はやや深めの杯部で口縁端部を短く外に折る。

(第102図21~38) は製塩土器。何れも筒形の体部を持ち並行叩きを顕著にとどめる。体部径は余り大きくない。倒杯形の脚部には形態差が顕著である。以上の土器群は床面・覆土中資料間に明瞭な時期差は認め難く、全体として弥生時代後期終末の様相を示している。 (大久保)



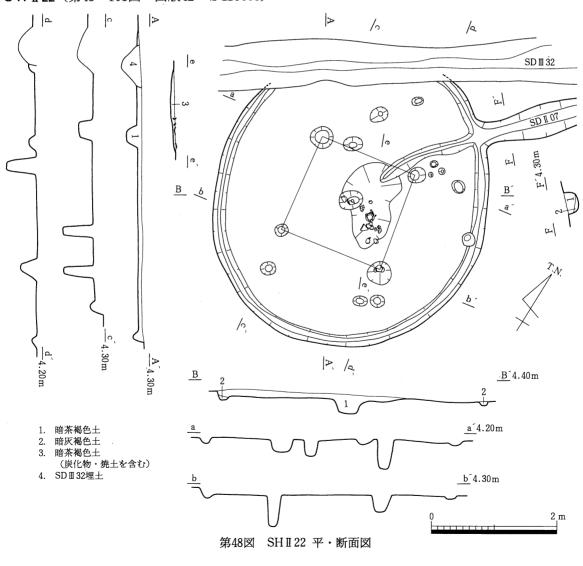
第47図 SH II 20·21 平·断面図

SH II 21 (第47·102図 図版41 SH8608)

G20区で検出した。本住居は同時期の竪穴住居SHI20の南に隣接し、北端をこれに切られる。平面形はややいびつな円形を呈し、長軸4.0m、短軸3.8mを測る。面積は12.1㎡で、当該期の竪穴住居中ではやや小形である。残存深最大0.12mと残りは良くない。床面中央に長楕円形の浅い中央穴を持ち、炭片・灰を多く含む。主柱穴は5本で平均径0.15~0.35m、深さ0.3mを測るが、規模のばらつきが大きい。壁面に接して断続的に壁溝が認められる。床面から甕(第102図39)・高杯(第102図40)が出土した。

(39) は二重口縁を呈する甕である。なで肩で口縁部は開きが短い割りには立ち上がりが長く,吉備系の二重口縁甕とは口縁部の形状がやや異なる。(40) は雲母土器高杯である。口径の割には比較的杯部が深く中位の屈曲部が低い。円盤充塡法で脚部と接続し杯部外面下半にはへら削りを施す。(41) は広口壺で口縁部端面をやや拡張し内傾させる傾向を示すが未だ文様帯は持たない。(42) は小片のため器種の特定が難しいが甕であれば古い様相を示す。(43・44) は甕口縁部でかなり薄手である。(44) は甕底部,叩き目を顕著に残し僅かに平底をとどめる。(46) は小形の鉢で内外面ともハケ調整で仕上げる。不明瞭だが小形の平底をとどめる。(47) は製塩土器脚部である。何れの土器も遺存状態が不良で細かい判断が困難であるがほぼ弥生後期終末に比定出来よう。 (大久保)

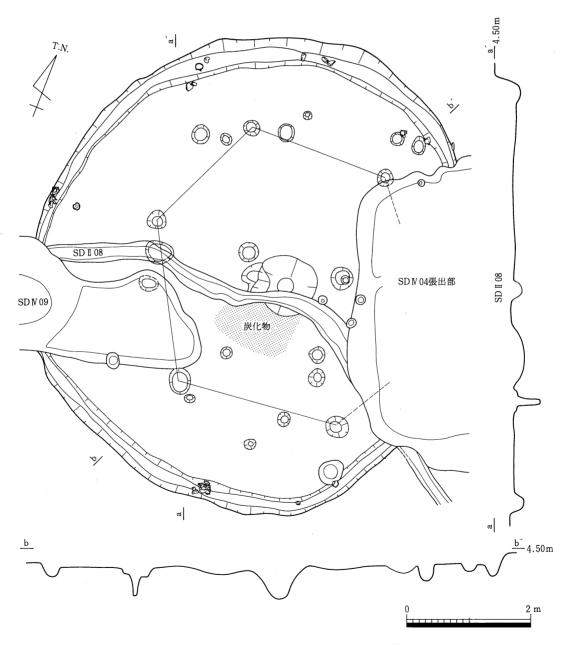
SH II 22 (第48·103図 図版42 SH8603)



G20区で検出した。本住居も第一微高地東南部の竪穴住居群中に位置し、北端を溝SDⅢ32に切られている。また微高地東斜面に形成された弥生前期段階の遺物包含層を切り込んで作られており、床面北半部にはそれを残している。平面形はほぼ円形を呈し長軸4.3m、短軸4.1mを測る。残存深0.1mと遺存状態は極めて悪い。主軸方位はN12°Wを測る。面積は13.1㎡で、当該期の竪穴住居中ではやや小形である。床面中央に平面形整形で中心が柱穴状に深い中央穴を持ち、そこから屋外東側に向かって幅0.4m、長さ5.6mの排水溝が延びる。主柱穴は4本からなり、壁溝は全周する。床面中央穴周辺から少量の土器を出土した。

(第103図 5) の蓋が床面に残された前期包含層中検出資料である他は本住居の遺存状態から見てほぼ床面資料と見成して良かろう。また(7) は壁溝中より出土している。

(第103図1)は短頸壺で口縁部の発達は弱い。(2)は小形器台の可能性が高いが、中位のくびれの



第49図 SHII 23 平・断面図

弱さから器台形の支脚の可能性も捨て切れない。(3・4)は甕で口縁部は緩やかに屈曲し端部は僅かに肥厚する。(5)は弥生前期の蓋である。(6・7)は小形の鉢で内外面に指押さえを顕著に残しやや粗雑な作りである。弥生後期後葉でもやや古い時期に位置付け得る。 (大久保)

SH II 23 (第49·103·104図 図版43 SH8609)

H19区で検出した竪穴住居址である。SDI08, $SDN04 \cdot 09$ と切り合い関係にありいずれも切られている。南には隣接して $SHI25 \cdot 26$ が位置する。平面形は円形を呈し長軸7.6m, 短軸5.2m以上,残存深0.2mを測る。面積は28.2㎡で,当該期の竪穴住居址の中では比較的規模の大きいほうである。主柱穴は確実なもので5本確認したが,推定で6柱穴になるものと考えられる。炉址は中央部で確認された。また,周囲には壁溝がめぐる。

出土遺物としては,弥生時代後期後半の土器及び石器等が検出された。出土した土器の内訳は,壺2・鉢9・高杯2・甕6・ミニチュア鉢1・土製丸玉1等が見出せた。これらの中より26点抽出した。

(第103図 8~16)は床面直上の土器である。(8~11)は甕である。(8)は大形甕の上半部である。 体部外面にタタキが顕著に残る。(9)は丸底気味の甕で底部中央部に穿孔が認められる。(11)は二重 口縁の甕である。(12)は小形の鉢である。底部は欠損している。体部は内湾気味に頸部に続き,口縁部 は外上方に開く。(13~15)は鉢である。(16)は高杯の脚部片である。

(第103図17~25, 第104図1~8)は上位の堆積層中より検出された土器である。(17・18)は壺の口縁部である。ハの字状に広がり端部を上下に肥厚させている。(19~24)は甕である。(19)は底部が欠落した甕である。体部は内傾気味に口縁部に続き口縁は直立気味に延びる。体部外面のタタキは,口縁部まで残る。(20~22)の甕は口縁部が外上方に広がる甕である。(21)は土師器の布留式に類似する。

(23・24) は甕の底部である。

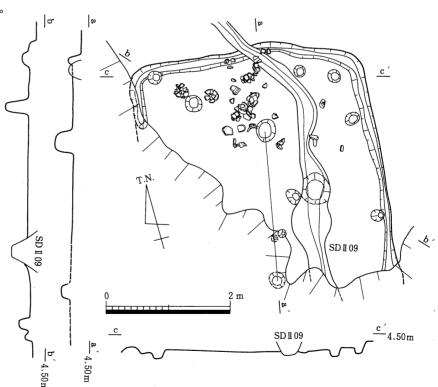
(25) は底部を欠く鉢である。

(第104図 1 ~ 5) は高坏の 脚部片である。(6) は脚台 付き鉢の脚部である。(7) は平底のミニチュアの鉢であて る。(8) は土製の丸玉である。中央部に穿孔が認められる。 (西村)

S.H. II 24 (第50·104図

図版43·44 SH8615)

G19区で検出した竪穴住居 址である。SDIの9・SXN 01に切られ,約半分失われて いる。西には隣接してSHI 23・25・26が位置する。平面 形は隅丸長方形状を呈し,長 軸3.8m以上,短軸3.7m以 上,残存深0.2mを測る。主



第50図 SHII 24 平·断面図

軸の方位はN2°Eを測る。面積は19.0㎡で、当該期の長方形状の竪穴住居址の中では平均的な規模である。主柱穴は2柱穴である。周囲には壁溝がめぐる。

出土遺物としては, 弥生時代後期後半の土器及び石器が出土した。出土した土器の内訳は, 壺5・鉢6・高杯2・甕10等である。全点図化した。

(第104図 $9\sim20$)は床面直上の土器である。($9\sim11$)は壺である。($9\cdot10$)は広口壺の口縁部である。口唇部をわずかに肥厚させ平坦に仕上げている。(10)の頸部には張付突帯めぐらす。(11)は底部である。($13\sim15$)は甕である。(13)は甕の上半部,($14\cdot15$)は下半部である。($16\sim18$)は鉢である。 3 点共に平底で,口縁部が外上方に開くものと,納まるものと二種類ある。($19\sim20$)は高杯片である。(19)は杯部の口縁部(20)は脚部片である。

(第104図21~31) は上位の堆積層中より検出された土器である。(21・22) は壺の上半部と底部である。(21) は直口壺に属する。(23~29) は甕である。(23~26) は上半部他は底部及び下半部である。底部は平底で,体部は丸味を帯,口縁部は「く」の字状に外反し端部を平坦に整形している。(31) は把手状の形態を呈する。器種不明の土製品である。 (西村)

SH II 25 (第51·105~116図 図版45·46 SH8611)

田19区で、S田 II 26と重複した形で検出した竪穴住居址である。S田 II 26・SD II 10と切り合い関係にあり、S田 II 25は両者を切り込んでいる。また、北には隣接してS田 II 23・24が位置する。上半部は削平を受けているためかなり残りが悪い。上面からはこの住居址廃絶後に多量の弥生時代後期後半の土器を廃棄されていた。またそれらを切り込む形で、室町期の柱穴が多数検出された。平面形は円形を呈し長軸6.5m、短軸6.4m、残存深0.3m、面積は32.0㎡で、当該期の竪穴住居址の中では比較的規模の大きいほうである。主柱穴は6柱穴検出できた。炉址は住居址中央部で検出した。ベット状遺構に関しては、平面で明瞭に摑めなかったが、幅約1.5m位のが存在していた可能性が高い。また、約半周する形で壁溝を検出した。なお、床面直上には、炭化物及び焼土片を含む薄い堆積層が、広く堆積していた。そのためこの住居は焼失家屋である可能性が高い。

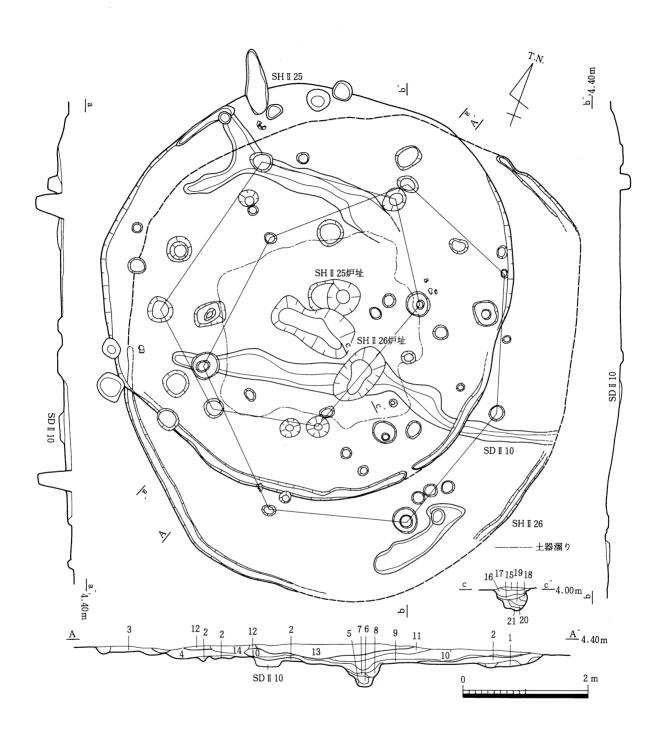
SHI25堆積層上位には先に触れたように、多量の弥生時代後期後半の土器を廃棄されていた。またそれらの土器に混ざって人頭大の礫も数点検出された。その数量はコンテナにして約40箱を数える。

SHⅡ25からは、多量の弥生時代後期後半の土器及び少量の石器が出土した。その大半は、上位の土器溜りの資料である。これらの資料は、弥生時代後期末より古墳時代前期初頭の範囲内で理解できるものである。最大図化できる資料を229点抽出した。

(第105図 $1\sim18$,第106図 $1\sim13$)は床面直上の土器である。(1)は壺の上半部($2\sim18$)は甕である。甕には,体部が球形気味に張り口縁部がくの字状に外反するもの($2\sim7$),肩部が直線気味に頸部に続き口縁部が短くほぼ水平に開くもの($8\cdot9$)がある。後者は所謂雲母土器の甕である。前者の外面にはタタキが顕著に残す例がある。($11\sim18$)は甕の下半部及び底部である。底部には平底になるものと,わずかに突出する物とに分けられる。(10)は100)は101 は101 は外である。(101 は大形の鉢で他は小形のものである。(101 は脚台付きの鉢である。(第106図 101 は 高杯である。(111 は所謂雲母土器の高杯である。(113 は底部を欠く小形丸底壺である。

(第106図14~24,第107~114図,第115図 1 ~15)は上位の土器溜りより出土した土器である。

(第106図14~24, 第107図) は壺である。(20~24) は二重口縁の壺の口縁部である。口縁外面には, 波状紋・鋸歯紋・竹菅紋等の施紋が認められる。(第108~112図) は甕である。底部は大多数のものは平



- 茶黄褐色粘質土 (SH II 26貼り床)
- 暗褐色土(茶色ブロック混入粘質, SH II 26貼り床)
- 黄茶灰色粘砂質土 (SH II 26貼り床)
- 4. 暗灰褐色土 (SH II 26埋土)
- 灰白色砂(SH II 25埋土)

- 5. 於日已的《SRII 25年上) 6. 暗灰黑色粘質土(炭混入,SHII 25埋土) 7. 茶(赤)褐色土(焼土,SHII 25埋土) 8. 乳灰茶色砂質土(SHII 25埋土) 9. 暗黑色炭混入土(炭・焼土混入,SHII 25埋土)
- 10. 乳暗灰褐色土 (SH II 25埋土) 11. 暗黒褐色土 (13よりややうすい, SH II 25埋土)
- 12. 暗灰褐色土 (SH II 25埋土)
- 13.
- 14.
- 照例をご上(いましいエニン 黒褐色土(土器溜り) 乳黒灰色土(中世堆積層) 茶黒褐色土(炭及び焼土を含む) 15.
- 16.
- 暗茶灰色粘質土(炭を含む) 暗灰褐色粘質土(炭を含む) 17.
- 18. 灰色砂
- 19. 暗灰色粘土混じり砂(炭を含む) 20. 黄灰色粘土混じり砂

第51図 SHII 25·26 平·断面図

底であるが、少量尖底気味のもの及び丸底のものが見出せる。また、少数(第112図31~34)の底部には穿孔して、甑として使用しているものがある。体部外面は、タタキ及ハケ調整を施しているものが大多数を占めるが、中でも(第108図3)のタタキはかなり幅が細い。また、(第110図19・20)等の体部内面調整には指頭痕が顕著に認められる。口縁部は、「く」字状に外反し、端部が平坦に仕上げるものが大多数を占めが、少量外湾気味に外反しするもの、直立気味に短く立ち上がるもの等の種類がある。

(第113・114図)は鉢である。(第113図)は大形,(第114図)は小形のものを掲載している。底部及び口縁部の形状は概ね甕の状況に符合する。(第114図27)は台付きの鉢である。

(第115図 $1 \sim 3$)は高杯の脚部である。(第115図 $4 \sim 12$)は脚台付製塩土器の下半部である。外面の調整にタタキを施しているものが見出せる。(第115図 $13 \sim 15$)はミニチュアの鉢・壺などである。

(第115図16~28,第116図 1~12)は土層観察用の畦及び剣出地点の不明瞭な資料をまとめた。なお,これらの内大部分は,上位の土器溜りに含まれる可能性が高い。 (西村)

SH II 26 (第51·116図 図版46 SH8610)

H19区で、SH II 25とほぼ重複し切られる形で検出した竪穴住居址である。SH II 25・SD II 10・S X IV 01と切り合い関係にある。切り合い関係を整理すれば、SD II 10との関係はSH II 26が切り込んでいる。SH II 25・S X IV 01との関係はSH II 26が切られている。また、北には隣接してSH II 23・24が位置する。上半部は削平を受けているためかなり残りが悪い。平面形は円形を呈し長軸7.5m,短軸7.1m,残存深0.30m,面積は14.4㎡で、当該期の竪穴住居址の中では比較的規模の大きいほうである。主柱穴は7柱穴検出できた。炉址は住居址中央部で検出した。また、途切れ途切れであるが壁溝を検出した。おそらくほぼ全周をめぐっていたものと考えられる。なお、部分的に張り床が確認された。

SHⅡ26からは, 弥生時代後期後半の土器が少量出土した。最大図化できる資料を5点抽出した。

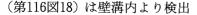
(第116図13・14) は甕の口縁部及び底部片である。(第116図15・16) は鉢である。(第116図17) はミニチュアの甕である。

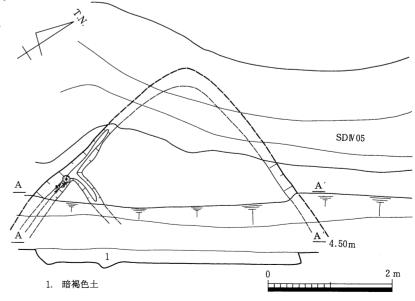
SH **II 27** (第52·116図 SH8614)

G19区で検出した竪穴住居址である。SDN05と近現代溝に切り込まれていて、半分以上残っていな

い。西には隣接してSHI23・24・25・26等の竪穴住居址が位置する。 平面形は不明瞭であるが,方形ないし隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸3.0m以上,短軸1.9m以上,残存深0.25m,方位N15°Wを測る。あまりにも残りが悪く,住居内の構造については不明な点が多いが,わずかに壁溝及び間仕切り溝を確認した。

SHI27からは,弥生時代後期後半の土器が少量出土した。最大図化できる資料を2点抽出した。





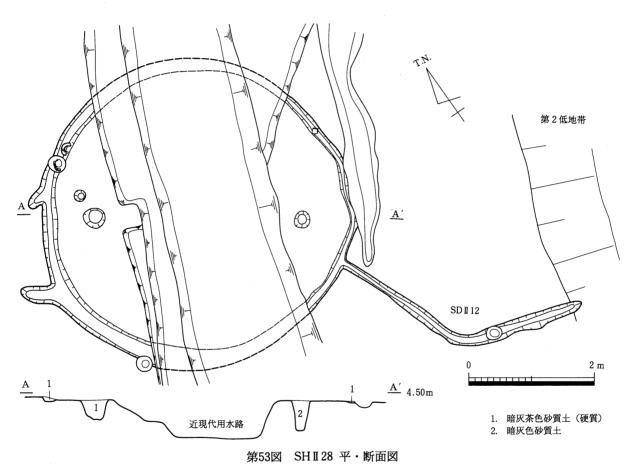
第52図 SH II 27 平·断面図

された器台である。上半部と下半部に分かれ、ほぼ同一固体になるものと考えられる。 (西村)

SH II 28 (第53·116図 図版47 SH8612)

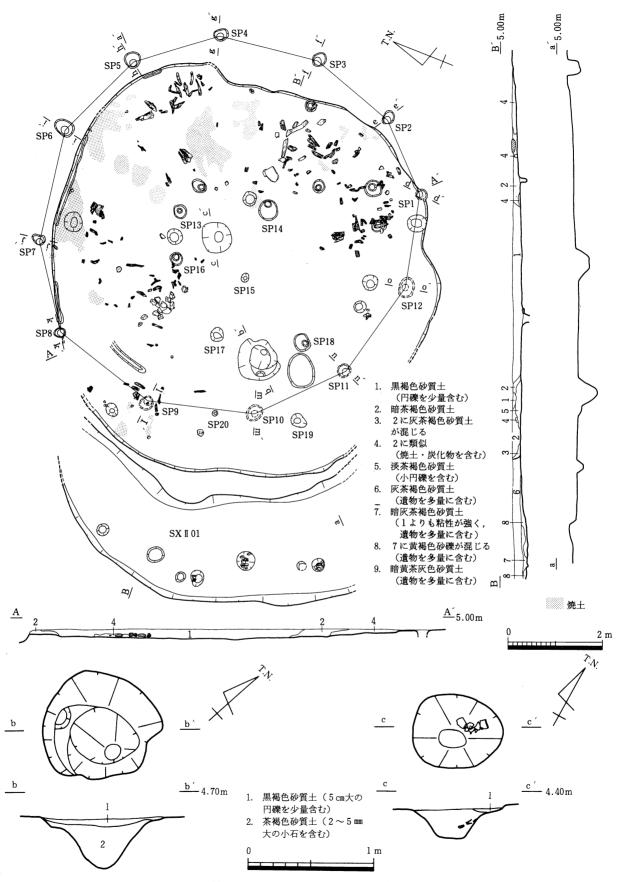
H・I 18区で検出した竪穴住居址である。近現代溝の掘り込みと,後世の削平のため壁溝を残すのみである。平面形は円形を呈し,長軸5.0m,短軸5.0mを測る。あまりにも残りが悪く,住居内の構造については不明な点が多いが,壁溝及びそれから延びる排水溝(SDI12)を確認した。なお,排水溝は第 2 低地帯に注いでいる。

SHⅡ28からは、弥生時代後期後半の土器が少量出土した。最大図化できる資料を3点抽出した。 (第116図19・20) は壁溝内より検出された壺の口縁部である。(第116図21) は把手状の土製品である。 (西村)

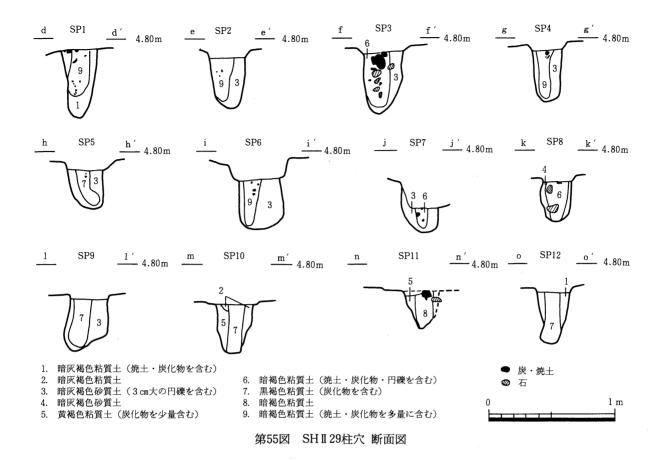


SH II 29 (第54·55·117図 図版95·96 SH8620)

E・F17区で検出した竪穴住居址である。上半部は削平を受けているためかなり残りが悪く,2棟の竪穴住居が東西で重複して切り合っているものと思われるが,明瞭な切り合い関係は摑めなかった。そのためまとめて報告することにした。平面形は両者とも不整円形を呈する。東側の竪穴住居の推定規模は,長軸約8.3m,短軸約8.0m,残存深0.15m,面積は約52.5㎡,西側の竪穴住居の推定規模は 長軸約8.1m,短軸約7.2m,残存深0.22m,面積は約45.3㎡を測る。いずれも当該期の竪穴住居址の中では比較的規模の大きいほうである。炉址は東西2個所で検出した。また,壁溝は東側の竪穴住居に伴うもので,途切れ途切れで検出した。なお,床面直上には,炭化材及び焼土片等が,広く分布していた。そのため2つの住居址の内いずれかは焼失家屋である。



第54図 SH II 29, SX II 01 平・断面図



なお,東側の竪穴住居址には約1 m間隔で外周をめぐる12の支柱穴が確認された。これらの柱穴は,いずれも垂直に穿たれており,全ての柱穴に柱痕が検出された。またこれらの柱穴中には焼土片及び炭化物を含んでおり,先に触れた焼失家屋との関係で興味深い。

SHⅡ29からは、弥生時代後期末の土器が出土した。これらの土器の中の、甕及び鉢の底部に丸底のものが見出せる。また、甕の中には器壁が薄く細いタタキを外面に施したものが見出せる。これらの点よりSHⅡ29出土土器は、弥生時代後期末より古墳時代前期初頭の範囲内で理解できる。最大図化できる資料を33点抽出した。

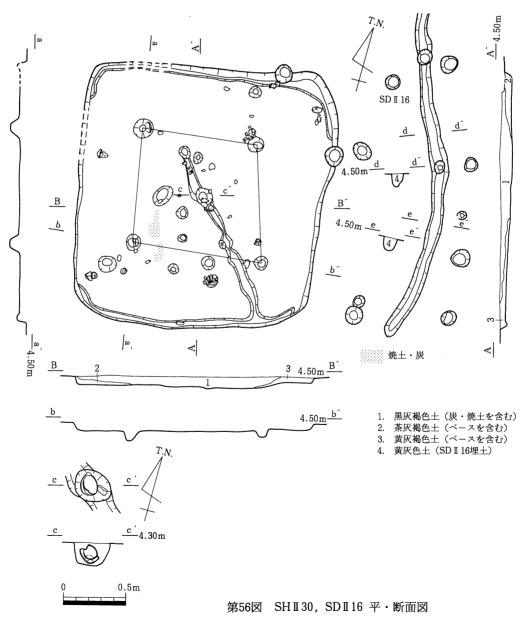
(第117図 $1 \sim 20$)は床面直上の土器である。($1 \sim 5$)は壺の上半部及び口縁部である。大多数の口縁端部は肥厚しているが,一部平坦に納まるものもある。(3)の口縁端部には波状紋を施している。($6 \sim 9$)は甕の上半部及び口縁部である。($6 \cdot 7$)の甕は器壁が薄く,外面には細いタタキを施していて、特徴的である。(10)は10)は10)は10 によった。である。(10)は10 にまった。底部の形状で,平底・丸底・底部が突出気味のもの等に分けられる。(10)は鉢である。底部の形状で,平底・丸底・台付きのもの等に分けられる。(10)は10 に指頭痕を残している。

(第117図21~33) は床面より上位の堆積層中より検出された土器である。(21) は端部を肥厚させた,壺の口縁部片である。(22) は甕の口縁部及び頸部である。端部を肥厚させ一条の凹線紋を施している。(23) は高杯の脚部である。(25) は脚台付製塩土器の脚台部である。(26) は土製の紡錘車片である。

(第117図27~33) は出土地点が不明瞭な資料である。(27) は壺の口縁部である。端部を肥厚させその外面に波状紋を施している。(28・32) は器台の口縁部ないし脚部である。(29~31) は甕上半部及び

SHⅡ30 (第56·118図 図版97 SH8623)

G17区,第2 微高地の北端部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。微高地の西部を回る小規模な溝 S D II 39に西北部を切られる。ほぼ長軸4.2m,短軸3.9mの正方形に近い平面形を呈し,深さ約0.2m,主軸方位はN10°Wを測る。隅丸方形の竪穴住居としては平均的な規模である。内部構造としては,床面に焼土化した部分は認められず炉跡は確認できなかった。北辺と南辺に壁溝が回る。南辺の壁溝へ中央部から延びる溝がつながる。主柱穴は4穴と考えられる。埋土中には炭化物と焼土の混在層があるが,炭化材や壁面の焼土化は認められなかったことから焼失家屋と断定するまでには至らない。また本竪穴住居の東側には,周溝的な機能を有すると考えられるSD II 16が位置する。本竪穴住居の主軸方位は,第1 微高地の隅丸方形の竪穴住居群の方位とほぼ一致し,真北に近く,第2 微高地の隅丸方形の竪穴住居群とは明確に異なる方位を示す点は注目される。遺物の出土状況としては中央部のピットから鉢が据えられた状況で2点重なって出土した。



(第118図 $1\sim20$)は床面直上出土の土器である。($1\sim2$)は壺で,(1)は口縁端部に鋸歯文が廻る。($3\sim10$)は甕で,(3)は外面に細かい叩きが施され口縁端部は上方に摘み上げられ,内面はヘラ削りが頸部近くまで及ぶ。($9\sim10$)は底部でいずれも叩きののちつぶした底部である。($12\sim18$)は鉢である。($12\sim16$)は,(15)を除き外面に叩きが施され,いずれも器高の割りに口径が大きい。(17)は口縁部内面は刷毛調整で,甕状のものである。($19\cdot20$)は製塩土器で(19)は脚部が明瞭ではない。

(藤好)

SH II 31 (第57·118·119図 図版98 SH8619)

G・H17区,第2 微高地の西部で検出した竪穴住居で,西部をSHI32に,またSDI39切られる。平面形は,ほぼ円形で北東部に張り出しを持つ。長軸6.7m,短軸6.3m,深さ0.2m,面積34.9㎡を測る。主柱穴は4穴と考えられ,床の中央部でファイヤーピット状の落ち込みは検出したもの,炉跡と断定するまでには至らなかった。他に北東部の張り出しを中心として壁沿いに壁溝が部分的に回る。また焼失家屋と考えられ,床面からは炭化材の放射状に検出された。張り出しの方向はほぼ西部の低地帯の方向と一致し,等高線と平行するように位置する。こうした状況は第1 微高地の竪穴住居の張り出しと共通する。また張り出しと床面との比高差はない。

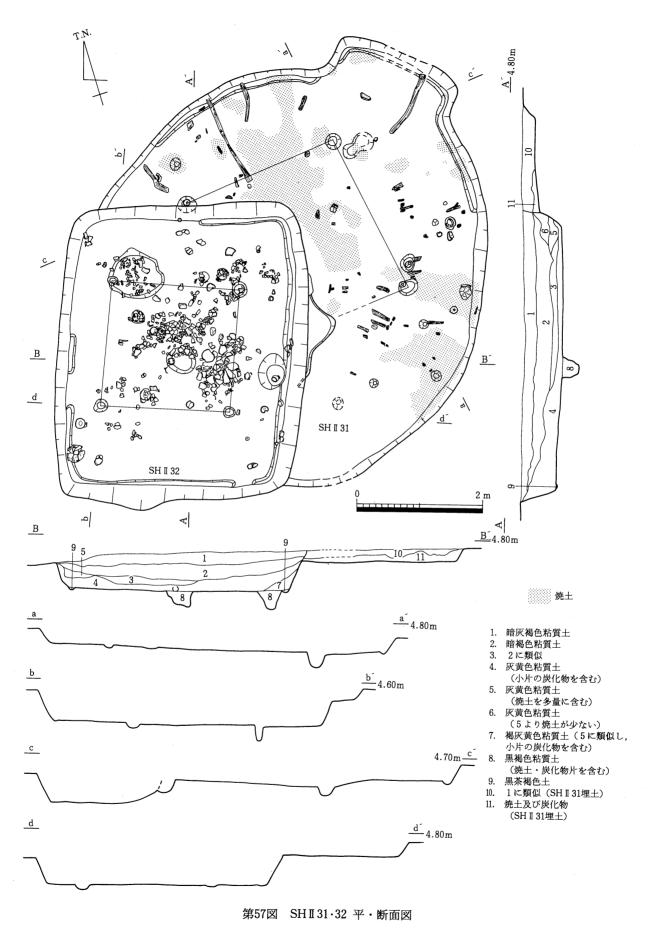
(第118図21~26,第119図 1~6)は床面直上出土の土器である。(第118図21)は壺で直立する頸部を持つ。(22~26)は甕で,外面は叩きのち刷毛で,底部は不安定な平底である。(21)は薄い器壁を持ち頸部が直立する壺である。(22)は体部内面上半部に刷毛目が残る。(25)はミニチュアの甕であろう。(第119図 1~6)は鉢で,いずれも不安定な平底を持つ。 (藤好)

SH II 32 (第57·119~122図 図版99·100 SH8622)

G・H17区,SHI31を切る状況で検出した隅丸長方形の竪穴住居で,長軸4.7m,短軸4.0m,深さ 0.68mを,主軸方位はN21°Eを測る。面積は約14.4㎡で隅丸方形の竪穴住居の中では平均的な規模である。炉跡は検出できず,主柱穴は4穴と考えられる。北西隅を除き,壁溝を検出した。残存状況は,先行するSHI31よりはるかに深く床面を掘り込んでおり,良好である。この竪穴住居の方位は,SHI30とは異なっており,むしろ南に位置するSHI33との関連性が高いようである。この遺物の出土量は比較的多い。また東側に隣接して走るSDII39とは近接しすぎており,切り合い関係こそないものの,同時併存の可能性は低い。

(第119図 $7 \sim 18$,第120・121図)は床面直上出土の土器である。($7 \sim 9$)は壺で,(8)は大きく外反する口縁を持ち,(8)は無頸壺で体部は球形を呈し,非常に薄い器壁を持ち,内面は指頭痕顕著である。(9)は内外面をヘラ磨きした底部である。($10 \sim 18$)は甕で,いずれも丸底を呈する比較的丁寧な作りである。($10 \sim 12$)は胎土は異なるものの雲母土器の成形と同じで,口縁部内面を板状の工具でナデを施し,内面の体部上半は指頭痕顕著。体部下半はヘラ削りを施し,体部外面は刷毛で全面を調整する。($16 \sim 18$) は外面は叩きのち刷毛,内面下半部はヘラ削りを施す。(18) は内面上半部に刷毛目が残る。

(第120図 $1\sim14$)も甕で($1\cdot2$)は口縁部の小片である。($3\sim8$)は外面は叩きのち刷毛,($5\cdot7\cdot8$)は内面刷毛,($3\cdot4$)は内面上半部に刷毛目が残り,下半部はヘラ削り。($9\sim14$)は甕の口縁部の破片。($15\sim21$)は小型の甕類で,(17)は小型の壺とも考えられる特徴的な器形を呈する丁寧な作りの土器である。(18)は概ね直立する短い口縁を持つ。($22\sim24$)は甕の底部と考えらるが,やや尖り気味の丸底を呈する。(第121図 $1\sim15$)は鉢で底部は丸底で,口径に対して器高が低いものが多い。また($7\sim9\cdot11\cdot12$)は外面の指頭痕が顕著な特徴的な小型の鉢である。($15\sim24$)は高杯で,($15\sim24$)は



-93-

19) は杯部上半が発達し、脚部が残るものでは屈曲が明確なものである。(22~24)は脚部である。 (25) は台付の鉢で、山陰系の低脚杯を模倣して作った可能性が高い。作りはやや雑で胎土的にも違和 感のないものである。(26・27)は製塩土器である。(28)は円形の紡錘車である。

(第122図 $1\sim6$)は中位出土の土器である。(1)は口縁部を上方拡張した壺で口縁部外面には波状文がつく。(2)は器壁の薄い甕,($3\sim5$)は鉢。(6)は脚付の鉢であろう。

(第122図 $7 \sim 15$)は上位出土の土器である。(7)は二重口縁の壺で,内外面は剝落し調整は不明である。($8 \sim 10$)は甕で,(8)は上方に口縁部を拡張した吉備系のものであろう。(9)は口縁端部をやや摘み上げ気味にし,内面はヘラ削りを頸部付近まで施した薄い作りの甕である。(11)は高杯で床直のものと差はない。($12 \cdot 13$)は小型器台で(12)は内外面刷毛,(13)はナデ調整のものである。(15)は製塩土器である。

(第122図16~20) はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なものである。(20)は甑で、底部には 3 穴が認められるが貫通しているものは 1 穴だけである。

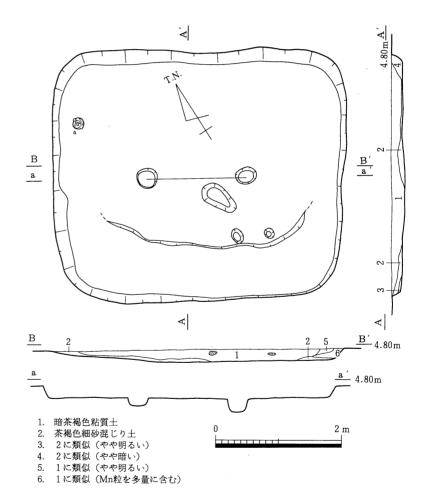
本竪穴住居から出土した土器には、小型の坩(第120図17)・高杯(第121図16・17等)・脚台付の鉢

(第121図25)・二重口縁壺(第122図7)・上方拡張の顕著な甕(第122図8)・小型器台(第122図12・13)など,外部からの影響下で出現したと考えられるものが多く認められる。こうした状況は同時期と考えられるSHI33にも共通して認められる様相である。またいわゆる雲母土器の甕の成形技法を取るものも形態や胎土が従来のものとは異なる点が注目される。

(藤好)

SH II 33 (第58·122図 図 版100 SH8624)

H16区で検出した隅丸長方形の竪穴住居で、西に接するようにSDⅢ39が走る。規模は、長軸4.6m、短軸4.0m、深さ0.22mを、主軸方位はN58°Wを測る。面積は15.9㎡で、隅丸方形の住居としては平均的なもので



第58図 SHⅡ33 平·断面図

ある。内部構造としては中央部のピット中から炭化物と焼土塊を検出しており炉跡であると考えられるが、深さは10cm 程度しかなく、SHI34等他の多くの明確な深いファイヤーピットとは異なる。主柱穴は長軸に平行して検出された2穴と考えられる。また床の南半は徐々に浅くなっており、ベッド状遺

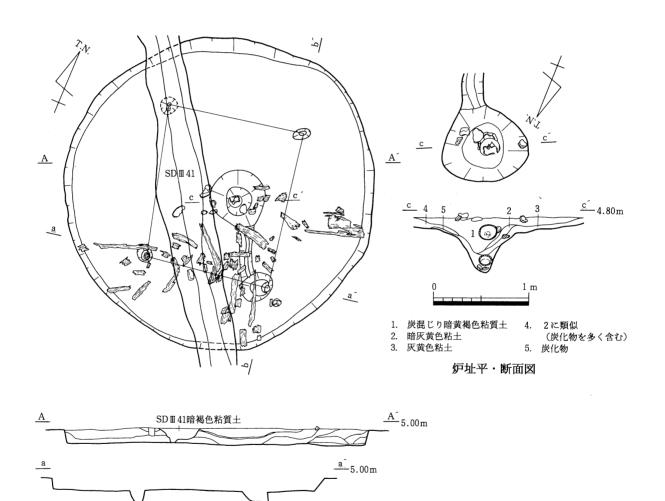
構が在った可能性も考えられる。

(第122図21・22) は床面直上出土の土器である。(21) は外面が叩きのち刷毛,内面はヘラ削りを施した甕。(22) は把手付甑で,底部は円形の透かし穴を5穴前後持つ。

(第122図23) は上位出土のもので、外反しながら大きくのびる杯部を持つ高杯である。 (藤好)

SH II 34 (第59·123図 図版101 SH8621)

田15区で検出した竪穴住居で,第 2 微高地の第 $\mathbb I$ 期の竪穴住居群の中では最も西に位置する。 $\mathbf SD \, \mathbb I$ 41に切られる。平面形は円形を呈し,長軸4.9 $\mathbf m$ ・短軸4.6 $\mathbf m$ ・深さ0.26 $\mathbf m$ を,主軸方位は $\mathbf N$ 15° $\mathbf W$ を測る。面積は17.3 $\mathbf m$ で,当該期の円形の竪穴住居の中では小型のものである。内部構造としては中央部にファイヤーピットを持つ炉跡を有し,ファイヤーピットからは溝が延びる。主柱穴は 4 穴で,その配置からすれば本竪穴住居は,真北方向の方向性を持つ。南半部を中心に炭化材が集中し,焼失家屋と考え



第59図 SHII 34 平・断面図

<u>b</u>5.00m

2 m

られる。

(第123図 $1 \sim 10$)は床面直上出土の土器である。(1)はミニチュアの甕で,内面は刷毛目が顕著。($2 \cdot 3$)は壺。(4)は外面叩きのち刷毛調整の甕。($5 \sim 7$)は鉢で平底を呈する。($8 \cdot 9$)は高杯の脚。(10)はミニチュア土器である。(11)は上位出土の甕である。($12 \sim 16$)はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なもので,(12)は口縁端部を上方に拡張した壺で外面に竹管文を持つ。(13)は内面に接合痕が顕著なやや雑な作りの壺と考えられる。($14 \cdot 15$)は甕で,(14)は外面の叩き痕が顕著である。(16)は薄い作りのミニチュアの甕である。

3.ピット

SP II 01 (第124図)

F16区で検出された柱穴である。平面形は円形を呈し、径約0.4m,深さ0.10mを測る。

SPⅡ01の出土遺物として弥生時代後期後半の土器1点を抽出した。

(第124図1)は二重口縁の高杯の杯部である。体部は直線状に外上方に延びる。口縁部は体部より屈曲し外湾気味に端部に至る。端部は尖り気味に丸く仕上げる。口縁部内面には複数の稜が認められる。 体部内面にはヘラミガキが顕著である。この土器は所謂雲母土器の範疇で捉えられる。 (西村)

4. 土 坑

SKII02 (第124·573図)

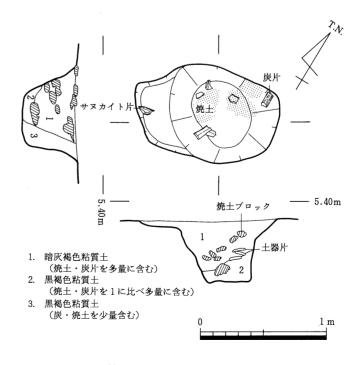
G19区で検出した。溝SDN05に切られ、径2.0mを残し深さ1.10mを測る土坑である。断面形はカマボコ形を呈する。埋土は単層で少量の弥生後期の土器小片を出土した。

(第124図1) は雲母土器高杯で円盤充塡法で脚と接続する。,中位で鋭く屈曲して上半部は外反して開く。口縁部で更に外反を強め内面に2条の沈線を持つ。内面下半は断続的な横へラ磨き。(2)は小形

の鉢、やや浅目のボール状を呈し、円盤状 に薄く突出する明確な平底を持つ。内外面 ナデ調整と指押さえ。 (大久保)

S K II 03

G20区で検出した、長軸約3.0m,短軸約1.7m,深さ約0.08mを測る土坑で、長軸はSHI20等の隅丸方形の竪穴住居と共通した方位を呈する。内部からはミニチュアの壺の体部が出土している。形状からすれば土坑墓の可能性が高い。第I期の遺構で墓もしくは墓の可能性が高い遺構は、本遺構の他には第2微高地のSTI01の小児用の壺棺がある程度であり、基本的には居住空間と墓域は明確に区別されていた可能性が高い。 (藤好)



第60図 SKⅡ07 平·断面図

SKII07 (第124図 SK8702)

G7区で検出した。平面形不整楕円形,断面形台形状を呈する土坑で円形周溝SD II 22内のほぼ中心部に位置し,これとの時期差は見出し難い。長軸1.1m,短軸0.8m,深さ0.40mを測る。埋土は2層に別れ,多量の炭片および焼土ブロックを含む。特に後者は部分的に面取りが認められ炉壁状の構造物の残骸の可能性が高い。形状・内容物から見る限り竪穴住居中央穴のある種のものに酷似している。周囲の柱穴群の中からこれに伴う柱穴を抽出することは出来なかったが,円形周溝SD II 22の規模・形状が竪穴住居周溝に類似する点からも,本土坑が削平された竪穴住居残骸の可能性を捨て切れない。比較的まとまった弥生後期土器片を出土している。

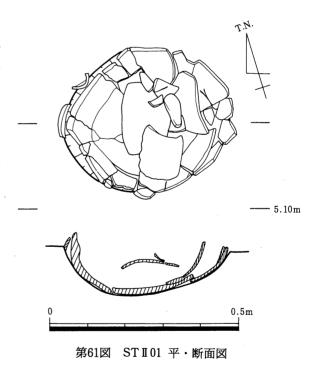
(第124図3)は小片であるが二重口縁壺口縁立上り部片の可能性が高い。外面には鋸歯文状の文様帯を施している。なお立上り部の傾きについては小片のため再考の余地がある。(4)は甕で体部は余り張らない。口縁部は緩やかに屈曲して端面を持つ。体部外面縦ハケ,内面へら削りは上端におよばない。(6~8)は小形の鉢。(6・7)ではやや突出きみの明確な平底を残す。(8)はやや不明瞭であるが外面にへら削りを施すやや新しい様相を備える。(9)は雲母土器高杯脚部片。内面へら削りで端部を緩やかに肥厚させる雲母土器高杯の特徴を良くとどめる。 (大久保)

5.墓

S T II 01 (第61 · 124図 図版102)

F14区で検出された小児用の壺棺である。上半部は削平により失われている。墓壙は壺の大きさに合わせて掘削しているため、墓壙と壺との隙間はほとんどなく、両者は密着した状態で検出された。墓壙は、長軸0.4m、短軸0.4m、深さ0.12mを測る。

(第124図10・11) は棺に使われていた大形の弥生後期後半の壺である。底部は平底で体部は丸味を持って頸部に至る。外面ヘラミガキ,内面ハケを施す。頸部は短く,口縁部は頸部よりラッパ状に外反する。口縁端部は上方にわずかに摘み上げる。頸部内面に指頭痕が認められる。壺棺の形態よりこの墓の時期は,概ね弥生時代後期後半に当る。(西村)



6.不明遺構

SXII01 (第124図)

F17区でSH II 29の西側で検出された,不定形な落ち込み状の遺構である。SH II 29とは検出面が異なり,SH II 29の西側のベース面になっている。灰茶褐色砂質土を除去した下層より検出できた。幅2.1m,深さ0.1mを測る。平面形はSH II 29の外周に沿う形で帯状の形態を呈し,断面は浅いレンズ状の形態を呈する。埋土は2層に分けられ,埋土中からは弥生時代後期後半の多量の土器及び石器が検出された。

SXI01の出土遺物中6点抽出した。(第124図12) は壺の肩部である。体部外面には縦方向のヘラミ

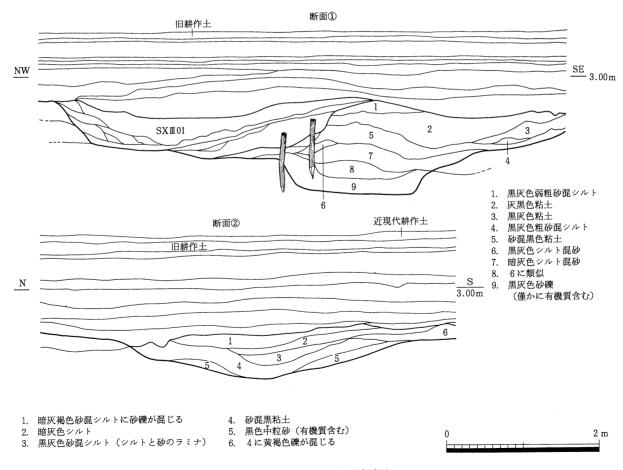
ガキ,内面には指頭痕が顕著に認められる。(13~15) は甕である。底部は平底と,丸底のものとがある。(13) は甕の上半部である。体部は丸味を持って口頸部に続き,口頸部はくの字状に外反し,端部は丸い。体部外面にタタキ,内面下半にヘラケズリ上半部に板ナデが認められる。(16) は鉢である。底部は小さな平底で体部は丸味を持って口縁端部に至る。外面下半部には指頭痕が認められる。出土遺物より,この遺構は概ね弥生時代後期末前後であろう。

7.溝

SD II 01 (第62·125~135図)

第1微高地の北端部、G29区から I 30区にかけて、南東から北西方向の流路を持つ溝である。微高地の北縁辺を等高線と平行して走り、西部では溝の形状がやや不明瞭となる。上位には 8 世紀前後の遺物を含むグライ化したシルト層がのる。検出長約40m、幅約3.3m、深さ約0.6mを測る。多量の弥生後期後半代以降の II 期の遺物が出土した。

(第125・126図)は壺である。(第125図 $1 \sim 6$)は口縁部外面に鋸歯文がつく。($1 \sim 5$)は口縁部端面が上下に拡張するもので,(6)は拡張の程度が弱い。もっとも残りの良い(3)は小型の壺で短く直立する頸部を持つ。(4)は鋸歯文が 2 段に施される。($7 \sim 9$)は口縁端部が直立気味に上方に拡張するものである。頸部も直立気味で,(9)の口縁部外面には竹管文がつく。($10 \sim 18$)は口縁端部の拡張が弱い壺で,(10)は内外面刷毛調整で,頸部から肩部内面には指頭痕が顕著に残り,頸部は直立気味で



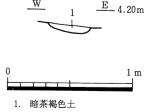
第62図 SD II 01 平·断面図

ある。(15)はやや大型の壺の口縁部から頸部で頸部外面には刺突文が施される。(17)はやや内傾する頸部を持つ。(18~21)は雲母土器の壺で,(18)は短く横方向に開く口縁部を持つ。(19)は頸部下端部外面に刺突文を持ち,内面は指頭痕顕著なものである。(第126図1~4)は頸部の破片で,外面に突帯を持つ。(8~13)は底部で,いずれも平底を呈する。(14)はやや雑な作りの小型の壺の体部下半である。(15)は壺の上部に小型の鉢を乗せたものを,形骸化したもので,鉢に底部はなく,壺の口縁部内面に直接体部下半がつながる。口縁端部外面には,櫛状の工具による擬凹線が廻る。

(第127・128・129・130図)は甕である。(第127図1~9)は外反気味に開く口縁を持ち,外面の残 りの良いものは刷毛調整,内面下半部はヘラ削りを施す。(10・11) は外面は叩きが顕著な甕で.(10) の内面にはヘラ削りが認められる。(14・15)は口縁部を上方に拡張する甕で、体部が残る(14)の内面 はヘラ削りが施される。(第128図 $1\sim4$)はほぼ完形の甕で,($1\cdot3$)は外面叩きのち刷毛内面には体 部中央から下半にかけてヘラ削りが認められる,(4)は外面刷毛のちナデ,内面はヘラ削り。(第129図 13~17) は非常に小型の甕で, 完形の(16) は平底, (17) はわずかに平底が残り, 特徴的な形態のもの で、外面は剝落、内面はナデである。(第130図) は典型的な雲母土器の甕で、精良な胎土を用いた丁寧 な作りのものである。外面は概ね上半部刷毛,下半部刷毛のちへラ磨きを施す。 $(1 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 7)$ の外 面には叩きの痕跡が認められる。内面は上半部指頭痕顕著,下半部へラ削りを施す。底部の残る(7) は明確な平底を呈する。(第131図1~5)は体部下半から底部にかけてのみ残る。(5)の外面には木の 葉の圧痕が残る。(9)は把手付の無頸甕。(10)は口縁部に穿孔が認められる。(12・13)は甑である。 (第132図,第133図 1 ~14)は鉢である。(第132図 1 ~ 4)は「く」の字状に外反する口縁部を持つ甕 で外面は刷毛調整である。(第133図 6 ・ 7 ・10) の底部外面には木の葉の圧痕が残る。(12~13) は脚台 がつく。(14) は淡い白褐色の内外面をヘラ磨きを施した丁寧な作りの鉢で、搬入品と考えられる。(第 |133図15~25,第134図1~14)は高杯である。(第133図15~24)は典型的な雲母土器の高杯で口縁部内 面に工具による凹線状の条痕がつくナデが施され、残りの良い(17・18)は内外面に井桁状のヘラ磨き が施される。(19~25, 第134図1・2)は外反する口縁部を持つ高杯。(3)はやや雑な作りの杯部上半 が発達せず直線的に外方へ短く延びるものである。(4~14) は脚部。(15) は器台であろう。口縁端部 に竹管文を持つ。 $(16\sim18)$ はミニチュア土器で,(16) は製塩土器,(17) は高杯であろう。(18) は小 型丸底壺,(19)はスプーン状を呈する土製品で,両者は上層からの混入品である可能性が高い。(20~ 22) は支脚で,色調は淡白褐色で器表は指頭痕顕著。3個体を組合せて使用するもので,搬入品と考え られる。(第 $135 図 1 \sim 7$)は,上層から出土の土器群である。(1)は台付皿。($2 \cdot 3$)は蛸壺。(4・5)は須恵器の杯。(6)は須恵器高杯。(8)は平瓶等の口縁部。(9)は須恵器壺で、肩部にヘラ記 号を持つ。(7)は樽形횮である。樽形횮は,下川津遺跡で唯一の出土のもので,この時期の遺構は調査 対象地内では検出されていず、第Ⅱ期と第Ⅲ期との間の空白期の資料であ る。 (藤好)

SDII02 (第63·135図)

田26~29区にかけて、概ね南北方向の流路を持つ溝である。途中で多くの遺構と切り合う。南部では第1低地帯流路2に切られる。北部では、第1低地帯流路1が西に曲がり第1微高地を限るが、その斜面部に注ぎ込む。検出長約85m、幅約0.4m、深さ約0.1m弱を測る。断面形はを呈する。遺構の残存状況は悪く、出土遺物は微高地上ではⅡ期の土器小片が含まれる



第63図 SDII 02 断面図

程度で,図化した遺物は北端部の溝がやや不明瞭となる部位から出土した土器群で,周辺にはSDI01に連なる包含層が広がり,SDI02の埋土と識別が困難であったことから,必ずしも本溝の所属時期を示す資料とは言い難い。本溝は途中で多くの遺構と切り合い関係があるものの埋土の類似から,確実な切り合い関係を指摘できるものが少ない。SHI03を切ることは確実であるが,他のIII期の竪穴住居との切り合いは明確ではない。溝が直線的に南北方向の流路を持つ点や北部でSHII01を避けるようにわずかに西に振れることなどからすれば,SHII01と共存の可能性も十分考えられるが,一応出土遺物からIIII00所産としておく。

(第135図10~12) 壺の口縁部である。(11) は直立する頸部を持ち,(12) は内面に竹管文が残る。(13~16) は甕で,(13) の口縁部は直立気味を呈し,球形の体部を持つものであろう。(17) は高杯の脚である。

SDII04 (第135図)

G21区の東端よりF21区に向けて、東西方向に延びる溝で、東端部は第1低地帯につながる。西側の延長方向の主要部分はSDⅢ29により切られていて遺存状態は悪い。検出長約6.0m,幅約1.0m,深さ約0.4mを測る。断面形はU字形を呈する。

S D I 04からは少量の弥生後期の土器と、微量の石器が出土した。これらの出土遺物中図化出来る土器 2 点を抽出した。

(第135図18)は壺の口頸部である。頸部より外湾し端部は平坦に仕上げる。頸部外面には部分的にハケが認められる。(19)は甕の底部である。 (西村)

SDII09 (第136図 SD8611)

G19区の南端で検出された,西に振りながらも南北方向に延びる細い溝である。周辺部にはSH II 23・24・25,SD II 08・10・11等のほぼ同時期の竪穴住居址及び溝が所在する。SH II 24・SK II 01・S X IV 01等の遺構と切り合いがある。SH II 24を切り,SK II 01・S X IV 01に切られている。検出長約7.5m,幅約0.3m,深さ約0.3mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は単層で茶灰色土である。南端部をS X IV 01により切られているため明言できないが,位置関係よりSD II 11に続く可能性が高い。

SDI09の出土遺物中図化出来る土器 9 点抽出した。時期は弥生時代後期後半に当る。(第136図 1)は口頸部と底部を欠く壺の体部である。体部最大径を中央部にあり,算盤玉状の体形を呈する。外面はナデ,内面は指頭痕が認められる。この土器は所謂雲母土器の範疇で理解できる。(2~5)は甕である。(2)の肩部は直線状に延び頸部に続く。口縁部はくの字状に短く屈曲し,端部はわずかに上方に肥厚する。内面は指頭痕が顕著に認められる。なお,この土器は所謂雲母土器の範疇で理解できる。(3・4)の甕口縁部は外湾気味に短く延び,端部に至る。端部は丸く仕上げている。(6~8)は鉢である。(6・7)は大形の鉢である。(7)は二重口縁を呈する。(9)はミニチュアの壺である。 (西村)

SD ■11 (第64·136~141図 SD8614)

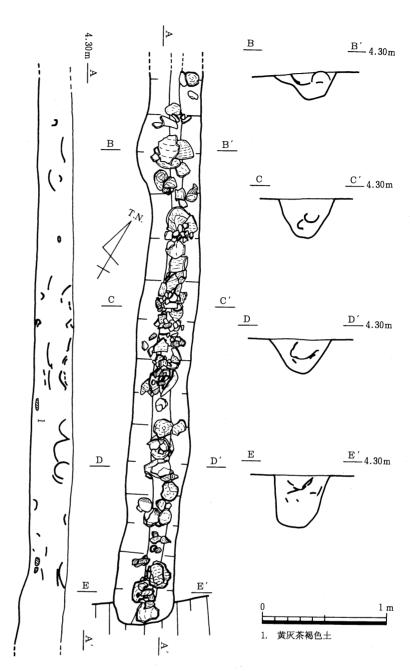
G19区の南端で検出された,南北方向に延びる溝である。南端部は第2低地帯に続く。周辺部にはS H II 23・24・25,S D II 08・09・10等のほぼ同時期の竪穴住居址及び溝が所在する。中央部は近現代水路により,北端部はS X IV 01により切られていて,遺存状態はさほどよくない。検出長約8.0 m,幅約0.5 m,深さ約0.3 mを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は単層で黄灰茶褐色土である。なお,溝からは一括投棄の形で多量の土器が出土した。

SD I 11の北方向の延長線上にはSD I 08・09・10等のほぼ同時期の3条の溝がSD I 11の北端部を

起点として放射状に配され ている。SDI112の切り 合い関係は,各溝との接点 を,室町期の遺構SXN01 により切られているため不 明であるが、位置関係より これらの溝は、本来SD I 11につながる1条の溝であ り, この溝が時間の経過に 伴い、北半部のみ流路方向 が変遷し、結果的に数条の 溝に分岐している可能性が 高い。これら3条の溝はS H Ⅱ 23・24・25等の竪穴住 居址と切り合い関係を有し ている。そのため竪穴住居 址の変遷を探る一指標にな

SD II 11からは多量の弥生時代後期後半の土器及び微量の石器が出土した。出土した土器は完形もしくはそれに準ずるもの数十点を数える。なお、これらの遺物は、その出土状況より一括投棄の遺物として間違いない資料である。

出土遺物中図化可能な土 器91点を抽出した。(第136



第64図 SDII11 平・断面図

図10~16,第137図1~8)は壺である。体部は球体化が進み、底部は丸味を帯びた平底が主体となる。口縁部は外上方に湾曲し端部を平坦に仕上げるものが主体となる。(第137図6・7)は肩部内面に指頭痕、内面下半にヘラケズリが顕著に認められ、所謂雲母土器の特徴に類似する。

(第137図 $9\sim14$,第138図,第139図 $1\sim7$)は甕である。口縁部は「く」の字状に外上方に折れ曲がるもの,頸部より外湾して端部に至るもの等数種類に別れる。口縁端部は丸く仕上げるもの,平坦に仕上げるもの,尖り気味に仕上げるもの等があるが,傾向として平坦に仕上げるものが主体を占める。底部は平底が基調になるが,丸底傾向がみられる。($18\sim20$)は所謂雲母土器の範疇で理解できる。

(第139図 8 \sim 18, 第140図 1 \sim 21)は鉢である。大形・中形・小形のものとに大まかに区分が出来る。 (第139図 8 \cdot 9 \cdot 16 \sim 18)は大形の部類に入る資料である。口縁部は外上方に折れ曲がり端部は平坦に 仕上げている。底部は平底が基調になるが, 台付きのもの(18)も,1点確認できた。な お,(8)は片口鉢に含まれる。(第139図10~ 15,第140図1~12)は中形の部類に含まれ る。口縁部は短く外上方に折れ曲がるもの (第139図10~15),体部からの連続で,整形 するもの(第140図1~12)とに別れる。底部 は平底が基調になるが,丸底傾向が可成強い。 (第140図13~21)は小形の部類に含まれる 鉢である。(20・21)は台付きの鉢である。 (18・19)はミニチュア土器に含まれる可能 性がある。

(第140図22~26) は高杯である。(22) は 高杯の杯部に当る。体部中央に屈曲し,口縁 部は外湾し端部に至る。(24~26) は脚部の 下半部である。(25・26) には透孔がみられ る。(24) は所謂雲母土器の範疇で理解できる。

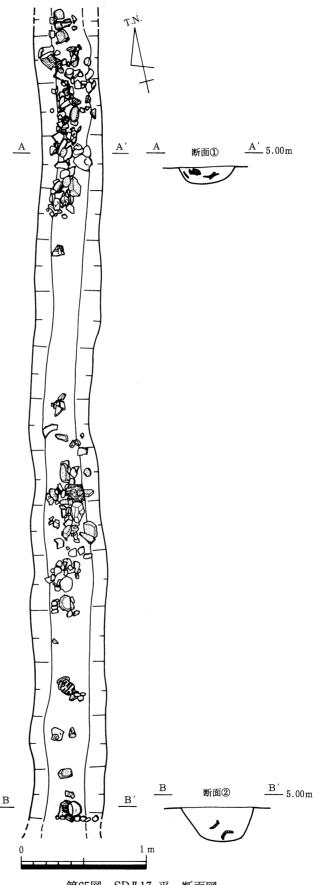
(第141図1)は算盤玉状の体部に内湾気味に外上方に開く頸部を持つ、小形丸底壺である。体部外面にはヘラミガキが顕著である。なお、この土器は所謂雲母土器の範疇で理解できる。

(第141図 $2 \sim 4$) は脚台付製塩土器である。(2) は体部片($3 \cdot 4$) は脚台部である。(2) の底部周辺は, 内湾気味に丸味を持ち体部上半部に延びる。外面にはタタキの痕跡を残す。

(第141図5・6) はミニチュアの土器である。(5) は甕ないし鉢のミニチュア(6) は製塩土器のミニチュアと考えられる。(西村)

SD II 13 (第13 · 141 · 142図)

第1 微高地の西南部, K15~17区にかけて, 南北方向の流路を持つ溝である。南部で第4 低地帯流路 1 に切られる。検出長約39 m, 幅約1.0m, 深さ約0.2mを測る。途中でSD II 15・14が分岐する。北端部ではSD I 02を切るが, 削平の結果K17区の北半部では不明瞭となる。



第65図 SDⅡ17 平·断面図

(第141図7) は壺である。口縁端部外面に鋸歯文か廻る。(8) は壺の可能性も考えられ、内面は指頭痕が顕著なものである。(10~18) は甕で、残りの良い(14) は、外面に刷毛調整を施し、内面はヘラ削りが部分的に残り、底部は不安定な平底である。(19・20) は甑で、甕の底部に穿孔したものではなく、当初から甑として製作されたと考えられる尖底気味のもので透かし穴は1穴である。(21~25) は鉢である。(21)は大型で、(23) は外面に叩き目を持ち、(25) は擬似口縁の甕を転用したものと考えられる。(第142図1・2) は雲母土器の高杯である。(1) は内外面にヘラ磨きを施す。(3) は製塩土器の脚部である。

部である。 SD II 14(第142図)

K16区でSD II 13から分岐し、K17区第 4 低地帯流路 2 に切られる。概ね南東から北西方向の流路を持つ溝である。検出長約15m,幅約1.3m,深さ約0.2mを測る。K17区では削平の結果,残存状況が悪い。(第142図 4~6)は甕で、(4)は内面へラ削り、(6)は内面に刷毛が施される。(7)は鉢と考えられ、外面はヘラ削りが施される。(8)は雲母土器の高杯の口縁部である。 (藤好)

SDⅡ16 (第56·142図 SD8615)

G17区で検出した溝で、SHI30の周溝と考えられる。概ね南北方向を向き、わずかにSHI30を囲むように湾曲する。北部は第2低地帯に注ぎ消滅する。検出長約6m,幅約0.3m,深さ約0.2mを測る。(第142図9)は壺の口縁で、短い頸部に内傾する口縁がつく。(10)は甕で、外面は叩き後刷毛、内面は指頭によるナデ調整のものである。(11・12)は製塩土器の脚部である。 (藤好)

SDⅡ17 (第65·142·143図 図版102 SD8620)

D15区で検出した、南北方向の流路を持つ溝である。検出長約12m,幅約0.5m,深さ約0.2mを測る。 断面形は逆台形を呈する明瞭な溝である。南部は第3低地帯の流路に切られる。出土遺物量は多い。ま た方向は第3低地帯の方向と近似し、第2微高地の南辺部をめぐっていた可能性が高い。

(第142図13~18)は壺である。(13・14)の口縁部外面には鋸歯文がつく。(18)は大型の壺の底部で,外面には叩き目が明瞭に残る。(19~22)は甕で,(19)の外面には叩き目が残り,(20・21)の内面は刷毛調整である。

(第143図 $1\sim5$)は鉢で,(1)は外面叩き,内面刷毛である。($2\cdot3$)は擬似口縁の鉢である。($6\sim8$)は高杯で,($6\cdot7$)は杯部の屈曲部が明瞭なものである。(10)は製塩土器,(11)はやや雑な作りで支脚である可能性が高い。 (藤好)

S D II 18

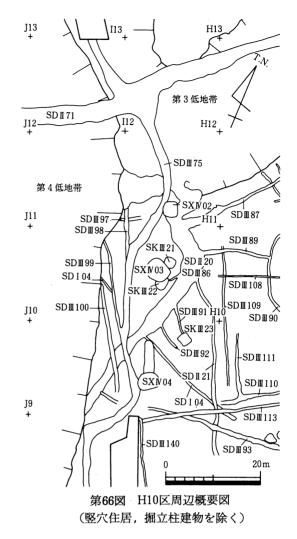
第4微高地北東隅D13区で検出した細い溝である。僅かに長約3mを検出したにすぎないが,同微高地北縁斜面に並行して流れ,第一低地帯に注ぎ込むらしい。幅約0.3m,深さ0.2mを測る。断面形は「U」字形を呈し,埋土は単層,暗褐色粘質土である。 (大久保)

SD**II20・SDII86**(第67・70・143~164図 図版150・151 SD8701・SD8718)

 存し、その再利用という形でSDⅢ86が営まれたと考えられる。

本溝は途中J4~6区にかけて第4低地帯流路6に,またJ6の北部からI8区にかけて流路1に切られる。本溝の流路はS字状に曲って走り,南部では弥生期の凹地と一致し南東から北西に向き,途中未確認であるが中央のJ6区で方向を変え,北部のI9区からH10区にかけては南西から北東に向き,北端部で西に振って第2・第3低地帯の合流部に注ぎ込む。本溝の流路には直線的な個所はあるものの,概ね第4低地帯の縁辺のラインと一致する。こうした点からすれば,本遺構は地形的な制約のもとで,等高線と大幅には矛盾することなく設けられたものであろう。

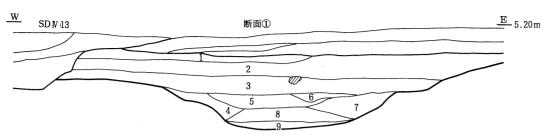
J6区で検出した個所では西側に本溝から別の溝が 西へ分岐する。分岐する個所は一段低くなっており, 分水等の機能を有していた可能性がある。またこの個 所では,溝底にピットがあり,構造は明確化はできな いものの何かの施設が設けられていた可能性がある。 本溝の西では,埋没流路の切り合いにより残存はしな いものの,第4低地帯の平安期から鎌倉期にかけての 流路1・6とほぼ一致して,第1・2期の第2・3低 地帯流路に連なる流路が存在していたと考えられる。



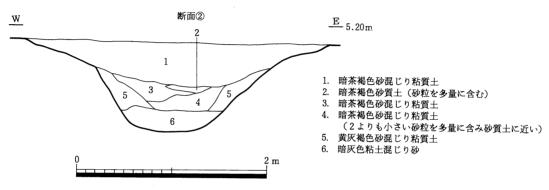
J6区で溝の分岐はかって存在した第2期もしくは第3期の流路に流れ込んだものであろう。

また本溝には,北部では $SD II 91 \sim 93$ 等の小規模な溝が流れ込む。また南部では $SD II 176 \cdot 177$ 等が部分的に平行して走り,整地層が本溝を含んでその上位を覆う。時期的な継続性は上層と下層の間には認められず,それぞれ II 期と II 期の遺構名を与えたが,遺物を明確に出土層位により区分することが困難であることから,併せて掲載することとした。

(第143×144図)下層から出土した遺物で、SDII20に相当する。(第143図12~17)は北部出土のものである。(第143図12~14)は壺である。いずれも球形の体部を持ち、(12)は細く直立する頸部を有すると考えられる。(13)は外面下半部を粗い刷毛、上半部を細かい刷毛調整した後、疎らなへラ磨きが施される。内面は指頭痕顕著で部分的にヘラ削りが残る。(14)は外面にわずかに叩き目が残る。(15~17)は甕で、(16)は外面叩き後刷毛、内面は叩き原体を使用したナデ状の調整の後、縦方向にナデを施す。(18)は中央部出土の甕である。外面は叩き後刷毛、内面は上半部ヘラ削り、下半部刷毛調整で、底部はわずかに不安定な平底が残る。(第144図)は南部出土のものである。(1~4)は壺で、(1)は上方へ開きながら延びる頸部と大きく外反する口縁を持つ。(2)は直立する口縁を持つ二重口縁の壺である。(3・4)は直線的に外方へ延びる口縁を持つ。(5~10)は甕で、(5)は口縁端部が内面側に肥厚し、上端部を面取りする。頸部はナデにより丸く湾曲し、屈曲部は直線的ではない。外面は刷毛、内面はヘラ削りが施される。(8)は雲母土器。(9・10)は底部もしくは体部下半で、外面は叩き、底は不



- 1. 暗茶褐色砂質土
- 2. 暗茶褐色砂質土(1よりも褐色が暗く全体に1よりも硬質)
- 3. 暗黒茶褐色砂混じり粘質土
- 4. 黒褐色砂混じり粘質土(7より砂粒が粗い)
- 5. 暗黒茶褐色砂混じり粘質土 (6より砂が多い)
- 6. 暗黒茶褐色砂混じり粘質土(3より砂が多い)
- 7. 黒褐色砂泥じり粘質十
- 8. 茶褐色砂 (2~3㎜大の砂粒が多い)
- 9. 茶褐色砂利 (1~3cm大の砂を多く含み少量粘土も含む)



第67図 SD II 20·SD III 86 H10区 断面図

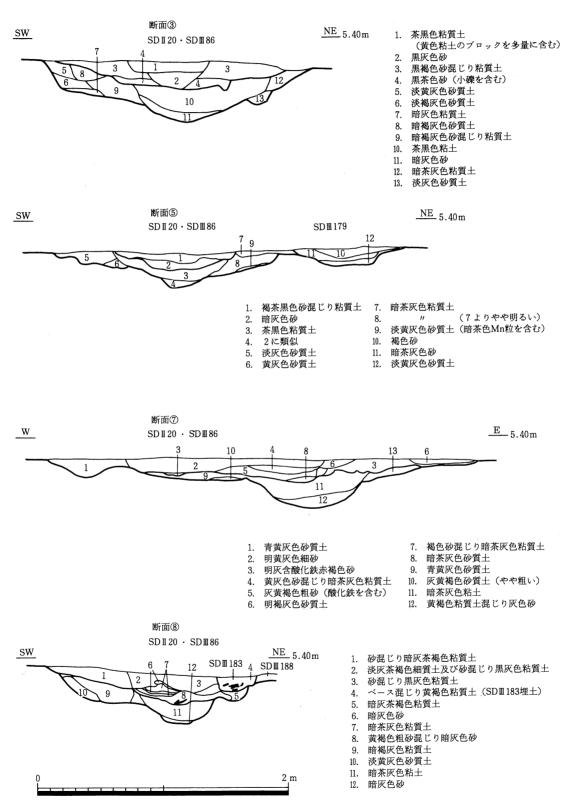
安定な平底を呈する。(11)は鉢で、外面には細かな亀裂が認められる。(12~14)は高杯で、(14・15)は雲母土器で、内面はヘラ削りを施す。(16・17)は製塩土器で、(17)は上層からの混入と考えられる。

(第145~147図 1~10)は,SD \blacksquare 86の下層から出土したものである。溝全体からすれば,中層に相当する。須恵器等の比率が高いことから,SD \blacksquare 86の下層と考えた。(第145図 1~7)は壺である。本来的にはSD \blacksquare 20に含まれていたものであろう。(1)は外方へ延びる頸部とさらに大きく外反する口縁部を持つ。体部は上半に最大径を持ち,下半に叩き目が残る。内面は刷毛調整である。(2・3)は二重口縁の壺で,(2)は口縁部の外反が顕著なものである。(3)は(2)と比べて外反が顕著ではなく,内外面は刷毛調整のものである。(4)は大きく外方へ延びる口縁を持つがそれ程外反は顕著ではない。(8~10)は底部で,不安定な平底がわずかに残る。($11\cdot12$)は小型の壺である。(13)は薄い作りの甕で,外面は叩き目が顕著に残り,内面のヘラ削りは,頸部までは延びず,頸部内面は刷毛が施される。口縁部は外方へ屈曲する。(第146図 $1\cdot2$)は高杯の脚部とも考えられるが,杯部との接合の痕跡が認められない。やや雑な作りのもので, \blacksquare 期に属する可能性もある。($3\sim14$)は甕である。(3)は長胴の甕で,外面は板ナデ,内面はヘラ削りが施される。(4)は完形のもので,外面下半部は叩き目が顕著,上半部は刷毛調整,頸部付近の内面は刷毛,体部は指頭痕顕著。底部は尖底気味のものである。

(15) は甑で,底部は尖底気味で,穿孔は 1 穴。外面は叩き目が残る。($16\cdot17$,第147図 $1\sim3$)は鉢で,(16)は大型のものである。(第147図 3)は口径に対して器高が低く,口縁部外面に沈線が廻る。(第147図 $4\sim8$)は,高杯である。($4\cdot5$)は杯部中位の屈曲が不明瞭なものである。(6)は短脚で,杯部内外面にヘラ磨きが施される。(7)は杯部中位の屈曲が明瞭。(8)の脚部は内面にヘラ磨き削りが施される。(147図 $9\cdot10$)は須恵器の杯身と提瓶である。

(第147図11~17,第148~163図 5)はSDⅢ86の北部上層出土の土器である。(第147図11~15)は

本来的には SD II 20に包含されていたものと考えられる。いずれも壺であろう。(16・17)は甕,(16)は肩が張らず,口縁端部は面取りをしていない。(17)は頸部が直立気味に立ち上がり,口縁部は大きく外反する。 SD II 20からの混入の可能性が考えられる。



第68図 SD II 20·SD III 86, SD III 179·183·188 I2区周辺 断面図

(第148図 1)は形状と杯部と接合の痕跡がないことから蓋であろう。(2)は小片のため傾き・径が不明瞭。(3~7)は甕で(4)は混入と考えられる。(8~12・15・16)は,SD II 86の特徴的な甕で,頸部の屈曲はこの時期の他の甕同様明瞭ではなく,最大径が体部下半にあり,丸底のものである。(9~12)のように中型のものと(18~20)のように小型のものがあり,形態は共通する。内面はヘラ削りが明瞭なものと,(17)のように不明瞭なものがある。口縁端部の形状は一定しない。外面はいずれも刷毛調整である。

(第149・150図) は長胴の甕で、(第149図1) のように頸部のくびれが明瞭なものと不明瞭なものがある。傾向としては後者が主体である。外面は刷毛調整、内面は部分的にヘラ削りが残るものが多く、頸部から口縁部にかけては刷毛調整のものが主体を占める。(第149図12) は混入であろう。

(第151図) は把手付の球胴甕で底部は丸底のものと平坦にしたものの両者があり,多くは外面は刷毛調整であるが,(3) のように格子目の叩きが残るものもある。(3) は頸部にかけて内傾する傾向が認められるが,外面の整形技法と対応したものかどうかは不明である。内面は刷毛調整のものと,へラ削りもしくは板ナデによるものとがある。

(第152図 $1\sim6$) は甑である。内外面刷毛調整のものが多い。 \mathbb{I} 期の甑で \mathbf{SH} \mathbb{I} 33出土のもの(第122図22)は口縁部が薄くなりながら短く外反し,本溝出土のものと形状が異なる。また口縁端部の面取りは6世紀後半~7世紀初等の甕等の口縁端部に特長的なものであることからすれば, \mathbf{SD} \mathbb{I} 20からの混入とは考えられない。口縁端部は面取りするものとしないもの(5)がある。(7~14)は鉢で,下層から混入の可能性が高い。(13・14)は短い脚がつく。

(第153図 $1\sim4$)は鍋と考えられる。形態的には \mathbb{I} 期の大型の鉢の系譜上で考えられるものであろう。体部外面と口縁内面の刷毛調整・口縁端部の面取りが特長的である。($5\sim17$)は中型の鉢で、($5\sim7$)は片口状の口縁を呈する。(10)は内外面をヘラ磨きを施す丁寧な作りのものである。この鉢の形状と(第148図 9)に代表される中・小型の甕の体部下半とは形態が類似する製作等での共通性が認められる点は注目される。

(第154図 $1\sim13$)は小型の鉢で,口径と比して器高の低いものが多い。口縁端部の調整は,面取りを施してないものと内面側を面取りしたものの両方がある。(9)は口縁端部内面を面取りし,内外面はへ ラ磨きを施す。(12)はやや雑な作りの鉢で,他の鉢とは形状が異なる。(13)は内外面をへラ磨きし,口縁部はややすぼまり気味で,器高が高い。($14\sim16$)は口縁端部に穿孔が認められる鉢で,($15\cdot16$)はやや雑な作りのものである。($17\sim33$,第155図 $1\sim14$)は高杯である。(第154図 $17\sim32$)は長脚の高杯で,脚部内面はヘラ削りするものと絞り目が顕著なものの両者がある。(33,第155図 $1\sim4\cdot6\sim14$)は短脚の高杯で杯部は,小型の鉢同様丸味を有した形状を呈する。

(第155図15~20)は製塩土器で、口縁部に叩き目を有する。(15・16)は平行叩き、(18・19)は矢羽状の叩きである。(21~23)は蛸壺。(24~26)は土錘で、両端に穴が穿たれる形態のものである。(27)は雑な作りの土錘で中央部に穿孔がある。

(第156図 $1 \sim 8$)は竈である。(1)には把手がつく。(9)は吹子の羽口で先端部は熱により窯変状になっている。

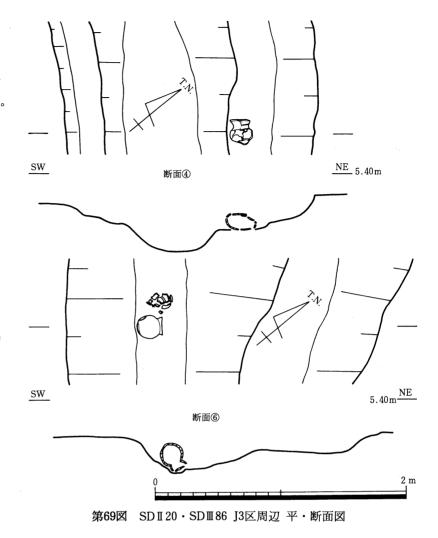
(第157~163図 $1\sim5$)はSD II 86の北部上層から出土した須恵器である。(第157図 $1\cdot2\cdot4\sim$ 32)は杯の蓋で($1\cdot2$)は天井部との境に段を持つ。下川津遺跡の II 期より古い時期の遺物で量的には極めて少ない。($4\sim32$)は天井部はヘラ削りを施す。ロクロの回転方向は概ね右である。(3)は大

型の杯である。(33) は高杯の 蓋。(34・35) は短頸壺の蓋で ある。(36) は口縁端部が内面に 摘み上げ気味となるものである。

(第158図) は杯の身で, (1) は古式のもので,出土量 は非常に少ない。(2~27) は 底部へラ削りのものが多く,ロ クロ回転は右である。(28~32) は杯で,口径の割に器高が高い ものである。

(第159図1~3)は大型の杯である。(4~26・第160図1~11)は高杯である。(第159図4~14)は長脚の無蓋高杯で確認できるものは2段透かしである。(11)の脚部は透かしが上段と下段では方向が異なる。(15~18)は短脚の無蓋高杯である。(23~25)は有蓋高杯である。(第160図1~11)は短脚

の高杯の脚部である。



(第160図12~15) は須恵器の曃である。(16~21) は平瓶等の口縁部である。(22) は提瓶,(23・24) は横瓶である。

(第161図 $1 \sim 4$)は長頸壺で,(2)の外面にはヘラ記号がつく。($5 \sim 8$)は短頸壺である。($9 \sim 16$)は壺である。(9)は脚がついていた痕跡があり,($12 \cdot 15$)も脚付の壺である可能性が高い。

(第162~163図 1)は須恵器の甕である。(8)は肩部に把手がつき,(9・10,第163図 1)は大型の甕で口縁部外面に文様が施される。(第163図 2)は漏斗で口縁部外面はカキ目,下半部は叩き,内面には同心円文が残る。(3~5)は脚付の長頸壺で,(5)は脚部に透かしが施される。

(第163図 6 ・ 7)は S D \blacksquare 86の南部上層から出土した遺物で、(6)は球形に近い体部を持つ甕であろう。(7)は土錘である。

(第163図 $8\sim10$,第164図)は,トレンチ等から出土した層位不明の土器である。 (藤好)

SD II 21 (第66 · 165, 166図 S D 8703)

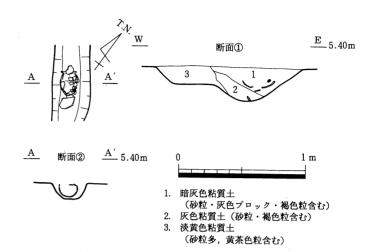
竪穴住居の周溝と考えられる S D II 22から派生する溝で G 7 区北部から H10区にかけて検出した溝である。 G 7 区から H10区にかけて,概ね南北方向の流路を持つ溝である。北部は S D II 20に流れ込む。 検出長約57.0 m,幅約0.4~1.2 m,深さ約0.2 mを測る。断面形は幅広 U字状を呈する。

(第165図 1)は大型の壺で,内外面に刷毛目が残り,底部は明瞭な平底である。($2\sim12$)は甕で,外面は叩き後刷毛調整のものが多い。内面はヘラ削りが施され,底部は平底である。(第166図 $1\sim7$)

は鉢。(8)は脚付の壺もしくは高杯である。 (藤好)

SD II 22 (第71·166~169図 図版153 SD8702)

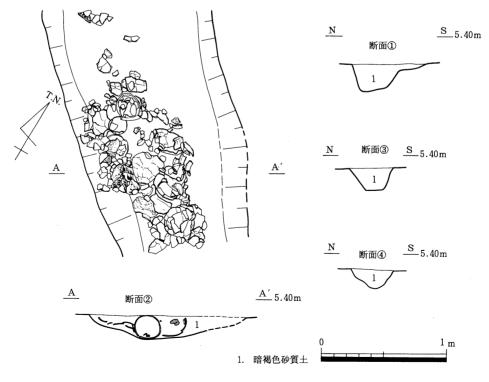
G・H6・7区で検出した径約15mの円形周溝である。北端で溝SDⅡ21に続き,更にSDⅡ20に合流する。また周溝内の中央部には同時期の土坑SKⅡ07が位置する。幅・深さは部位によって差異が大きく,幅0.4~1.3m,深さ約0.2mを測る。断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は単層で灰褐色砂質土である。溝内



第70図 SDII 21 断面図

の数か所で完形ないしはそれに近い弥生後期土器を出土した。もっとも顕著なのは図示した溝西端部で、やや幅広くなった部分にほぼ完形に復元しうる土器ばかり30個体以上が一括投棄されていた。本溝は規模・形状から見るかぎりでは竪穴住居周溝に最も近い。北に排水溝状の小溝が接続することや、中心部に竪穴住居中央穴様の土坑が位置することもこの推定を支持しうるが、断定する迄の材料はない。また出土土器から見て弥生後期後葉でも比較的古い段階に比定出来る。

(第166図~第169図) に図化掲載した36個体が本溝出土土器のほぼ全てである。器種構成は広口壺・短頸壺7・細頸壺3・甕14・甑1・大形鉢1・小形鉢4・高杯3・製塩土器1・ミニチュア土器1である。一応該期の器種組成を漏れなく含み良好な一括資料であることは疑い無いが,構成比率の点では鉢の著しい少なさと壺類の多さが一般的ではない。



第71図 SDⅡ22 平·断面図

壺(第166図10~第167図 2)は体部の球形化がかなり進行しているが何れも明確な平底をとどめる。また口縁部の発達が未熟で端部を大きく拡張するものは未だ出現していない。弱く肥厚させるか僅かに摘み出す程度である。したがって口縁部に文様帯は持たずに頸部に刺突文を巡らす例がまま見られるだけである。細頸壺(第167図 3~5)では後期末葉の同器種と比べて体部が未だ大形である。頸部はほぼ直立する。(第167図 3)は雲母土器細頸壺で多量の角閃石細片を含む。

甕では口縁部の屈曲度合いに差異が見られるが、概ね体部から緩やかに屈曲して内面に鋭い稜が認められる資料は少ない。また屈曲部直下の内面が僅かに肥厚してその部分に粘土帯接合痕をとどめる例も多い。体部外面は並行叩きの後に縦ハケ出を加えるものが大部分であるが、完全に叩き目を消し切る例は少ない。稀に(第167図 8)のように並行叩きをナデ消す資料もある。内面へら削りは上端まで達せず、口縁部直下には指押さえもしくはナデを施す例が多いが(第168図 3・7)のようにハケ調整を加える場合も認められる。(第168図 5)は雲母土器甕で薄手のシャープな底部を持ち、体部外面下半にヘラ磨きを加える。口縁部は強く折れるが未だ内面に稜は持たない。(第169図 2)は甑。尖底に近い極めて矮小化した平底を持ち焼成前に穿孔する。明らかに甕とは異なる独自の形態を備えている。大形鉢は折損ているが外反する口縁部を持ち、体部外面並行叩きの後に下半にへら削りを加える。小形鉢は外面並行叩きのものとナデ調整とがあるが何れも突出気味の明瞭な平底を持つ。

(第169図 8)の高杯は極度に短脚化し内湾気味に強く開く裾部を持つ。杯部は中位で強く屈曲して上半は外反するが余り深くない。この地方の高杯では珍しく該期の吉備南部地方のそれに良く似ている。 (10)は中位で弱く屈曲して短く上半部が直立する椀形の杯部を持つ。残部から判断して本例も短脚化がかなり進行している。

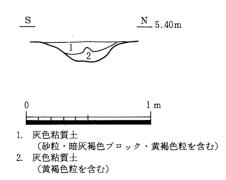
製塩土器は筒形の体部に小形倒杯形の脚部を付す。体部外面には並行叩きを顕著にとどめる。本例は下川津遺跡で最も古い製塩土器例であり、外面叩き調整の採用は対岸吉備南部地方のそれよりも早い可能性がある。 (大久保)

SDII23 (第72·169図)

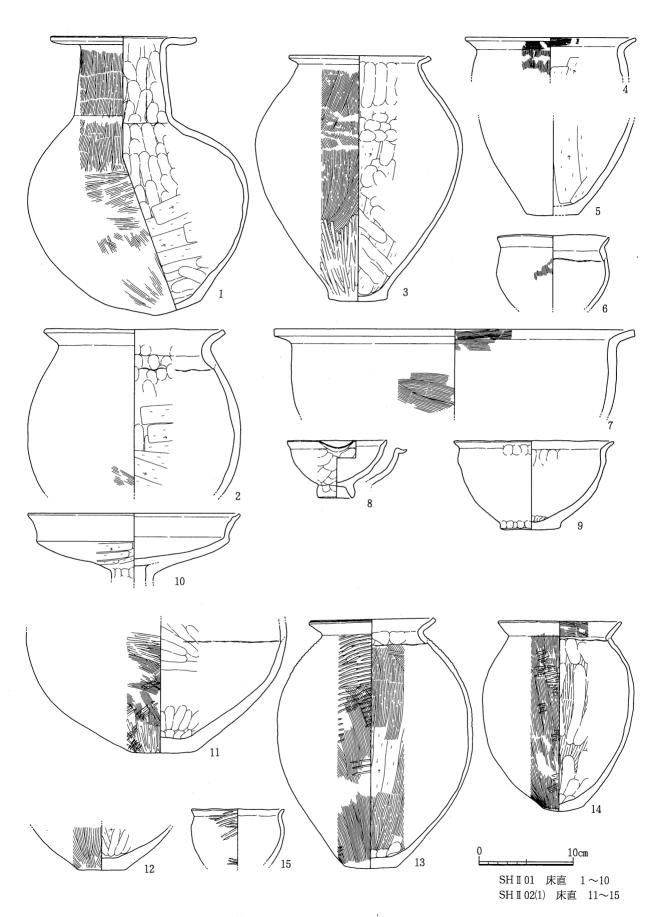
F6区の西部からH6区にかけて検出した概ね東西方向の流路を持つ溝である。東部では北に向きを変え,西端部では南に振る。本溝は,竪穴住居の周溝と考えられるSDI22の南に位置する。円形にめぐるSDI22の南部がやや変形し直線的となり,SDI23と平行することから,本溝はSDI21・22と同時併存かやや先行するものと考えられる。検出長40mほどの長さを検出した。幅約0.6m,深さ約0.2mを測る。断面形は逆台形状を呈する。本溝出土の土器は完形のものが多く,二次的に焼けたものか赤

色を呈するものが多い。また製塩土器の完形のものやミニチュア土器など祭祀的な様相の強いものが多い。

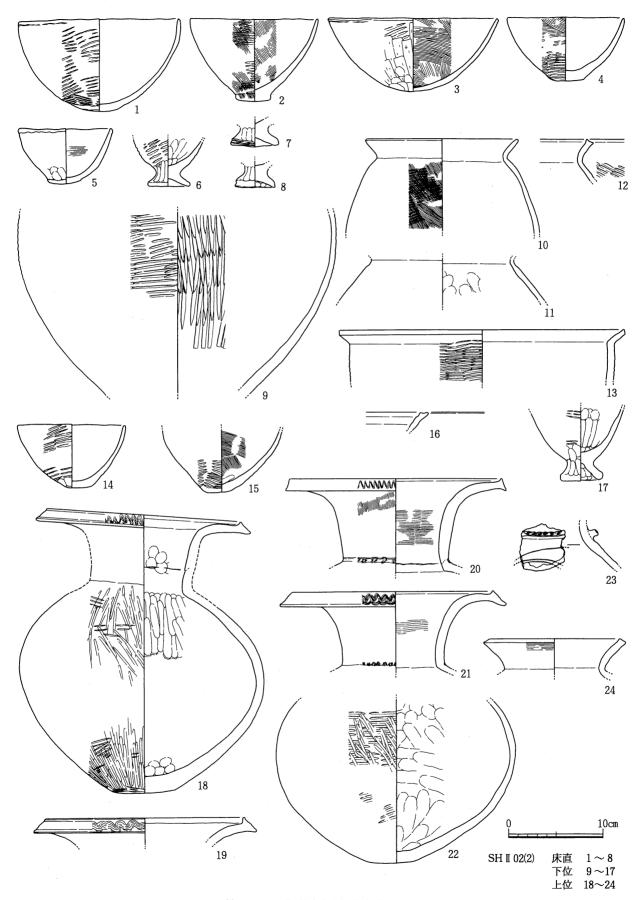
SD II 23の出土遺物として、6点の資料を抽出した。(第169 図13) は壺である。口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部を平坦に仕上げる。(14) は甕の上半部である。体部外面には、タタキ施し、口縁部は口縁部を「く」の字状に屈曲させている。(15~18) は高杯である。(15)は口縁部、(16~18) は脚部である。いずれの脚部とともに、一つの円孔が施されている。 (藤好)



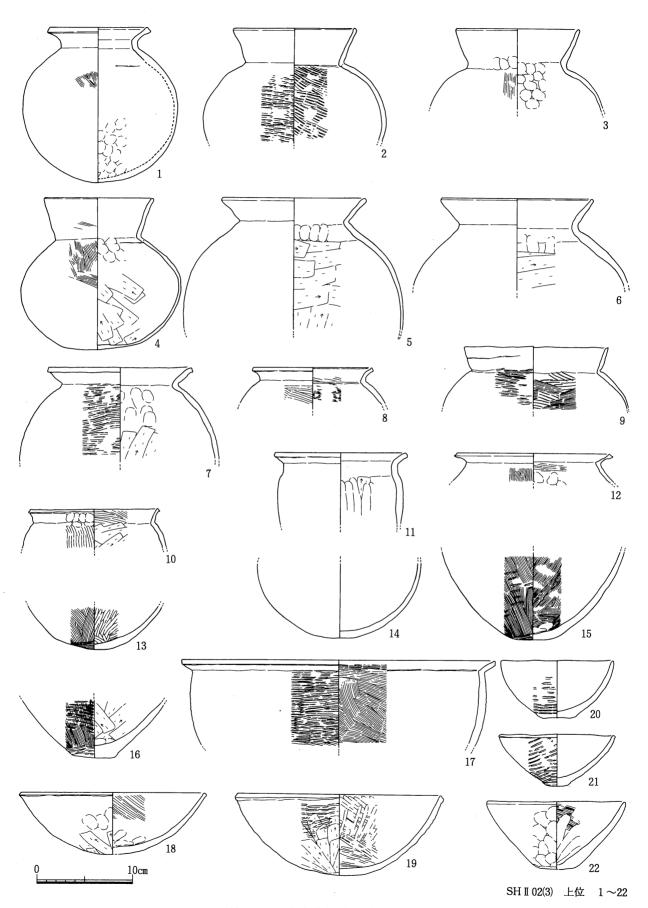
第72図 SD I 23 断面図



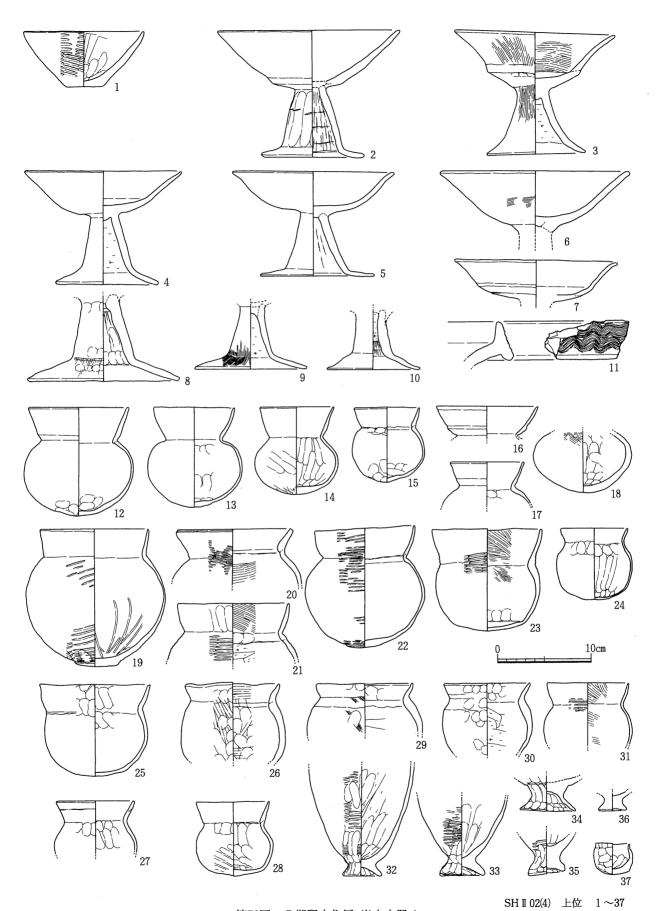
第73図 『期竪穴住居 出土土器 1



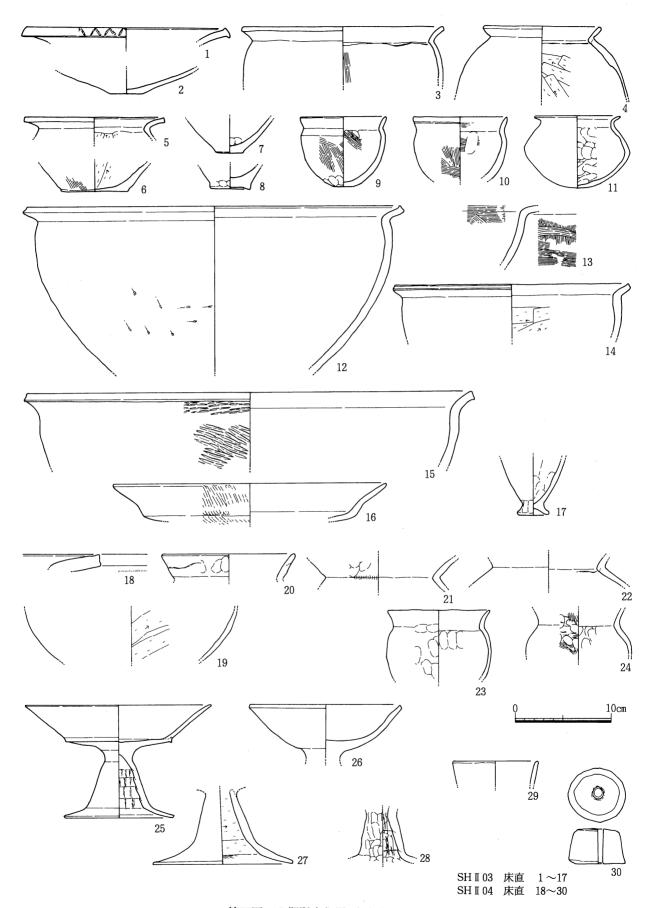
第74図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 2



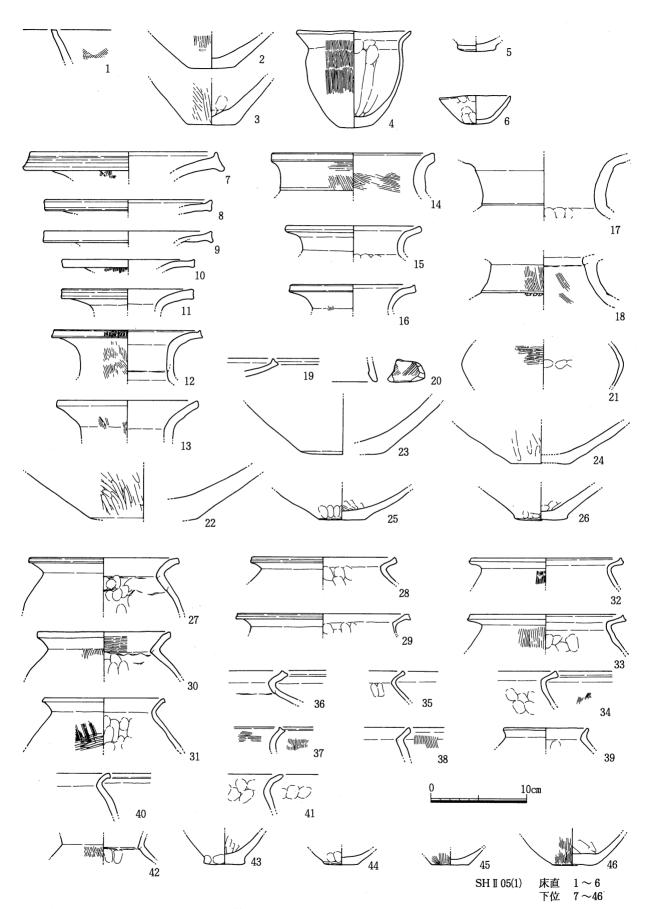
第75図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 3



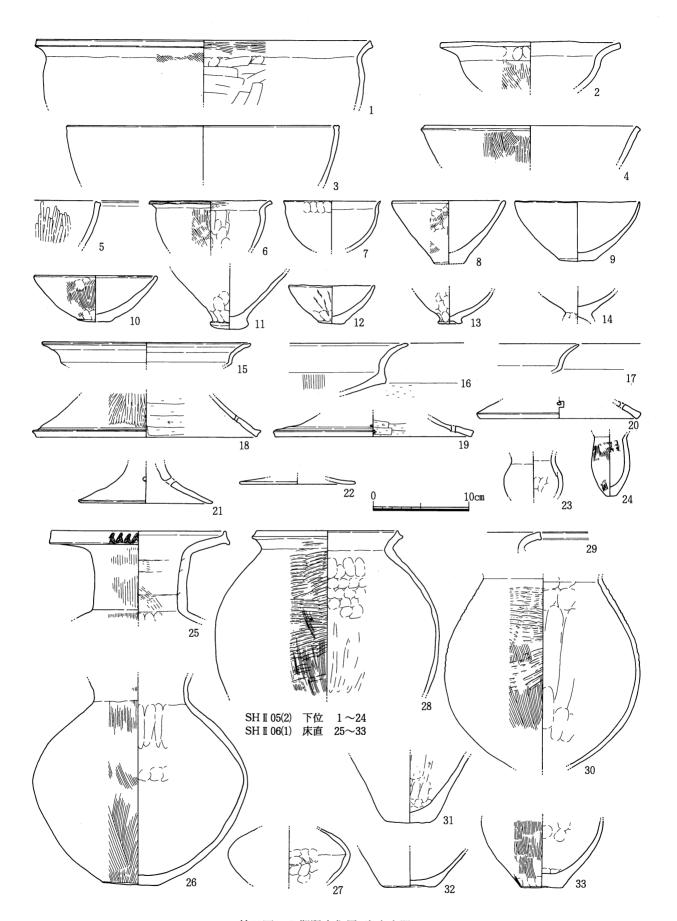
第76図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 4



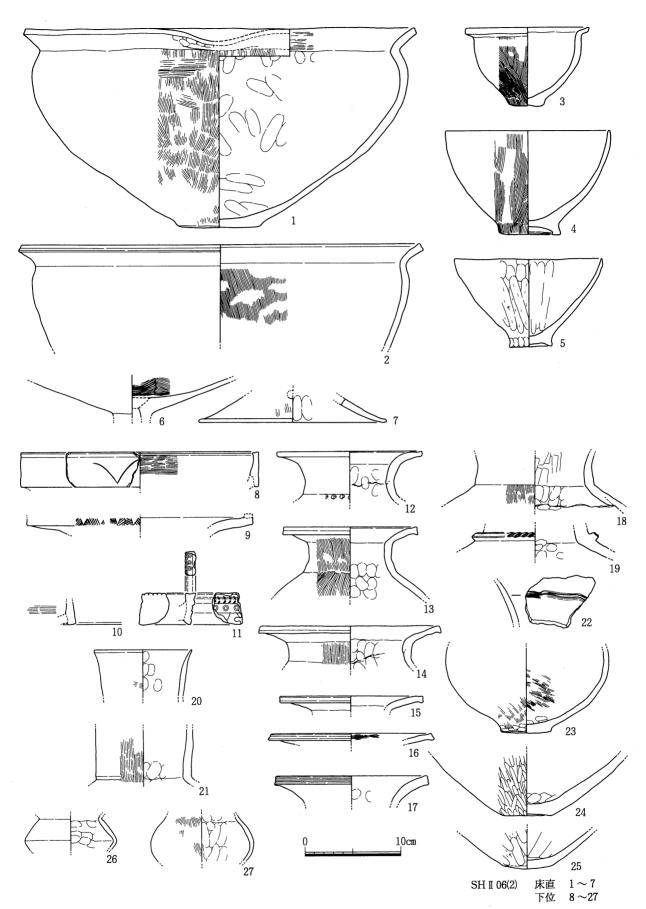
第77図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 5



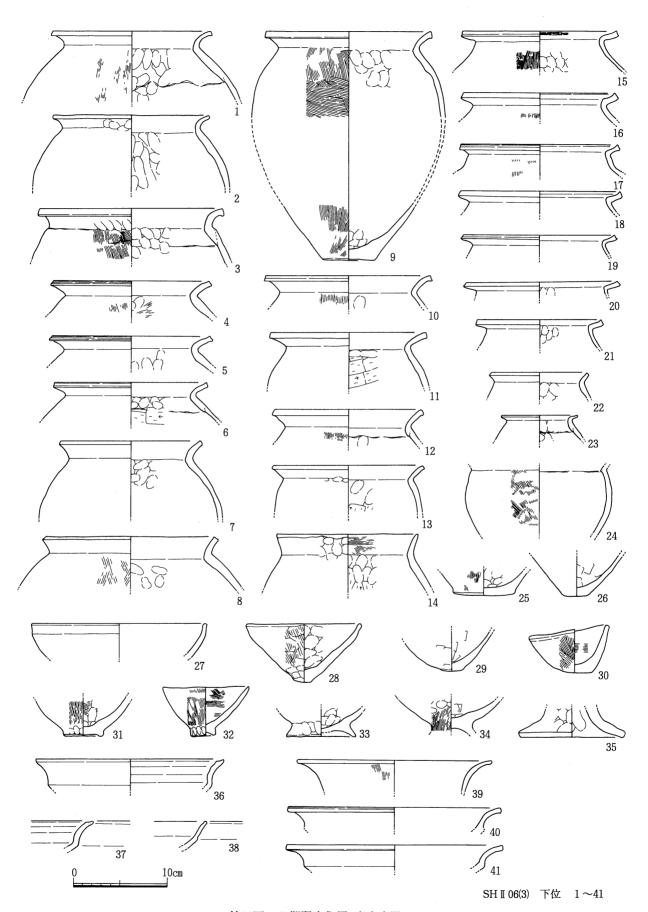
第78図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 6



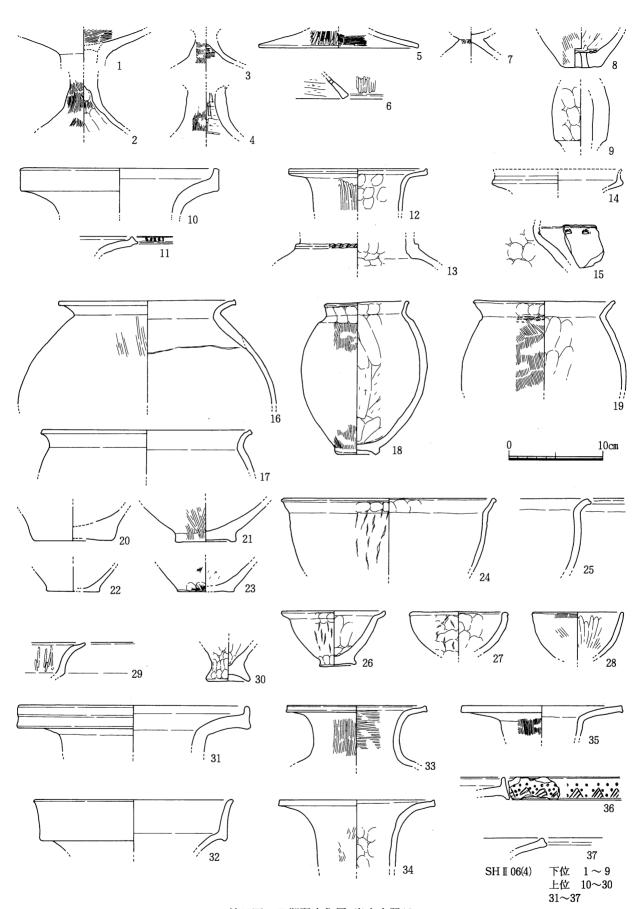
第79図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 7



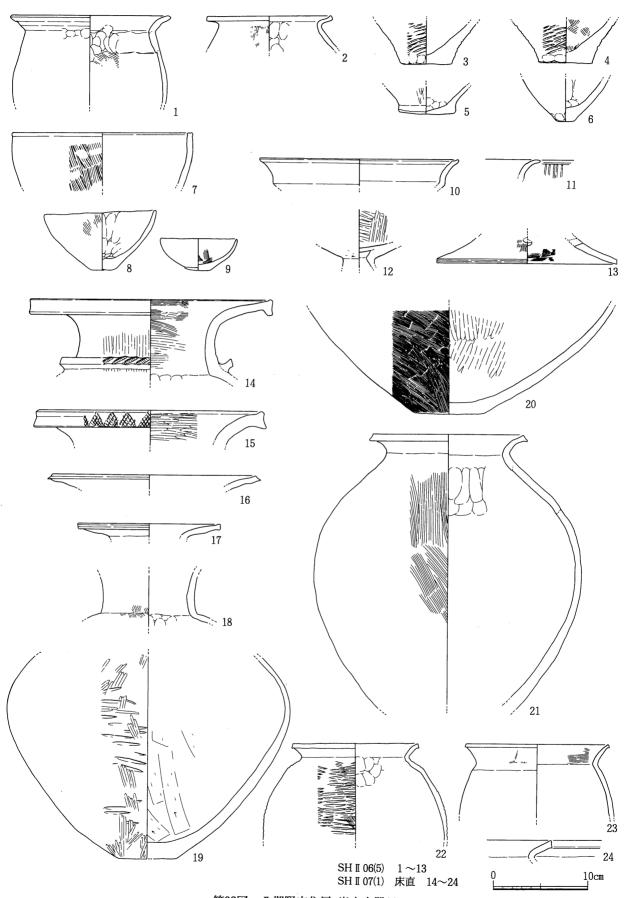
第80図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 8



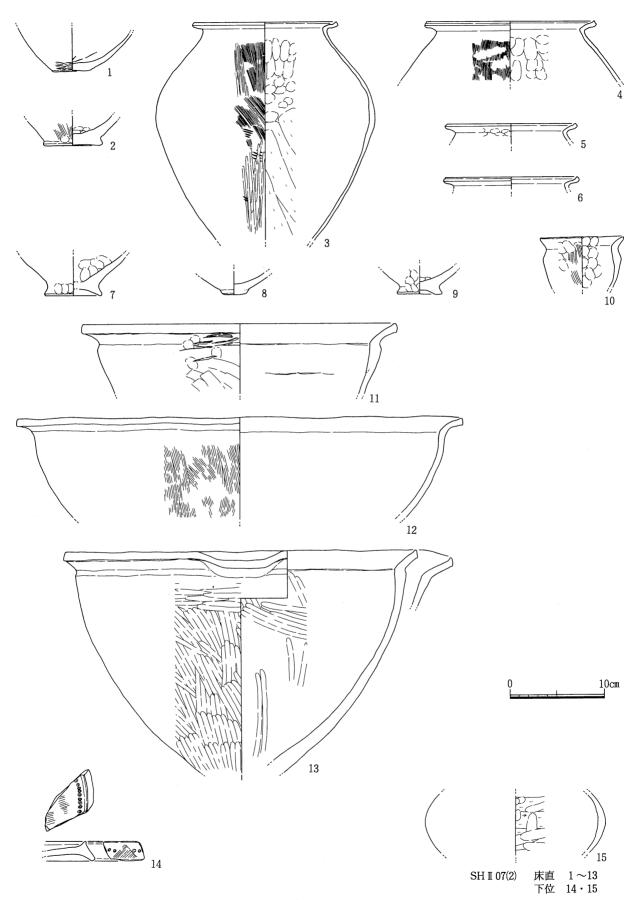
第81図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器 9



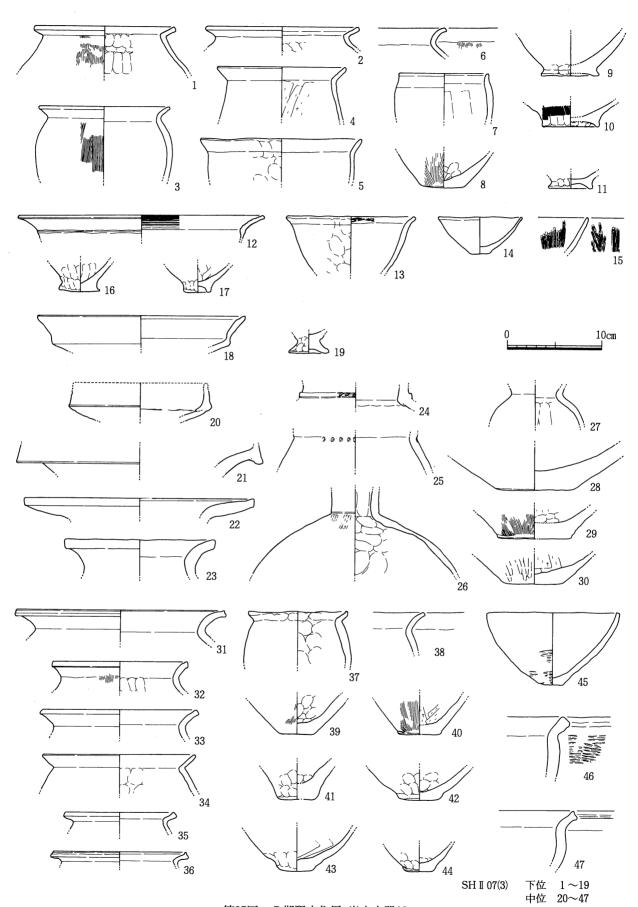
第82図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器10



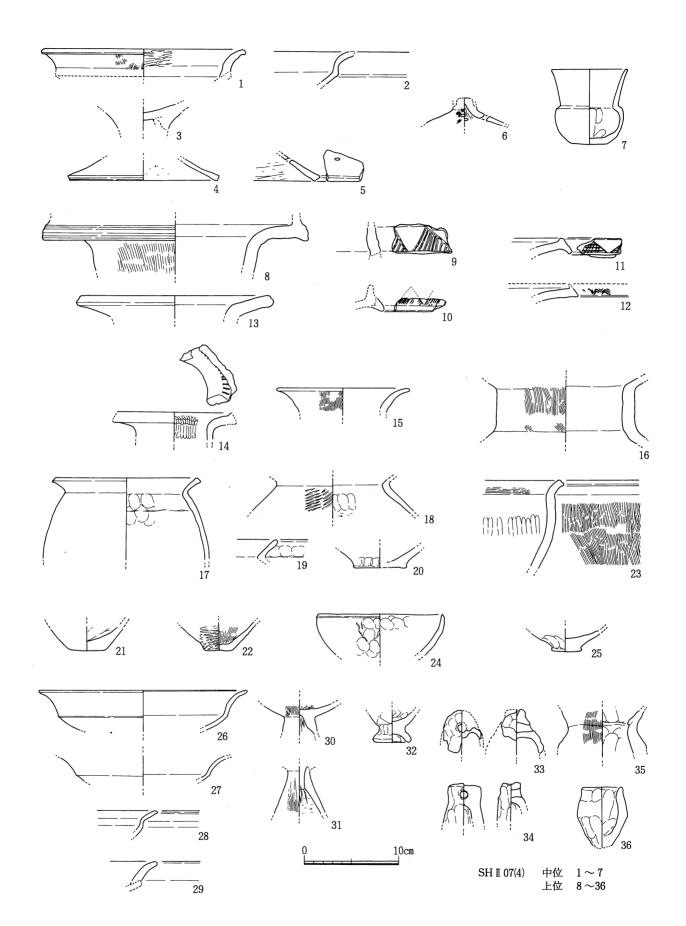
第83図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器11



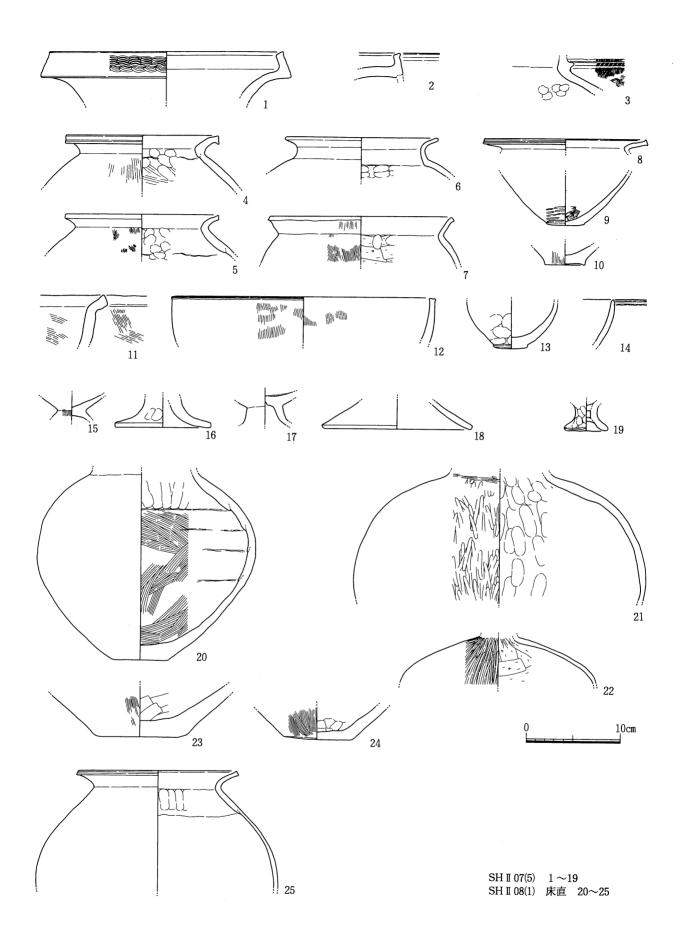
第84図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器12



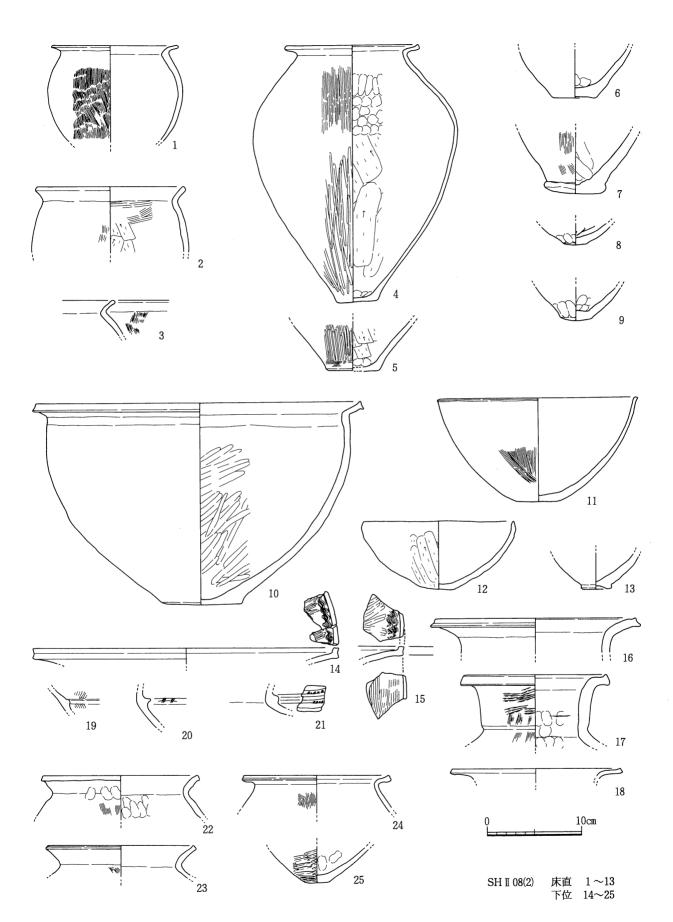
第85図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器13



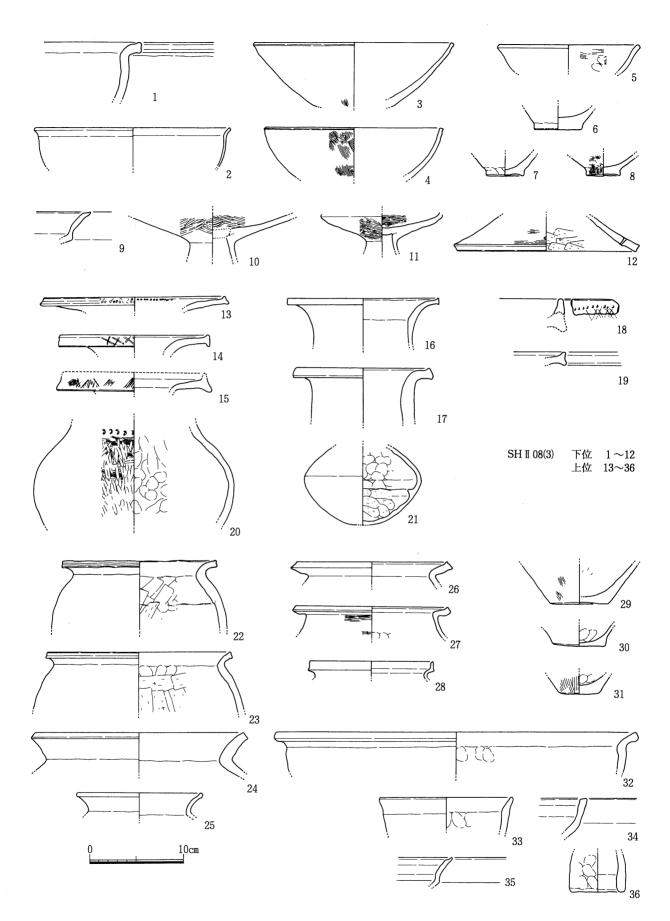
第86図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器14



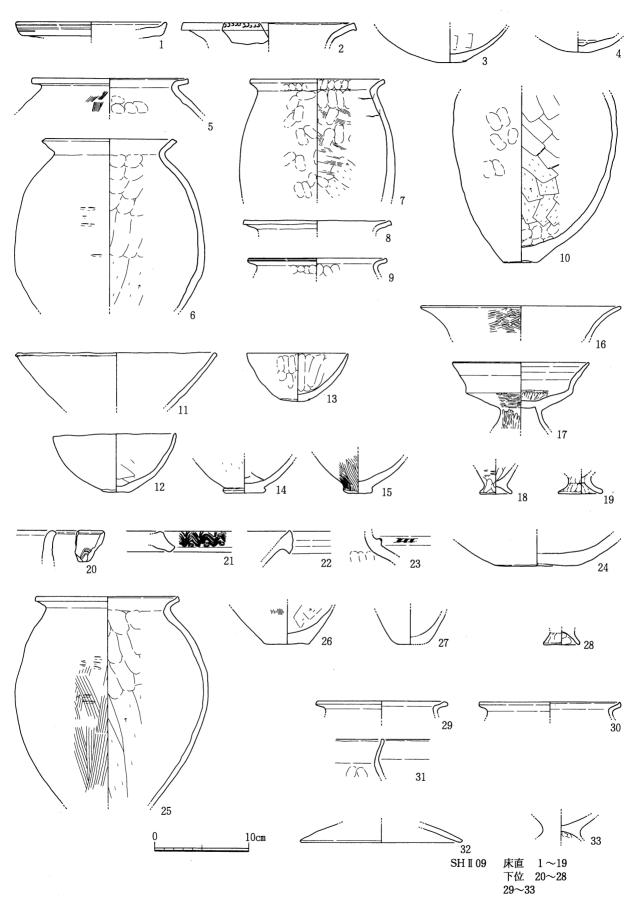
第87図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器15



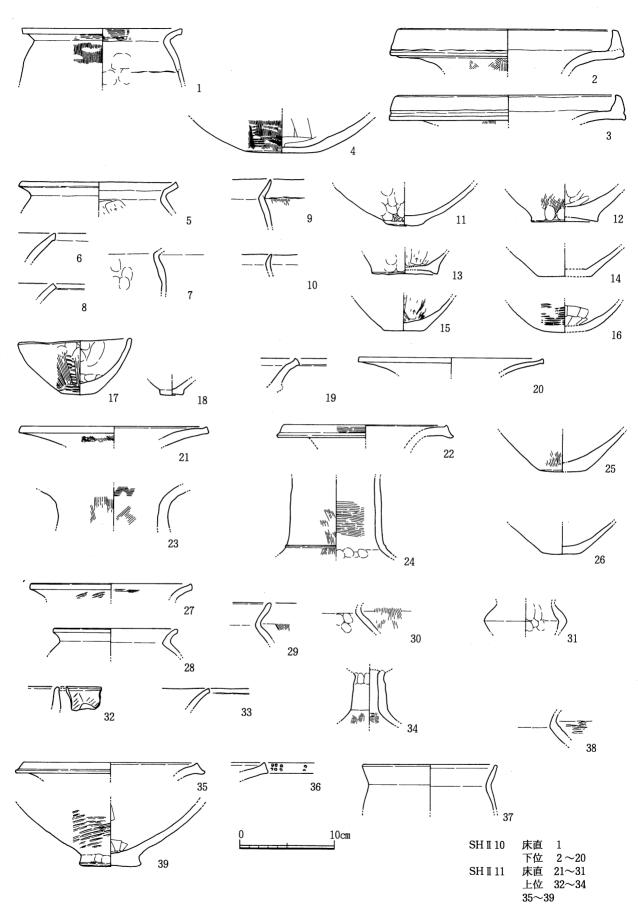
第88図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器16



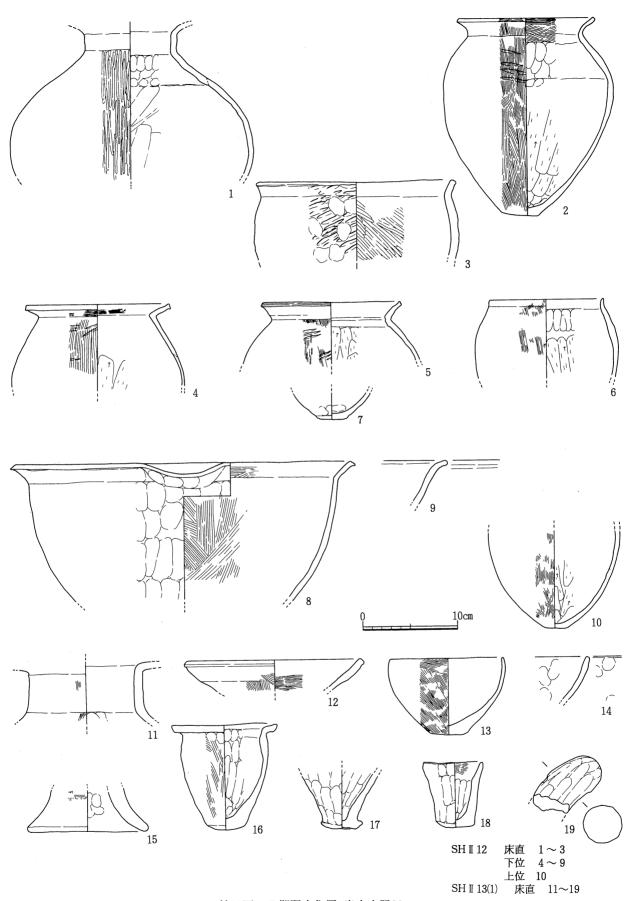
第89図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器17



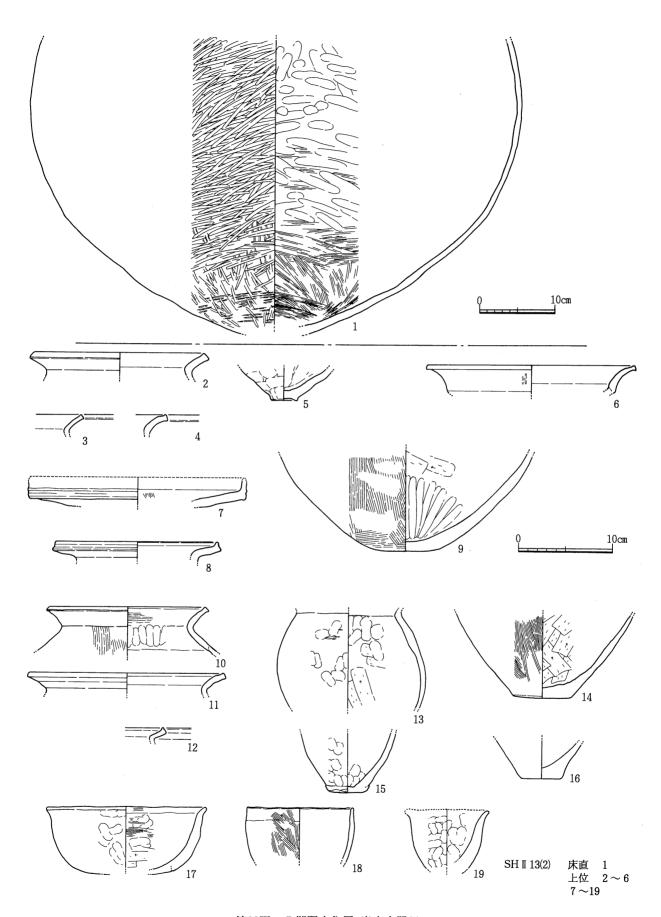
第90図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器18



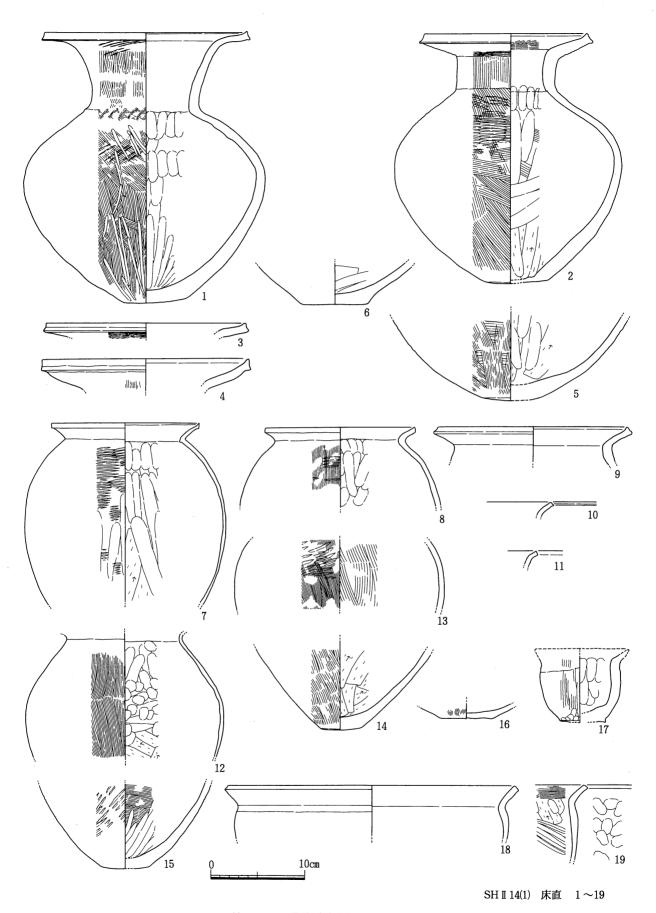
第91図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器19



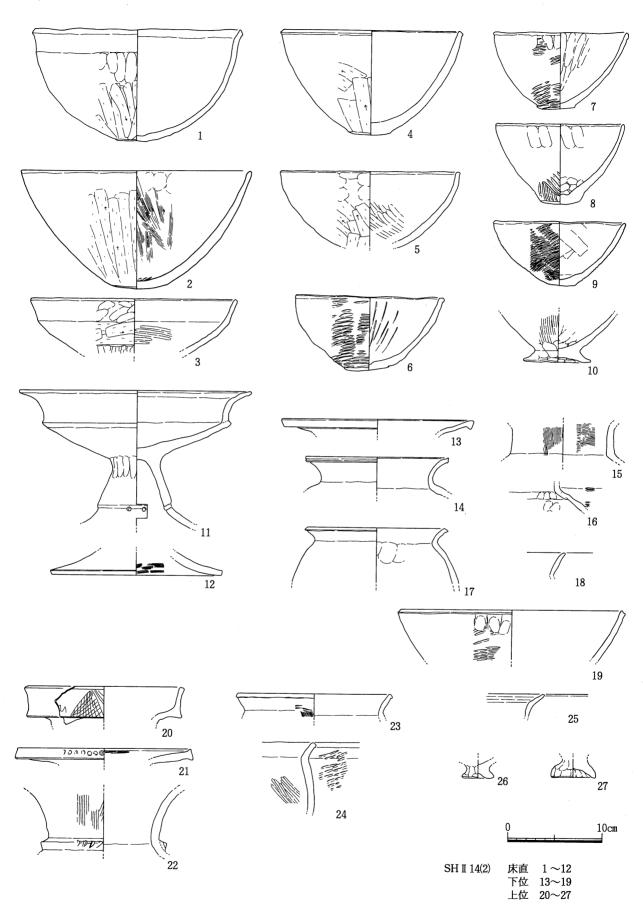
第92図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器20



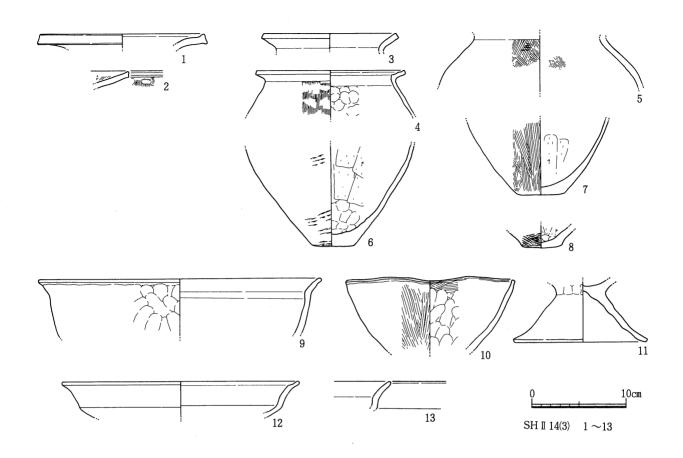
第93図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器21



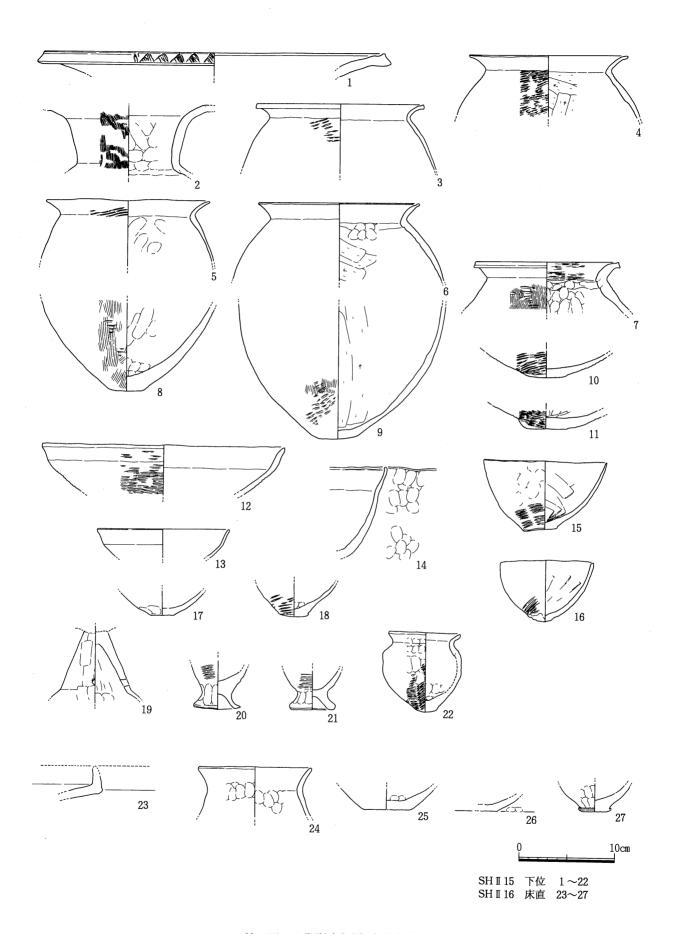
第94図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器22



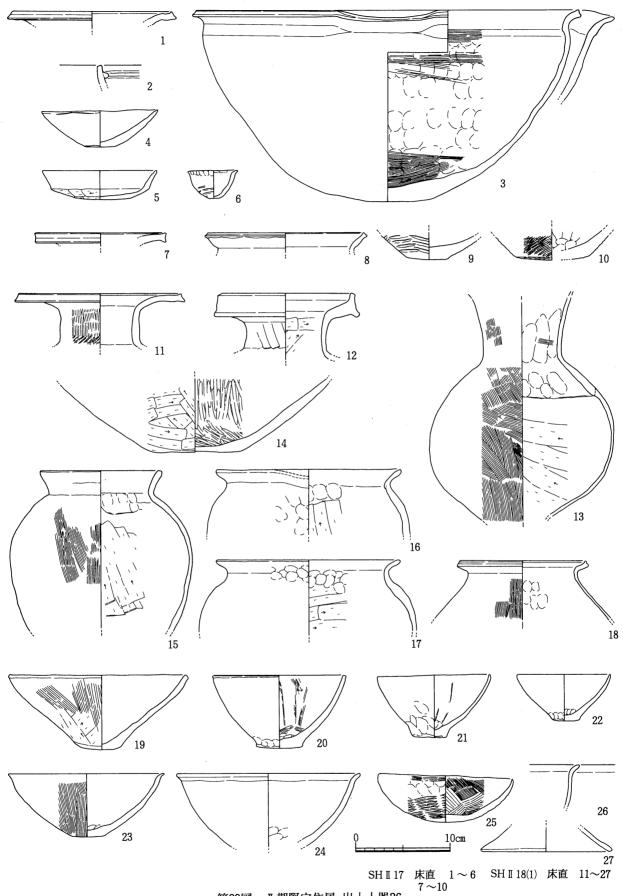
第95図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器23



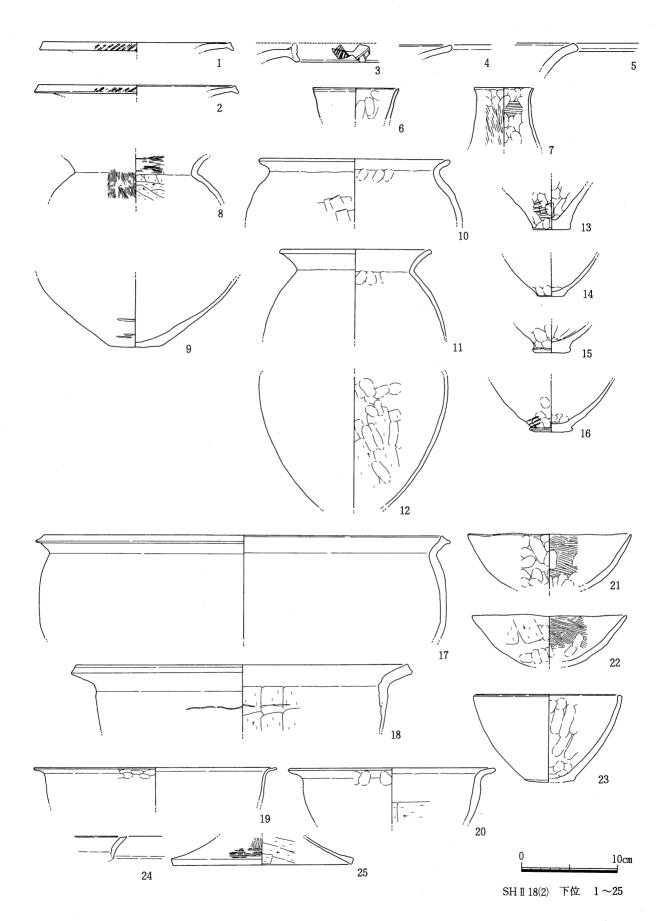
第96図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器24



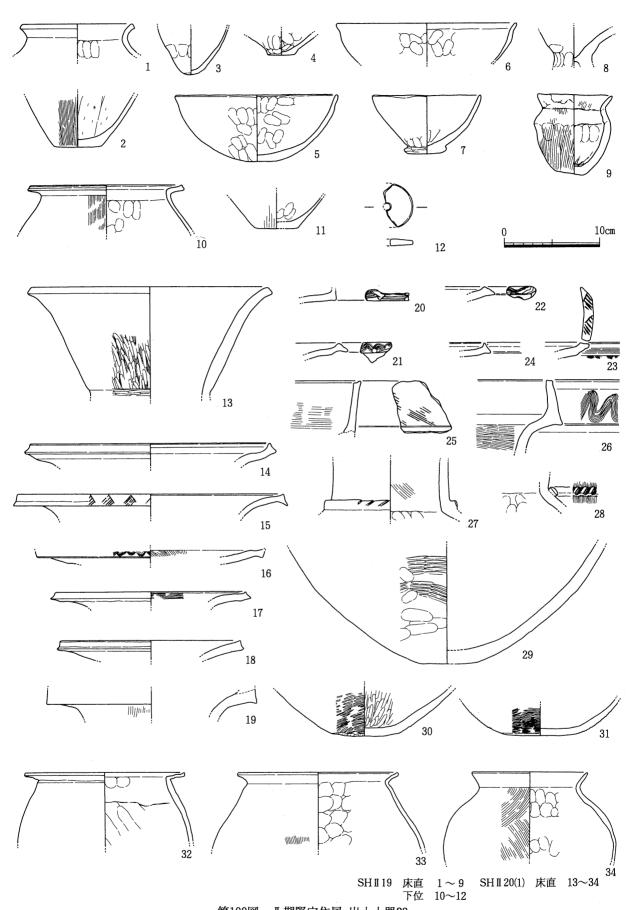
第97図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器25



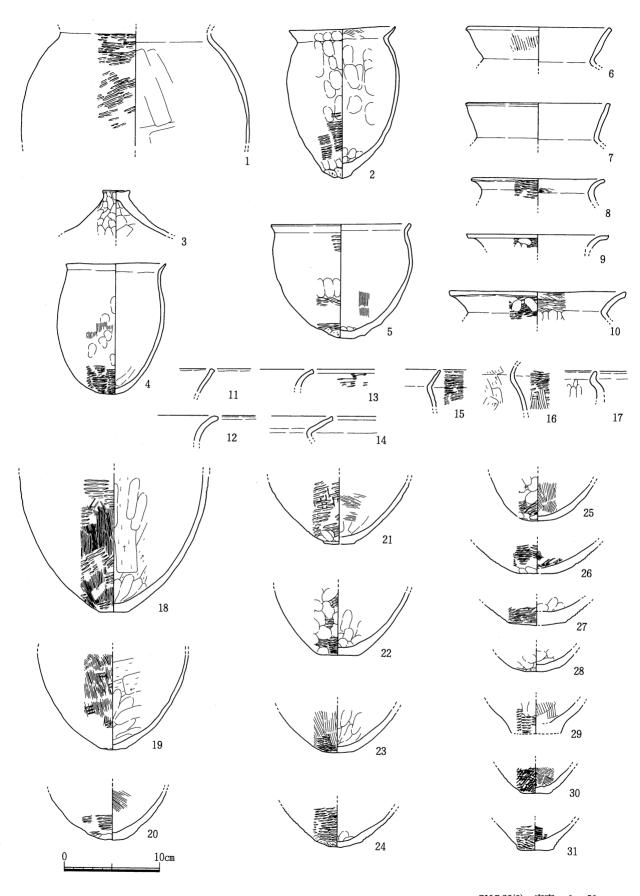
第98図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器26



第99図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器27

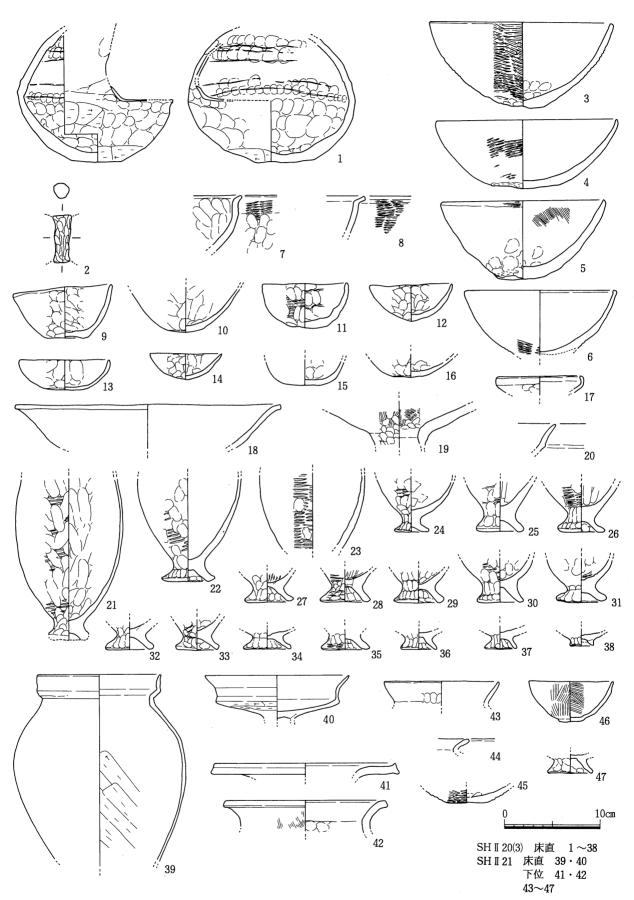


第100図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器28

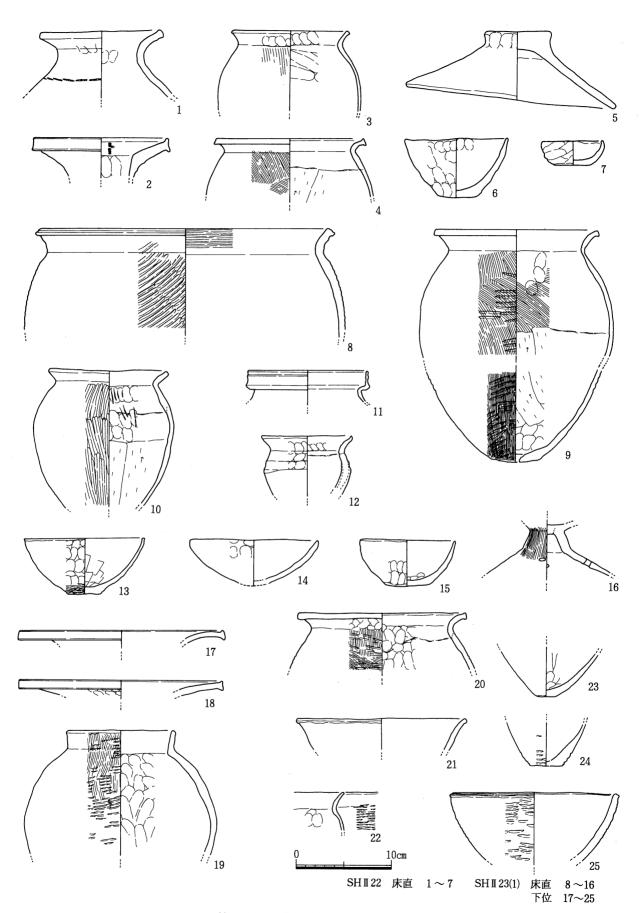


第101図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器29

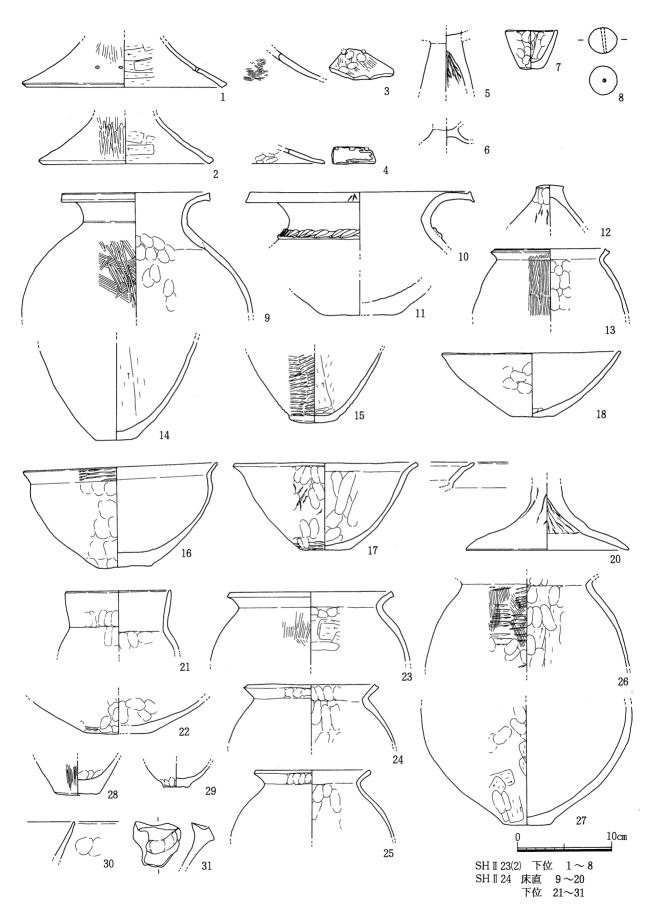
SH II 20(2) 床直 1~31



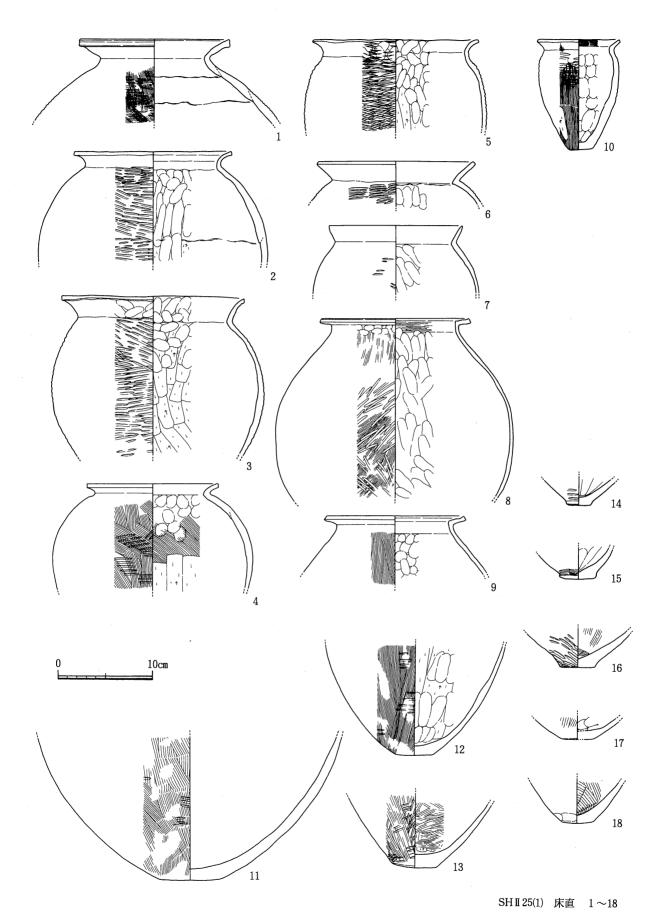
第102図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器30



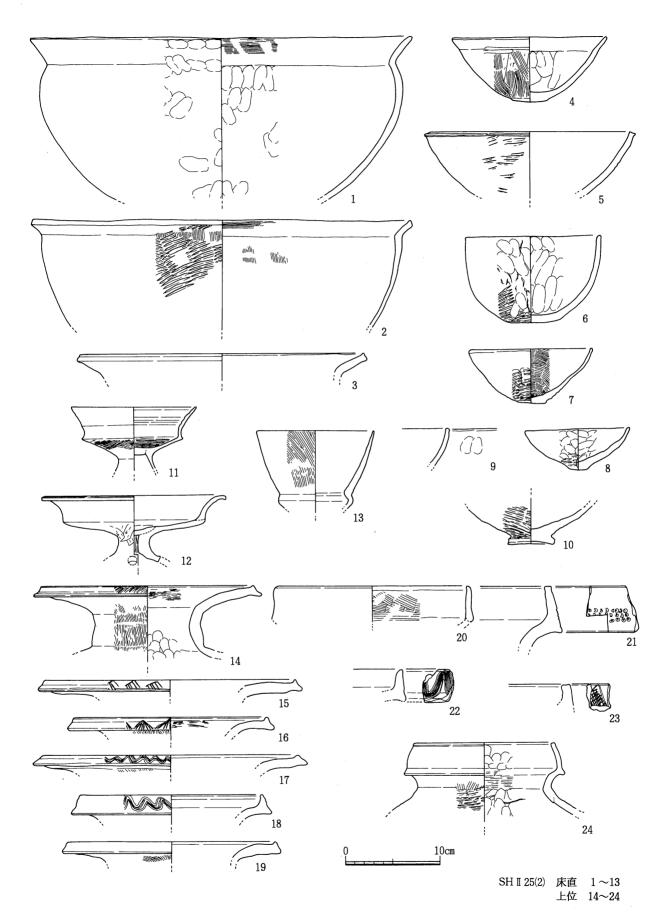
第103図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器31



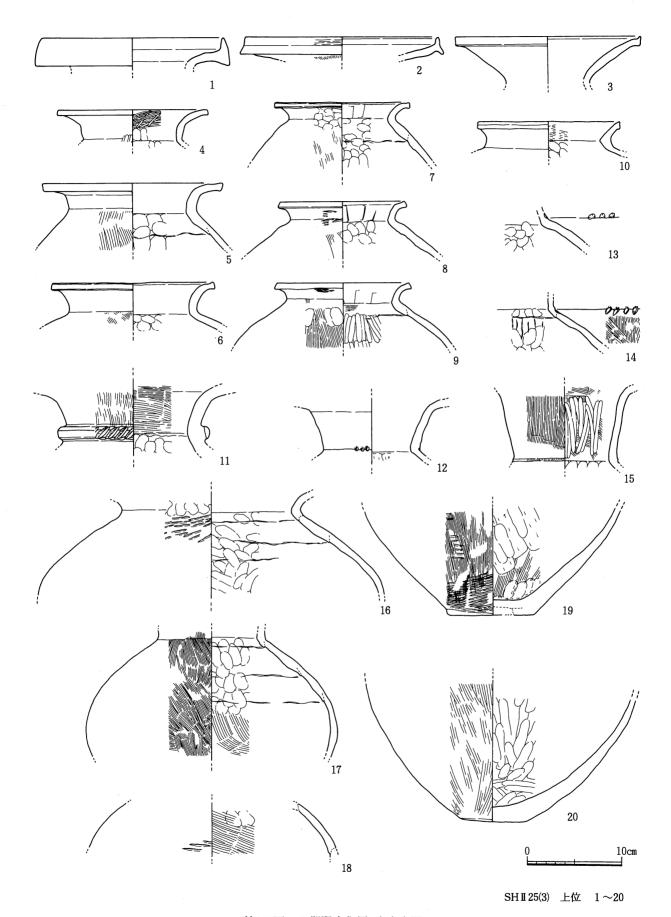
第104図 I 期竪穴住居 出土土器32



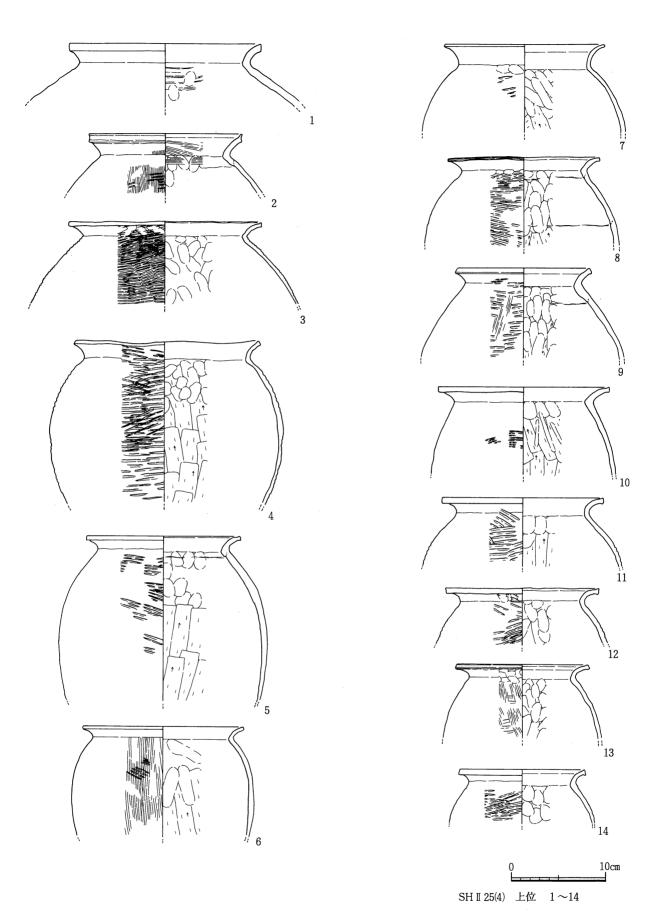
第105図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器33



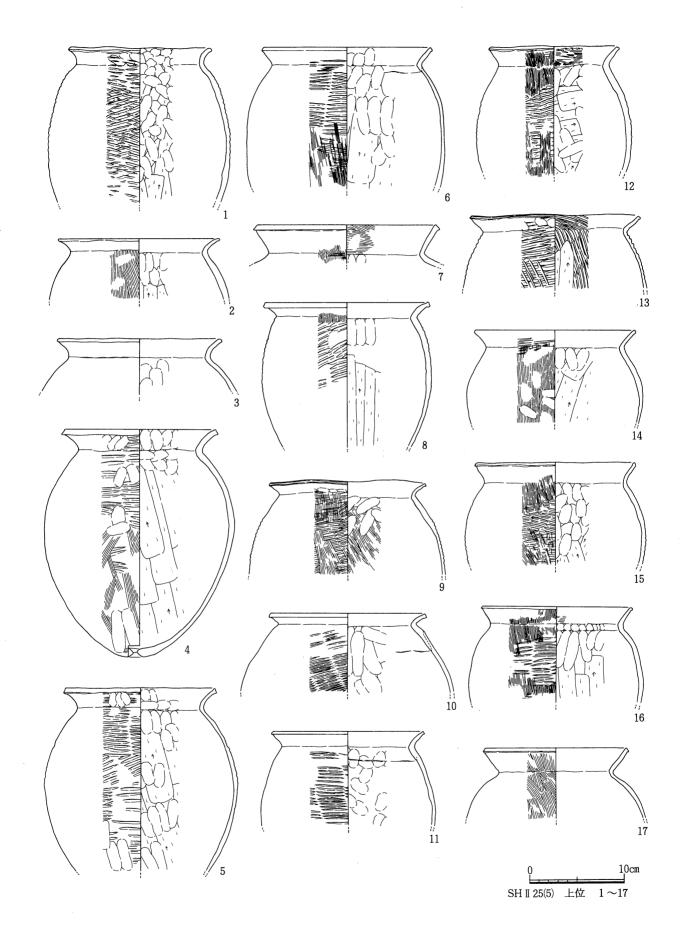
第106図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器34



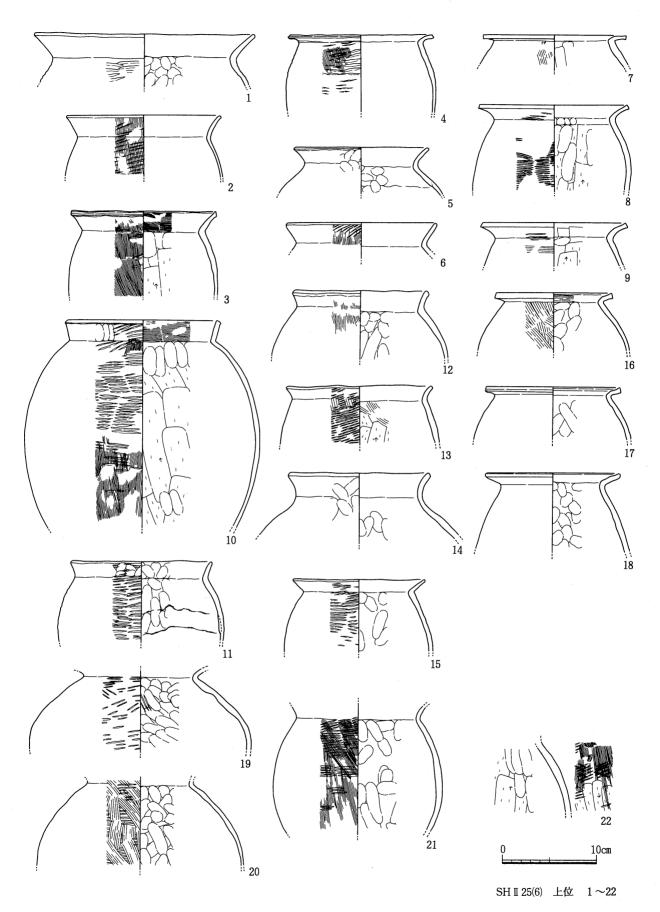
第107図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器35



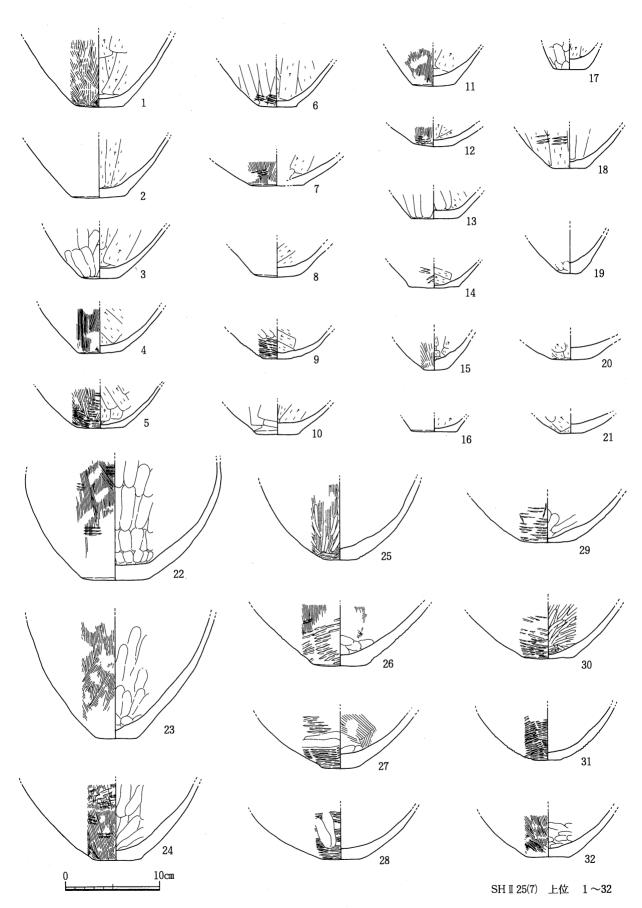
第108図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器36



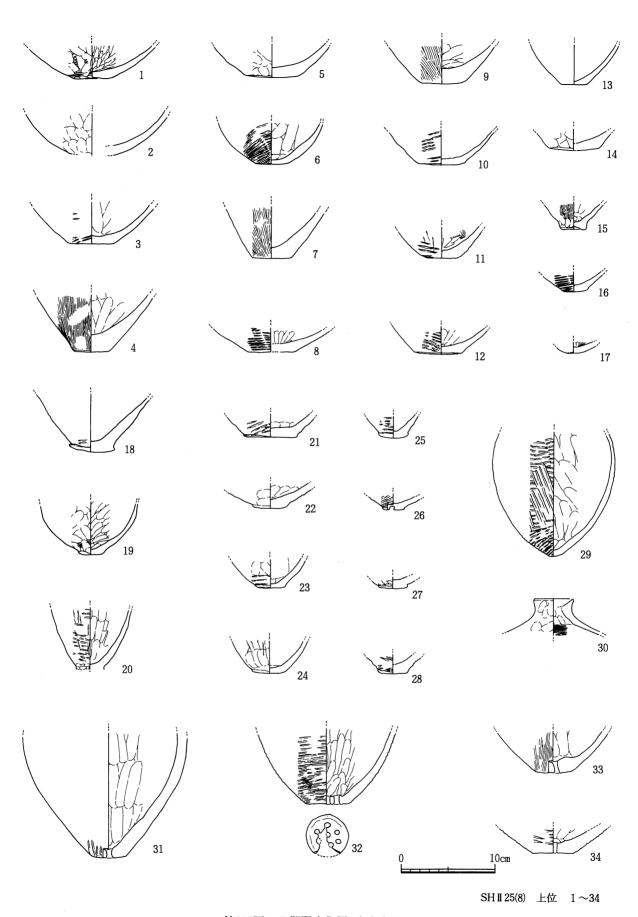
第109図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器37



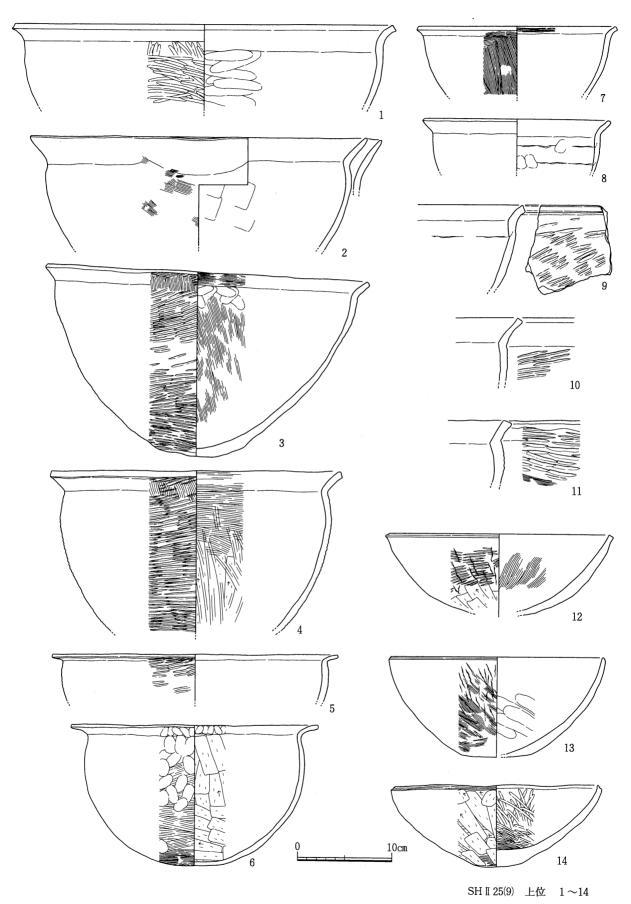
第110図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器38



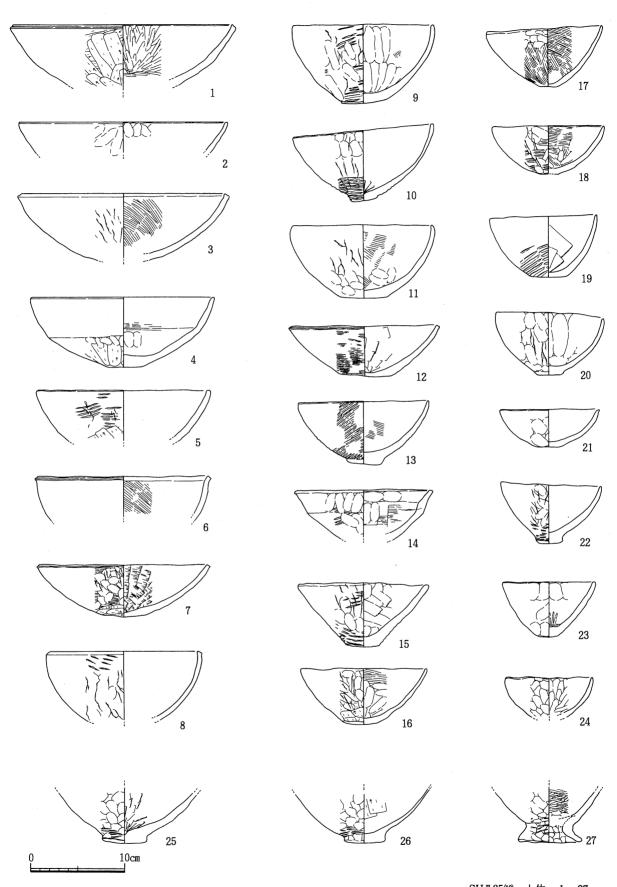
第111図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器39



第112図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器40

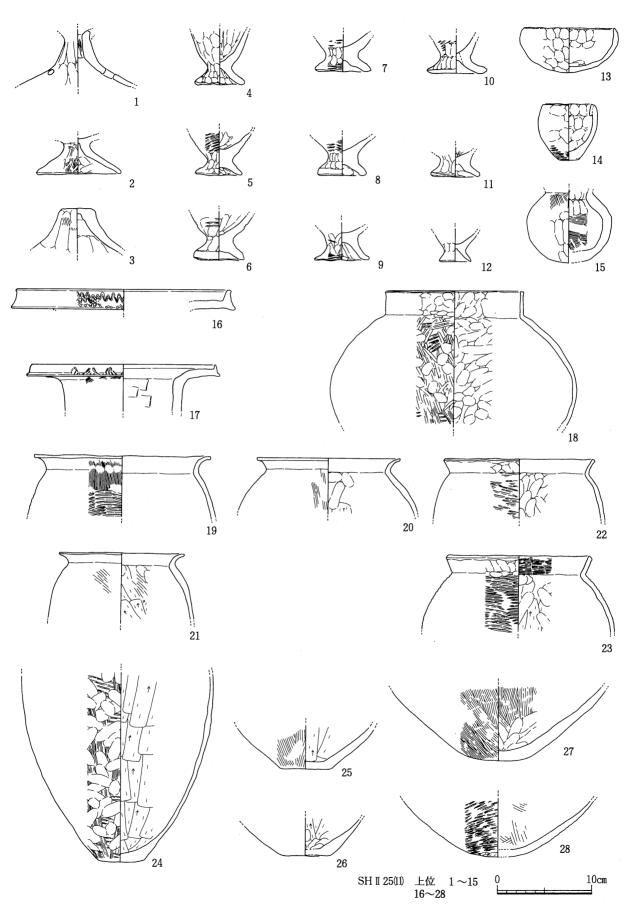


第113図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器41

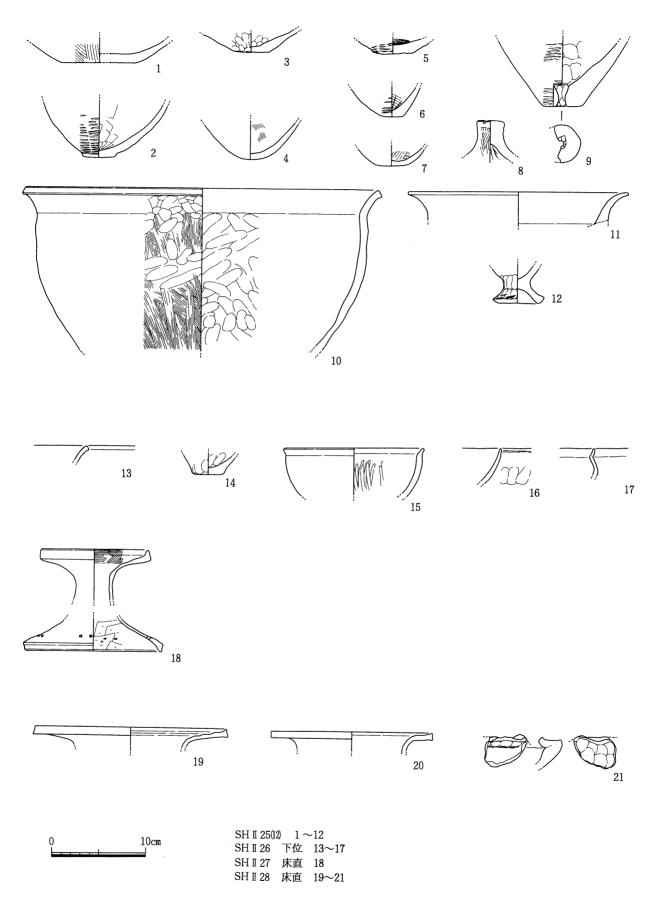


SH II 25(10) 上位 1~27

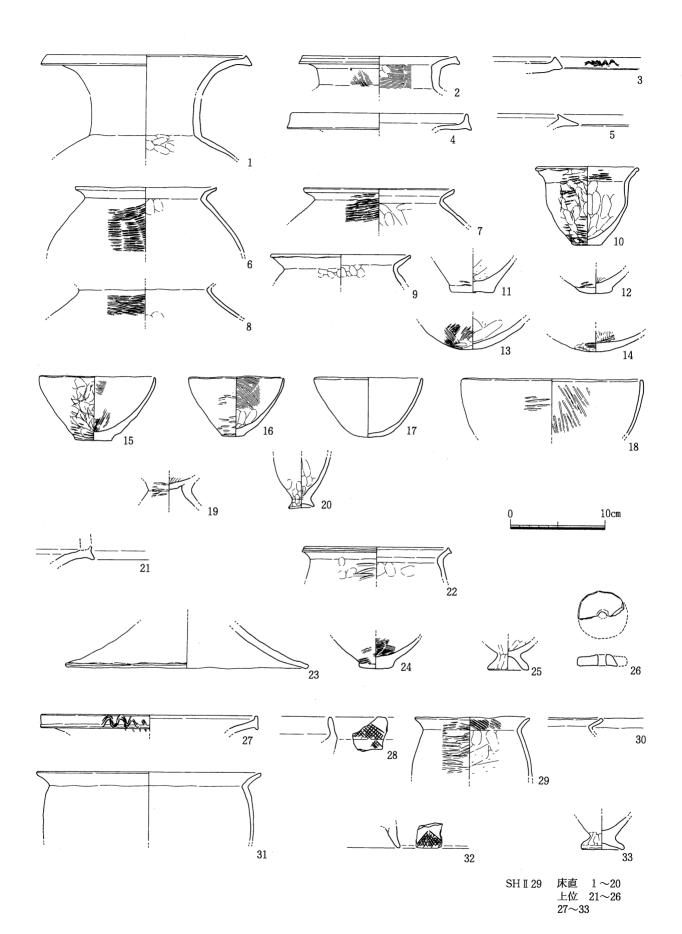
第114図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器42



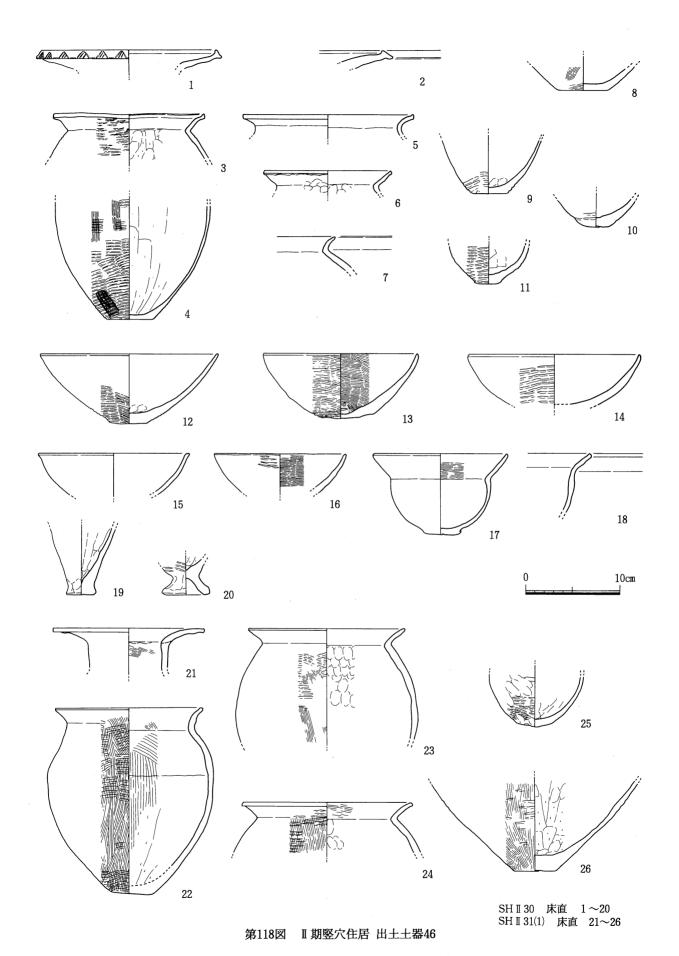
第115図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器43



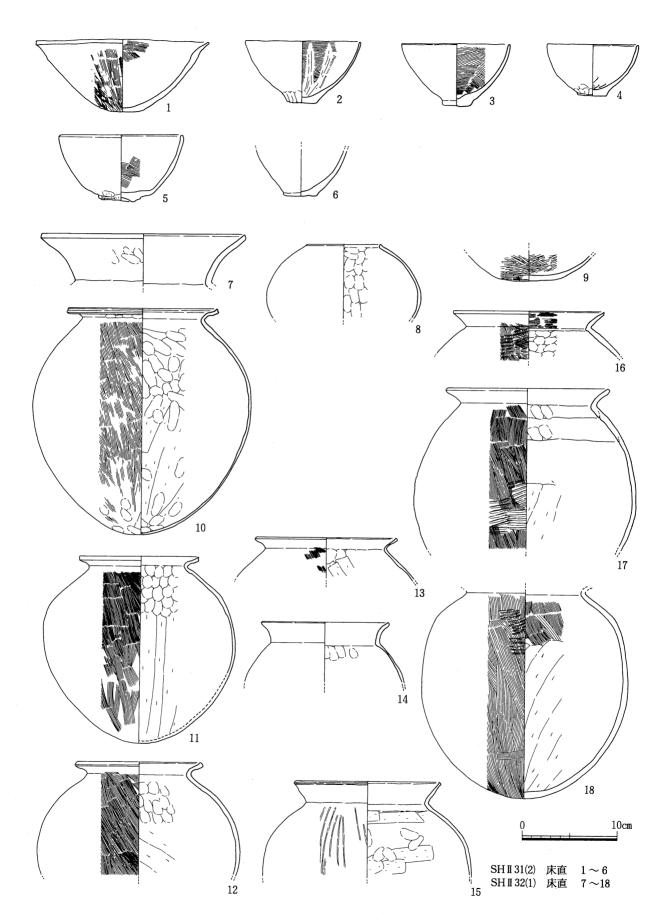
第116図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器44



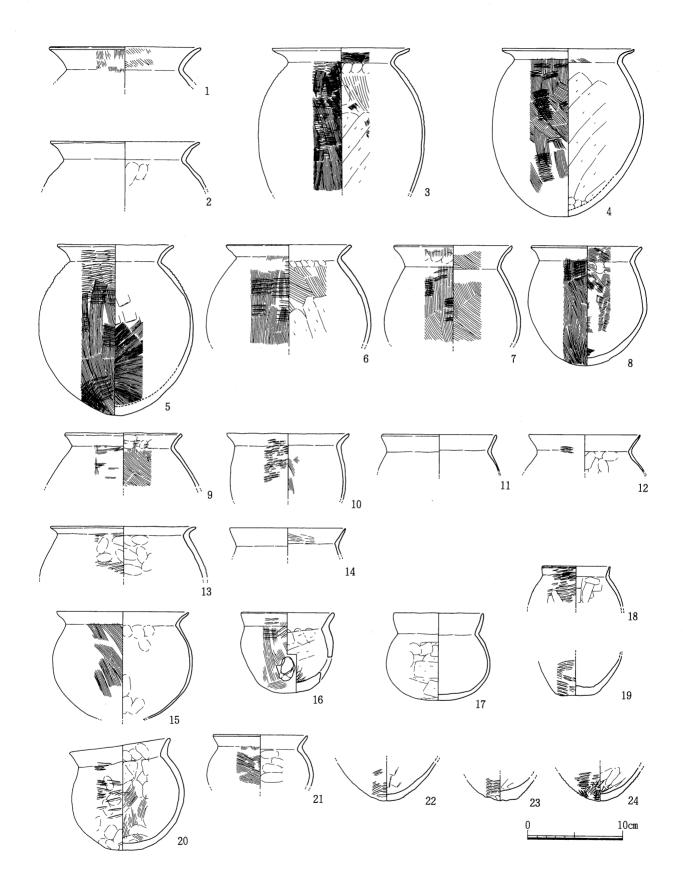
第117図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器45



-156-

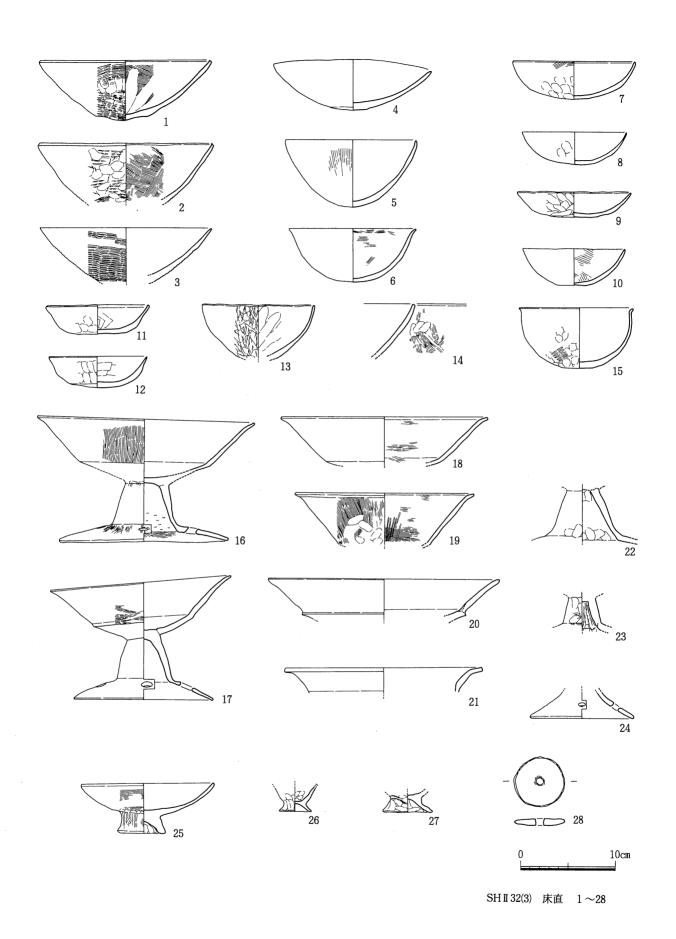


第119図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器47

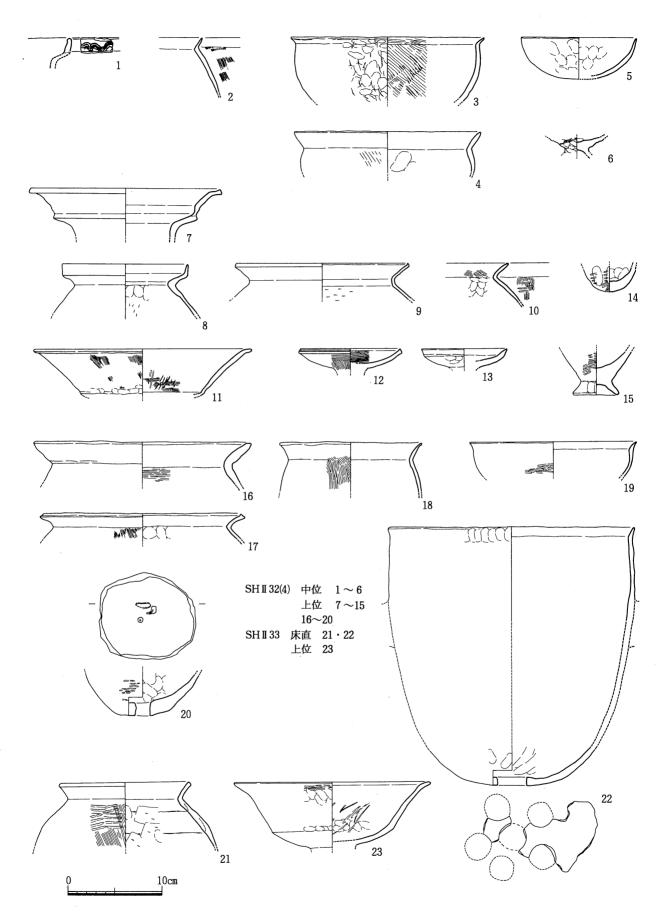


SH II 32(2) 床直 1~24

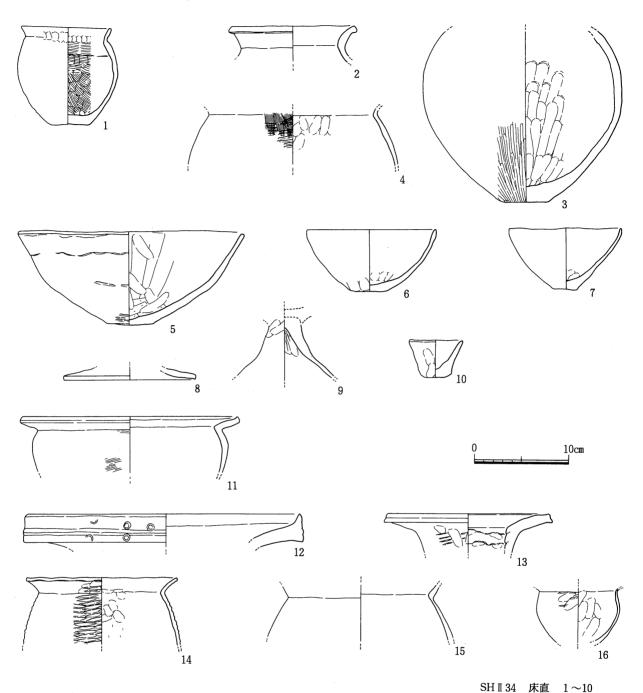
第120図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器48



第121図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器49

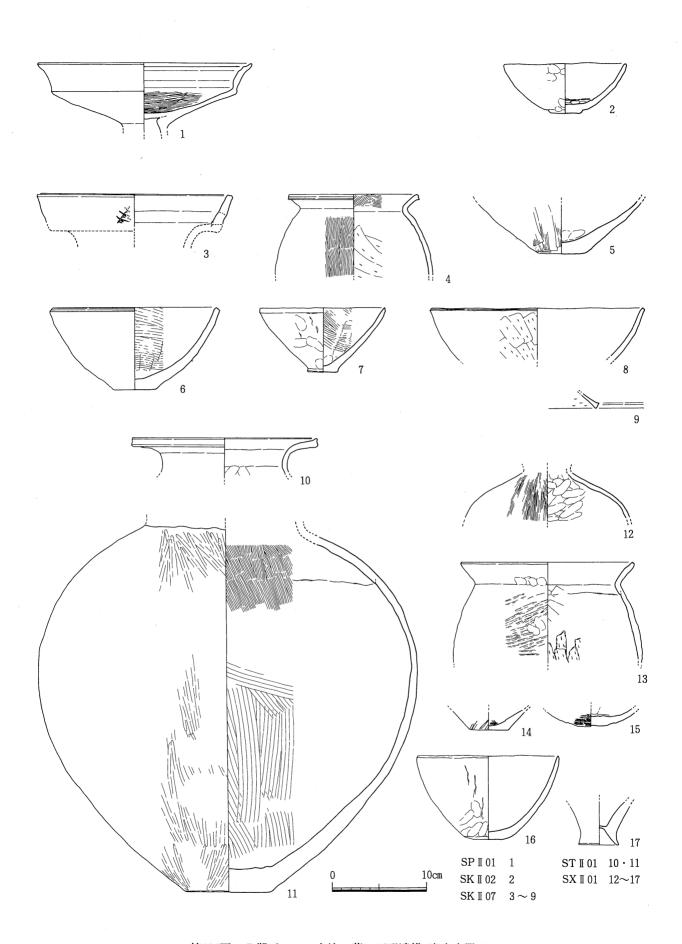


第122図 Ⅱ期竪穴住居 出土土器50

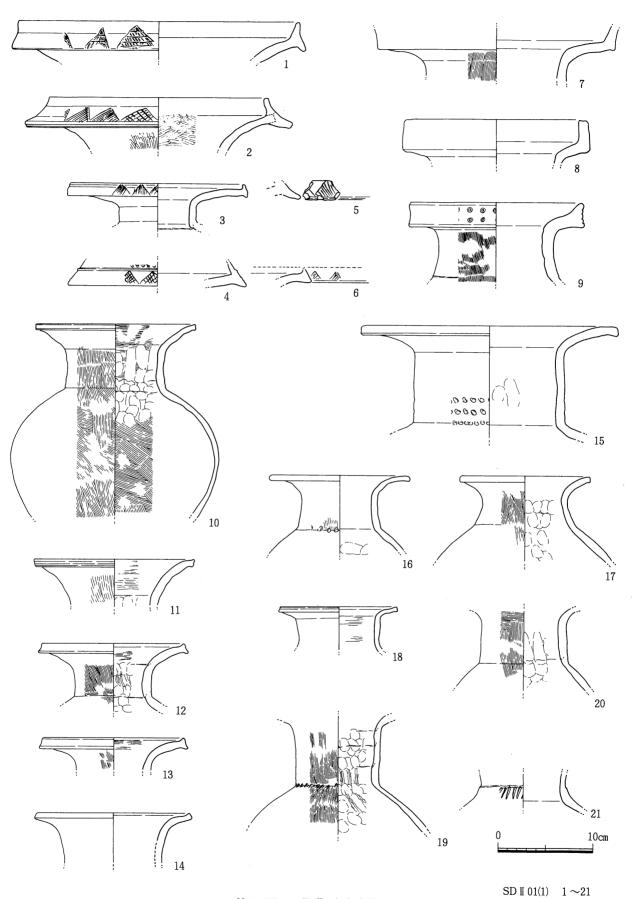


SH II 34 床直 1~10 上位 11 12~16

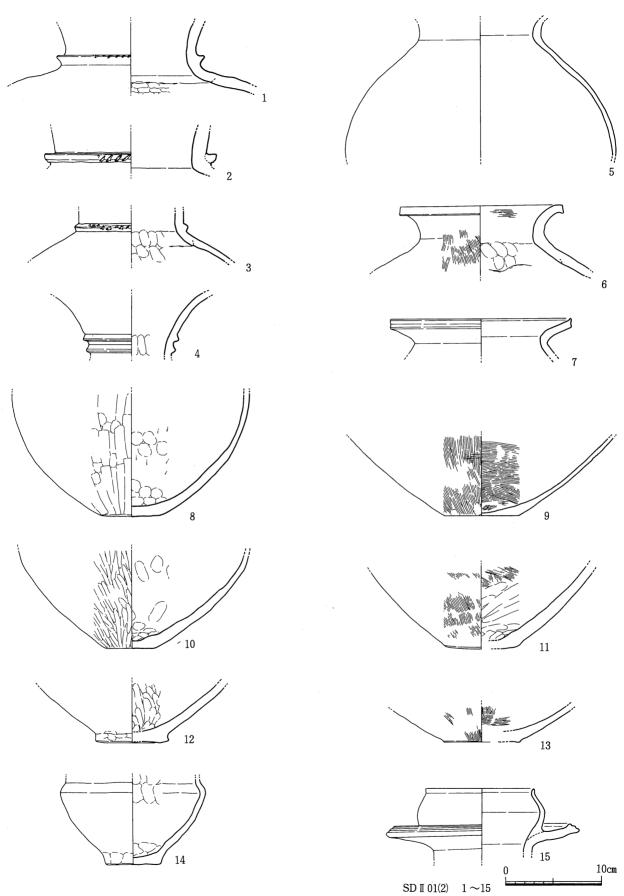
第123図 『期竪穴住居 出土土器51



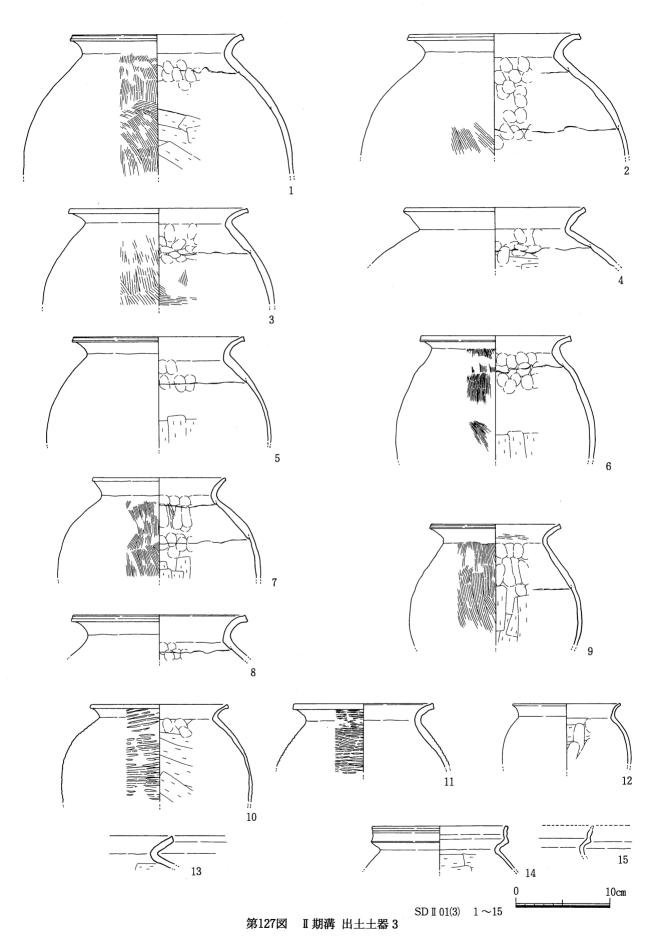
第124図 『期ピット,土坑,墓,不明遺構 出土土器 1



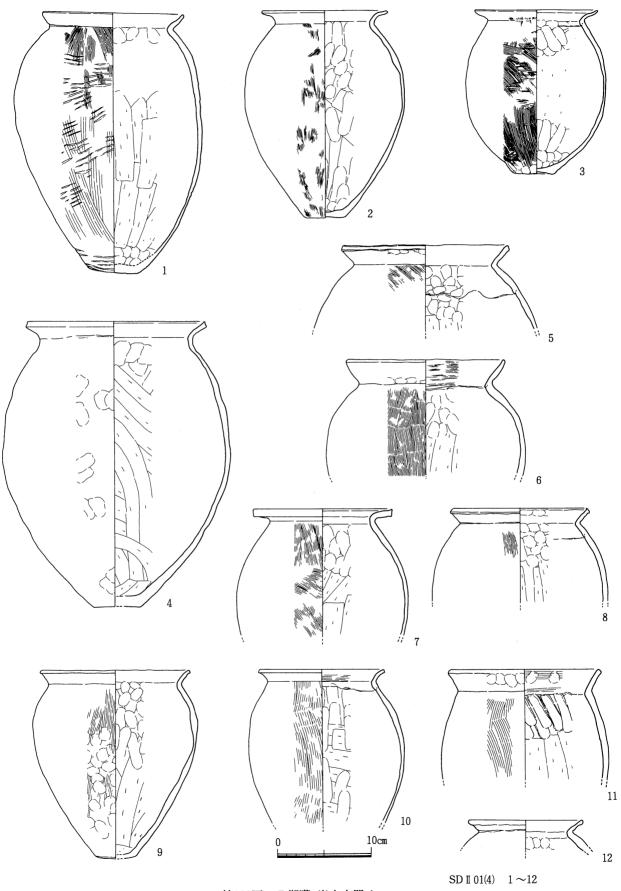
第125図 Ⅱ期溝 出土土器 1



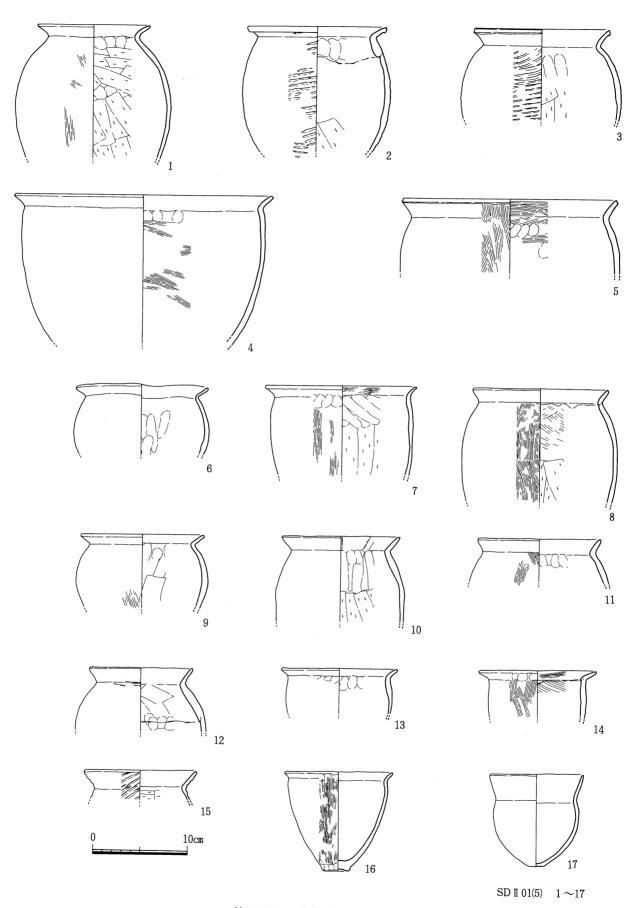
第126図 Ⅱ期溝 出土土器 2



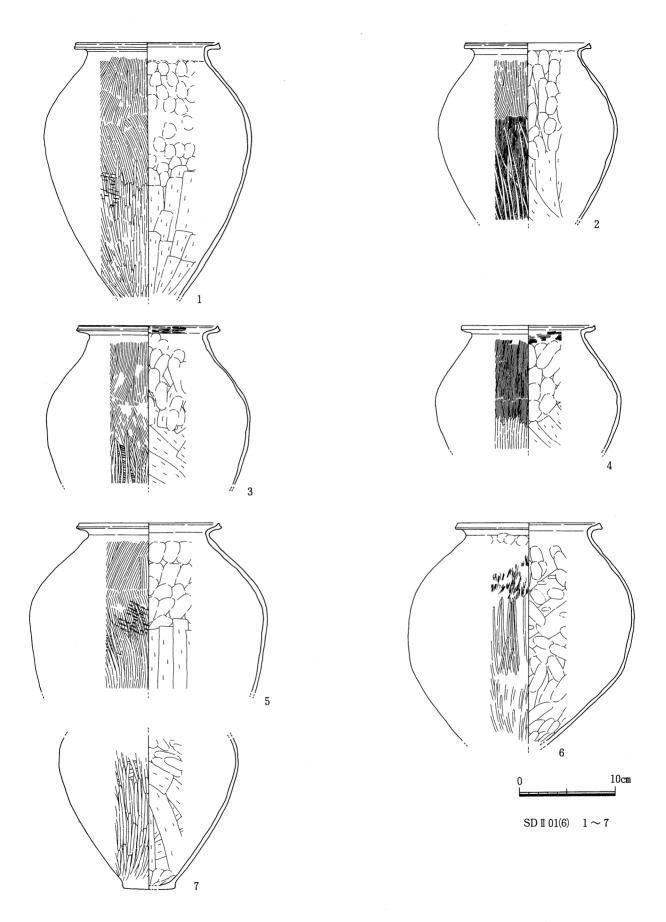
-165-



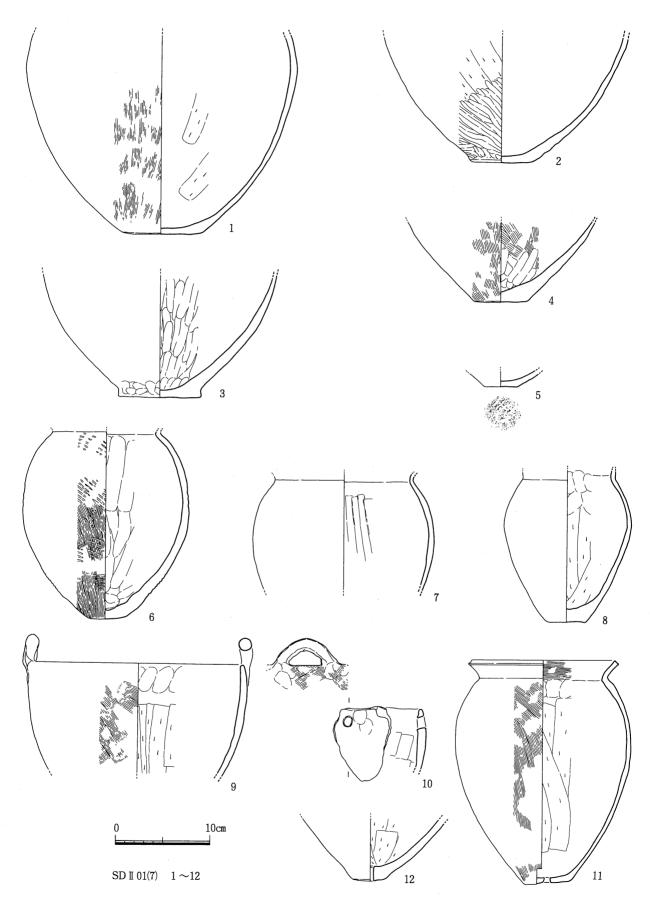
第128図 Ⅱ期溝 出土土器 4



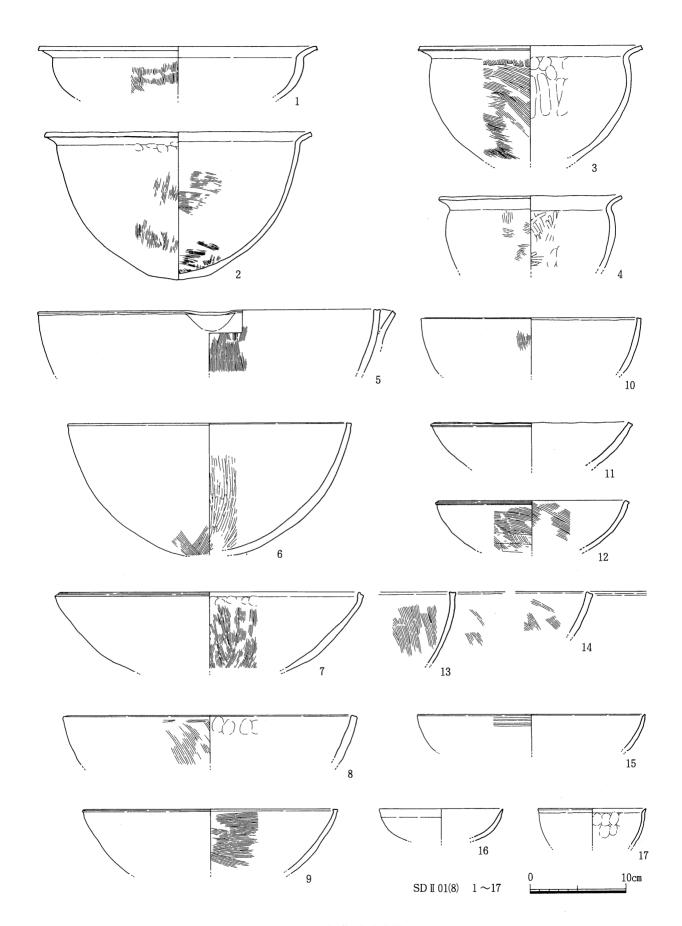
第129図 Ⅱ期溝 出土土器 5



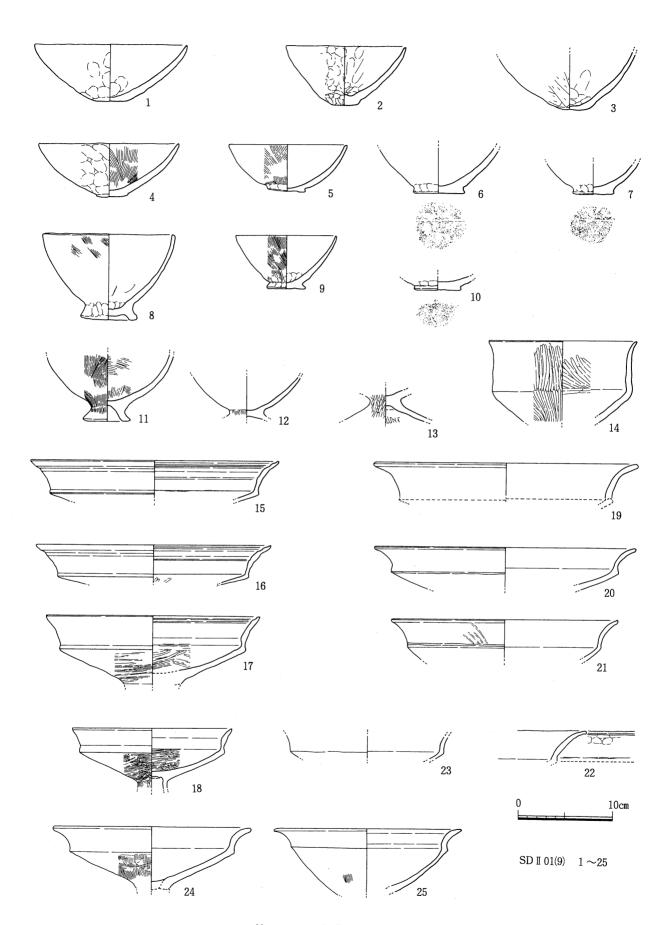
第130図 Ⅱ期溝 出土土器 6



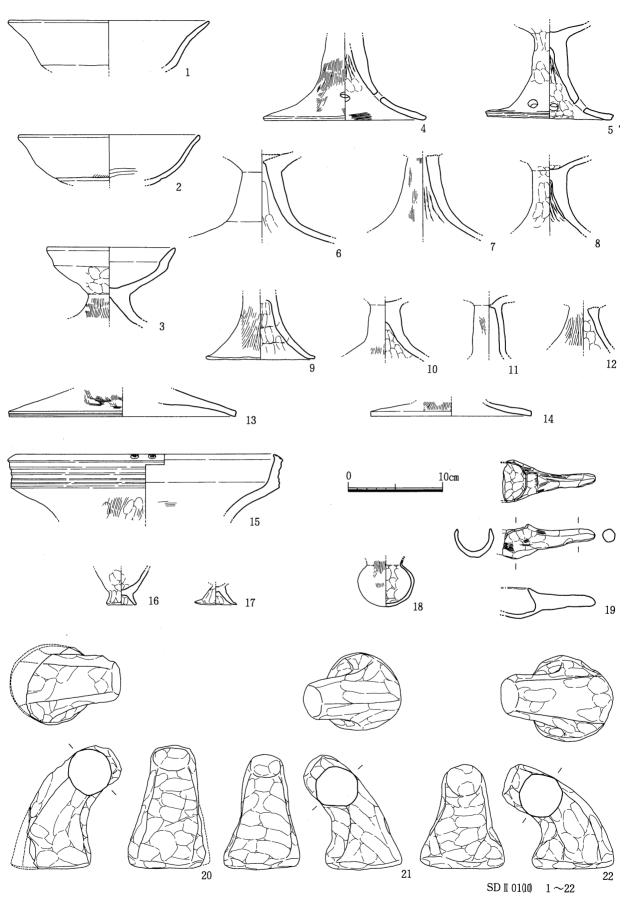
第131図 Ⅱ期溝 出土土器 7



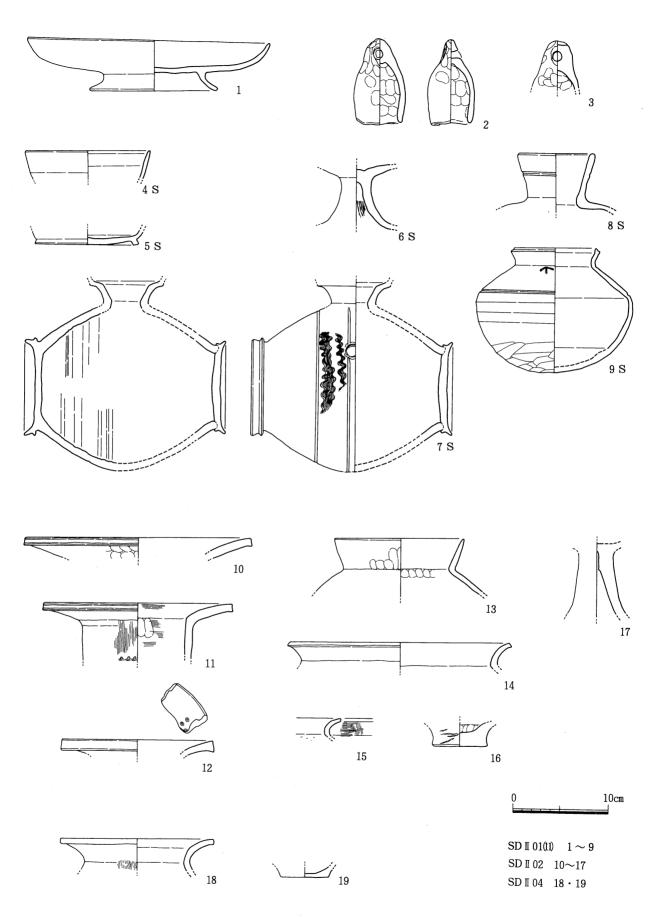
第132図 Ⅱ期溝 出土土器 8



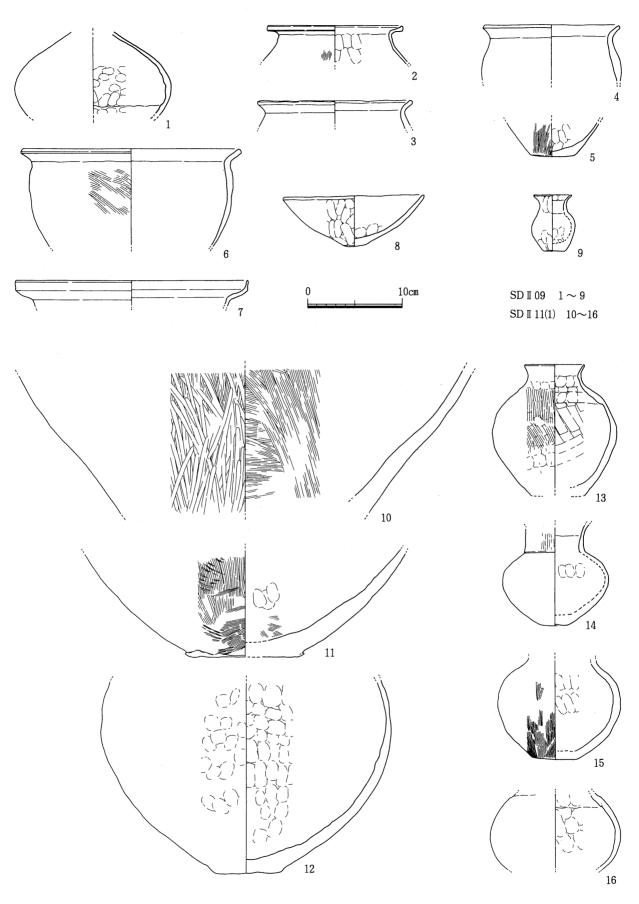
第133図 Ⅱ期溝 出土土器 9



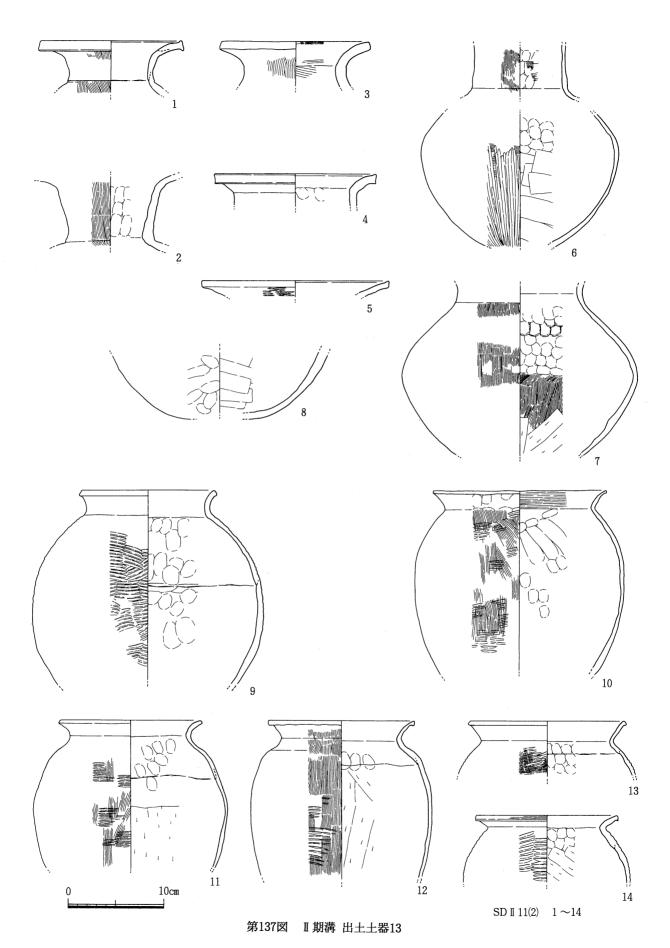
第134図 Ⅱ期溝 出土土器10



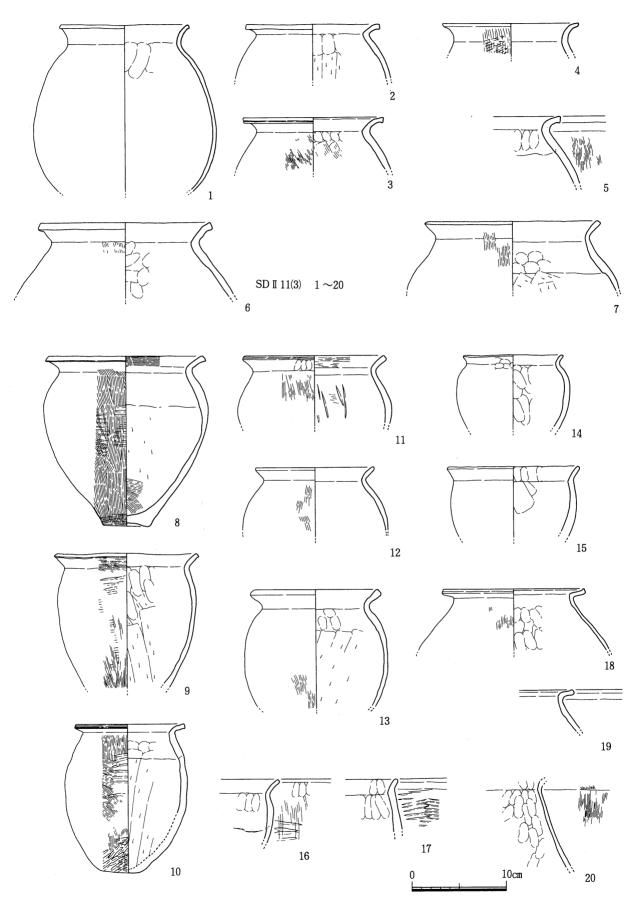
第135図 Ⅱ期溝 出土土器11



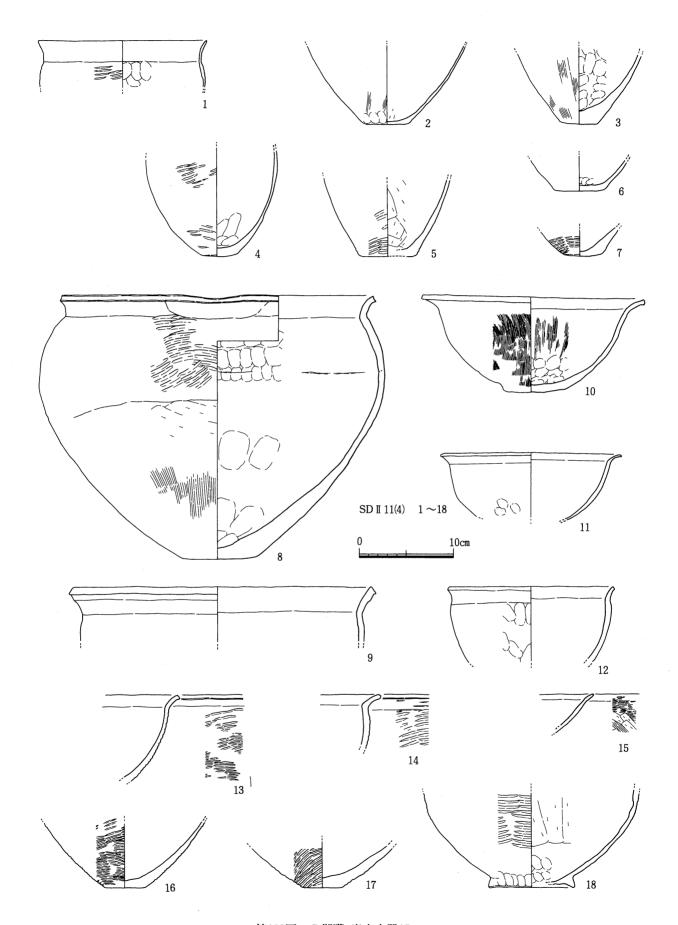
第136図 Ⅱ期溝 出土土器12



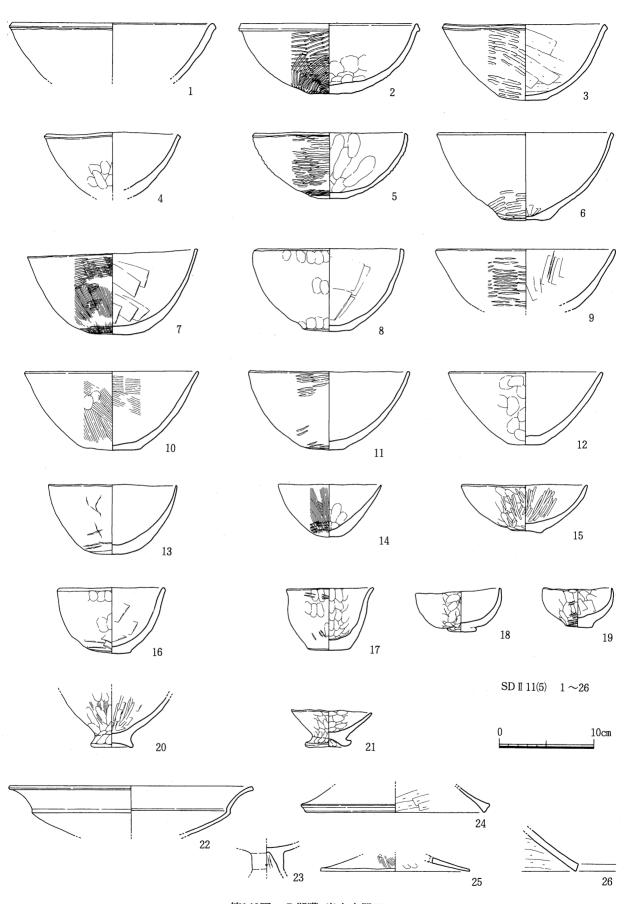
-175-



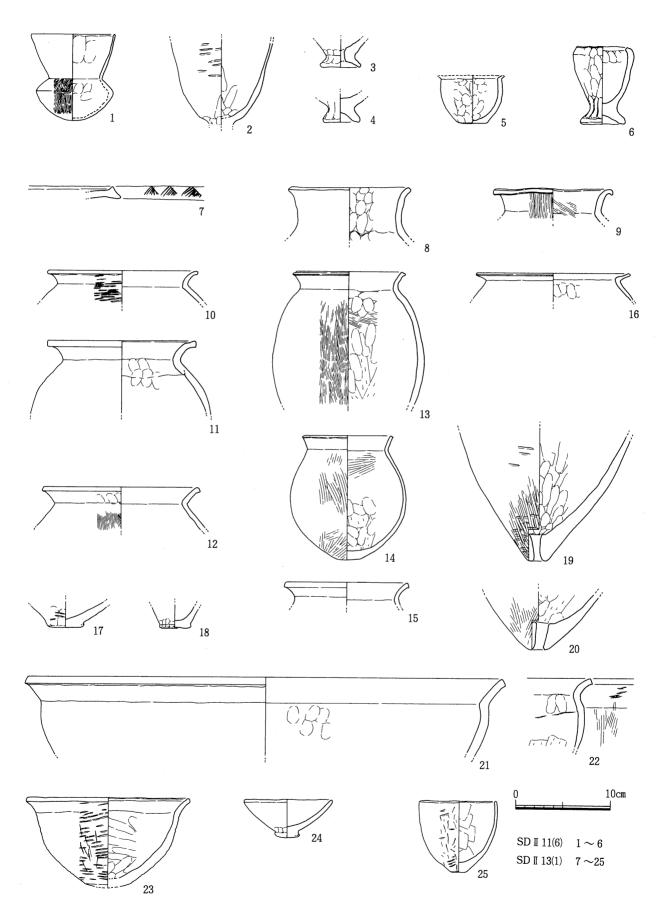
第138図 Ⅱ期溝 出土土器14



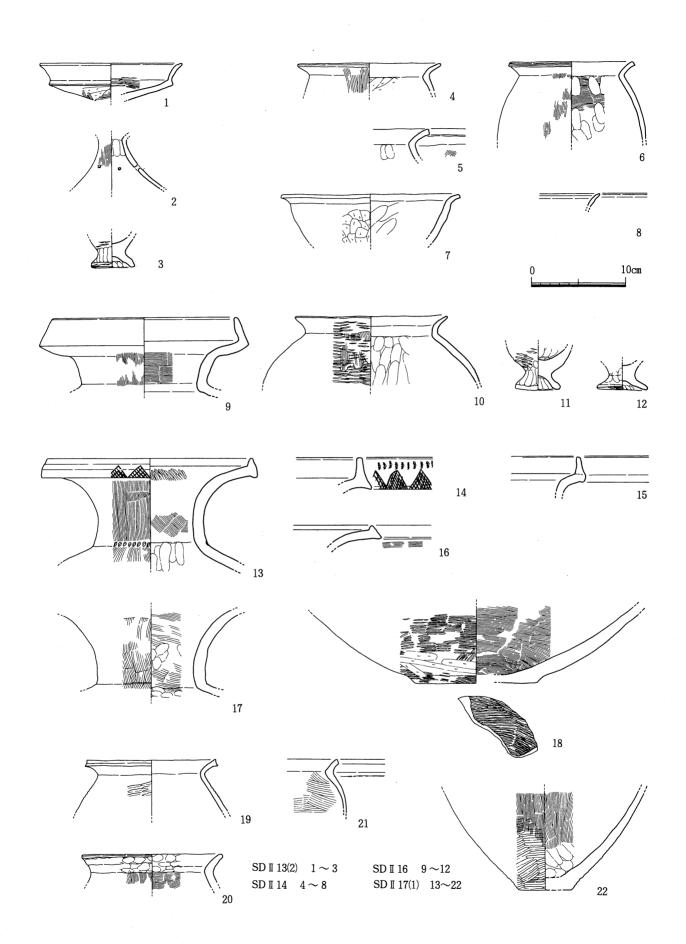
第139図 Ⅱ期溝 出土土器15



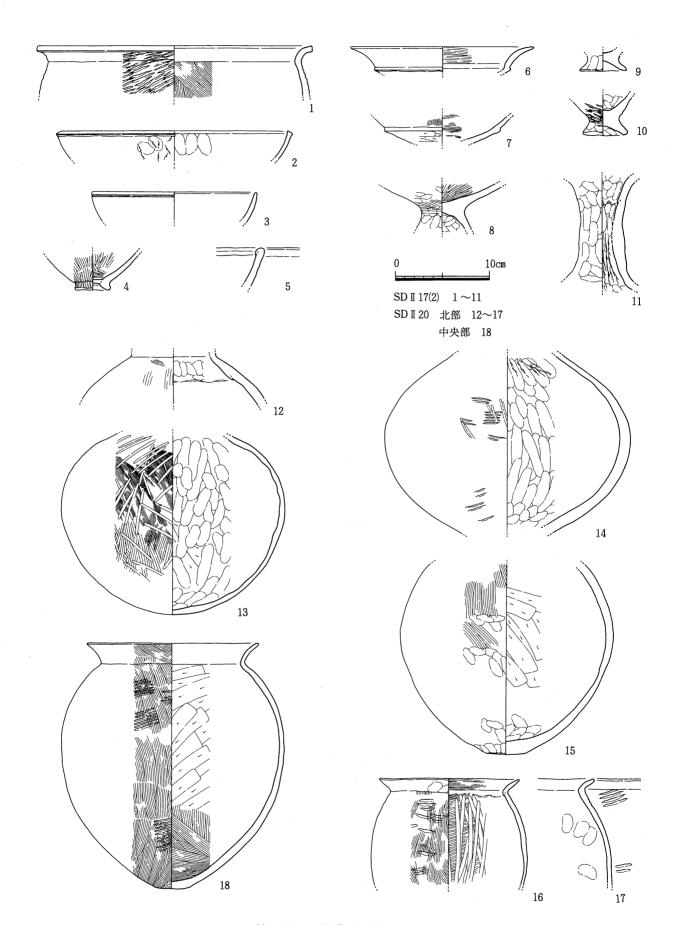
第140図 Ⅱ期溝 出土土器16



第141図 Ⅱ期溝 出土土器17



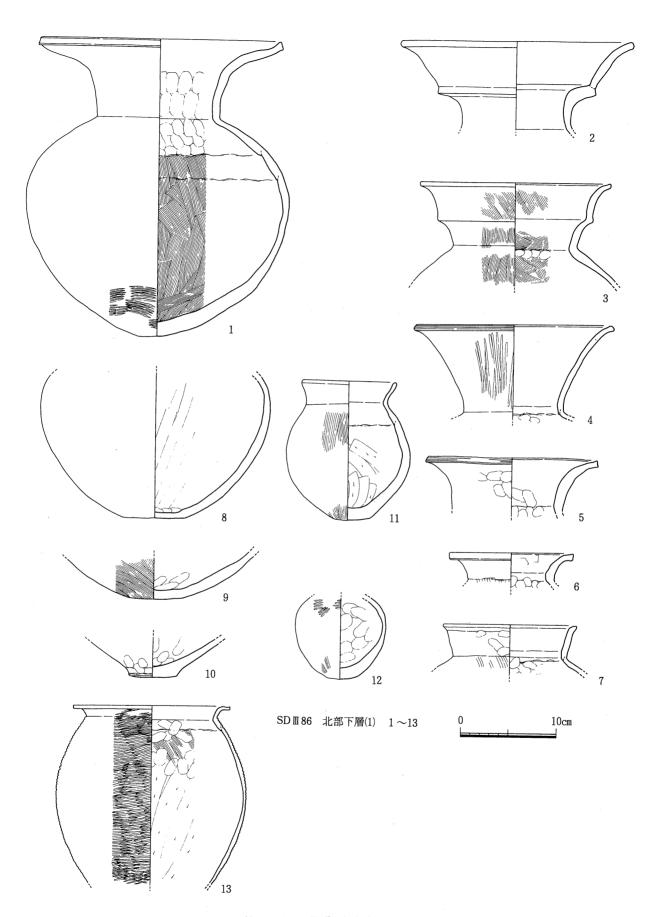
第142図 Ⅱ期溝 出土土器18



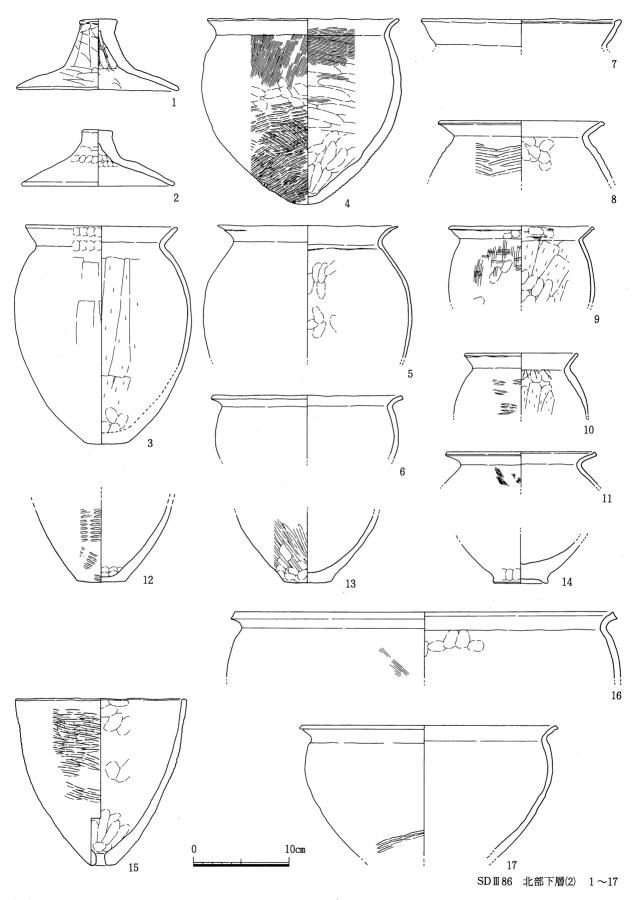
第143図 Ⅱ期溝 出土土器19



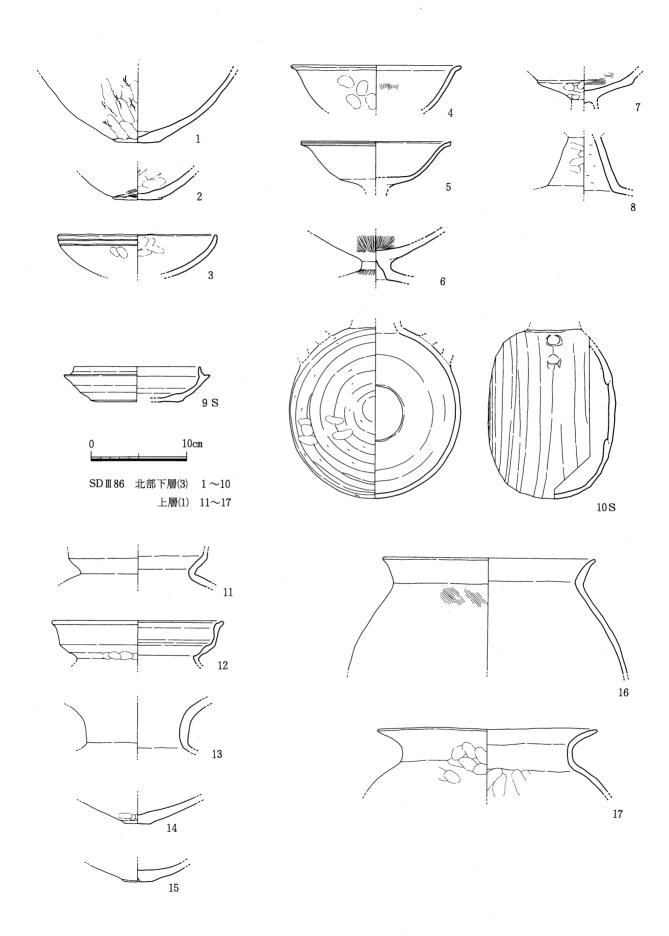
第144図 Ⅱ期溝 出土土器20



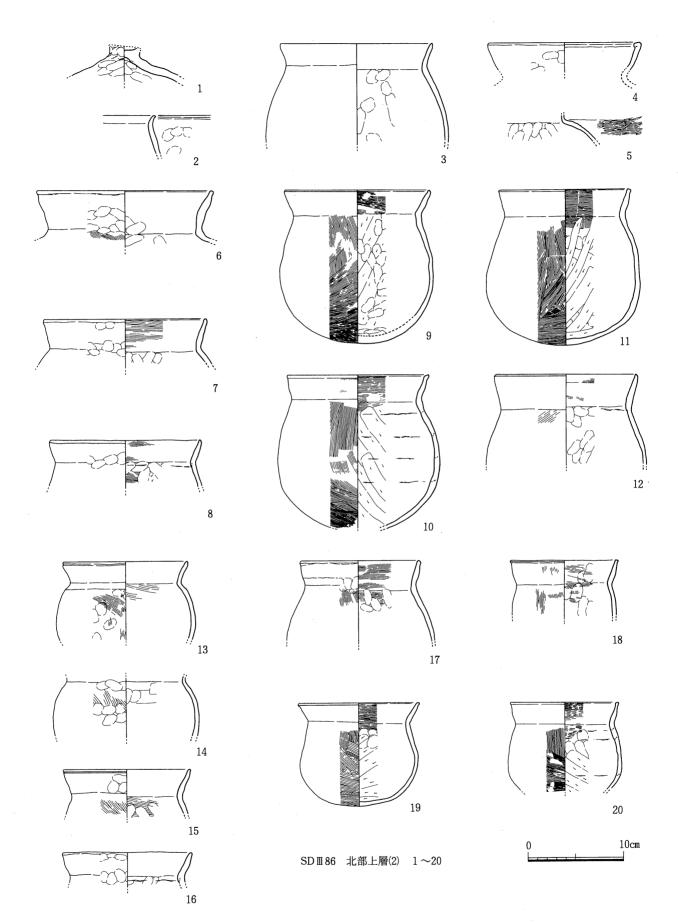
第145図 Ⅲ期溝 出土土器21



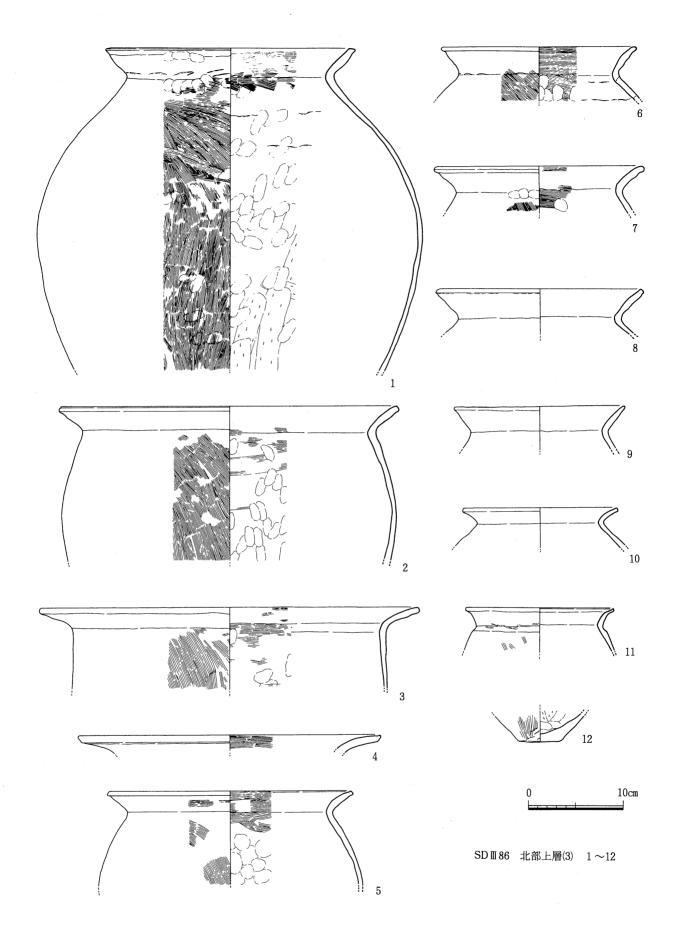
第146図 Ⅲ期溝 出土土器22



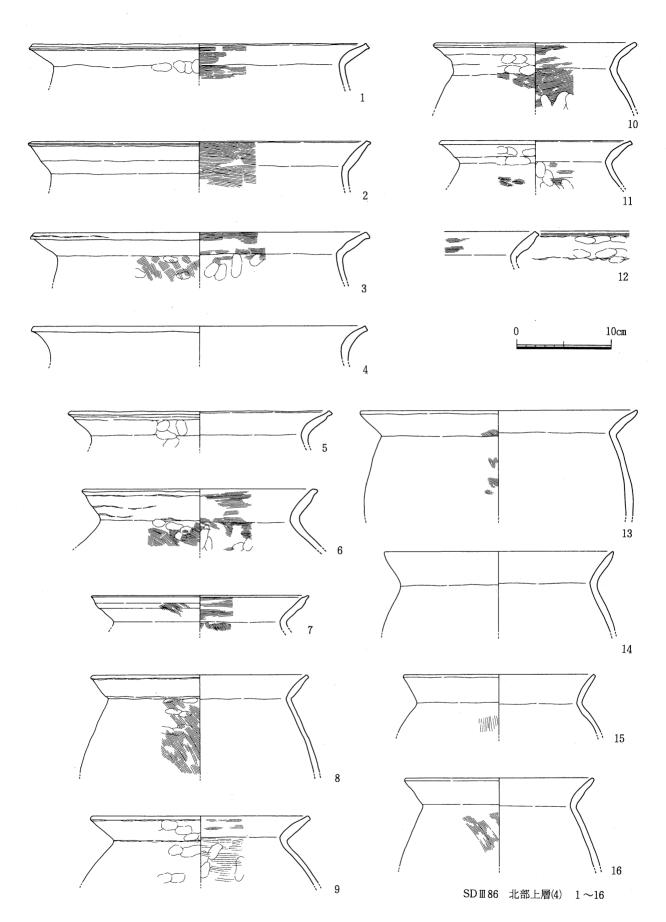
第147図 Ⅲ期溝 出土土器23



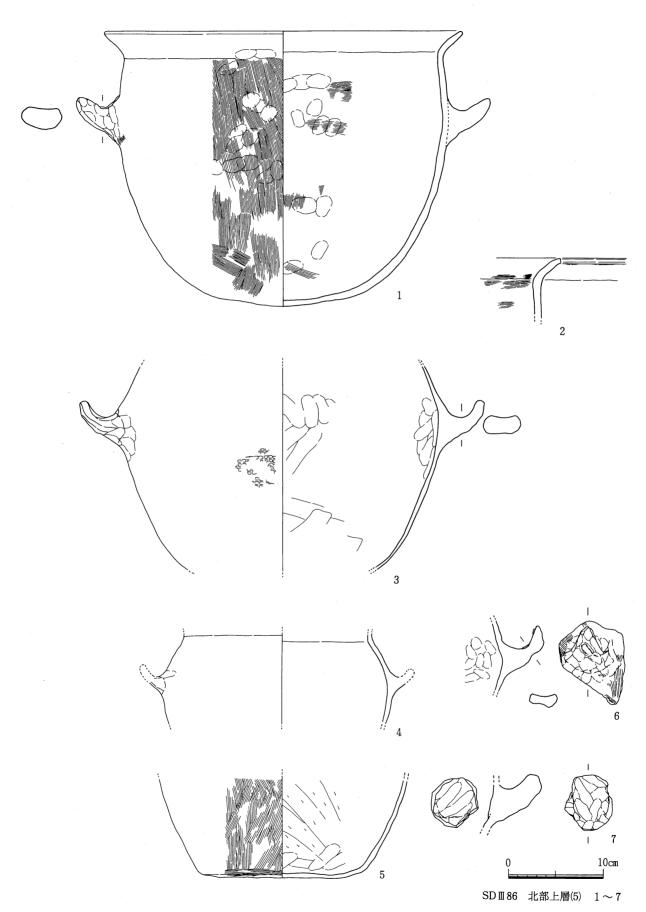
第148図 Ⅲ期溝 出土土器24



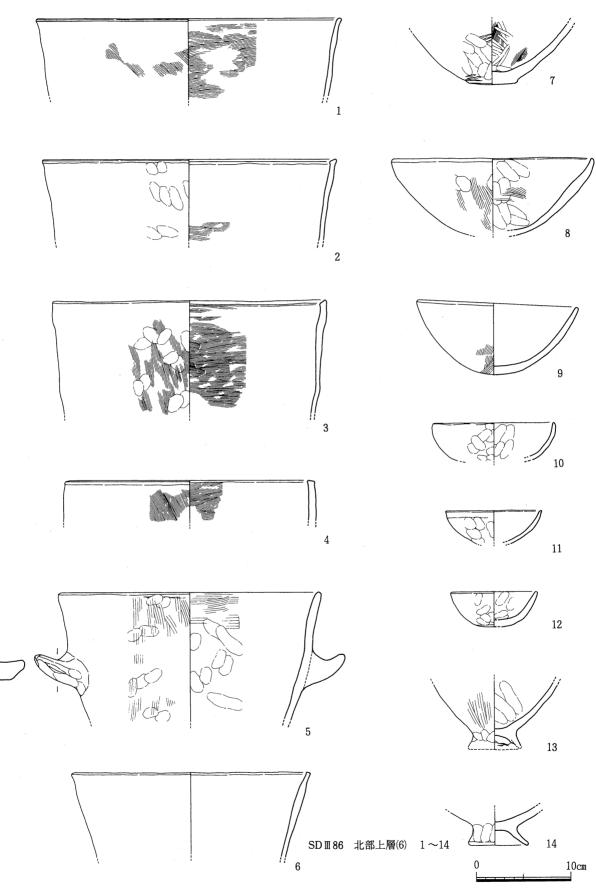
第149図 Ⅲ期溝 出土土器25



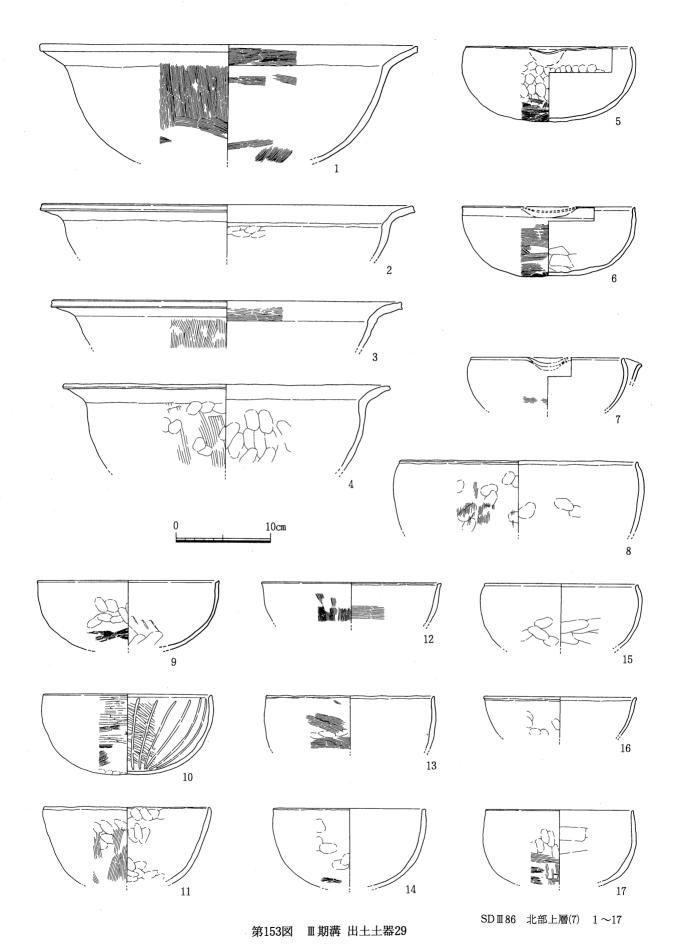
第150図 Ⅲ期溝 出土土器26



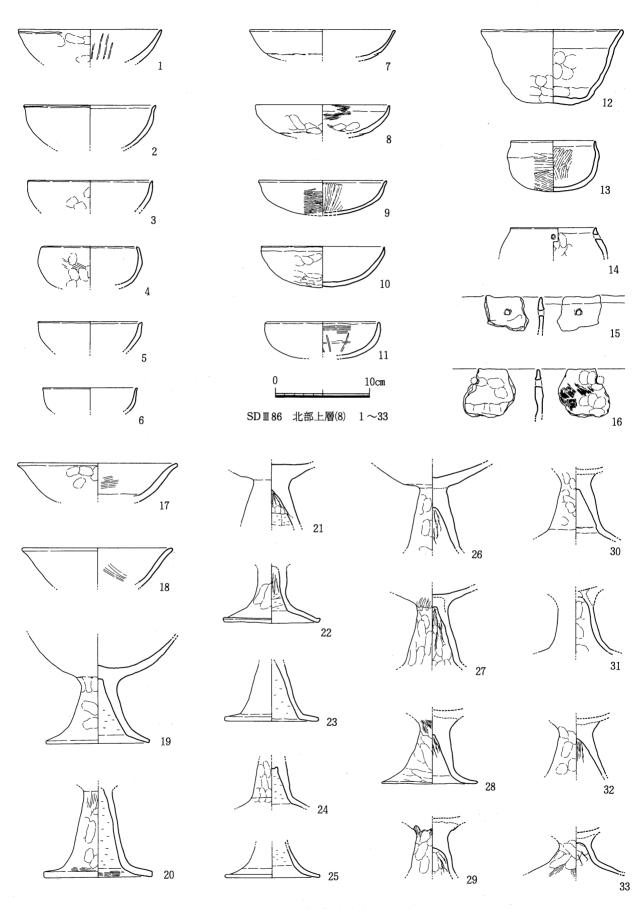
第151図 Ⅲ期溝 出土土器27



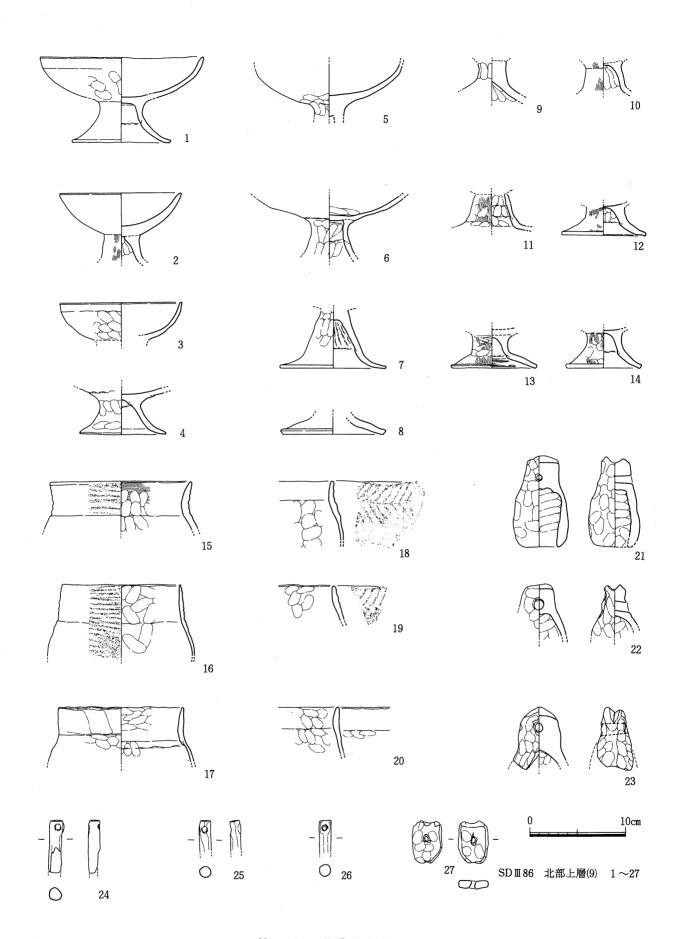
第152図 Ⅲ期溝 出土土器28



-191-



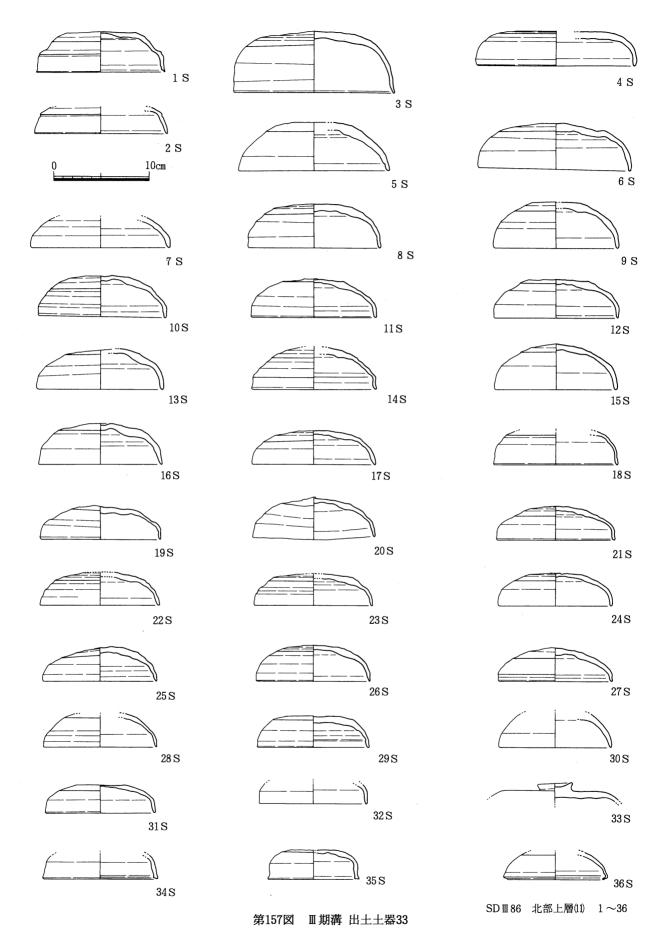
第154図 Ⅲ期溝 出土土器30



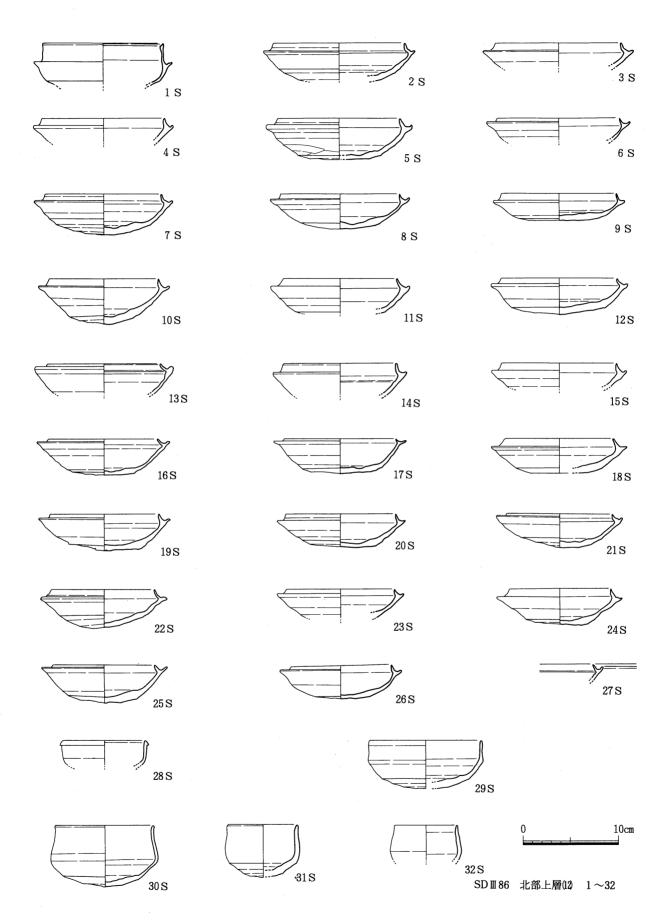
第155図 Ⅲ期溝 出土土器31



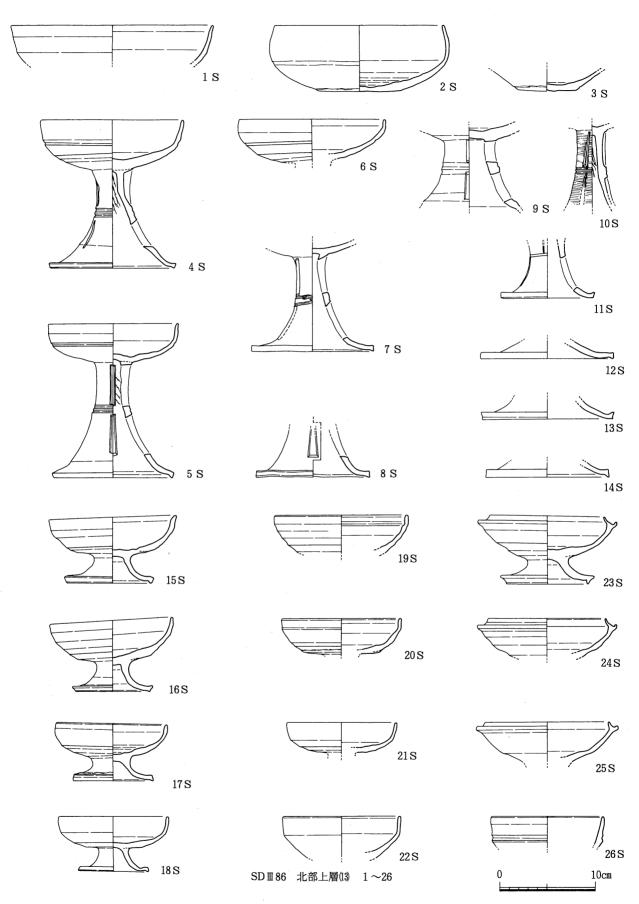
第156図 Ⅲ期溝 出土土器32



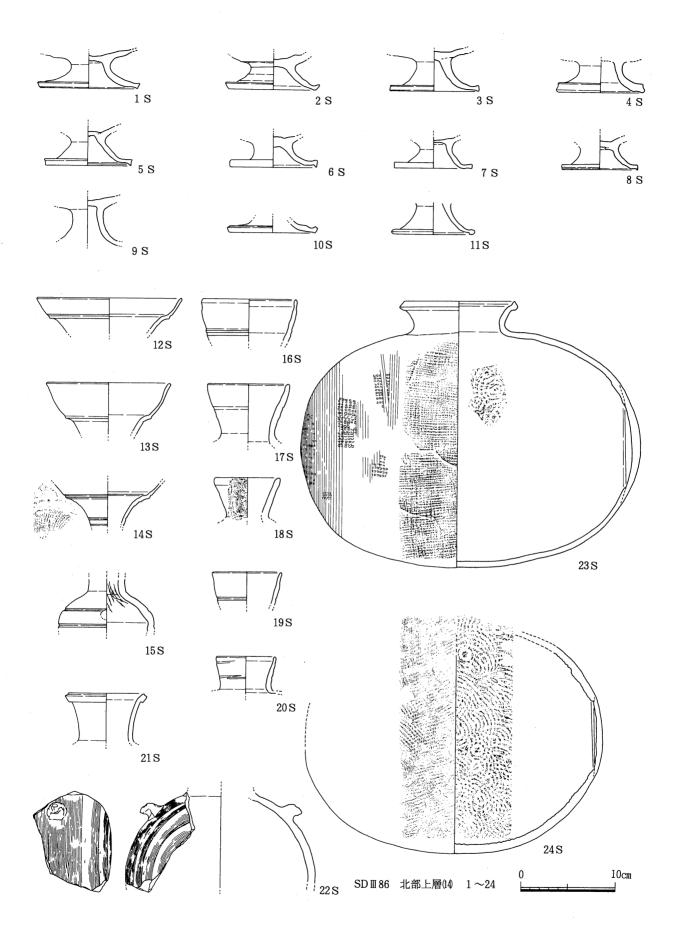
-195-



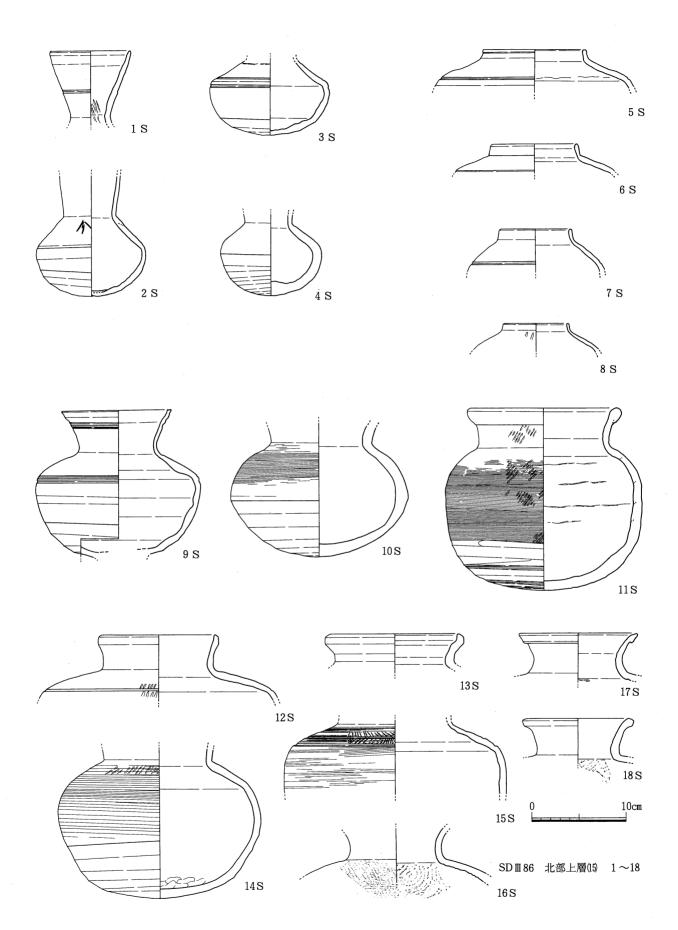
第158図 Ⅲ期溝 出土土器34



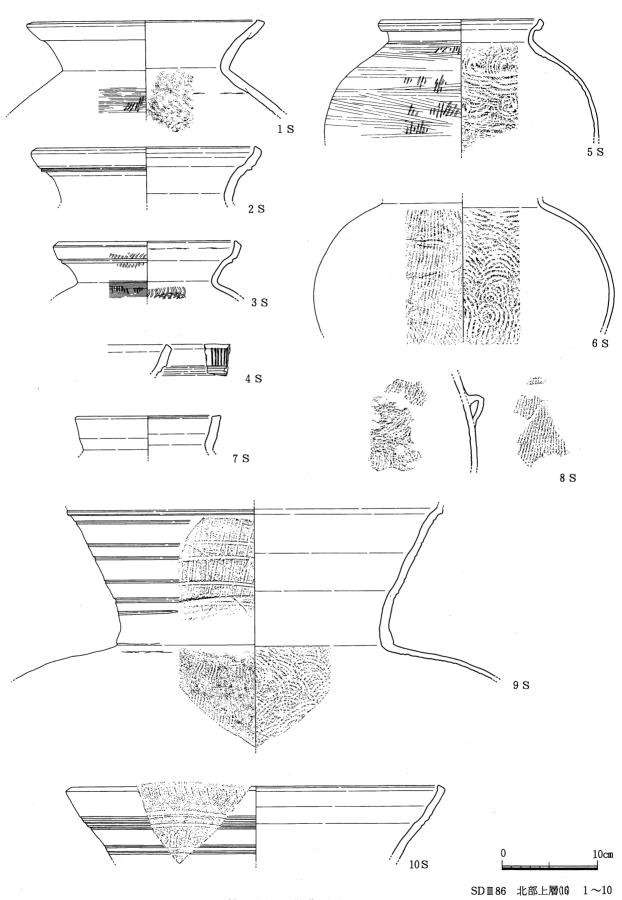
第159図 Ⅲ期溝 出土土器35



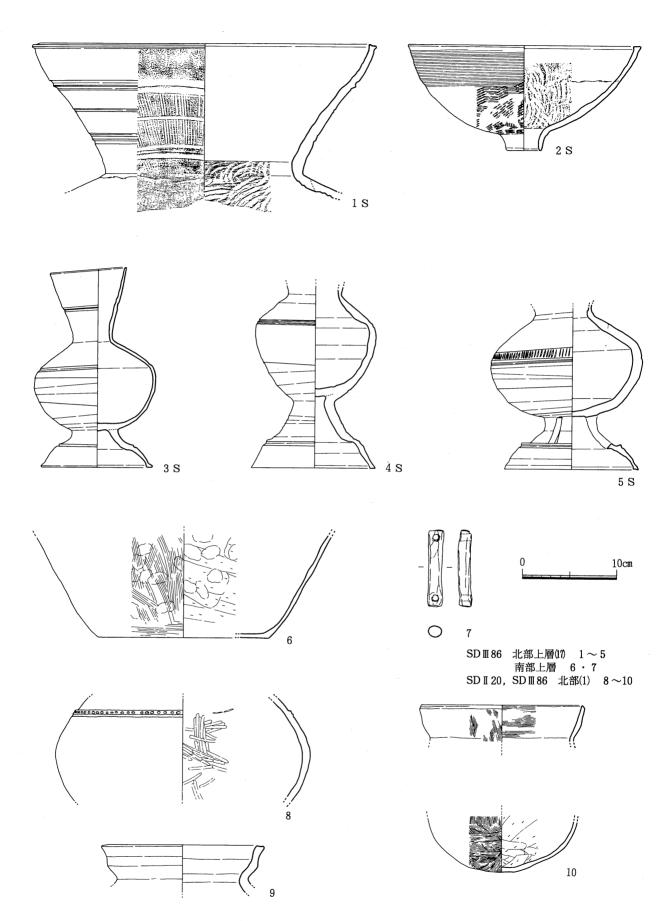
第160図 Ⅲ期溝 出土土器36



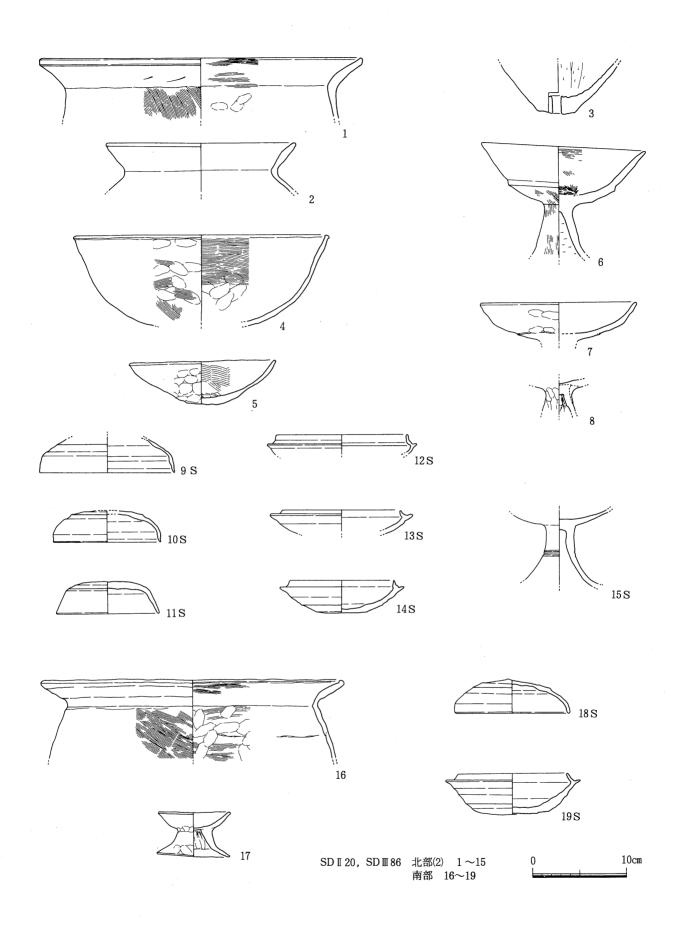
第161図 Ⅲ期溝 出土土器37



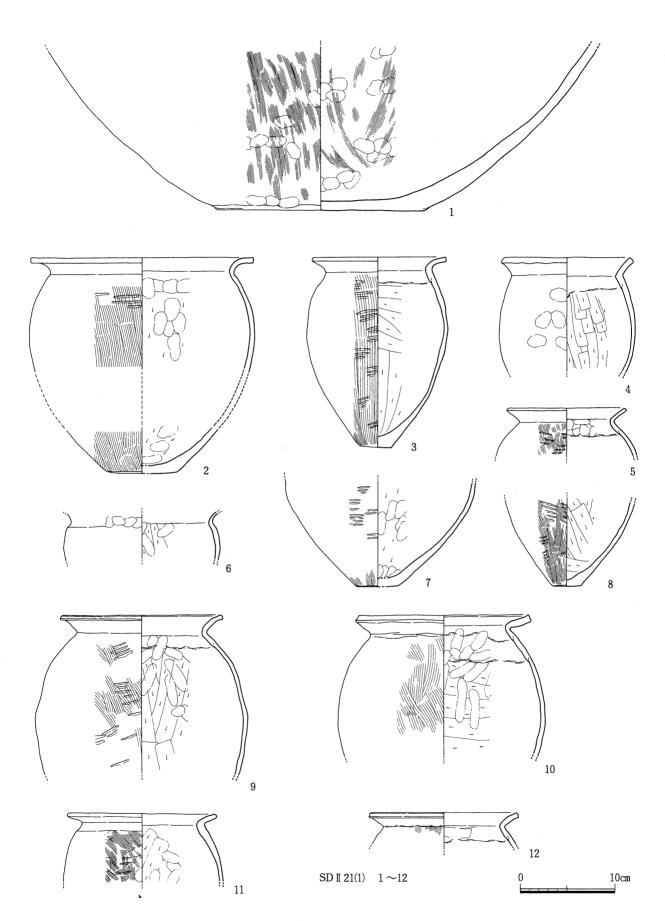
第162図 Ⅲ期溝 出土土器38



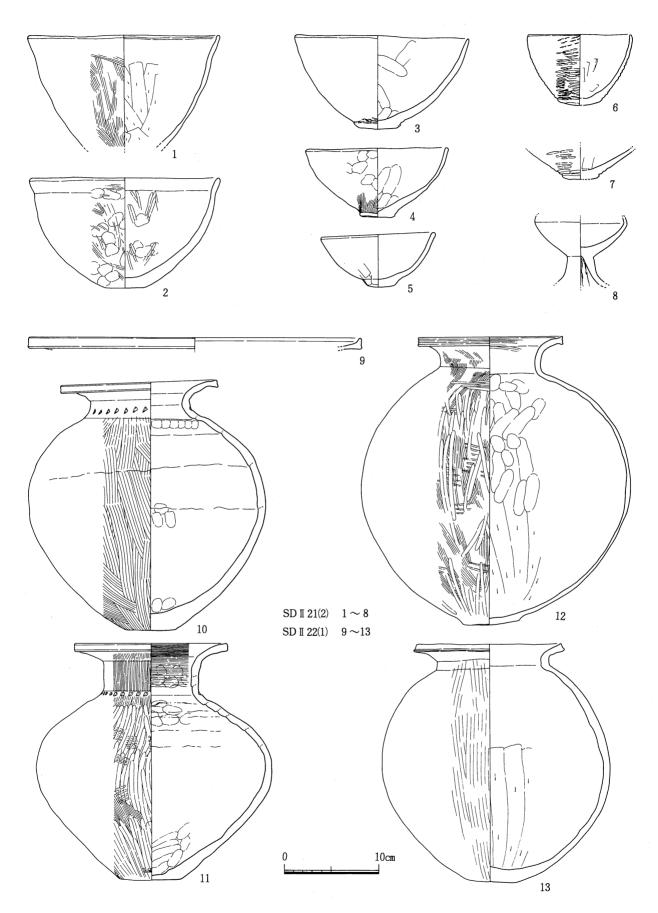
第163図 Ⅱ,Ⅲ期溝 出土土器39



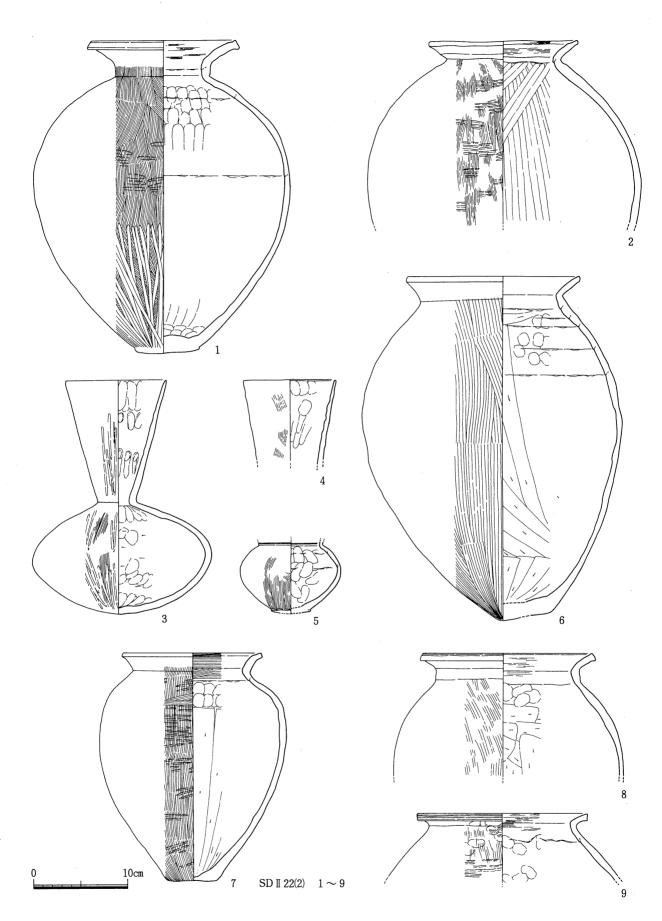
第164図 Ⅱ,Ⅲ期溝 出土土器40



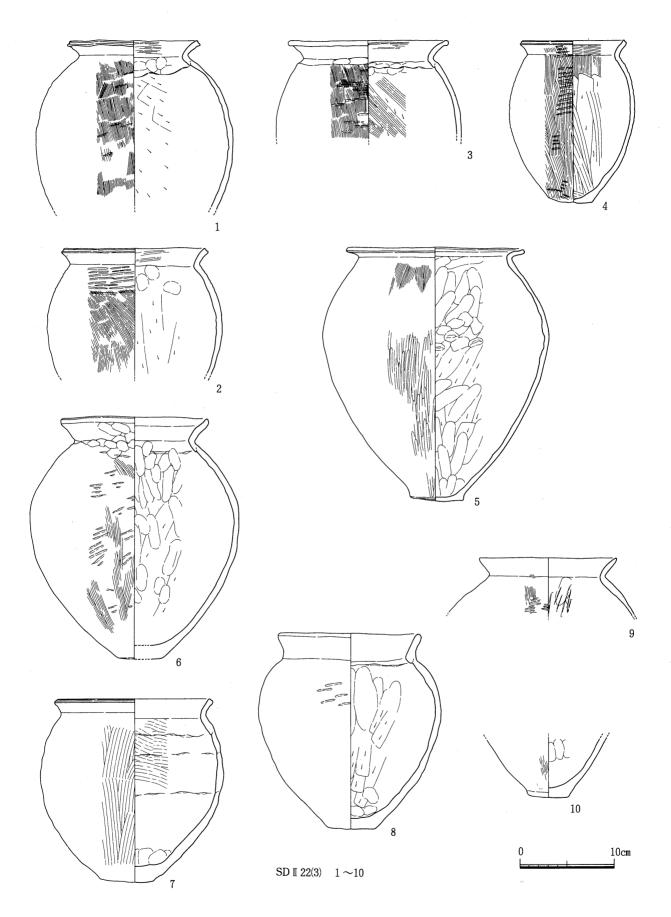
第165図 Ⅱ期溝 出土土器41



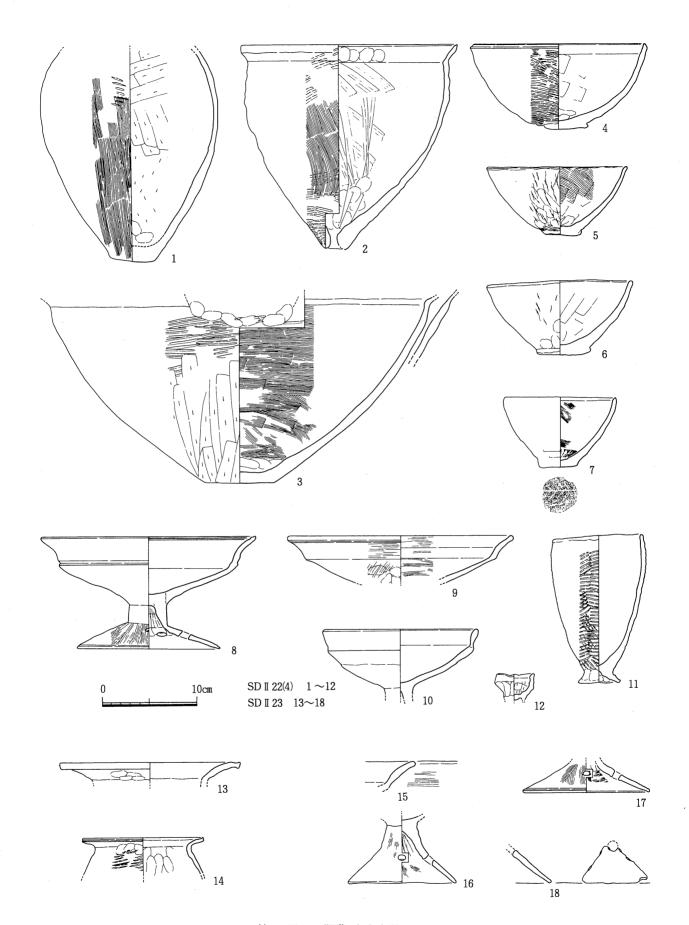
第166図 Ⅱ期溝 出土土器42



第167図 Ⅱ期溝 出土土器43



第168図 Ⅱ期溝 出土土器44



第169図 『期溝 出土土器45

第4節 第Ⅲ期 古墳時代後期~鎌倉時代

1.はじめに

第Ⅲ期の集落は第1~4 微高地全域に展開する。集落域は、Ⅱ期までの集落が微高地の縁辺部を中心に展開していた小規模な集落に対して、この時期になれば微高地の中央部にまでに拡がる、比較的規模の大きな集落である。なお、平安時代後期には、微高地の周辺に展開していた自然河川は概ね埋没し、現地形の原形が形成される。そして、集落はその上にも拡がる。

当期に最低限定できる主要な遺構を微高地単位で集計すれば,第1 微高地-竪穴住居址18・掘立柱建物57・土坑10・墓8・溝38 第2 微高地-竪穴住居址4・掘立柱建物46・井戸1・土坑3・墓2・溝32 第3 微高地-竪穴住居址3・土坑1・溝1 第4 微高地-竪穴住居址34・掘立柱建物193・井戸5・土坑52・墓12・溝124等が確認された。第1~4 微高地の中で,特に第4 微高地上の遺構の集中が顕著である。

これらの遺構の中で第1・2・4 微高地上には、6~8世紀の比較的規模の大きな掘立柱建物が数棟 単位で企画配置を成し展開している。Ⅲ期の下川津集落を理解する上で重要な一視点に成っている。な お、第2・3 低地帯には奈良時代、第4 低地帯には平安時代の水田址が、検出できた。

この集落の注目される出土遺物としては,墨書土器・緑釉陶器・越州窯青磁椀・圭頭太刀柄頭・石帯 ・円面硯・土馬・陶馬,木製品では農地開発に関連する用具である「犂」・木製鞍・鐙・独楽・琴

られない遺物が出土している。

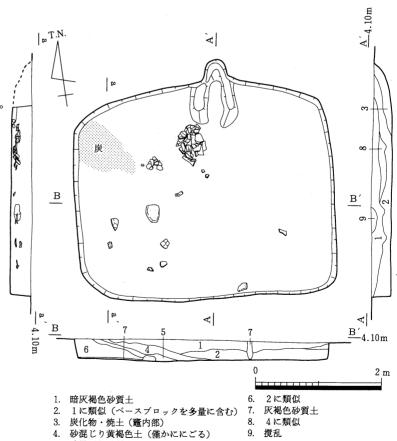
柱……等,一般集落では、比較的み

このような特徴を持つⅢ期集落は,遺構数・出土遺物量共に,下川 津遺跡の中でも中心的な時期に当る。 次に,最大資料化出来る遺構と遺物 を順次紹介する。 (西村)

2. 堅穴住居

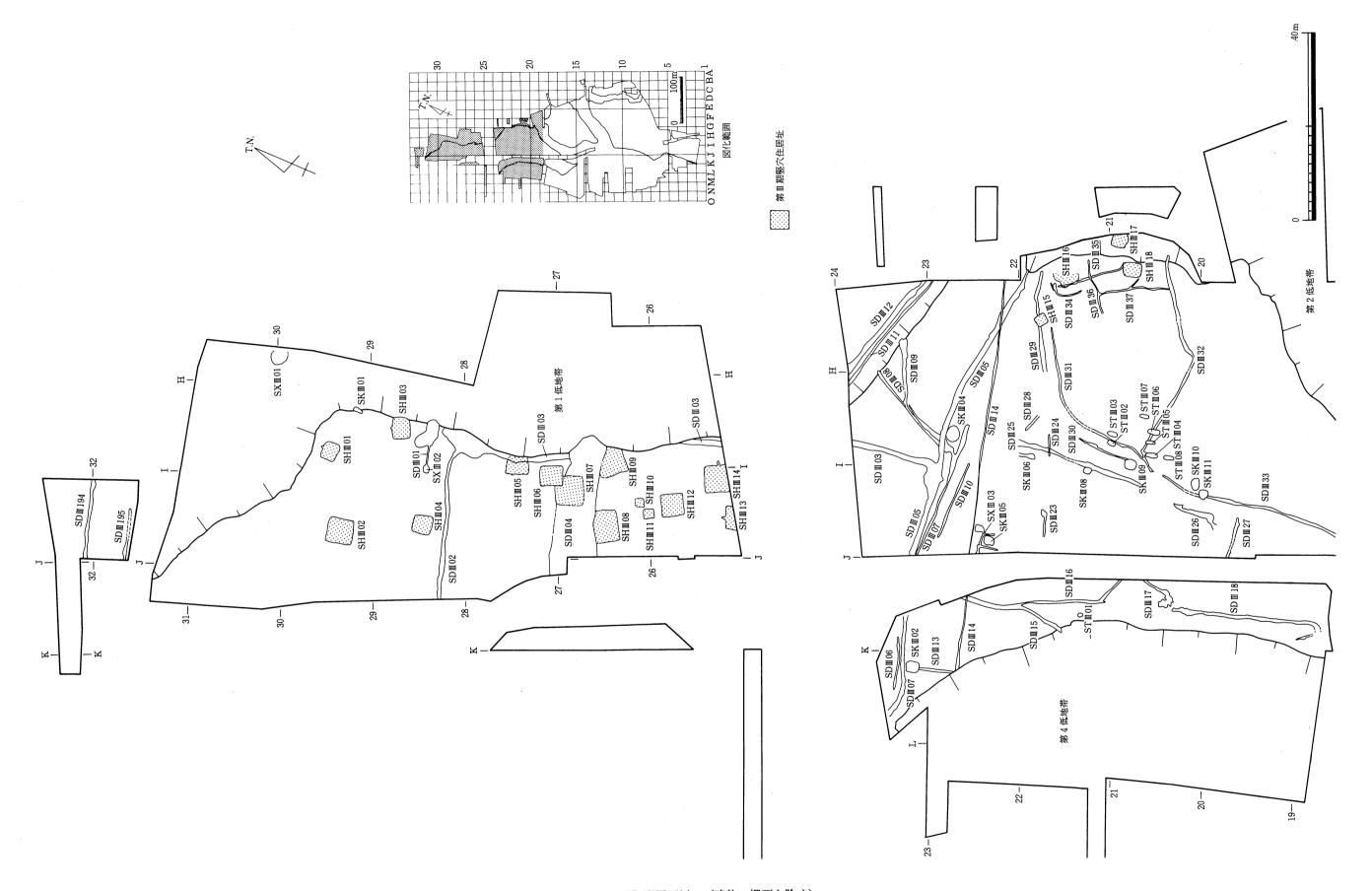
SHⅢ01 (第172·416図 図版50 SH8736)

本住居は、第Ⅲ期の竪穴住居の中でもっとも北に位置し、第1微高地の東北端のH29区で検出した。平面形は、やや隅丸の長方形を呈し、長軸約4.1m、短軸約3.4m、残存深約0.34mを、また主軸の方位はN2°Eを測る。面積は13.9㎡である。内部構造としては、北辺のやや東寄りに作り付けの竈を有する。主柱穴

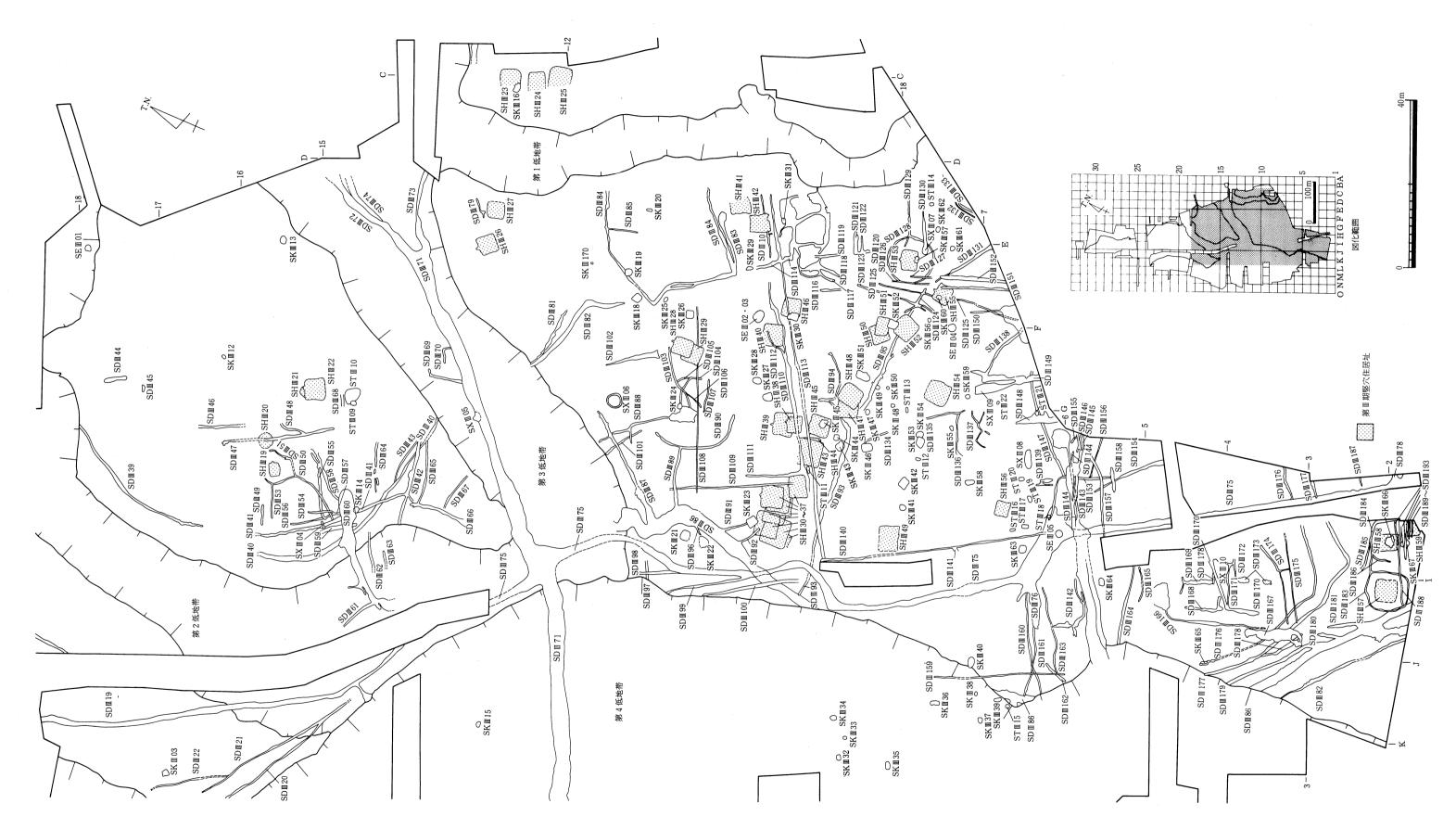


- 4. 砂礁とり黄褐色土(僅かににこる) 5. 暗黒灰色砂質土
 - 第170図 SHII01 平·断面図

-208-



第171図 第Ⅲ期主要遺構 配置図(1) (建物・栅列を除く)



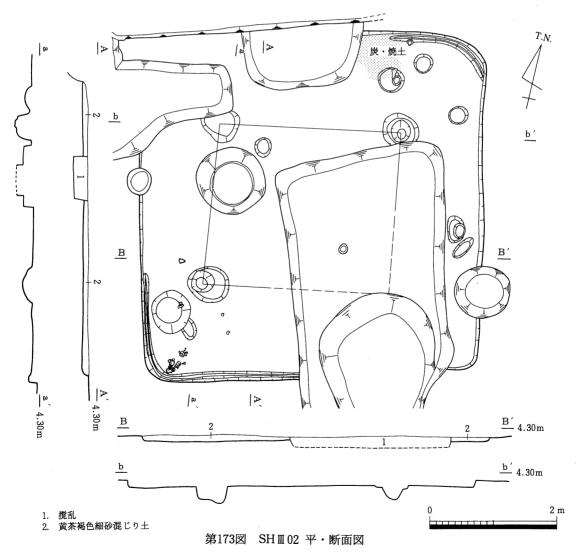
第172図 第Ⅲ期主要遺構 配置図(2) (建物・栅列を除く)

は,精査したが検出できず,もともと明確な柱穴はなかった可能性が高い。中央やや西寄りに,平坦部を上にした平たい石が据えられていた。また東北隅で炭化物の集積を検出したが,その位置等から焼失家屋である可能性は低いと考えられる。また竈の近くから把手付の甕が1個体,土圧で潰れた状態で出土した。また竈の位置が,やや東にずれるが短辺である東辺を1辺とするほぼ正方形が基本形となる住居であると考えられる。東辺と比較して西辺はやや狭く,本来の住居を西側に拡張したものである可能性もある。

(第416図 $1 \sim 5$)は床面直上出土遺物である。いずれも甕で完形の(5)は球胴の把手付甕である。 外面は刷毛調整で,内面は口縁部内面のみ刷毛で体部はナデ調整である。甕類の口縁端部の形状は面取りを施すものは口縁に直行するものと直立する面取りで,水平面取りのものはない。 (藤好)

SHⅢ02 (第173·146図 図版51 SH8734)

SHⅢ01の西で検出したほぼ正方形を呈する竪穴住居である。 I 29区に位置する。近現代に土坑で北辺中央部・南部・西部は攪乱を受ける。長軸5.6m, 短軸5.5m, 残存深約0.1mを, また主軸の方位はN 14°Wを測る。面積は30.9㎡で, 当該期の竪穴住居のなかではやや大型の住居に属する。竈本体は検出できなかったが, 北辺中央部東側に焼土を検出したことから竈が北辺中央部に存在したものと考えられる。主柱穴は4穴である。北辺と南辺から西辺にかけて壁溝を検出した。また南西隅で須恵器の高杯が出土



した。図化した遺物はいずれも床面直上のものである。

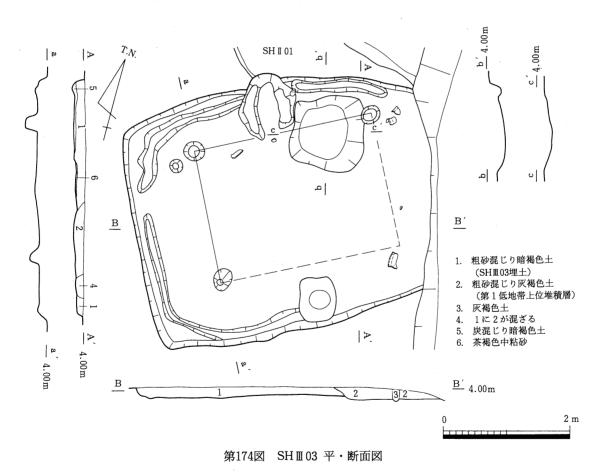
(第416図8)は甕で,外面刷毛,体部内面はヘラ削り,口縁部内面は刷毛調整である。最大径は体部下半にある特徴的なものである。(10・11) は蛸壺。(12) は須恵器杯蓋,(13) は須恵器高杯である。

(藤好)

SHⅢ03 (第174·416図 図版52 SH8737)

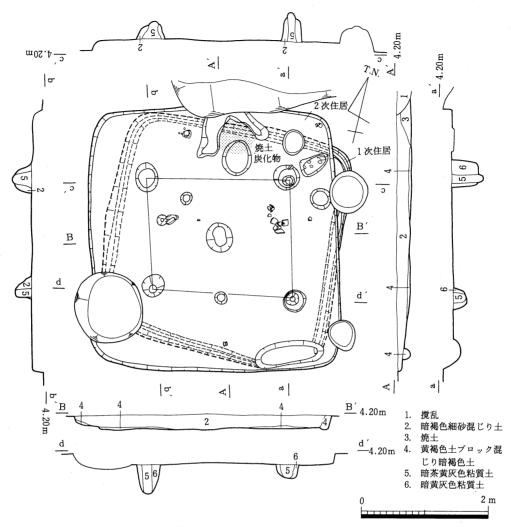
H28区で検出した住居で、微高地東端の斜面に面した位置に立地する。東部は削平を受ける。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸約4.8m以上、短軸約3.9m、残存深約0.19mを、また主軸の方位はN26°Wを測る。推定面積は、18.8㎡である。内部構造としては、北辺の中央部に作り付けの竈を有し、竈の東側で炭化物が入った浅い土坑を検出した。また主柱穴は4穴と考えられ、北辺・西辺・南辺に壁溝がめぐる。図化した遺物は床面直上のものである。

(第416図14) は大型の甕である。口縁端部を直立ないし直行面取りし外面は刷毛,内面はナデで部分的に刷毛目が残る。(15) は小型の甕で内外面刷毛後ナデ。(16・17) は鉢で,(16) は口径に対して器高は低い。(18) は蛸壺,(19・20) は須恵器の杯蓋である。 (藤好)



SH**Ⅲ04**(第175·417図 図版54 SH8730·SH8731)

I29区で検出したやや隅丸方形の竪穴住居で、立て替えが認められる。切られた古い時期の竪穴住居はほぼ正方形を呈し、主軸方向は、真北方位を示す。全周に壁溝をもつ。規模は、長軸3.7m、短軸3.7mを測る。主柱穴は検出できなかった。また立て替え後の住居は、長軸4.0m以上、短軸3.8m以上、残存深約0.2mを、また主軸の方位はN12°Wを測る。内部構造としては、北辺の中央部に作り付けの竈を



第175図 SHⅢ04 平·断面図

有し, 主柱穴は4穴である。壁溝は認められない。

(第417図 $1\sim9$)は床面直上から出土した遺物である。(1)は大型の甕の口縁部で,頸部のくびれは少ない。($2\cdot3$)は中型の甕で,残りの良い(2)はほぼ球形の体部を呈し,外面は刷毛調整である。(4)は甑の口縁部で内外面は刷毛調整である。(5)は蛸壺。($6\cdot7$)は須恵器の杯身で,底部はヘラ切り。($10\sim14$)は上位から出土した遺物,($15\sim24$)はトレンチ等からの出土で層位的には明瞭でないものである。(10)は甑の口縁であろうか,(16)は甕の口縁で混入品と考えられる。(18)は片口の鉢で外面は刷毛調整である。

SHⅢ05 (第176·417·418図 図版54 SBNB08)

I27区で検出した住居で,東半はSDⅢ03により,削平を受ける。第1低地帯に面した微高地の東端に位置する。平面形は正方形に近いと考えられ,長軸4.8m以上,短軸2.6m以上,残存深約0.12mを,また主軸の方位はN20°Wを測る。内部構造としては中央部に焼土と鉄滓が混じる浅い炉跡を検出した。また吹子の羽口が4点出土したことから,鍛冶関係の工房跡と考えられる。主柱穴は4穴である可能性が高い。図化した出土遺物は床面直上の遺物である。

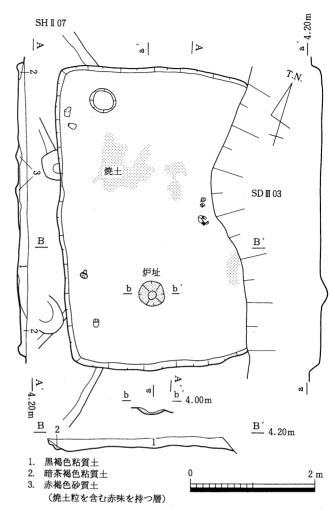
(第417図25~31)は甕で、口縁端部の形状には様々なものがあり、(25~27) のように口縁端部を垂直に面取りするもの、(27) は面取りをせず、(30) は水平に面取りをする。(32) は製塩土器と類似する

が外面に叩きを施さない。(33・34) は口縁 径が小さく、壺としたほうが良いものか。 (35~38) は口縁径に対して器高が低いもの で、口縁端部内面は斜めに面取りをする。 (36・38) には内面に暗文が施される。(40) は片口の鉢である。

(第418図 1)は製塩土器,($2\sim4$)は蛸 壺。(5)は竈の破片。($6\sim9$)は吹子の羽口。($10\sim19$)は須恵器で,杯は? \sim ラ削りを施す。 (藤好)

SHⅢ06 (第177・418図 図版55 SBN B06)

I 27区で検出した竪穴住居で、SHⅢ05の南に位置し、SHⅢ07・SDⅡ02を切る。平面形は南北に長い長方形を呈し、長軸約5.0m,短軸約4.4m,残存深約0.08mを、また主軸の方位はN23°Wを測る。面積は21.5㎡で、当該期の竪穴住居のなかではやや小型に属する。長軸を明確に南北方向にもつ住居は、本住居の他に、SHⅢ18があるが、いずれも東部が低地帯に面しており、長軸方向を南北に向けたものと考えられる。また先行するSHⅢ07が隅丸に近い形状を呈するのに対して、



第176図 SHII 05 平・断面図

本以降はコーナーが角張る点が注目される。内部構造としては、竈は認められず、4穴の主柱穴からなる。また北辺に壁溝をもつ。

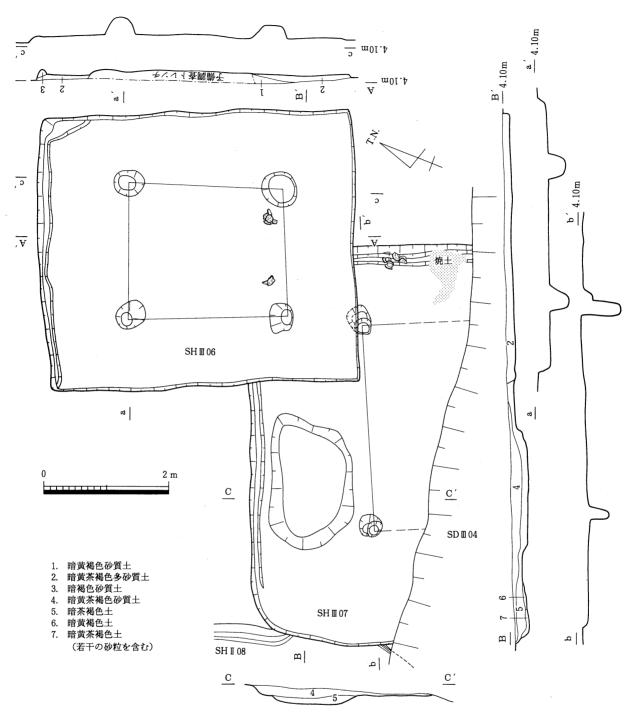
(20~22) は床面直上から出土したものである。(20) は口縁部内面をほぼ水平に面取りをする。(23~25) は下位から出土したもので,(23) の甕は(20) と比較して頸部の屈曲が明瞭である(藤好) SHⅢ07(第177・418・419図 SBNB07)

I27区で検出した竪穴住居で、SHI08を切り、逆にSHI06に北東部をまた南半部をSDI04に切られる。平面形は東辺の竈の位置から正方形に近いと想定される。長軸6.3m以上、短軸3.3m以上、残存深約0.32mを、また主軸の方位はN22°Wを測る。残存状況は良くない。内部構造としては東辺に竈の痕跡が認められ、主柱穴は4穴と考えられ、壁溝がめぐる。また北部に浅い土坑状の落ち込みがある。

(第418図26~28)は甕で口縁端部が残る。(26・28)は垂直面取りである。(29~30)は鉢で,(31)は内面に暗文,外面にヘラ磨きを施す。(34)は甕の把手であるが,逆「く」の字型に折れ曲がる形状のものである。(第419図 1~5)は須恵器で,(2)は大型の杯で,体部中位に沈線が廻る。ヘラ削り? (藤好)

SHⅢ08 (第178·419~421図 図版55·56 SBNA07)

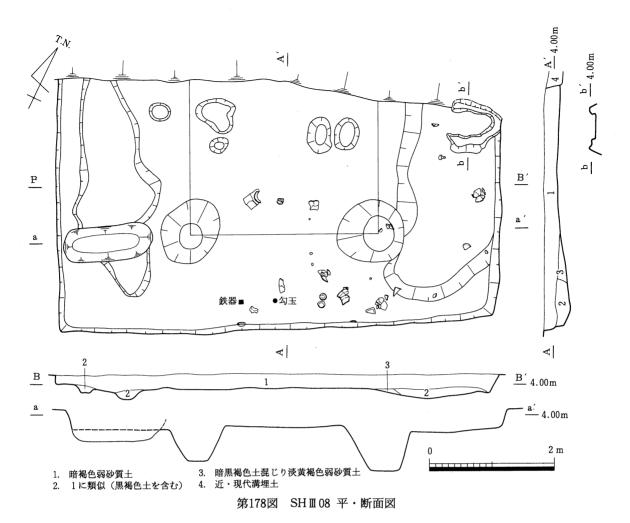
I26区で検出した竪穴住居で、北半部をSDⅢ04に切られる。平面形は竈の位置から正方形に近いと



第177図 SHⅢ06·07 平·断面図

想定される。長軸7.1m,短軸4.0m以上,残存深約0.42mを,また主軸の方位はN29°Wを測る。この時期の竪穴住居としては規模の大きいものである。隅は角ばる。内部構造としては東辺に竈があり,主柱穴は4穴と考えられ,壁溝は認められない。東部と西部に浅い落ち込みを確認したが,床土の改良に伴う貼り床の跡と考えられる。主要な出土遺物としては,第576図2の石英製の勾玉が出土している。

(第419図6~22) は床面直上から出土した遺物である。(6) は鍋で、口縁端部は水平面取りを行ない、体部と口縁部内面は刷毛調整である。(7) は把手付の球胴の甕で外面は刷毛調整,体部内面はナ



デ。(8~10)は鉢で,(8・9)は内面に暗文,(8)は外面刷毛調整,(9・10)は底部へラ削りを施す。(11)は高杯で内面に暗文が残る。(12~14)は製塩土器で口縁部外面は平行叩き目。(15~22)は須恵器で,(17)は大型の杯で口縁端部は斜めに面取りし,体部中央に沈線が廻る。(18)は短頸壺の蓋であろう。(22)は大型の甕で口縁部は直立する。(第420図 1~8)は下位からの出土のもので,(1)は把手付の甕の破片で,把手は逆「く」の字状に曲がる。(4~8)は須恵器である。

(第420図 $9\sim24$)は上位から出土したものである。(9)は甕で頸部の屈曲が明確で,肩が張る形状を呈する。($10\cdot11$)は中型の甕で,肩が張らず残りの良い(11)は最大径が体部下半に位置し,内面はへラ削りを施す。(12)は鍋であろう。($13\sim17$)は鉢で,(14)以外は口縁部内面を面取りする。大型の(14)は片口状の口縁を呈す。小型の(17)には内面に暗文が施される。(18)は竈もしくは甑と考えられる。口縁端部が内側に折れ曲がるように肥厚する確実な甑はなく,竈の可能性が高い。(19)は蛸壺で肩が張らない形状を呈する。($20\sim24$)は須恵器である。(第421図 $1\sim4$)はトレンチ等からの出土遺物である。

SHⅢ09 (第37·421図 図版56 SBSAB)

日・I 26区で検出した竪穴住居で,SHII09・SDII02を切る。北半部を斜めにSDII04に切られることから,平面形は明確ではないが,正方形に近い形状であった可能性が高い。柱穴の位置等から長軸 4.8m以上,短軸3.5m以上,残存深約0.4mを,また主軸の方位はN40°Wを測る。東辺と北辺が削平されており,竈の有無は不明である。主柱穴は4穴と考えられる。

(第421図 5~14)は下位からの出土遺物である。(5)は把手付の甕で,口縁端部は水平に面取りを行ない,体部外面は刷毛調整,内面はナデである。(6)は鍋で口縁部内面は刷毛調整。(7)は製塩土器で口縁部外面に平行叩き目が残る。(8~14)は須恵器である。(15)はトレンチ等からの遺物である。(藤好)

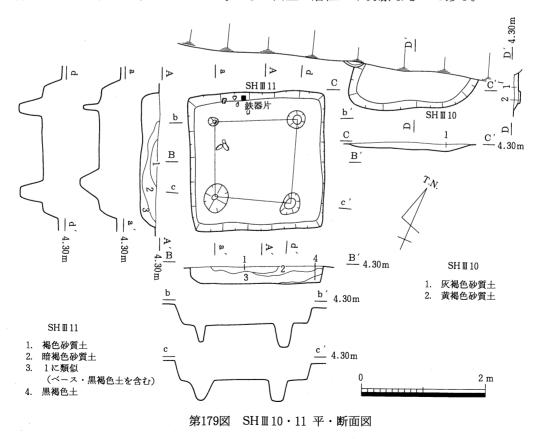
SH**Ⅲ10**(第179図 図版57 SBNA10)

I 26区で検出した。隣接するほぼ同様の形態を呈すると考えられる SH III 11が柱穴と炉跡をもつことから小型の竪穴住居と推定した。ただし第 4 微高地を中心としてほぼ同様の規模の土坑が存在することもあり,土坑の可能性も十分考えられる。北部の大半を現代の用水路に切られ残存状況は良くない。平面形はほぼ正方形を呈すると想定されるが,SH III 11と比較して,辺が直線的ではない。長軸2.0m,短軸0.7m以上,残存深約0.1mを,また主軸の方位はN26°Wを測る。残存状況が良くないこともあり,主柱穴等の内部構造は不明である。

SHⅢ11 (第179·421図 図版57 SBNA09)

I 26区で検出した非常に小型の竪穴住居である。重複すると考えられるSBⅢ20との切り合い関係は埋土の類似から明確ではない。長軸2.2m,短軸2.1m,残存深約0.28mを,また主軸の方位はN25°Wを測る。面積は4.0㎡である。内部構造としては主柱穴が4穴で,床中央に炉跡と考えられる焼土化した部分がある。南に位置するSHⅢ12と西辺が同一直線上にのる。本遺構は,規模以外の点については住居としての条件を充たすが,実際上の機能は判然としない。

(第421図16~22) は下位からの出土遺物である。(16) は甕の口縁,(17・18) は小型の壺の口縁。 (19) は鉢で,口縁端部が内面に丸く肥厚し,混入品の可能性がある。(20~22) は須恵器で,(20) は 大型の杯であろう。(23~28) はトレンチ等からの出土で層位が不明瞭なものである。 (藤好)



-219-

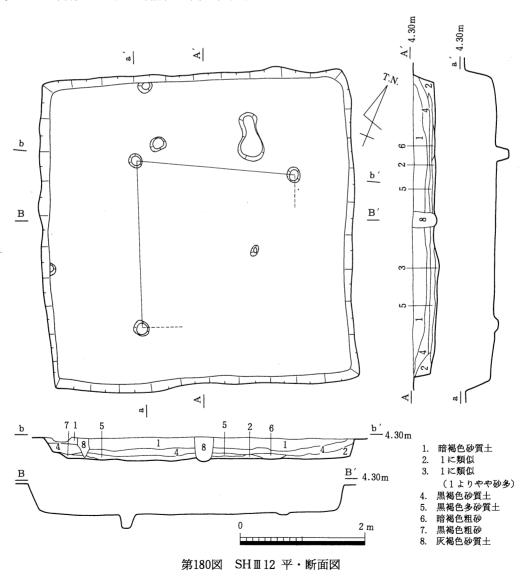
SHⅢ12 (第180·421図 図版58 SBNA04)

I 26区で検出した竪穴住居で、その形状や方位等からⅢ期の竪穴住居と考えた。ほぼ正方形を呈し、長軸5.0m、短軸4.9m、残存深約0.42mを、また主軸の方位はN29°Wを測る。面積は23.5㎡である。この時期の竪穴住居としては平均的な規模のものである。内部構造としては、竈・炉跡いずれも認められない。また主柱穴としたものも非常に浅いくぼみで、明確なものではない。本遺構は、検出に際して、床面の認定が非常に困難であったが、これは埋土がとくにその下部において地山と類似し、若干の土の濁りで埋土と判断をせざるを得ない状況であった。使用に伴う床の安定化がほとんど認められない。また壁面の傷みも少なく、使用されたとしても、短期間で埋め戻された可能性が高い。また隣接するSBⅢ20とは方位が非常に近接し、先後関係はあるもののそれほどの時期差はない可能性が高い。出土遺物には第Ⅲ期のものは含まれず、いずれも第Ⅱ期のもので混入品と考えられる。

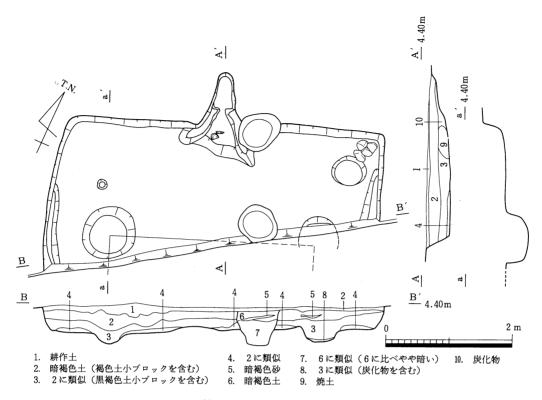
(第421図29~31) は壺の口縁。(33・34) は雲母土器高杯の杯部の破片である。 (藤好)

SHⅢ13 (第181·421·422図 図版58·59 SBNA03)

I 25区で検出した竪穴住居で、南部は現国道の下部に入りこみ確認はできなかった。SB II 21・22に切られる。ほぼ正方形を呈する可能性が高く、長軸5.3m、短軸2.4m以上、残存深約0.46mを、また主



-220-



第181図 SHⅢ13 平·断面図

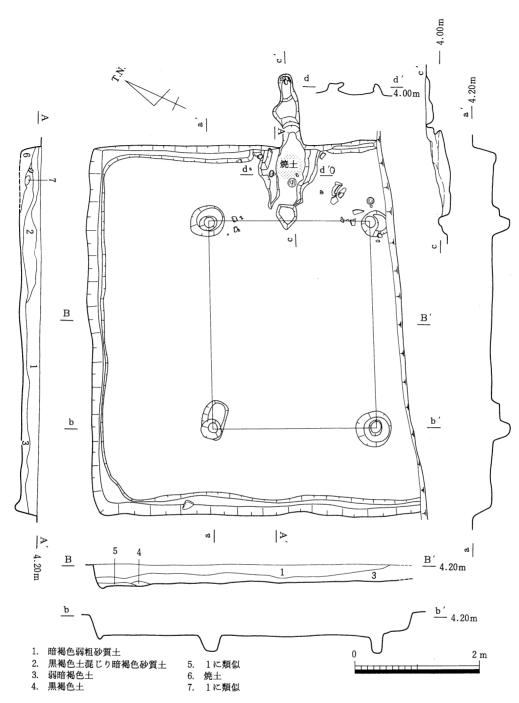
軸の方位はN22°Wを測る。推定面積は9.3㎡でやや大型に属する。内部構造は北辺中央部に竈をもち,東西辺に壁溝をもつ。主柱穴は2穴確認したが,4穴からなると考えられる。北東隅に礫の集積が認められた。隣接するSHⅢ14とは主軸方位がやや異なり時期的に後出する可能性が高い。出土遺物においても口縁端部の面取りで水平面取りのものが含まれる点は注目される。

(第421図35~38)は床面直上出土の土器である。(35・36)は甕で、口縁端部は水平に面取りを行な うもの(35)と直行面取り(36)の両者がある。(37・38)は須恵器で、(37)は 息と考えられ、外面に 細かな櫛描波状文が施される。 混入品である。(38)は杯の身である。

(第422図1・2)は上位出土の甕で、(1)は口縁端部を直行面取りを行ない、(2)は水平面取りを 行なう。両者とも体部外面刷毛、内面は口縁部のみ刷毛で体部内面はナデ調整である。 (藤好)

SH **■14** (第182 · 422図 図版59 · 60 SBNA05)

I 25区で検出した竪穴住居で、南部はSHⅢ13と同様に調査範囲外に延びる。柱穴の配置からほぼ正 方形の平面形をもつと考えられ、長軸5.2m以上、短軸5.8m、残存深約0.32mを,また主軸の方位はN 27°Wを測る。推定面積は36.0㎡である。やや大型の住居である。内部構造としては、主柱穴は4穴からなり、東辺に竈がつく。竈の煙道残存状況は良好で,竈内からは、(第422図8~10)の須恵器の杯・高杯短頸壺が出土した。SHⅢ13とは主軸方位がやや異なり、SHⅢ08・10~12との共通性が高い。この一群の竪穴住居で竈をもつものは,竈の位置が東辺につく。こうした住居は西を意識した配置とすることができよう。ちなみにこの一群と共通方位をもつSBⅢ32に代表される掘立柱建物群は、微高地の東部を中心として展開し、西側に空間をもつ。両者の間には微高地内の占地の面からも共通性が認められる点は注目される。出土遺物には口縁端部を水平面取りする甕は含まれず、隣接するSHⅢ13とは異なる。

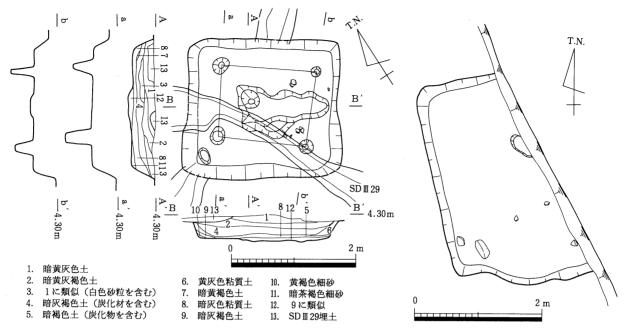


第182図 SH II 14 平・断面図

(第422図3~10) は床面直上出土の土器である。(3) は中型の甕で、口縁部と体部下半が直結はしないが、同一個体と考えられ、球形に近い体部を持つ。(4) は口縁部が発達しない形状の甕である。(5~7) は鉢で(5) は口縁端部は内面が面取りを行ない、外面へラ削り、内面には暗文が施される。(6・7) はやや粗雑な作りの鉢でいずれも外面は指頭痕が顕著である。(8~10) は須恵器である。(第422図11・12) は下位出土の土器で、いずれも口縁端部を垂直面取りし、体部外面は刷毛、内面はナデ調整である。(13・14) は上位出土の土器、(15~18) は出土層位不明の土器である。(藤好)

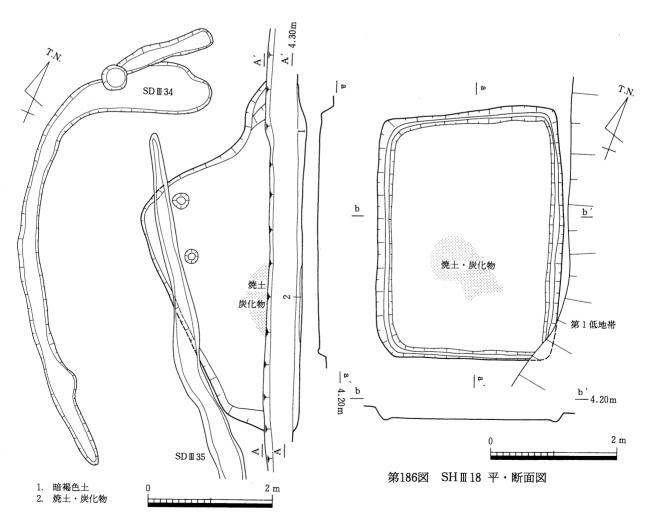
SHⅢ15 (第183·423図 図版61 SH8616)

G21区で検出した竪穴住居址である。SD II 29・SD IV 05と切り合い関係にあり、SD II 29を切り込



第183図 SHⅢ15 平·断面図

第185図 SH Ⅲ 17 平面図



第184図 SH 1116, SD 11134 平·断面図

み, SDN 05に切られている。平面形は隅丸方形を呈し長軸2.4m, 短軸2.2m, 残存深0.35mを測る。 主軸の方位はN 56° Wを測る。面積は3.8㎡で、当該期の竪穴住居址の中では比較的小形である。主柱穴 としては4柱穴確認した。

SHIII15の出土土器として,最大図化できるもの14点を抽出した。なお,床面直上より出土したのは(第423図 1)の資料のみである。(第423図 1)は須恵器の長頸壺の頸部である。(2~5)は土師器の甕である。(6)は土師質の蛸壺片である。(7)は須恵器の皿(8)は須恵器の甕である。(9~11)混入品の内弥生土器の資料である。

SHⅢ15の資料中には時代を特定出来るものは比較的少ないが,この住居址がSDⅢ29を切り込む点と,出土した須恵器の資料より,この住居址の時期は概ね6世紀末~7世紀中葉の範囲内に納まるものと考えられる。 (西村)

SHⅢ16 (第184·423図 図版61 SH8617)

G21区で検出した竪穴住居址である。後世の地下により約2分の1弱しか残っていない。また,SD III 35と切り合い関係があり,SD III 35により切られている。平面形は不明瞭ながら,不整形な隅丸方形を呈するものと考えらる。長軸3.5m以上,短軸2.2m以上,残存深0.07mを測る。主軸の方位はN48°W を測る。推定面積は24.9㎡で,当該期の竪穴住居址の中では平均的な規模である。内部構造としては,北辺に作り付けの竈を備えている。床面中央付近には,焼土・炭化物が集中する所が検出された。また,本住居の西側には,付属施設と考えられる周溝(SD III 34)が検出できた。

SHⅢ16の出土土器の中で図化できる土器は、以下の3点のみである。いずれも床面に近い層より検出されたものである。

(第423図12~14) はSHⅢ16から出土した資料である。(12·13) は弥生の甕であり,混入品である。(14) は土師質の蛸壺片である。

SHⅢ16の資料中で唯一この時期に伴う資料は(14)の蛸壺片のみである。そのため詳細な時期を特定することは無理であるが,この竪穴住居址が竈を備える点より,他の類例と照らして,6・7世紀代のいずれかの時期に含まれることは確実であろう。また,隣接するSHⅢ15とは概ね主軸方向を揃えており,この住居址と比較的近い時期に当る可能性が高い。 (西村)

SHⅢ17 (第185図 図版62)

F20区で検出した。SHⅢ18の東側,第1低地帯にかかる斜面部の一段低い部位に立地し,東半部は現水路下部に延び完掘することができなかった。形状から竪穴住居と判定したが,柱穴・竈いずれも検出できず,また時期を判断し得るような遺物も出土していない。平面形は方形を呈すると考えられ,長軸3.4m以上,短軸2.1m以上,残存深約0.14mを,また主軸の方位はN13°Wを測る。出土遺物では図化できるようなものはない。 (藤好)

SHⅢ18 (第186·423図 図版62 SH8618)

F20区で検出した竪穴住居で,第1低地帯にかかる斜面部際に立地する。SH II 18を切る。平面形は南北に長い,長方形を呈し,長軸約3.4m,短軸約3.0m,残存深約0.1mを,また主軸の方位はN20°Wを測る。面積は10.3㎡である。内部構造としては,周囲に壁溝をもつ。主柱穴は確認できず,中央部に床面が焼けた部位を確認した。炉跡の可能性がある。

(第423図15~24) は床面直上出土の土器である。(15・16) は甕の破片で,(15) は口縁端部は垂直面取り,(16) は中型の甕であろう。体部外面と口縁部内面は刷毛調整である。(17) は鉢で,外面は指頭